

平成13年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書

授業科目名「社会体験実習」

◆  
平成13年度信州大学研究プロジェクト報告書

「不登校、いじめ、キレる、荒れる、学級崩壊を包括する地域と学校教育のあり方」

第1期「信大YOU遊広場」の実践  
——“臨床の知”を求めて——

The First Annual Report of "Shinshu University Students' Project  
'YOU-Yu Plaza' in Practice" (2001)

—— In Search of "Experience-based Teacher Education" ——

2002(平成14)年3月  
信州大学教育学部



平成13年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書：授業科目名「社会体験実習」

平成13年度信州大学プロジェクト報告書：

「不登校、いじめ、キレる、荒れる、学級崩壊を包括する地域と学校教育のあり方」

# 第1期「信大YOU遊<sup>プラザ</sup>広場」の実践 ～“臨床の知”を求めて～

The First Annual Report of  
“Shinshu University Students’ Project ‘YOU-Yu Plaza’ in Practice” (2001)  
— In Search of “Experience-based Teacher Education” —



2002 (平成14) 年3月

信州大学教育学部







# まえがき

信州大学教育学部長 藤沢謙一郎

この度、『第1期「信大 YOU 遊広場 (ﾌﾗｯｸﾞ)」の実践―臨床の知を求めて―』が刊行されることになりました。「信大 YOU 遊広場」は、これまで長年に渡り積み重ねてきた「信大 YOU 遊サタデー」を充実発展させての取り組みであり、その実践活動を注視していましたので、本書の刊行を喜ぶとともに、関係者のご努力とご労苦に敬意を表します。

本学部は、平成11年度に、学校、家庭および地域社会の諸問題に主体的にコミットし、他者や事物とのいきいきした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした新しい教育体制に改組しました。このため、1年次から4年次まで系統的に教育現場と係わる臨床経験を重視したカリキュラム編成をする一方、附属教育実践総合センターの実践分野での活動の広がり支援し、教員に必要な実践的指導力の養成に意を注いできました。

学生便覧では、「臨床の知」とは、個々の「訴え」に耳を傾けるために、大学の学問や研究を現実の社会に開かれたものにするということです―と述べ、更に、「臨床の知」は、ただひたすら「現場」(ﾌｨｰﾙﾄﾞ)に出て、体験を積み重ねれば自然に身に付くというものではありません。生身の人間の「訴え」に耳を傾けるには、対象との適正な「距離感」とも言うべきものがが必要です。遠すぎれば抽象的な把握になり、近すぎれば「木を見て森を見ず」ということになるからです。学生の皆さんのそれぞれが、この信州大学の4年間において、ﾌｨｰﾙﾄﾞでの臨床経験と先人が問題との格闘の中で生み出してきた「技」や「理論」との往復運動を主体的に進め、適切な「距離感」に裏づけられた「臨床の知」を十分に学び取ることを期待します―と説明し、同時に学習意欲を喚起しています。

改組から3年が経過した現在、「臨床の知」を理念とする教育の中で学生はどのような力を身につけて来ているのかを考えることは、学生にとってはもとより学部にとっても極めて大切なことです。ところが、教育の営みを短期間で評価するということはなかなか難しく、とりわけ「臨床の知」の評価となると困難さを覚えますが、避けて通れないことであると考えています。ただ私は、学生たちが活動の中で感じ取ったもの、身にしみこませたものを、自らの言葉にして語り、また文章化する過程を経て、再びそれを我がものにしていくなかに、確実な力が備わるのだと考えています。本書は、その困難な道に一步を踏み出すことになるものと大いに期待をしているところです。この刊行を機に、「臨床の知」を求めての教育実践が、一層充実・発展していくことを祈念しております。

最後になりますが、学生の教育実践に多大なご協力とご支援を賜りました、長野県教育委員会、長野市教育委員会、JA 長野中央会、JA ながの、牟礼村ふるさと振興公社、長野県テクノ財団等の関係機関の皆様には厚くお礼を申し上げます。



# 目次

			Page
まえがき	藤沢 謙一郎	信州大学教育学部長	1
目次			2
I. 第1期「信大YOU遊広場」への寄稿			
挨拶に代えて	渡邊 時夫	信州大学教育学部長補佐	4
明るく・楽しく・仲良く	町田 竜太	「信大YOU遊広場」運営委員長	6
夜明け前が・・・	白井 克典	「信大YOU遊広場」開設準備委員長	7
教師は子どもにとって影響力の大きい存在	林 一真	「信大YOU遊広場」副運営委員長	8
おみやげ♪	両角 孝之	「信大YOU遊広場」副運営委員長	9
教育の開拓者として	杉山 雅幸	「信大YOU遊広場」研究主任	10
新たな世代が創る道	那須 良寛	「信大YOU遊広場」研究主任	11
茂菅そして牟礼農場での体験活動	和田 清	信州大学教育学部教授	12
菅平高原での「ふきのとうキャンプ」	平野 吉直	信州大学教育学部助教授	14
今、日本の子どもに大切なこと	寺沢 宏次	信州大学教育学部助教授	16
子どもも教師も体験を	小池 英樹	長野市教育委員会青少年課指導主事	18
「信大YOU遊広場」の目玉は学生の情熱	竹内 幸一	ソニーフロンティアサイエンス研究所	19
「信大茂菅ふるさと農場」での 出会いと実践	大内 清	(財)長野県農業開発公社 JA ながの	20
「信大YOU遊広場」に寄せて	林部 信造	農業	22
子どもの育ち、大人の育ち	志村 昌之	内地留学生	23
価値ある学びを創る	大澤 安貴子	信州大学大学院 学校教育専修1年	24
体験的な学習の重要性和教師の役割	塩原 孝茂	信州大学大学院 学校教育専修1年	25
II. 第1期「信大YOU遊広場」の概要			
信大YOU遊広場の概念図			26
信大YOU遊広場発足までの歩み			28
年間活動報告			30
III. 0プラザから6プラザの実践記録			
0プラザ 「鉄腕アトム」			32
1プラザ 「信大牟礼ふるさと農場」			41
2プラザ 「信大茂菅ふるさと農場」			47
3プラザ 「キャンパス教育の森」			54
4プラザ 「キャンパスプレーパーク」			59
5プラザ 「里山ふれあいキャンプ」			66
6プラザ 「お出かけYOU遊プラザ」			73
IV. 第1回YOU遊フェスティバルの実践記録			
YOU遊フェスティバル本部			76
ハッピークリスマスツリー			
— 子どもの発想を広げるクリスマスツリー作り —	岡部 桂子 (実3)		88
つくってとばそう!! ふんわりフリスビー			
— 紙バックのリサイクル —	土田 みどり (社3)		91
ガムでけしゴムを作ろう!!			
— 世界で一つのけしゴム —	角 直子 (実3)		94
ほんとに聞こえる? 簡単 “手づくりラジオ”	井上 将宏 (生3)		97
ピョンピョンとぼう! なわとび kids			
— なわとびを通しての仲間作り —	片瀬 亜希子 (地3)		100



ブレバリッ!? ウイナー!		
— 実践してみてわかったこと —	西 絢平 (実 2)	103
オリジナルポストカードを作ろう		
— コンピュータを使ったポストカード作り —	原山 美樹 (生 2)	106
V. 「信大YOU遊広場」と実践的指導力に関する考察		
「信大YOU遊広場」の総合的な学習		
— 1年間の活動で身についたもの —	町田 竜太 (社 3)	109
0 プラザの活動で身につけてきた2つの力		
— 連携する力・コミュニケーションの力 —	富山 裕子 (障 3)	115
世代間交流の可能性		
— 「信大YOU遊広場」の実践を通して —	白井 克典 (社 3)	121
人間関係、そして「信大YOU遊広場」		
— 出会うことが出来た人から学んだこと —	西澤 俊輔 (理 3)	127
学びの場		
— 「信大YOU遊広場」における子ども理解 —	清水 美香 (実 3)	133
四季と「信大YOU遊広場」		
— 花、生き物、人との関わりを通して —	林 美智子 (実 3)	139
私と子どもの“自然”な関係		
— 自分なりの子どもとの関わり方を追って —	小黒 あかり (実 3)	145
たくさんの学びと自信		
— 「信大YOU遊広場」の実践を通して —	鹿子木 愛 (実 3)	151
地域と学生がつくるコミュニティー		
— 『里山ふれあいキャンプ』を通して —	小島 真知子 (地 3)	157
「信大YOU遊広場」と私の体験		
— 汗と涙を流して覚えたものは、一生忘れない —	小林 則雄 (地 3)	163
ビバ★★YOUプラ		
— 「信大YOU遊広場」を通して —	梅田 亜紀子 (社 3)	169
「信大茂菅ふるさと農場」における自然体験が		
子どもの人間形成に及ぼした影響	相磯 素子 (幼 4)	175
土から人へ		
— 小・中学校における農作業体験活動の実態と課題 —	杉山 雅幸 (野 4)	181
農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ学生と地域社会の支援		
— 「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」での実践 —	志村 昌之 (内地留学生)	187
「信大YOU遊広場」の実践を通して学生は何を体験したか		
	谷塚 光典 (信州大学教育学部附属教育実践総合センター講師)	194
教育における臨床経験・作業活動	小林 輝行 (信州大学教育学部教授)	200
「信大YOU遊広場」の精神と実践的指導力の養成	土井 進 (信州大学教育学部教授)	208
VI. 新聞記事と第1期「信大YOU遊広場」スタッフ名簿		
新聞記事		214
信大YOU遊広場スタッフ名簿		218
あとがき・編集後記	土井 進 (信州大学教育学部教授)	221
	白井 克典 (社 3)	
	花村 尚美 (理 2)	



## 挨拶に代えて

信州大学教育学部長補佐 渡邊時夫

2001年12月8日の土曜日。その日は、寒い信州にあっても格別寒さが身に凍みた。「第1回YOU遊フェスティバル」の開会式が教育学部体育館で開催された。学部長に替わって挨拶を依頼されていたので、少々早目に会場に赴いた。入り口には天幕が張られ、受け付け係の学生が数名、甲斐甲斐しく働いていた。呼び止められて、ふと見ると、机の上に、小さな皿におむすび一つとホカホカと湯気の立つ味噌汁が添えられていた。このおむすびは、昨夜遅くストーブの無い部屋で本日のために一生懸命ににぎっておいたのだそうだ。茂菅という地籍の農家から借用した田んぼ「信大茂菅ふるさと農場」で、学生が育てたお米を使ったおむすびだった。寒さの厳しい早朝に、おむすびを齧りながらすすめる味噌汁は、「信大YOU遊広場（プラザ）」そのものの暖かい味がした。

体育館には天井に沿って様々な飾りが張りめぐらされていた。土井先生の説明によると、貴重な紙を節約して、すべて古い広告などのリサイクルだそうだ。やがて予定されていたすべての子どもと保護者が勢ぞろいし、開会行事が始まった。ユーモアを交えながらの学生の進行振りは、てきぱきとしていて、経験豊かな教師を彷彿とさせた。

開会行事の後、参加者はそれぞれのメニューに従って、各会場に散って行った。餅つきがあり、焼き物あり、子どもたちは嬉々として活動に没頭していた。学部の教官や大学院生も何人か遠巻きに活動に加わっている姿も印象に残った。

この日を迎えるまでに、学生は、子ども研究、企画、準備、教官との打ち合わせ、JAながのの方々や、日常的にお世話になっている牟礼村や茂菅の人々、子どもたちや保護者との連絡や協力要請に多くの時間とエネルギーを費やしている。その間には、メニューの選び方や、タスクへのアプローチのあり方、子どもたちへの対応の仕方など、時として、学生間で激しいやり取りもあったと聞いている。書物や教室の中では得られない貴重な経験を経てきている。こうして学生は、学部教育の目指す「臨床の知」を、それぞれに会得しつつあるのだと実感された。

充実した一日の終わりに、「反省・懇親会」が開かれた。多少のビールを傾けながら、華やいで談笑する学生の声が学生食堂いっばいに響きわたった。これが一日のクライマックスと思った次の瞬間、「信大YOU遊広場（プラザ）」の本当のクライマックスがやってきた。本日の活動を含め、これまでの経験について学生が一人ずつ静かに語り出したのだ。人前では話す勇気も力量も無かった自分が、率先して大勢の前で語れるようになった自己の成長過程や、仲間との共同作業の楽しさ、教官や仲間を信頼することの喜びなど、聞き応えのあるスピーチの連続は正に圧巻であった。数十分前の、あの華やいだ雰囲気とは打って違って、静かな空気を緊張した声が1時間余りにわたって響きわたった。時には出席者すべてが目頭に熱いものを覚える瞬間もあった。参加者は学生ばかりでなく、教官も院生もJAながのの大内さん、農家の林部さんご夫妻、そして「信大YOU遊サタデー」の先輩たちも多数混じっていた。「信大茂菅ふるさと農場」で一年間学生に農事を指導された林部信造さんが最後に挨拶に立たれた。隣に座っていらっしゃる奥様を見ながら「定年を



迎えて、一度は人生の終わりを味わった私は、信大の学生と生活を共にすることになった日から、私の新しい人生が始まった。学生諸君、ありがとう」と、噛み締めながら語られた一言一言に、すべての出席者が言葉以上の深さと感動を味わった。

「臨床の知」の意味は深く、言葉で説明することは難しいが、このような実践や体験を通して初めて得られる何かである、と痛感した一日であった。

英語の Plaza は、単なる「広場」という意味ではなく、「都市や町のなかに存在する公共の広場」のこと。信大キャンパスに創出したこの「公共の広場」である「信大YOU遊 Plaza」が益々豊かに、広く活用されることを期待したい。





# 明るく・楽しく・仲良く

「信大Y O U遊広場」運営委員長 社会科学教育専攻 3年 町田竜太

## 1. サタデーからプラザへ

報道関係の方が、プラザの本部へ取材に来た際に必ず聞いてきたことが、「今までのサタデーと比べて具体的にどのように変わったのですか？」という問いでした。そして私は、「1番の違いは年間を通して活動することです。」と答えました。文にして1行弱、しかしその言葉の意味することは1年間活動してやっと理解することができたように思えます。

この1年間プラザの活動を企画・運営・実行してきましたが、私を含めメンバー全員の心と体の状態は当たり前ですが毎日違うもので、その状態の変化は、プラザの活動にも大きな影響が出ることがあったように思えます。意見が合わずに言い合いになったときや、方針が合わずやる気が無くなった、そんな時に常に助けてくれた言葉が「明るく・楽しく・仲良く」です。誰かがこの言葉を発せばその場は自然と和み、新たな案が生まれ活動に結びつけることができました。

プラザのメンバーが途中で投げ出すことなく、この1年間先が見えない状態で戦い抜いたこと、そして継続してきたことで、年間を通して活動することの難しさを知り、サタデーからプラザへ脱却できたと確信しています。

## 2. 運営委員長って何？

私はこの実践記録の寄稿を依頼されましたが、この1年間本当に頑張ってくれたのは各プラザのプラザ長です。私がプラザ長にお願いすることはたくさんありましたが、逆にプラザ長の助けとなれたことはあまりなかったと思います。運営委員長としてもっとプラザ長の負担が軽くなるように配慮しなければいけませんでした。文句を言うこともなく、活動をしてくれました。私が外に出て、「Y O U遊広場の運営委員長をやっています」と、偉そうに話せるのも、みんなが活動をしてくれていたからです。

運営委員長の役割はなんでしょうか。確かに運営委員会では司会を務め、先のことを考えながらプラザ全体が共通の認識を持てるように心がけました。しかし、実際に活動するのは各プラザであり、運営委員長の企画する活動というものは存在しませんでした。一見の何もしていないかのような錯覚に陥ることもありましたが、私が考える運営委員長とは、プラザ長を始め、スタッフ全員がやろうとしている活動に打ち込めるような環境を作ることではないかと思います。そして何か緊急事態が起きたときには、迅速に対応できるように体を空けておく必要があるということが分かりました。運営委員長があくびをしているとき、プラザは順調に動いていると私は感じていました。

## 3. 最後に

この1年間たくさんの人と出会い、その中で貴重な経験をさせていただきました。先行き不安な私たちを常に見守ってくれていた土井先生をはじめとする大学の先生方、また、この活動を理解し協力してくれた地域の方々、そして何よりも参加してくれてくれた子どもたちとその保護者の方々に心から感謝を申し上げたいと思います。1年間ありがとうございました。そして来年もよろしくお願いします。



## 夜明け前が・・・

「信大Y O U遊広場」開設準備委員長 社会科学教育専攻 3年 白井克典

夜明け前が一番暗いという言葉があります。信大Y O U遊広場発足準備会はまさにその夜明け前だったように思います。

平成12年12月12日に学生約80人と藤沢謙一郎学部長先生をはじめ多くの先生方と共に第一回目の発足準備会を開催しました。この時はまだ信大Y O U遊広場という名前も決まっておらず「信州大学教育学部における21世紀の学生主体の新プロジェクト発足準備会」という名前でした。発足準備会は第一回から第七回まで開催しました。この発足準備会を開催している期間は私にとってたくさん悩み、そして友達や先輩、先生方とたくさん語り合った期間となりました。

私は信大Y O U遊サタデーにスタッフとして参加したことはありましたが運営するという仕事についたことはなく今回の発足準備会が運営に携わる初めての会でした。七回の発足準備会を開催するにあたって様々な壁にぶつかりました。一回一回の発足準備会を開くために資料を作ったり、会をうまく進行させるためにはどのようにしたら良いのかを考えたり、会場をとったり、暖房のことを考えたりと一回の発足準備会を開催するにあたって様々なことをする必要がありました。運営する立場に立って初めて一回の会を開く大変さに気付きました。

第一回の発足準備会では約80人の学生が集まりましたが、回を重ねるうちに参加する学生がだんだんと減ってきてしまいました。「会の進行に問題があるのではないか。」「みんなで話し合って一から創りあげていこうという話だったのにこんなに少ない人数で大事なことを決めてしまってよいのか。」など様々な意見が出されました。このような意見が出されたとき私は会を運営していく難しさを痛感しました。発足準備会がうまくいかないイライラと発足準備会への批判の声に耐えかねて土井先生や友達に何度も相談しました。いろいろ話し合った結果、「80人全員がそろふことはあり得ないし、80人全員がそろふのを待っていたら話し合いは進まない。準備会に来てくれた人たちで決めることがあれば決めるべきで、会に来ることができなかった人たちにも話し合った内容がわかるように会の内容を全てノートに書き、公開すればいいのではないか。」ということになりました。

この出来事以外にも一人で考えていてもどうしようもない時、人に相談し、話し合うことで糸口が見えてきたことが何度もありました。話し合う、語り合うことの大切さを知ると共に、先生や友達など語り合える人がいることへの幸せを強く感じました。

夜明け前が一番暗い。信大Y O U遊広場発足準備会はまさにその夜明け前だったように思うと最初に書きましたが、暗闇の中で悩み、友と語り合い、様々な問題を解決した経験はとても自分の力になったと思います。そして、みんなで暗闇の中をさがき、努力したことで信大Y O U遊広場は夜明けを迎えることができたのだと思います。

最後になりましたが信大Y O U遊広場発足準備会、信大Y O U遊広場に参加していただいた学生の皆さん、先生方、地域の方々に深く感謝の言葉を申し上げます。ありがとうございました。



## 教師は子どもにとって影響力の大きい存在

「信大Y O U遊広場」副運営委員長 家庭専攻 4年 林一真

今年度、信州大学教育学部で新しく発足したフレンドシップ事業「信大Y O U遊広場」は2年生・3年生と今まで携わってきた「信大Y O U遊サタデー」と違い、各プラザでの年間を通しての活動であったため、年間を通して子どもと関わる事ができた。そのおかげで、ひとりの子どもを継続して見ることができ、子どもとどのように接したらいいか考える機会を得ることができた。また様々なプラザに参加することで、数多くの子どもとも触れ合うことができた。

2プラザ「茂菅ふるさと農場」の活動では、ひとりの子どもを毎回観察しながら接していた。毎回の農作業体験で、なかなか農作業に溶け込めなく、母親の近くでいつも眺めている子どもである。どのようにしたら、その子どもが農作業に参加してくれるのか考えたが、具体的な方法は出なかった。具体的な方法はないものの、子どもの姿をじーっと見ていて、学生との多く関わるのなかで、興味関心のわく瞬間があることに気がついた。子どもに学生が積極的に接し、心理的に子どもが活動しやすい環境を作ってあげる必要がある。これは、授業の支援につながる。このような支援をするためには、常に子どもを見ていくことである。子どもをしっかりと見て、子どもからのメッセージを逃してはならない。発する声だけではなく、表情やしぐさもまた、子どもからのメッセージである。学生との関わりの中で、農作業の終わりごろには、その子どもは積極的に田んぼで動き回っていた。

4プラザ「キャンパスプレーパーク」では、子どもと距離をおいて接することを学ぶ機会となった。信大Y O U遊広場の活動は、フレンドシップ事業であるため、ただの遊びを提供する場ではない。子どもとともに学生も学ぶ場である。キャンパスプレーパークもただの遊び場であってはならない。キャンパスプレーパークは禁止事項のない自由な遊び場という環境から、子どもが自由に遊ぶことができる。それは、子どもを自由にする面、危険も伴ってくる。危険な場面で、してはいけないことは叱ることが必要となってくる。それには、ある距離を保ちながら子どもと接することが必要である。子どもと一緒に目線になってともに遊ぶことは、子どもを知る上でとても大切なことである。しかし、それはまた、子どもが危険なことをしていることに気づかないことも危惧される。3年次教育実習で、子どもにどのように叱ったらいいかわからない時期があった。活動(授業)の目標を見据え、子どもがしてもいい範囲を決めておくと、注意しなくてはいけないところが見えてくる。この視点を持って子どもと接することが、子どもとの距離をおくことである。この距離を保つことが教師としての立場を考える第一歩である。

最後に、子どもにとって、「信大Y O U遊広場」は、子どものアンケートを見る限り、農作業などの活動よりも学生との関わりを楽しむにしている子どもが多い。これは学生(教師)が、子どもにとってどれだけ影響力の大きいものか物語っている。体験的な学習を含め、様々な授業における目標やそこに到達するまでの配慮や支援は、その教師に委ねられている。そのため、教師のやり方で子どもに良いものを与えることもできるが、子どもを駄目にもすることを踏まえねばならない。教師は子どもにとってそれだけ影響力が大きいのである。子どもと接するときは、常に最善を尽くして取り掛からなければならない。



## おみやげ♪

「信大YOU遊広場」副運営委員長 数学専攻 4年 両角孝之

私はYOU遊サタデーの頃から執行部、キャプテンと積極的に活動に関わってきた。このYOU遊広場でも、「副運営委員長」(名称は明確でないが)といった位置にいた。今年は教員採用試験や他のボランティア活動によって活動が制限されていたが、可能な範囲で活動、会議に参加した。このような立場の自分の目から見た「YOU遊広場」について書く。

この活動では「継続」がその特徴として挙げられる。この理念はYOU遊サタデーではなかった。イベントレベルではどうしても一回毎切れてしまう「繋がり」が、「継続」により保たれた。それにより学生たちが地域、子どもたちとの信頼感を形成するに至った。そして何より学生自身が繋がり続けるという意味が大きい。毎週の定例会、運営委員会、そして定期的な活動でモチベーションを高めていった。YOU遊広場の活動がある意味サークル活動に近づいたのである。また、この繋がり Friendship事業で全国に広がったのも特徴的である。外部からの視点が加わり、刺激が入ることにより、向上心が高まった。

しかし、その多くの成果の一方で、若い活動である故のこの活動の限界も見えてきた。運営委員会に属している人間の自己満足的な側面。他のメンバー、そして4年生を初めとして、他の教育学部生、教授等をうまく利用できなかった。YOU遊広場には絶対入りたくない。また入りたいけど入れない、といった人の意見を汲み取り、反映せねばならない。仕事の配分などの問題点は運営委員会で扱われつつも、結局動きは見られなかった。今の問題点をいかに解決していくのかプラザ毎がもっと独立して考えていくべき場面でもあり、それが当初のYOU遊広場のスタンス、プラザ長の役目ではなかったのではなかろうか。

この信州大学教育学部には、「変態」が多い。多くが先生という職業にあこがれ、生真面目な傾向が強い。その中でもさらに「変態」が集まったのがこの団体である。皆同じような生き方をし、考えを持ち、活動している。そのお陰で団結力は大変強く、進行もうまくいく。一方、閉鎖感を与え、世界に広がりが無い。偏った視点でしか考えられていない。

また、継続によってYOU遊サタデーより失われてしまったものが多くある。意識の希薄化であるが、活動が日常になることによって「慣れ」が生じ、一つの活動に全力になって協力していく体制がなくなった。同時に人間的な向上が少なかった。自分の可能なことか、少し上のことにしか挑戦しないため、失敗することがまずなく、多少頑張ればなんとかなってしまう。大学内、地域には、スゴイ人は多くいる。そこへ見聞を広められず、YOU遊広場に時間の多くを取られ、世界を広げられなかった人もいないだろうか。

計画の面では、年間計画、月間計画といったものもなく、各プラザの目的も曖昧であった。だからこそ、プラザ長以外が主体的に判断し、行動できる場がなかったのではないか。記録としてはYOUプラノートがあるが、誰もが使えるものではない。また、この報告書でも枚数制限もあり、感想等が多い。これらの記録を来年度以降使用しやすいように加工し、誰でも見やすくその活動以外の活動にも役立つものを各プラザが残すことが必要である。

ここまで「来年度以降に繋げるための報告書」ということであえて書いてみた。私自身もこれらを改善できなかった自分を不甲斐なく思い、残すべき物を残しきれなかったのではと後悔も多い。来年度は4年生にYOU遊広場を引っ張ってきた人間が多く残り、今年度とは環境が違う。その環境を生かし、今年よりも一つ上のものに挑戦してもらいたい。

# 教育の開拓者として

「信大YOU遊広場」研究主任 野外活動専攻 4年 杉山雅幸

## 1. YOU遊広場の創造性

YOU遊広場、創設1年目。様々な思いが生まれ、今まで大学ではできなかった活動を行うことができた。来年度からも今年度と同様に、革新していくことだろう。そしてまた、私はそれを期待する。私は、YOU遊広場には新しいものを作り出せる要素があり、その可能性が存在しているように思う。次にあげる3つの要素は、これからも失ってもらいたくない。では、その3つの要素とは何であるか述べよう。

まず1つ目に、YOU遊広場の活動が、継続的な活動だということ。年間を通して子どもとかかわることから、より直接的で、実践的な活動になり、スタッフは、試行錯誤しながら取り組むことができる。2つ目に、分野が多岐にわたり、プラザと言う形で今まで混在していた各分野が、はっきりと方向性が見える状態であること。スタッフは、いろいろな教育の側面を見ることができ、自由に体験できるのである。関心がある人にとっては、始めの一步を踏み出すきっかけになり得る。また異分野の観点をもつ人が集まるので、互いに切磋琢磨することができ、それぞれの分野(=プラザ)が無限に広がっていくだろう。また新しい視点をもった分野が生まれてくるかもしれない。3つ目に、活動の場が確保され、用具が備えられていること。活動にとって、基礎的なことだということは言うまでもない。

これらは皆の力で維持されている。だから皆への感謝の気持ちを忘れてはならないのだ。

しかし、上で述べたような要素を活かし、未知なる可能性を引き出すためには、次のような姿勢を身に付けることが必要かと思う。

## 2. 今後の発展のために

### ① 社会の動きに目を向け、今、何が求められているのかを分析する姿勢をもつこと

今年度行なった活動自体は、どれをとっても目を見張るようなすばらしいものであった。しかし、それをじっくりと振り返る機会があっただろうか。1年間通して、子ども達とかかわることから、往々にして活動の準備に時間が費やされてしまいがちである。活動の反省を踏まえ、自分自身で考えることが必要である。また考えるとき、世相を知っておくことで考えに深みが増す。YOU遊広場の中だけのこととしてではなく、社会の取り組みとしてとらえ、分析していく姿勢を忘れないようにして欲しい。

### ② 他での取り組みを知り、自分達の活動を見つめる姿勢をもつこと

近年では、他大学や地域社会においても様々な活動が行われ、プラザに似た活動が行われているところもある。過去の報告書を見たりすると、なるほどと思うことがあったり、新しい発見をすることができる。YOUサタの歴史を紐解くことでも発見があるだろう。

### ③ 放任にならないこと

野外教育の指導者になる過程には段階があるという。まずどうしたらいいか分からず放任する。次に全て指示を与えるようになる。経験を積み、自信がつくと適切なときだけ指示を与えることができる。これは野外教育指導者に限ったことではないだろう。経験を十分に積むことは、とても難しいことである。しかし経験のある人がサポートすることで、子ども達に有効な影響を与えることのできる事業ができよう。大切なのは「人間力」である。



## 新たな世代が創る道

「信大YOU遊広場」研究主任 信州大学大学院学校教育専修 1年 那須良寛

昨年度、信大YOU遊サタデーの7年間の活動が閉幕となった。自分はYOUサタ世代とでも言うべきか、大学生活の大半をこれに賭してきたわけで、自分が現在のフレンドシップ活動の先駆けであるYOUサタに取り組んできたのには、それなりの理由があった。子どもの笑顔が見たい、自分の力を試したい、それらが教員養成の場として、最も活力源となり得るからであった。それに付随して、大学と地域の連携等の問題を、徐々に理解していけるようになった。これが私の「思い」であるのだが、新たな挑戦をしつつも、先輩方が築き上げてきたYOUサタを発展させながら、守っていくことが重要であると思っていた。それを壊してまで、ゼロからのスタートを切るのにどこまで成果が得られるのかと感じていたが、実際は随分違ったものだった。

今年度のYOU遊広場の活動には、大学院生の立場と、YOUサタ経験者の自分が混同して、後輩達のご意見番として活動に参加していければと考えていたが、そんな必要はなく、彼らの新しい活動に、自分が魅力を感じて、それに驚いているばかりであった。7つの活動、それぞれのプラザが、既成の概念にとらわれない自由で、それでいて理にかなった活動を展開していった。

「信大牟礼・茂菅ふるさと農場」では、休墾田や休耕地を利用して、地域の方に指導をしていただきながら、学生と子どもが共に汗を流し、農作物を育て上げていく活動を通して「土づくり・人づくり」を目指してきた。この活動のすばらしい点は、本職の方から、専門的な農業の知識を学び、学生と子どもが実践し、収穫に結びついていくということである。普段、家庭にならぶ食べ物を生み出すのにかかる労力やありがたみ、育て上げた喜びを感じることができる。これらの「体験」から得るものは大変価値のあるものである。これからも、より深い知識と体験を得られる活動になることを期待したい。

「里山ふれあいキャンプ」では、学生スタッフによる親子キャンプを企画運営した。親子のふれあいを自然の中で深めていくことと、それを企画する学生の力試しということがおもな目標だと私は感じた。実際に学生達が進行するのはなかなか大変で、スタッフ全員の力が必要とされた。不備はあったものの、親子が楽しむ光景が多々見られたすばらしいキャンプであったと思う。課題としては、安全面や日程の調整などが残るが、これからも挑戦を続けてすばらしいものにしていくことを望む。

新しい世代の創る、新しい活動はまだ始まったばかりである。これから先にどのように進化するかは分からないが、地域に活動を働きかけることで参加する子ども達の『社会力』を育てることに一役買っているのではないかと感じる。人間に在るべき力、そうした根底の力を呼び覚ましていく、彼らの活動にはそんなエネルギーがあるのである。

これからの活動の中で、試行錯誤して、立ち止まることは多々あるだろう。子どもへの接し方、立ち止まる「壁」など、それに伴う不安よりも、彼らはチャレンジ精神や創造意欲のほうが大きく凌駕している。また活動の中で経験を重ね、理論を学び大きくなっていくだろう。新たな世代が創る道を共に歩き、見守っていきたい。

(参考文献) 門脇厚司 『子どもの社会力』 岩波書店 1999年



## 茂菅そして牟礼農場での体験活動

信州大学教育学部教育科学講座教授 和田清

地域の子どもたちとの交流を通して、YOU遊広場の活動が茂菅と牟礼の農場で実践されてきた。私はわずかししか参加しなかったが、メンバーの自主的な取り組みを目の当たりにし、こらからもずっと長続きするよう思いつくままにいくつか書き出してみよう。

### 1. 授業への位置づけ

12年度から始まったこの体験活動は、土井先生のご希望で13年度より授業として扱うことになった。「自然体験研究特講」「同演習」であったが、この授業科目名には何もこだわらない。たまたま、土井先生の授業開設には間に合わなかったのが、既に用意されていたこの科目名でとりあえず実施してもらっただけである。今後は、このYOU遊広場の実践活動にふさわしい、全国に誇れるような授業科目が設定されるはずである。

### 2. 体験活動の意義

栽培活動でも製作活動でもさまざまな体験活動は、単にものをつくるためのノウハウを身につけることを目標に行われているのでは決してない。参加するにもいくつかの困難な選択肢の中から、「よし、子どもたちの待つ遊ブラへ参加しよう」とする意欲と態度を私は重視する。そして、自分たちで計画を立て、実施し、あるいは作り上げた満足感、充実感は、言葉では言い表せないほどであるはずだ。そこに実践活動の意義がある、と私は考えている。もちろん、よりよいものを作ろう、よりおいしいものを作って食べようという願望はだれもがもっていることで、それは体験活動へいっそうの意欲をわかせてくれる。

### 3. 土に親しむ—表土が命を支える—

人間は原始の時代から土の上で生活し、その土に育つ草や木を糧にして生きてきた。地表からわずか40～50cmほどの土壌—表土が地球上のすべての命を支えている。この大事な母なる土壌から、「汚い」とか「汚れる」「荒れる」などの言葉で遠ざけてはならない。学校の教師こそ土いじりのできる人になってほしいし、子どもたちが喜んで土遊びできる環境づくりこそ命を尊ぶ人づくりへとつながるのだと考えている。

農家の人たちは、この表土を何をおいても大切にす。作物を収穫した後は、土地がやせてきたといっは肥料を加えて土づくりに精を出す。ドイツでは古くから表土保全法という法律があつて、山でもどこでも無闇に表土を荒らすことが禁じられている。道路を造るときでも、工事後にまた使えるよう表土だけまとめて蓄えておく。ところが残念ながら日本では、大型重機で表土も深土もごちゃ混ぜにして命なんてまったく意識していない。

### 4. 里山のこと

今、山村の周囲に広がる里山は全国どこも荒れ放題となつてきた。「チョウがいなくなった」「トンボもホタルも」「むかし懐かしい草花が減った」と、身近な生き物がつぎつぎと消えてきたという話題で持ちきりである。里山とは裏山の雑木林だけでなく、集落の周りの田畑や小川、池、社寺林、屋敷林、そこで生活する人びとの暮らしまで広く含めて扱う必要がある。それを私は里山生態系とよんでいるのだが、茂菅でも牟礼でもこれから取り組む課題はいくらでも存在する。どれも卒論や修論のテーマにふさわしいほどである。農場での体験活動を通し、地域の人たちとの交流も進めて農山村の現代的な問題にも関心を



向けてほしいと期待している。



## 菅平高原での「ふきのとうキャンプ」

信州大学教育学部スポーツ科学教育講座助教授 平野吉直

キャンプなどの自然体験活動で期待される教育的成果は、第一に、自然の中での生活や活動がもたらす成果です。自然の美しさや不思議さに対する驚きや感動は、子どもの感性を高めるとともに、自然に関する知識を深め、その関連性・重要性を学ぶことにつながります。また、キャンプには自然の中での素朴な生活・活動が多く伴います。物質的な豊かさや便利さの中で暮らす子どもにとって、こうした非日常的な生活・活動は、不便であり、時には苦痛を感じることもあるでしょう。しかし、このような環境の下での困難を乗り越える体験は、子どもに成就感をもたらし、向上心や忍耐力を培うことに役立ちます。

第二に、集団による活動・共同生活がもたらす成果です。キャンプは、小グループでの生活・活動が主体となります。子どもは、いわば小さなコミュニティの一員となります。自分のことは自分でする、役割分担をして責任を持って仕事を成し遂げる、といった自主的・主体的な行動や態度が自然と求められます。また、仲間とよく相談をする、協力して事を運ぶ、約束を守る、というような協調的・社会的な態度や行動も求められます。こうした生活・活動の実践・反復は、子どもの自主性、協調性、社会性の育成に大いに役立つものです。

第三に、新しい体験がもたらす成果です。キャンプは、子どもにとって、普段の家庭生活や学校生活では味わうことのできない新鮮な活動です。こうした新しい体験は、これまで気付かなかった自己の長所や能力を発見したり、短所を知る機会となります。子どもが自己を見つめ直し、日常の生活、家族、友人関係など、自分を取り巻く社会について考えるまたとない機会を提供します。

そこで寺沢宏次助教授をチーフに、信州大学研究プロジェクト「不登校、いじめ、キレる、荒れる、学級崩壊を包括する地域と学校教育」に取り組んでいるメンバーは、長野市内の小学校から4・5・6年生38名を募集し、以下のような3回の準備会を経て、「ふきのとうキャンプ」を実施することとしました。信州の大自然を活用した「ふきのとうキャンプ」は、雪上での様々な自然体験活動をとおして、やさしさやたくましさなど、子どもの「生きる力」をはぐくむためのお手伝いをします。

①第1回準備会：平成14年1月14日（月）14：00～16：00

グループに分かれて、信州大学教育学部で雪の造形を楽しみました。

②第2回準備会：平成14年2月11日（月）14：00～16：00

信州大学教育学部の体育館を中心に、チャレンジゲームに挑戦しました。

③保護者説明会：平成14年3月2日（日）15：00～16：30

保護者説明会でキャンプの詳細を説明するとともに、子どもたちは、この日に発表されたキャンプでの班に分かれ、リーダーそして班のメンバーとの顔合わせをしました。

④「ふきのとうキャンプ」：平成14年3月24日（日）～27日（水）3泊4日

3/24 午後：雪上チャレンジゲーム、夜：かんじき（竹スキー）作り

3/25 午前：かんじき（竹スキー）ハイキング、午後：雪洞作り、夜：雪洞泊



3/26 午前：アウトドアクッキング（朝食作り）・休息、午後：全体企画活動（そり遊びなど）、夜：雪上キャンプファイアー

3/27 午前：班別企画活動

「ふきのとうキャンプ」は、文部科学省菅平高原体育研究場をベースに、積雪豊かな菅平高原で実施します。「ふきのとうキャンプ」の指導には筆者と筆者の研究室の学生・大学院生5名があたります。また、参加者の募集と各班ごとに子どもと生活を共にする2名ずつのスタッフは「信大YOU遊プラザ」の学生12名があたります。そして、寺沢助教授とその研究室の学生5名は「ふきのとうキャンプ」に参加した子どもたちの心身にどのような効果が表れているかを、GO/NO-GO 課題による調査によって明らかにします。プログラム全体の統括責任者が土井進教授です。

間もなく平成14年度が始まります。いよいよわが国では学校週五日制が完全実施され、画期的な教育改革が展開していきます。13万人といわれる不登校生の問題に、この「ふきのとうキャンプ」が1つの希望の光を投げかけるものとなるよう、教官、学生・院生、子どもたちが一体となって成功させたいと思います。

Web上では非公開

## 今、日本の子どもに大切なこと

信州大学教育学部スポーツ科学教育講座助教授 寺沢宏次

私たちは日本の子どものからだの変化に関する調査を始め、その一環として 1969 年から GO/NO-GO 課題による子どもの大脳活動の型の調査を行ってきました。この GO/NO-GO 課題による大脳活動の実験は、「赤・黄色の二種類のランプのうち、赤はゴム球を握り、黄色は握らない」という指示を与え、約束事がちゃんと守られているかを調べます。日本の子どもは 1980 年頃からこの約束事を最初は理解しておきながら、間違ってしまうケースが多く起ってきています。具体的に述べますと、加齢と共に間違いの数が減少していかなかったり、特に間違ってしまう年齢が加齢傾向に向かうという大脳活動の発達の遅れが見られています。この GO/NO-GO 課題は脳生理学、神経科学、認知脳科学、心理学の世界で広く使用され、比較的良く知られている実験です。日本語に訳すと「行くか、行かないか」或いは「やるか、やらないか」ということになるでしょうか。この GO/NO-GO 課題をサルやヒトに行い、脳の神経細胞から出る電位、磁場を見る脳波、脳磁計や脳の血流量を見る光トポグラフィーで調べてみますと、前頭葉の 46 野付近の活動が高まることがわかってきました。大脳の構成は、大脳新皮質と大脳辺縁系に分けられ、大脳新皮質は前頭葉、側頭葉、頭頂葉、後頭葉からなります。前頭葉は一般に意思・感情の他に感覚・運動・注意・集中を統合している所と言われています。そして前頭葉の 46 野は一般的な情報を取り入れ、そこで最終的な判断を行なうワーキングメモリーという大変重要な働きをしていることが現在明らかになっています。

私たちは 1980 年頃から日本の子どもの GO/NO-GO 課題の正解率の減少を引き起こしている原因を探るため、子どもたちを取りまく生活環境の変化に着目します。そして、日本と中国の子どもたちに対して GO/NO-GO 課題を実施した結果と子どもたちの生活調査のクロス集計を試みていく内に、原因は子どもたちの遊びの形態変化が関与していることを突き止めます。すなわち鬼ごっこやかくれんぼなど、からだを動かす動的な遊びからテレビ・テレビゲームなどからだを動かさない静的な遊びに移行していることでした。この背景には日本の高度経済成長があると考えられます。すなわち、車の保有台数が増加し、同時に交通事故が増え、この時多くの幼児が犠牲になります。これにテレビの普及が重なり、日本の子どもは危険な屋外から安全な屋内に遊び場を変えます。遊び空間はビルや駐車場に変わり減少し、少子化も伴い子どもの群れ社会の崩壊が起こり、子ども同士のコミュニケーションが激減していきます。ここで身体活動を伴う動的な遊びは影を潜め、変わってテレビ・テレビゲームなどの静的な遊びが主流をなしてきたわけです。それでは日本の子どもたちの遊びが、からだを動かす動的なものから静的な遊びに移行したことがなぜ大脳活動の発達の遅れに繋がるのでしょうか。脳の前頭葉は運動や他人とのコミュニケーションという刺激を受けることによって発達することがわかってきています。この大脳活動の発達の遅れは、遊びのスタイルの変化によって、運動量や人と人とのふれ合いが少なくなったために、この前頭葉の部分をあまり使わなくなったことが関係していると私たちは考えています。人間も運動しなければ体力は失われます。走ったり歩いたりしなければ足も当然衰えていきます。前頭葉も適切な刺激を受けなければその発達は遅れるでしょう。



このようなことを背景に私たちは今回、信州大学研究プロジェクトの経費によって、「信大 YOU 遊広場（プラザ）」と連携して保健室や相談室に登校している子どもたちも参加する「ふきのとうキャンプ」を実施する運びとなりました。このキャンプのプログラムは日本の子どもたちに不足している運動や暖かい人と人とのふれ合い体験を密接に取ることに配慮しています。このプログラムが日本の子どもたちを救う一つの手だてになっていくことを期待しています。





## 子どもも教師も体験を

長野市教育委員会青少年課 指導主事 小池英樹

現代の子どもたちは、原体験が不足し、人間関係を結ぶ力も低下してきていると言われています。このことは、様々な生活場面で顕在化しており、学校教育や社会教育の場面で、多くの方々から指摘されています。自然体験・生活体験の不足をはじめとして、自分から友達に関わっていけないこと、グループ遊びが成立しないことなど、本来はぐくまれるべき豊かな心の育ちが危惧されるところです。

このような現状の中、信州大学では、土井教授を中心として、子どもたちに様々な体験活動の場や機会を提供してられました。このことは、教職を目指す学生にとっては、教室以外の場所で、子どもたちに積極的に関わる機会をつくることであり、活動を通して学ぶという正に実践的な取り組みそのものであります。このような、実践活動のなかから学ぶ取り組みは、本来、教育において最も重要なことであるにもかかわらず、今まで、なかなか具体的実践が見られなかったのではないのでしょうか。そんな中、この「YOU遊広場」の取り組みは、将来教職を目指す学生たちの実践としては全国でも先駆的なものであり、また、その先見性は他に類を見ないものであります。

昨年暮れに信州大学におじゃまして、本年度の活動内容を見せていただく機会を得ました。また、各プラザ長の学生さんから、プラザの活動のねらいと内容を丁寧にお話しいただきました。どのプラザも、新鮮なアイデアと若い実行力に満ちていて、まぶしいおもいで聞かせていただきました。

社会が急激に変化する中で、学校教育をはじめ、今後の日本の教育は多くの課題を背負っています。しかし、時代がどんなに変わろうとも、教育においては変わらないことがあるように思います。それは、体験に学ぶこと、そして、子どもに学ぶ大人のあり方そのものであると確信します。

若さと行動力に満ちた学生のみなさんの、今後の活躍を願ってやみません。さらに、今後とも「YOU遊広場」の活動がますます発展し、教職を目指す学生たちの輝かしい指標となるよう祈念しております。





## 「信大Y O U遊広場」の目玉は学生の情熱

ソニーフロンティアサイエンス研究所 竹内幸一

私は子ども未来センターの検討委員として、この1年間長野県内を隈なく歩き回り、地域の子どもたちのために活動されている「良寛さん」や「達人」の方々に直接お会して語り合いました。「信大Y O U遊広場」にも8月の里山キャンプと12月のY O U遊フェスティバルに参加させていただき、学生の皆さんと膝づめで語り合いました。皆さんの活動には情熱があります、温かさがあります。これが「信大Y O U遊広場」の最大の目玉であると思います。皆さんが茂菅や牟礼の農場で育てたお米やじゃがいも、にんじん、玉ねぎなどを用いて子どもたちと一緒に作ったカレーライスをいただきましたが、私は何ともいえない温かさ、心と心のふれあいを感じました。

長野県の子ども未来センターをどのように構想すればよいか。私はこの1年考えに考え抜いてきました。その結論として以下の12の目玉を提案したいと思います。

- 1.子どもと一緒に自分達で展示物を創り続けるミュージアム
- 2.好きなテーマで活動や作業が出来る子ども別荘村
- 3.小さめのチルドレンズミュージアム、各市でも欲しくなるような低学年向け活動施設
- 4.建物の面白さだけで子どもが大はしゃぎするムーミンの家
- 5.マイクロバスで長野県内各地に出前するミュージアムバス
- 6.子どもの喜ぶ本格的な和風の家、四季の彩り、日本人の情緒、子どもの行事、お行儀
- 7.子どもにとって良い映画しか見せない映画館
- 8.本当に生活できるエコドームハウスでのビオトープ、有機栽培
- 9.大芝の温泉の排水余熱で1年中蝶々の楽園
- 10.先生達に総合的な学習に役立つ創造的学習を伝授
- 11.大芝の協力で各学校がエクスペラトリウム活動
- 12.長野の最大の目玉は子どもに温かい良寛さんと達人達

信州で子どもたちと素晴らしいかわりをされている良寛さんや達人の方々とお会いして、この方々の心と技を活かすことこそ長野ならでの子ども未来センターとなると確信しました。まだまだ信濃教育の良さが長野の人々の中に伝承されています。これだけはお金でも法律でも権威でも買えない長野の宝です。子ども達に優れた先生は、先生達への優れた先生でもあります。こういう方々が参加しやすい施設が大芝に出来たら大成功です。あとは自然発酵します。県としても手間がかからず、子ども達にも喜ばれ、全国からも喜ばれる方法になると思います。最初に子どもに関わる人ありきです。子どもに温かい想いを抱いていらっしゃる良寛さんや達人、学生の皆さんこそ、子ども未来センターの宝です。

子ども未来センターの特長を一言で言い表すならば、「第2の学校」「オルタナティブスクール」です。これを声高に唱えている施設は日本にはまだ無いと思います。それくらい子どもに真剣な施設が残念ながら見当たらないのです。

100年後の新しい信濃教育が「信大Y O U遊広場」から、そして「子ども未来センター」から始まることを私は心から期待しています。そして、学生の皆さんのご活躍を心からお祈りしています。



## 「信大茂菅ふるさと農場」での出会いと実践

(財)長野県農業開発公社 J Aながの営農指導部 大内清

土井先生、志村先生、学生の代表の皆さんが見えて「信大YOU遊広場」の活動に協力して欲しい、そんな要請でお手伝いする事になりました。

当初、信大教育学部の農業体験くらいの認識でいましたが、この一年間、附属教育実践総合センターの先生方、学生の皆さんと行動を共にする回数が増すにつれ、又、土井先生からフレンドシップ事業報告書(そのB)の実践記録を見させていただくなかで、体系的な取り組みを知りました。J Aとしても、国際協力田という位置付けもありました。

土井先生の「土づくりは人づくり」作物(生き物)を育てるという活動を通じ、そこにいる動物、植物、自然界の営みに接し、共生することにより未来を切り開く原動力を身につけたいという言葉に共感しました。J A(農協)活動に長く携わって来ましたが、J A組合員の皆さんの生産指導、生産力アップ、それを有利販売に努め、所得向上を目指す追及が主体だったように思えます。この事も重要事項である反面、米作りと生活の営み主食、すなわち生業として、歴史の中で伝承しなければならないことも多くあると思います。幼年期からの関わりが人間形成上大事だと思います。今日的ひずみ、社会の諸問題に対応して、たくましい教職員を目指す信大教育学部の実践取り組みにJ A関係者としても敬意と感謝をいたしております。

私が最初に驚いた事は、米作りの基本した。苗作りの時に土井教授が紺色のつなぎ作業服で学生さんと雨の中を農家の皆さんと種播き、仕込み作業をしている姿でした。これは本物だ、YOU遊広場に取り組む意気込みが伝わってきました。(苗作り半作)

茂菅の若松さんの水田の借入手続きを終え、田起し作業(一般的には機械で起し、短時間で済む)が学生の皆さんが「三又」で「一畝、一畝」土の硬さが身にしみ汗した意義は変えがたいものと思います。ただ若干残念な事は、均一に起こされていなかった事と、作業にあたる心構え、服装が気になりました。水田には畝床と言って、土層下面に水が漏れないように硬い層があり、ここまで深く耕し、堆肥や肥料を入れると、稲の根が力強く張り、災害や病害虫に耐えられる土壌になるのです。

田植えのイベントも盛大に開催され、大変良かったと思います。代かきされた水田に学生の皆さんの指導援助で、地域の子も達が小さな手で苗が植えられる。グニャとした土の感触は一生忘れないと思います。青々と植えられた光景は農村原風景であり、民族を支える食糧の再生産の始まりです。

私も何年ぶりに体験した人力による他の雑草取り(今では有効な除草剤があり考えられない事)を先生、学生の皆さんとやりました。顔に葉先が当たり痛い、指の爪に土が入り、腰は痛い散々な作業でもありました。(米作りには88の作業がある)

8月に入って出穂しました。この間、毎日の水掛け当番があったと思います。スズメ被害防止に、網張りを林部さんの奥さんの指導で行いました。圃場の向きと網の縦・横の均一に張るところがポイントです。

稲刈りイベントも学生の皆さんが子ども達に教える仕種が胴に入り慣れない手つきがだんだん上手に仕向け、途中で「やだくなる」子どもと苦戦の末、ハゼ掛けをし、終了と



同時に夕暮れとなりました。

脱穀作業は、林部さんの物置から足踏み脱穀機が登場し籾が飛ばないように装置も万全で取り組み、この脱穀機と近代的なハーベスターで終了しましたが、子ども達は籾の「ウルチ」と「モチ」の見分け方を覚えました。

西澤農場長の音頭で子ども達が「田んぼさん大きな収穫ありがとう」と合唱しましたが、携わった皆の気持ちだと思いました。

更に牟礼村高嶋さんを講師に「しめ縄作り」に挑戦し、収穫祭では白井君達が小学生に上手に教えることができました。

また、収穫されたお米の一部は南アフリカの飢餓に苦しむ「マリ共和国」へボランティア団体を通じて、食糧援助米として杉山君達の立ち合いの上、発送されました。

以上これら米作りの諸作業、行動にお手伝いをさせていただきましたが、先生方のご指導のもと、学生の皆さん、地域の子も達との出会い、体験と感動があり教育的効果が大きかったと思います。

一年間土井先生、志村先生はじめ、多くの学生の皆さんと接して感じたことは、

1. 信大の皆さんは礼儀正しく、挨拶上手で気持ち良かった。
2. それぞれのイベントに実行委員長、農場長、イベントの担当者が苦勞して工夫しながら地域の子供達に接して、子供達も“食”のプロセスを理解できたと思います。「計画」「準備」「実行」「反省」授業の外にこの事前準備が大変だったと思います。
3. 教職を目指す学生の皆さんの目は、真剣さと、ユーモア、実行力がありました。
4. 附属教育実践センターの先生方、多くの学生の皆さんと会えた事は、私自身も楽しく、学ぶ点が多くありました。参加された子どもさん他関係者1人としてケガ等も無く、無事終了したことに感謝いたしております。
5. JAとしても「いのちを育む、地域と交わる」運動をすすめています。食農教育が重要課題でもあります。御卒業される皆さんは、任地でJAに市町村行政に一声掛けていただければ、連携して御協力できると思います。

最後になりましたが、関係し常に協力いただいた林部さん、地主の若松さん、大変ありがとうございました。





## 「信大YOU遊広場」に寄せて

長野市茂菅 農業 林部信造

二年目を迎えた「信大茂菅ふるさと農場」は、内容も更に充実、楽しみながら物を作る  
こと、また育てることを学び、人々とのふれ合う時間も与えてくれました。また国際協力  
田としての目的も果たし、収穫の喜びを共に味わう事が出来ました。私も縁あって学生の  
皆さんと共に農作業をさせていただいたこの一年を振り返り感想を思うがままに記したい  
と思います。

「信大YOU遊広場」に参加した子ども達がジャガイモ、サツマイモ堀など、初めて畑  
の土に触れ、硬い土、柔らかい土などの感触を味わい、水田においては稲の苗を持ち、一  
本一本田植えをし、これが大きく成長し毎日食べる米になることを教えてもらい貴重な体  
験となったことでしょう。この体験は土のみが与えてくれた自然の恵みであり「信大茂菅  
ふるさと農場」の大きな贈り物だと思います。人は助け合い、支え合いながら共に人とな  
って成長を続けます。その心を大切にしながら農業を愛し続けましょう。

（「しめなわ」作りに参加して）しめなわ作りの経験がありませんでしたので受講生とし  
て初挑戦しました。わらは「信大茂菅ふるさと農場」で作ったものを使い、学生の皆さん  
と共に講師の先生の教えに従い作っていきますがなかなか思うように出来ません。一週間  
後に控えたフェスティバル、何としても覚え、自分のものにしたいという学生の皆さんの  
努力と気迫を感じつつ講習会が終わりました。数時間という短い受講体験からどのような  
手順で子ども達に教え、作品を作り上げていくのか大変関心を持っていました。私自身作  
ることで精一杯、人に教えるという余裕などありませんでしたから。

当日会場には早くから、わら、はさみ、霧吹き等、全て準備されており即実習に入りま  
した。作品を作る手順も細かく書かれ、更にイラストを使い子ども達が楽しみ、飽きない  
ように配慮された会場の雰囲気、学生の皆さんによる寸劇を交えた実技指導で進められま  
した。殊に「しめ」の縫い合わせの状態を子ども達が一目でわかるよう、三色のテープを  
使って教えるというアイデア等、発想のすばらしさには感服致しました。

これらの教えにより全員が立派な「しめ」を作ることができ、家に持ち帰り、我が子の  
作品を飾り、家族揃ってお正月を温かく迎えた事でしょう。フェスティバルが成功裡に終  
わりました事を心からお喜び申し上げます。

夜は学生の皆さん、関係者の方々による反省会と食事会が催され、私も家内と共に参加  
させていただき、大変嬉しく、光栄に存じております。

会食が始まり、和やかな雰囲気の中、学生の皆さんから報告、反省、感想等が次々と発  
表されました。それは原体験を味わった人のみが語り得る言葉であり、また責任を果たし  
た喜び、信頼と協調によりYOU遊広場の目的を果たしたという充実感が人々に感動を与  
えてくれました。私も久しく味わうことがなかった感動を覚え、感無量でございました。

「信大YOU遊広場」が、土井先生の献身的なご指導により、年々拡充強化され、この  
活動が教えた多くの実体験は、二十一世紀の教育の原点だと確信いたします。

私も農業が好きです。若い人達のエネルギーを吸収させていただき、楽しみながら共に  
汗を流した一年間、これが皆さんの活動の一助となれば、この上ない幸せです。



## 子どもの育ち、大人の育ち

信州大学教育学部内地留学生 坂城町立南条小学校教諭 志村昌之

今年度、内地留学という貴重な機会を与えていただき、縁あって「信大YOU遊広場」の活動に参加させていただきました。初めて運営委員会や定例会に参加したとき、「やりたいこと（課題）を仲間と支え合いながらやっていく」という、まさに“大学生の総合的な学習の時間”という強烈な印象を受けました。毎週の運営委員会や定例会での話し合い、各プラザや活動毎の打ち合わせなどを通して、いつも子どもたちのことを思い、かかわっていただく家庭や地域の皆さんのことに配慮しながら、充実した活動を着実に進めていくことができていたと思います。

ある時の農場パスポートの返信に、「毎回、家では見られないようないい顔で楽しく参加させていただきました。ありがとうございます。」と、書かれているのを見つけました。子どもたちが、決して派手で楽しいとはいえない農作業を通して、こうした表情や思いを出してくれたことはもちろんですが、おうちの方々が子どもたちの成長の姿をしっかりと受け止めてくれたことも大きな喜びです。JAながの中央会の高松春洋さん、牟礼村ふるさと振興公社の竹元清春さんをそれぞれお訪ねしたとき、くしくもお二人は同じようなことをおっしゃっていました。「子どもたちが農作業を通して成長し、それを取り巻く大人が意識を変え、社会が変わっていかなければならない」と。農場の作業では、おうちの方々は、最初のうちは見ていることが多かったようですが、学生の呼びかけもあって、後半は一緒に作業をしていくことが当たり前ようになってきたと思います。作業を終えたあと、家族で収穫物を味わったり畑や田んぼのこと、そこで見つけた草花や虫などの話で盛り上がったりしたのではないのでしょうか。こうした人間としてのつながりが何よりなのです。それが、土井先生の言われる「土づくりと人づくり」につながっていくのだろーと思えます。農場だけではなく、他のプラザの活動も同じです。中心となる子どもたちのことを考えながら進めていったわけですが、うまくいったこと、つまづいたり後戻りしたりしたことなど、いろいろなことがあったと思います。活動の中心は、遊んだり作業をしたりする子どもたちですが、その子どもたちとかかわる学生の皆さん、その関係を見守ったり支えたりしている家庭や地域の方々にとっても、子どもの成長を通して知らず知らずのうちに人間力、社会力が培うことができたと思います。「信大YOU遊広場」は、“空中ブランコ”のようなところがあると思います。空中高く揺れているブランコを目の前にすると、その先に何があるのかという恐怖心や不安などであきらめてしまう場合がありますが、勇気を出して思い切って飛びついてみると、その心地よさや楽しさを味わえるかもしれません。事実、「信大YOU遊広場」は、学生、子どもたち、家庭や地域の方々、誰にとっても未知なるもので参加への不安は大きいものがあったことでしょう。しかし、思い切って参加してみると、先ほど述べたようなことをはじめとして、それぞれの立場ですばらしい学びや成果があったと思います。私にとっても十数年間の教師生活で忘れかけていた子どもたちの学びや育ちへの思いを問い直す貴重な機会となりました。

多くの皆さんと共に充実した活動できたことに心から感謝するとともに、これから始まる新たな「信大YOU遊広場」に勇気を持って参加される皆さんのご活躍をお祈りいたします。



## 価値ある学びを創る

信州大学大学院学校教育専修 1年 大澤安貴子

初めて「信大YOU遊広場」に参加させて頂き、ありがとうございました。

YOU遊フィスティブアル講座のような大人も子どもも学べる学習の場を設定するまでには、多くの時間と労力をかけ、様々な困難を乗り越え、ようやく当日を迎えられたことと思います。スタッフの皆様ご苦労さまでした。

さて、このYOU遊フィスティブアル講座での子どもたちとの触れ合いが学び合いであるためには、そこに学びを成立させる条件がどうしても必要になりますが、今回のYOU遊フィスティブアル講座の中にその答えがありました。

それは、①学びを創るのにふさわしいテーマの選択と、②学びを創る場の設定でした。そしてこの二つが成立している講座では、みごとに真剣な学び合いが生まれていたのです。

平成の教育改革で問題とされているものの一つに、教師の資質能力の問題がありますが、YOU遊フィスティブアル講座は、学びを創れる教師になるための資質能力を養うことにも、大きな貢献をしていました。

近年、教育問題を最優先課題に打ち出しているアメリカ合衆国が、専門家としての教師の基準を定めたものに、“National Board for Professional Teaching Standards”がありますが、その中の Standard VI (Meaningful Applications of Knowledge) には、次のような記述があります。

Teachers select worthwhile topics for study.

Meaningful learning develops when teachers help students delve into topics deeply, drawing on their experiences, perspective, skills, concepts, and knowledge from several disciplines.

すなわち意味のある学びは、子どもがあらゆる能力を働かせて取り組めるようなやりがいのあるテーマの選択により成立するということです。

さらに Standard III (Learning Environment) には、そのような意味ある学びを創る環境について、次のように書かれています。

The supportive, congenial, and purposeful learning environment established by such teachers promotes active learning, exposes students to a variety of intellectual challenges, and prepares them for independent learning opportunities.

つまり積極的な学びを促進し、様々な知的課題に触れさせ、自主的な学びの機会を用意する教師によって意味のある学びが確立されるとしています。これらはそれぞれ①と②に一致するのです。

また教師としての私の経験を振り返っても、やはり同じことが言えます。私の最大の喜びは子どもたちとの学び合いでした。子どもが学び教師も学ぶ、そういう価値ある学びの実現が、今後も数多く行われていくことを何より願っております。

参考資料

National Board for PROFESSIONAL TEACHING STANDARDS



## 体験的な学習の重要性と教師の役割

信州大学大学院学校教育専修 1 年 塩原孝茂

本年度の「信大YOU遊広場」の活動について、現場の教師の一人として、体験的な学習の重要性と教師の役割という二つの側面から述べてみる。

平成 10(1998)年 12 月 14 日に改訂告示された小学校学習指導要領において、総合的な学習の時間が新設され、自然体験や社会体験など体験的な学習を積極的に取り入れていくことが示された。これに先立つ平成元(1989)年 3 月 15 日に告示された小学校学習指導要領では、小学校低学年において、直接体験を重視する教科として生活科が新設されている。

体験的な学習の重要性については、さまざまな研究がなされている。有田嘉伸(1995)は、活動・体験学習の効用として、(1)こどもの積極的な意欲を喚起し、楽しく学習できる、(2)地域社会やこどもの生活の場に根ざした学習を展開できる、(3)おもしろさを発見できる、(4)疑問や問題を発見する、(5)現実の世界の場に入り込み、生きた社会を体験できる、(6)自然の場に入り込み、生態学的な発見ができる、(7)意義深いエピソードに出会う、という 7 点を挙げている<sup>(1)</sup>。また、児島邦宏(1999)は、「学校教育が体験を内容とし、方法とするということは、「体験」こそ、学校での学習の基礎・基本の中核をなすものであるという過言ではないだろう。社会性を育てていく上で、その基盤をなし、出発点をなす基礎・基本として、体験を位置づけることが不可欠である」と述べている<sup>(2)</sup>。有田、児島の論から、体験的な学習は、単に知識詰め込みがたの教育を批判するだけではなく、人間の成長に大きな影響を与えることを示唆している。

一方、体験的な学習に関わる教師側役割であるが、宮原修(1997)は、自然体験に関して「自然を単に体験するだけでなく、大人(保護者や教師や地域の人々)が、適切な「ことば」で子どもの自然体験(発見・学習)を意味づけ、発展させてあげられれば、子どもはさらに自然に対する「興味・関心・意欲・態度」を深めることになるだろう。そのようななかから、子どもの全身的(身体運動的・認知的・感情的)な「こころ」の発達も促されるのである。」と指摘している<sup>(3)</sup>。体験はたださせればよいというものではなく、子どもたちの体験を豊かにし、意味あるものにするためには、教師の存在、役割が重要であることを指摘している。

本年度のプラザの活動は、上記の面において重要な意味をもっている。1 点目として、体験的な活動を柱としたものであったこと。将来教師になる、ならないは別として、自分の成長にとって重要なものであった。2 点目として、教師を目指す者としての体験の意味である。宮原の言葉に「意味づけ」とあるが、これを可能にするのは教師自身の体験のみである。企画・立案・実行と素晴らしい姿を見せていただいたことに感謝する。

(1)有田嘉伸「学習における活動・体験の意義」『長崎大学教育学部教科教育研究報告』第 24 号 1995 年 72-73 頁

(2)児島邦宏『豊かな体験でいきいき教育』ぎょうせい 1999 年 7-8 頁

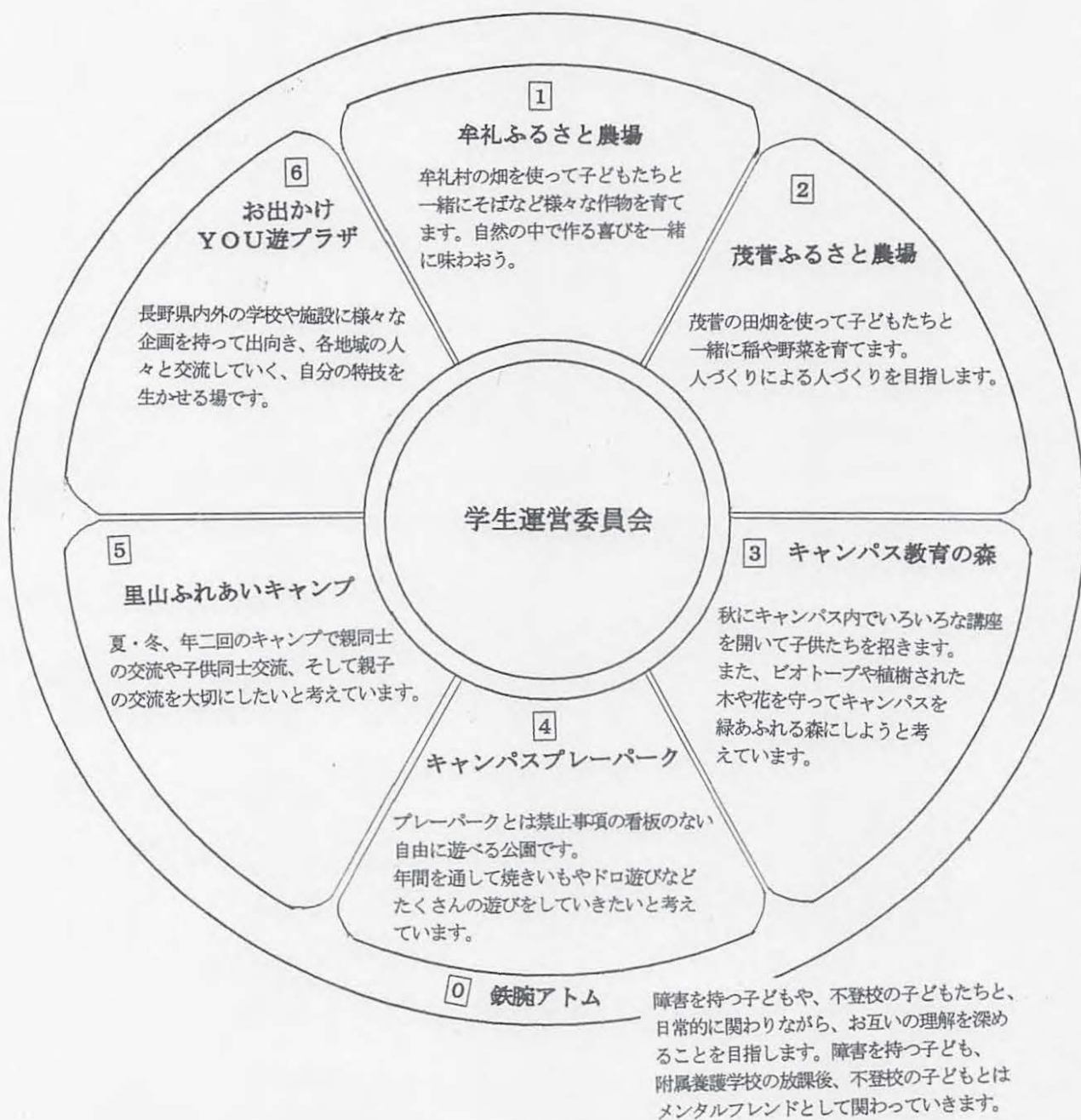
(3)宮原修「現代の子どもにとっての「自然体験」の意義をどう考えるか」『教職研修』1997 年 12 月増刊号 教育開発研究所 13 頁

## Ⅱ. 第1期「信大YOU遊広場」の概要

### 土づくり・人づくりプラザ 信大YOU遊広場の概念図

#### ・連携機関

長野県教育委員会、長野市教育委員会、J A長野中央会、J Aながの  
牟礼村ふるさと振興公社、長野県テクノ財団





## 1. テーマ

つくり・人づくり・学び  
信大 Y O U 遊広場

## 2. スローガン

明るく・楽しく・仲良く

## 3. 目指す力量形成

- (1)「自然」との共生による人間力の向上
- (2)「地域社会」との共生による社会力の向上
- (3)学問と自発的な体験の結合による実践的指導力の向上

## 4. 活動場所

- 0 プラザ 教育学部教室、附属養護学校、中間教室
- 1 プラザ 牟礼ふるさと農場（長野県牟礼村）畑 80a・山林 2a
- 2 プラザ 茂菅ふるさと農場（長野市茂菅）畑 3a・水田 3a
- 3 プラザ 教育学部教室、チューリップ農園、2000本の苗木、旧附属小学校敷地
- 4 プラザ キャンパスプレーパーク（教育学部W館横の空き地）
- 5 プラザ キャンプ場
- 6 プラザ 長野県 120 市町村

## 5. 学生運営委員会

- ・運営委員長 町田竜太（社会 3）
- ・副運営委員長 富山裕子（障害 3）、白井克典（社会 3）、林一真（家庭 4）  
両角孝之（数学 4）
- ・委員 各プラザ長、林美智子（実践 3）、鹿子木愛（実践 3）、小林則雄（地ス 3）

## 6. 各プラザの運営（教官、社会人の支援・指導のもとに学生が主体的積極的に取り組む。）

- 0 プラザ ◎富山裕子（障害 3）○平賀倫子（障害 3）△比嘉頼子（障害 3）
- 1 プラザ ◎西澤俊輔（理数 3）○ △那須良寛（院 1）
- 2 プラザ ◎西澤俊輔（理数 3）○中澤典子（国語 4）△相磯素子（幼教 4）
- 3 プラザ ◎清水美香（実践 3）○林美智子（実践 3）△大場浩幸（数学 4）
- 4 プラザ ◎小黑あかり（実践 3）○白井克典（社会 3）△鹿子木愛（実践 3）
- 5 プラザ ◎小島真知子（地ス 3）○小林則雄（地ス 3）△杉山雅幸（野活 4）
- 6 プラザ ◎梅田亜紀子（社会 3）○町田竜太（社会 3）△笹崎典子（数学 4）

◎プラザ長 ○副プラザ長 △研究主任

## 7. 教職員運営委員会

教育学部長、附属教育実践総合センター長、教官有志、事務官で構成する。

## 「信大Y O U遊広場」発足までの歩み

7年間続いた「信大Y O U遊サタデー」が、平成12年11月をもって閉幕することになった。しかし、大学の授業以外に何かやってみたいと思っている人が多くいたため、有志の学生が集まって、「21世紀の学生主体の新プロジェクト発足準備会」が開催された。

### 平成12年12月12日 第1回発足準備会

昼休みの15分間、ビラを見て興味をもってくれた学生が集まった。呼びかけ人と学部長の挨拶と今後の準備会の開催日を決めた。

### 平成12年12月19日 第2回発足準備会

放課後、約30人の学生が集まり、自分のやりたいことを出し合い、どのようなプロジェクトにしていきたいかを話し合った。三世代交流、農業、障害児者と関わりたい、不登校の子と関わりたい、国際交流、地域との交流、宿泊を伴った活動…、様々な思いが語られた。このようにやりたいことがまちまちであるため、みんなの思いが実現できるプロジェクトのあり方についても意見を出し合った。

### 平成12年12月21日 第3回発足準備会

放課後は用事がある来られない人の為に、みんなが集まりやすい昼休みに準備会を行った。ここでは、今まで話し合われたことをもう一度確認し、一人でも多くの人が参加できる日に次の準備会の日を設定した。

### 平成12年12月25日 第4回発足準備会

今回も放課後に集まって、自分たちのやる気ややりたいことを言い合うことから始まった。白熱した話し合いが続いた。

また、第3回の時に自分のやりたいことや思いを一人一人に書いてもらっていた。その結果、みんなのやりたい事にある程度のまとまりがあることが分かった。信大茂菅ふるさと農場・信大牟礼ふるさと農場・信大キャンパス農場・信大オープンハウス・信大教育ボランティア・茂菅子ども会との連携・JAながのとの連携・牟礼村ふるさと振興公社との連携の8つのグループに大きく分けた。活動内容の大まかな案ができてきて、プロジェクトがほんの少し形になってきた。もっともっと話し合いの場を設けて、みんなが納得できるものにしていきたい。プロジェクトの名前・執行部や責任者のあり方など組織について・授業との関連などなど、決めることはまだまだたくさんある。

### 平成13年1月8日 第5回発足準備会

冬休み最後の日。帰省先から、長野に戻ってきている人が集まって急ぎょ開かれた発足準備会。この日は、昨年までY O U遊サタデーの執行部として活躍なさっていた先輩方も参加してくださり、貴重な意見をたくさん聞くことができた。



「何をやりたいかということ以上に、目的はどうするかという出発点を決めることが大切」というのが、プロジェクト発足準備会に参加してくださった先生方の意見だった。そこで、今回は目的・目標についての話し合いから始まった。そして、プロジェクトの名前や責任者の決め方なども考えた。その結果、案ではあるが、新プロジェクトが一応形になった。この案を第5回発足準備会に出し、みんなで話し合い、最終的に決定していくことにした。

#### ＜案＞

名前：信大Y O U遊広場

組織：1 プラザ・・・牟礼ふるさと農場      2 プラザ・・・茂菅ふるさと農場

3 プラザ・・・キャンパス教育の森      4 プラザ・・・キャンパスプレーパーク

5 プラザ・・・牟礼ふれあいキャンプ      6 プラザ・・・出張Y O U遊広場

どのプラザにも障害をもった子や不登校の子や反社会的な子を受け入れる。

それぞれのプラザに委員長・副委員長・研究主任をおく。

目標：自然との共生による人間性の向上・三世代の共生による社会力の向上・学問と実践の結合による教育文化の発展・明るく楽しく仲良くフレンドシップの拡大・地域の人づくり町づくり

### 平成13年1月10日 第6回発足準備会

放課後、上記の案を元に意見が交わされた。目標・具体的な内容・名称についてみんなで考えた結果、現在のような信大Y O U遊広場ができあがった。後は人事を決めるだけとなった。

### 平成13年1月15日 第7回発足準備会（最終準備会）

まずは、各プラザのプラザ長・副プラザ長・研究主任を立候補で決めた。次に運営委員会のキャプテン・副キャプテンを立候補と推薦の後、投票によって決めた。これで、信大Y O U遊広場の概要が全て決まった。

#### 各プラザごとの話し合い

各プラザ長を中心に広場ごと話し合いの場を設けた。そのプラザに興味のある学生が集まり、一年間の活動について話し合った。

平成13年1月26日放課後・・・5プラザ

平成13年1月29日放課後・・・1プラザ

平成13年1月30日放課後・・・0プラザ

平成13年1月31日放課後・・・2プラザ

平成13年2月1日放課後・・・3プラザ

平成13年2月2日13時～・・・6プラザ

平成13年2月2日放課後・・・4プラザ

## 年間活動報告

	2月	3月	4月	5月	6月
0 プラザ	・活動目標・活動内容 決め ・柳町中学校 「心の教室」見学	・ふれあい学級 の見学・説明会 (学生12名・教官2名)	・心の相談員 (東部中・柳町中・三陽中・裾花中・篠ノ井東中) ・メンタルフレンド (ふれあい学級)		・附属養護学校での (高等部での授業
1 プラザ		・牟礼村振興公社に 下見・打ち合わせ (学生 名・教官 名)	・28日ジャガイモ植え (子ども 名 学生16名・教官2名)	・26日ニンジン・ サツマイモ植え (子ども7名 学生14名・教官2名)	
2 プラザ	・話し合い		・J Aながので 打ち合わせ (学生1名・教官2名) ・21日ジャガイモ植え (子ども10名・親1名 学生10名・他3名)	・12日レンガ畑で遊ぼう (子ども10名・親4名 学生5名・他3名) ・田植え準備 ・夏野菜・豆類 ・サツマイモ・コンニャクイモ	・2日田植え (子ども36名 学生23名・他10名) ・田んぼの世話 作付・栽培
3 プラザ		・市内の小学校訪問	・パンプキン・の移植・栽培 ・話し合い	・サルビア・マリーゴールド ・ひまわり・サンビタリア ・タリヤ	種まき・栽培 ・21日ビオトープ作り
4 プラザ	・話し合い・看板作り ・ポスター、ビラ作り ・オープン準備		28日キャンパス・スプレ・パーク オープン ・ダンボールで…家作り、魚つり、アクセサリー作り・シロメサのかんむり ・竹で…竹とんぼ、貯金箱、ミニベンチ、水鉄砲	毎週木曜日 15:00～17:00(夏休みは10:00～)	・30日～1日冒険遊び場
5 プラザ		・年間計画の話し合い ・鍊成センターの下見 ・牟礼キャンプ場下見 ・19日キャンプ場決定	・スタッフ募集	・プログラム概要決定 ・ハイキングの下見	・下見研修キャンプ ・プログラム担当決定
6 プラザ			・毎月第2土曜に開かれる湯谷小学校「子どもランド」に参加		





7月	8月	9月	10月	11月	12月
活動 に参加)					
・城山・南部・東北の各中間教室にて新たにメンタルフレンドとして活動					
・14日そばの種まき (子ども29名 学生14名・他4名)	・4日ジャガイモ掘り (子ども4名 学生9名・教官2名)	・8日土よせ・草取り (子ども 名 学生6名・教官2名)	・13日そば刈り ニンジン・サマイの収穫 (子ども28名・親9名 学生20名・他3名)	・24日そば打ち (子ども31名・親13名 学生12名・他6名)	
・29日ジャガイモ掘り 野菜の収穫 (子ども 名 学生 名・教官2名)		・ダイコン・赤ダイコン ・ホレンソウ・野沢菜 ・レンゲの種まき ・29日稲刈り (子ども30名 学生20名・他6名)	作付・栽培・収穫 ・20日脱穀 (子ども30名 学生15名・他4名)	・田起こし	・野沢菜漬け
収穫					
				・チューリップの球根植え	
17:00)、毎週土曜日 10:00～17:00(雨天時と大学の都合で使えない日を除きオープン)					
小屋作り、手作りプラコ、虫取り、野外料理、ギター、ハーベキュー のこぎり・かなづちを使った工作、物置の上で遊ぶ、草投げ戦争			落ち葉ゲーム、焼き芋、野球、タイ、遊ぼうパン(10/22)、リコーダー、たき火 畑作り、プレパリ!?ウインター(12/8)、かまくら作り、雪合戦、スノーマン、		
全国研究集会へ					
・参加者募集 ・プログラム検討・決定 ・しおりの作成 ・キャンプの流れ等 の確認	・8/10～8/12 里山ふれあい キャンプ ・反省会			・ふきのとうキャンプの準備	
			・22日4プログラムと合同 で“遊ぼうパン”		・8日YOU遊 フェスティバル



### Ⅲ. 0 プラザから 6 プラザの実践記録

## 0 プラザ 鉄腕アトム

### 1. 0 プラザができるまで

0 プラザは、不登校の子ども・障害を持つ子どもを対象にした活動である。このように対象児を限定したのは、三つの願いがあるからだ。

まず一つ目は、「不登校の子どもたちが学生との触れ合いによって少しでも元気になって欲しい」という願いである。私たちは、長野市が何百人という不登校児童生徒を抱えていることを聞き、私たちの身近にも、様々な悩みにより元気をなくしているたくさんの子どもの存在を知った。そのような悩みを抱えた子ども、学校に行けなくて苦しんでいる子どもに、学生との触れ合いによって、ストレスを発散できる場や相手を見つけ、少しでも楽になって欲しい、このような私たちの想いが不登校の子どもたちとの活動に結びついたのである。

二つ目は、「不登校の子ども、障害を持つ子どもに一人でも多く参加して欲しい」という願いである。YOU遊サタデーの時には、不登校の子どもや障害を持つ子どもの参加はほとんどなかった。子どもたちにとって、知らない人たちがたくさんいるところへ出かけて行くにはかなりの勇気があるはずだ。「参加してみたいなあ」という気持ちはあるが、勇気が出せず参加できないでいる子どももいるだろう。また、保護者の方の心配から、なかなか参加に踏み切れないこともあるだろう。特に、これまで参加が少なかった不登校の子ども、障害を持つ子どもの場合、そのような傾向が強いと思う。対象児を限定した理由には、子どもたちの「参加したい」という気持ちを大切にしよう、という私たちの想いが込められている。

三つ目は、「不登校の子ども・障害を持つ子どもと一緒に活動したい」という願いである。大学では、不登校や障害児に関する授業はあるが、実際に不登校の子どもや障害を持つ子どもと触れ合う機会はほとんどない。しかし、今日の教育現場において不登校は深刻な問題であるし、養護学校教員に関わらず、全ての教師が障害児・者に対して理解を深めることは大切なことである。「どのやって関わっていけばいいのかわからない」という不安を取り除き、不登校の子どもや障害を持つ子どもと進んで関わっていける教師になるためには、実際に触れ合い、感じる事が一番である。そのような理由から、「不登校の子ども・障害を持つ子どもと一緒に活動したい」という願いを持つようになった。

このような三つの願いを基に、「不登校の子どもや障害を持つ子どもと日常的に関わりながら、お互いの理解を深めることを目指す」を0 プラザ全体の目標として掲げ、0 プラザの活動がスタートした。  
(障害児教育専攻 3 年 富山裕子)

### 2. 今年度の活動内容

#### (1) 不登校の子どもとの活動

私たちは、心の教室相談員やメンタルフレンドとして、長野市内の小・中学校に出かけ、子どもたちと関わってきた。



・「心の教室相談員」とは

心の教室相談員とは、悩みやストレスを抱える中学生が、心のゆとりを持てるよう、生徒の相談に応じる相談員のことである。生徒が悩み等を気軽に話せ、悩みや不安を和らげることのできる第三者的存在として、平成10年度の2学期から、全国の中学校約7,800校に配置されている。

・「メンタルフレンド」とは

不登校児童・生徒を対象に、集団適応指導、学習指導、教育相談等を行う場として、長野市教育委員会により「中間教室」が設置されている。中間教室には、メンタルアドバイザー（適応指導員）が常駐し子どもたちにと接するが、メンタルアドバイザーの要請により、メンタルフレンドが不登校児童・生徒の援助、支援活動を行うことができる。

長野県教育委員会、長野市教育委員会と連携し、心の教室相談員やメンタルフレンドとして、6つの中学校と4つの中間教室において計15人の学生が、子どもたちと触れ合った。

＜心の教室相談員として活動した学生＞

東部中学校	長澤ひとみ（理科・4年）
三陽中学校	武重智子（言語教育・2年）
裾花中学校	関谷亜紀子（数学・4年）
篠ノ井東中学校	小林則雄（地域スポーツ・3年）
柳町中学校	中澤典子（国語・4年）
西部中学校	白崎麻希子（理数科学教育・3年）原山美樹（生活科学・2年）

＜メンタルフレンドとして活動した学生＞

ふれあい学級	町田竜太（社会科学教育・3年）高相朱里（教育実践科学・2年） 鹿子木愛（教育実践科学・3年）
南部中間教室	増田美和（障害児教育・2年）
東北中間教室	松田博美（生活科学・2年）山口真史（教育実践科学・2年）
城山中間教室	桐山恵美子（生活科学・2年）西澤俊輔（理数科学・3年）

(2)障害を持つ子どもとの活動

信州大学教育学部附属養護学校と連携し、学生が高等部の授業に参加させてもらうことにより、障害を持つ子どもたちと関わり合った。附属養護学校の先生から指導助言を受けながら、子どもたちとペアを組んで製品作りや掃除をしたり、一緒に販売活動を行ったりした。

＜活動日と学生の参加人数＞

・活動開始（6/22）～一学期末まで

活動日	6/22	25	26	27	29	7/2	6	16	17	19	23	24	計
参加人数（人）	3	3	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	17

・二学期

活動日	10/23	24	25	26	29	30	31	11/6	7	12	15	17
参加人数（人）	1	2	1	3	1	1	2	1	2	1	3	2
活動日	11/19	22	26	28	12/3	5	10	12	14	17	21	計
参加人数（人）	1	3	1	2	1	2	1	2	1	1	1	36



以上、6/22 から 12/21 までの 35 日間で延べ 53 人の学生が参加した。

＜参加学生と参加日数＞

参加学生	参加日数	参加学生	参加日数
笹崎典子（数学・4年）	9	比嘉頼子（障害児教育・3年）	2
広瀬一弥（技術・4年）	1	平賀倫子（障害児教育・3年）	5
岡部桂子（教育実践科学・3年）	2	桐山恵美子（生活科学・2年）	3
鹿子木愛（教育実践科学・3年）	6	森田美保（地域スポーツ・2年）	2
富山裕子（障害児教育・3年）	23		

このように、障害児教育専攻の学生だけでなく様々な専攻の学生が、附属養護学校で子どもたちと触れ合った。学校に出かけての活動であるため、活動日は全て平日である。そのため、大学の授業等の兼ね合いもあり、授業が忙しい2年や卒論等がある4年生は、定期的に参加するのが難しかったようである。しかし、数回の活動であっても、関わる前に抱いていた不安は減り、「また、行きたい」という声を聞くことができた。

（障害児教育専攻 3年 富山裕子）

### 3. 心の教室相談員の立場から

本年4月より、篠ノ井東中学校へ心の教室相談員として、お手伝いさせて頂き、8ヶ月が経過した。

#### (1) 篠ノ井東中学校の心の教室相談員に対する対応について

心の教室相談員のために、相談室を設置して頂いた。和室の広い部屋で、生徒が10名程度集まっても十分な広さがある。生徒の下駄箱の近くで出入りしやすい場所にあるため、重宝している。

夏休み中の教育実習後、その体験から学級活動の時間に心の教室相談員としての自己紹介の時間を設けて欲しい旨、お願いしたところ、すぐに対応してくれた。

このような学校側の積極的な対応に感謝している。

#### (2) 心の教室相談員としての現状について

一学期は何をしてよいかわからず、暗中模索だった。幸いもう一人の相談員である中條先生に相談したところ、気持ちよく相談にのって頂き、指導・教示を頂いた。中條先生は司書として常駐されながら、心の教室相談員をされており、多くの生徒がいつも集まっていた。そのような場から生徒と接する機会を作ることができたことは、大変助かった。

自己紹介では、「私は学生です。だから先生と呼ばないで」ということや「のりおさんとよんでください」ということを話している。大部分の生徒が、朗読会や心の教室相談員たよりのタイトルを見て、「のりさん」と声を掛けてくる。ちょっと誤算だったが、当初の「先生」という呼びかけがほとんどないので、喜んでいる。

教育実習後は、学校や生徒に対する様子がある程度理解できてきたので、学校の協力を得て、積極的に生徒の間に入っていきようにした。大学の授業が午後からない火曜日は、心の教室相談員としてできるだけ定期的に学校へ出かけるよう努めている。また、学校への来訪予定を部屋の前に掲示して、できるだけ生徒に周知するようにしている。生徒から相談を受けるには、まず生徒から信頼されることが条件となる。当初は2週間に1回程度の訪問であったが、それでは生徒から信頼されるのは難しいだろう。生徒と接する時間は、昼休みと放課後が主となることから、この時間は極力校内を歩き、多くの生徒と接するよ



うに心がけている。これまで、本格的な相談、悩みについての生徒からのアプローチはないが、3名の生徒から手紙を頂いた。

「ひげののりさん朗読会」(10月から毎月実施)の開催や、「のりちゃんの夢航海 航海日誌(心の教室相談員たより)」(10月21日第1号、以下6号まで)の発行を、学校の協力を得て始めた。このような活動を通し、ようやく心の教室相談員として生徒の間に少しずつ浸透しているという実感が持てるようになってきた。多くの生徒から浚刺とした挨拶を受けるのは、とても爽やかで気持ちの良いものである。私が逆に勇気づけられているような気持ちがする。

今後は、部屋に生徒たちが気楽に入室し、相談できるような状態を作っていくことが課題であると考えている。  
(地域スポーツ専攻3年 小林則雄)

#### 4. メンタルフレンドとして活動して

私は、7月から、週に1回、南部中間教室に、メンタルフレンドとして通ってる。南部中間教室は、市内で唯一の小学生のみを対象とした教室なので、子ども達は車での送り迎えが必要となっている。しかし、そのおかげで、おうちの方とも朝、夕と会えるので、週に1度しか行かない私も、全員のおうちの人と言葉を交わすことができ、顔も覚えてもらうこともできた。

はじめてこの中間教室の安藤葉子先生にお会いしたとき、「気難しい子や、警戒心の強い子が多くて、はじめはびっくりすると思うけど、そのうち馴染んでくれば、みんないい子だから。はじめは大変かもしれないけど…」と言われ、私は、子ども達が私をどう感じて、どういう態度をとるのか、とても不安になってきた。今思えば、「不登校」という言葉を意識しすぎていて、ひとり、どきどきしていただけたのだが、とにかく、緊張して初対面の日を迎えた。

しかし、子ども達は、安藤先生に「あの子達が初対面の人に、あれだけ普通に接しているなんて。成長したなあ」と言わせるほど、いきなり現れた私を、すんなりと受け入れてくれた。さすがに最初は、じっと観察するように私を見ていたけれど、1時間もしないうちに、私の問いかけに答えたり、笑ったりしてくれるようになってきた。

はじめはこんなふうに、お互い緊張していたけれど、今ではすっかり慣れて、最近では、「おばさん!遅いよ!」といわれながら、真剣に鬼ごっこをしている。他にも午前中から行ける時は、勉強を見たり、お昼を一緒に食べたり、サッカーや、最近では雪合戦もした。「俺はあたらねーよ」というある男の子の言葉に挑発され、思いっきりその子を狙って投げたけれど、結局あたらず(私のほうが、かなりあたっていた…)、戦いが1時間半にも及んだため、翌日はかなりの筋肉痛になってしまった。

私はずっと、ただ遊んでいるだけで、何か役に立っているのだろうか、メンタルフレンドなどという名前がついているからには、もっと何かしなくてはいけないのではないかと考えた。それは今でも思っているし、何かみんなのできる新しいことはないかなと考えてもいる。でも安藤先生が、「そうやって一緒に遊んでくれる年の近い人がいるだけで、あの子達にとっては嬉しいことなんだよ。みんな自分を見て欲しいって思っていて、私ひとりだと、間にあわないこともあるから、週一といわず、もっと来てほしいくらいだよ。」と言ってくれたり、子ども達も「今日はお昼食べてくの?」と聞いてくれる子や、私の誕生日に手作りのビーズの指輪をくれた子、掃除で長いすを持ち上げようとしたら、何も言わ



ず手を貸してくれた子、私がなにげなく「そのリュックいいなあ」と言ったら、本当に買ってしてくれた子などがいて、今の私は、メンタルフレンドだ！と変に力むこともなく、ただ、大好きなみんなと会える事が楽しくて、中間教室へ行かせてもらっているという感じである。

でも、このままでは、自分にどのような力がついたのか、また必要なのかもわからないし、先生と子ども達に甘えたまま、ただ楽しいで終わってしまいそうなので、やはりもっと自分の中で、課題を持って取り組んでいきたいと思っている。

(障害児教育専攻 2年 増田美和)

## 5. 附属養護学校の子どもたちとの活動を通して

附属養護学校の活動は、高等部の授業と一緒に参加させていただくという形をとっている。事前に高等部の授業の計画表をいただき、学生は大学の授業などのスケジュールを見てあいた時間に参加をしている。だから参加する学生も、参加する日程も、どうしても不規則になってしまう。附属養護学校の先生方は、そういう状況を理解した上で私達を信頼し自由に参加させてくださった。まずそのことを有難く思う。

私は附属養護学校の活動に5回ほど参加させていただいた。当初はもっと参加するつもりだったが、平日で他の授業との兼ね合いもあり、あまり参加できなかった事を残念に思う。これまではボランティアで障害児と関わったり、キャンプや家庭訪問での子ども達の姿も少しだけ見てきたが、学校の中で子ども達と関わる経験は今まであまりなかったように思う。だから、今回0プラザの活動に参加することで、家庭や地域での姿だけでなく、学校の中で子ども達の発達の様子や先生方の支援を直接見る事ができたことは、自分にとってとても意味のあることだった。

附属養護学校では年に一回公開研究会がある。私は今年、去年に続いて二回目の参加をしたが、去年とは少し受け止め方が違っていたように思う。一人一人の子がどんな子か少しは知っていたし、それまでの活動を見てきた分、より身近により具体的に感じる事ができた。そして何より活動に参加することで、公開研究会だけではわからない日々の積み重ねや成長をリアルに感じる事ができた。

学校のことも、日々の生活のことも、何も知らない状態で学校に足を踏み入れて、最初は不安と戸惑いがあった。でも、初日から気軽に話し掛け親しげに接してくれる子ども達や、迷惑をかけているにも関わらずやさしく接してくれている先生方に、自分のできごとをしたいと思いますようになった。2度3度と参加していく中で、言葉がわからなくても子ども達が伝えたがっていることや要求していることがわかるようになり、喜びを感じていった。子ども達と一緒に作品の販売をしたり、バーベキューの準備をしたり、水遊びをしたり、お昼を一緒に食べたり…。一緒に活動をして、一緒に時間を共有することが何よりもうれしかった。自分自身の関わり方としては、戸惑いの中参加でなく見学になってしまったことも多々あったが、今後は先生方に話を聞いたり、他の学生と情報交換をしていくことで、もっと積極的に関われるようになっていけたら良いと思う。そしてひとり一人の発達課題に何らかの形で働きかけをしていきたい。

高等部の活動は作業が中心である。私が初めて参加した活動は若槻コーポ店での製品販売だった。私が参加した時間は終わりのほうだったのにも関わらず、みんな生き生きと活動していた。売上の目標達成に向けてひたむきに販売する姿や、自分の作品が売れていく



ことに満足そうな表情を浮かべている姿を見て、私もとても楽しくなり、ワクワクしたのを覚えている。高等部は社会に出て行く一歩手前の子ども達。その子ども達から何を学び、そして私に何を支援することができるのだろうと…。

後期になって一度、校内実習に参加したこともあった。私は父親が共同作業所に関わっていることもあって、作業所を見学したり、ゼミで調べたりしたことがある。障害者が社会に出て行くことは、長引く不況と競争主義社会の中で、厳しい現実もある。そんな中、学校でどのような進路指導がなされているのかは前から興味があった。校内実習ではあいさつや時間を守ることなど、社会的なマナーについて特に厳しく指導されていた。些細なことのように感じるけど、大事な指導だなと感じた。一般の企業に就職すると、養護学校のように個別には扱ってくれない。卒業後数年経って辞めてしまうケースも少なくない。進路指導で何を行っていくのか、何が必要とされるのか、よく考えなくてはいけないのだなと思った。今回は指導の場面しか見れなかったが、もっと精神的なケアがどのように行われているのかなど、感じ取ったり先生方と話ができたらよかったと思う。

養護学校には様々な子どもが通い、個別に指導計画が考えられている。教師はひとり一人に合った活躍の役割や場面を保障し、他の先生と連携して支援を行っている。養護学校や作業所で障害児(者)と接していて私がよく感じることは、彼らがあまり他者と比較しない事である。「自分ばかり」とか、「何であの子はやらないの」とか、そういう発言は聞いたことがない。それぞれの違いを認め合い、それぞれの形で精一杯やっていることを評価し合える。個性を尊重し協力し合うこと、それは教育で大切にしたいことである。教師の価値観や認識は子ども達に影響を与えることもある。ひとり一人の違いを認めると言葉でいうのは簡単でも、実践するのが難しかったりする。あせらず、自分の枠にはめずに、ありのままに子どもを捉えてゆとりを持って支援することが、私も教師になった時にできるだろうかと考えた。現場の先生方の接し方を見て学んだことを、自分も現場に出たときに活かしていけたらと思う。

平日の授業がない時の活動ということで、子ども達と関わる時間は限られている。半日だけだったり、たったの数時間になってしまったりもする。その限られた時間をどうしたら大切にできるのか、ということを私はあまり考えずに接してきてしまったように思う。自分のことを先生でもクラスの仲間でもない「部外者」と捉え、遠慮したり躊躇することであまり積極的に関われなかった面もあったようにも思う。授業だけでなく生活全体の中で子ども達とどう関わっていけるか、もっと工夫や努力が必要だったのではないかなと思う。例えば、お便りなどでコミュニケーションの方法を工夫したり、学生に子ども達の製作する作品の注文をとったり、参加する学生同士が交流したり学習したりする場ももっと作れたらよかったと思う。今後は子どもや先生方とも、参加する学生とも、もっと深い関係が築いていけるように、年度が変わることを新たな出発点としてこれからの事を話し合い、次につなげていけたらと思う。

(障害児教育専攻 3年 平賀倫子)

## 6. 今年度の反省

今年度からの活動であったので暗中模索の状態であり、反省はすべきことはたくさんある。しかしここでは、特に大きな反省として挙げられた3つを紹介する。

1つ目は、全ての学生の参加したいという願いを生かしきれなかったことである。メンタルフレンドや心の教室相談員は人数が決まっており、24人の学生の希望があったが、実

際に活動できたのは、15人の学生だけである。また、不登校の子どもとの活動も障害を持つ子どもとの活動も、学校に出かけて行つての活動であるため、活動日は平日に限られる。このため、大学の講義と重なることが多く、授業が忙しい人は参加したくてもできない状況にあったようだ。全ての学生の参加したいという気持ちを大切にすれば、活動日や活動内容を見直す必要があるだろう。しかし、学校現場に出かけて行つて活動できたことは、学生にとっても子どもたちにとっても意義深かったように思う。

2つ目は、学生同士で情報を共有する場がなかったことである。それぞれが活動し、そこから学ぶことは多くあったが、その学びを0プラザ全体で共有することができなかった。その理由として、学士同士が意見交換する場がなかったこと、自分の学びや不安などを発信できる場がなかったことが挙げられる。しかし、活動だけで予定が詰まってしまう、集まって話をする時間がなかなか取れないのが現状であった。週1回の定例会時に0プラザだよりを作っていたのだが、全てプラザ長が担当していた。この0プラザだよりをみんなで分担し、それぞれの活動を報告する場にすることもできるだろう。

3つ目は、専門的な学びの場を設けることができなかったことである。2月に活動内容を話し合っていた時には、「不登校についてみんなで勉強会をしたい」、「子どもたちの障害について勉強したい」という意見も出された。子どもたちと触れ合う中で、本を読んだり、研究会に参加して自ら学んでいった学生もいたようだが、0プラザとしてそのような学習会を設けることはできなかった。

メンタルフレンドや心の教室相談員として活動したり、附属養護学校に出かけて子どもたちとの活動を行った学生と話をしていると、行く前は「どうしよう、どういう風に関わったらいいのかな」と不安そうに話していたが、何度か関わりを重ねていくことで、「今日は〇〇くんといっぱい話をしたよ、今度行くの楽しみだな」と嬉しそうに話す姿に変わっていった。このように関わってみることで、不登校の子どもや障害を持つ子どもに対して構えることなく向き合っていけるようになった学生の姿を見ていて、今年度の0プラザの目標であった、「不登校の子どもや障害を持つ子どもと日常的に関わりながら、お互いの理解を深めることを目指す」を達成することができたように感じる。今年度出された3つの反省を生かしていけば、0プラザの活動は、より学びの深い活動となっていくことだろう。

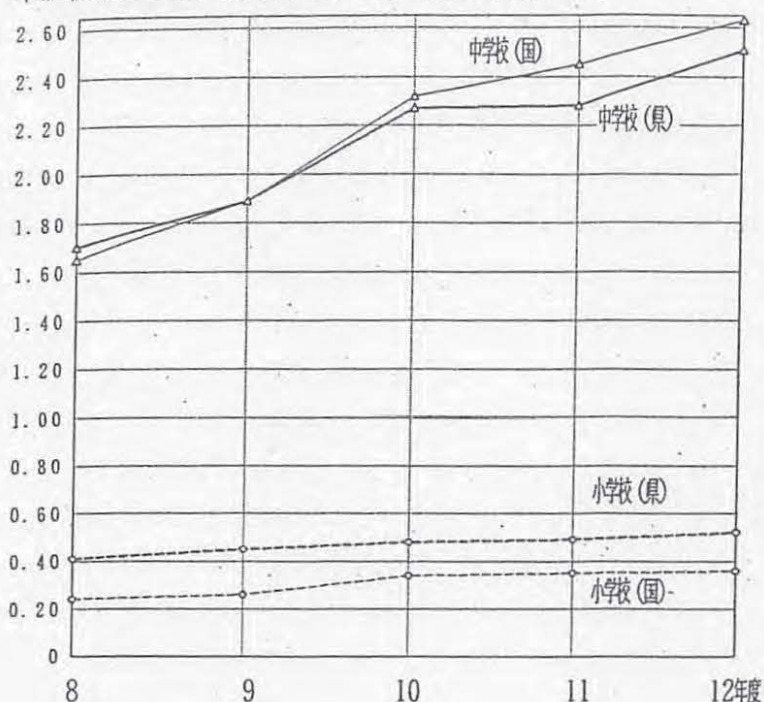
(障害児教育専攻 3年 富山裕子)



# 平成12年度児童生徒の不登校の状況について

長野県教育委員会教学指導課

## 1 不登校児童生徒（30日以上）の在籍比の推移（％）



年 度			1 2	1 1
小 学 校	人数(人)		686	657
	在籍 比 (%)	県	0.51	0.49
		国	0.36	0.35
中 学 校	人数(人)		1,826	1,711
	在籍 比 (%)	県	2.51	2.28
		国	2.63	2.45
合 計	人数(人)		2,512	2,368
	在籍 比 (%)	県	1.22	1.13
		国	1.17	1.11

## 2 直接のきっかけ別人数

(単位：人、％)

区 分			校 種	小 学 校		中 学 校		校		
年 度			12	(構成比)	11	(構成比)	12	(構成比)	11	(構成比)
学 校 生 活	1	友人関係をめぐる問題	82	(12.0)	160 (23.3)	(20.2)	350	(19.2)	660 (36.1)	(37.9)
	2	学 業 の 不 振	25	(3.6)			160	(8.8)		
	3	入学、転編入学、進級時の不応	16	(2.3)			56	(3.1)		
	4	教師との関係をめぐる問題	33	(4.8)			27	(1.5)		
	5	クラブ活動・部活動等への不応	1	(0.1)			42	(2.3)		
	6	学校の決まり等をめぐる問題	3	(0.4)			25	(1.4)		
家 庭	1	親子関係をめぐる問題	74	(10.8)	158 (23.0)	(22.8)	89	(4.9)	213 (11.7)	(12.3)
	2	家庭の生活環境の急激な変化	44	(6.4)			74	(4.1)		
	3	家 庭 内 の 不 和	40	(5.8)			50	(2.7)		
本 人	1	病 気 に よ る 欠 席	41	(6.0)	310 (45.2)	(48.6)	87	(4.8)	835 (45.7)	(42.7)
	2	そ の 他 本 人 に 関 わ る 問 題	269	(39.2)			748	(41.0)		
そ の 他			30	(4.4)	(4.4)		34	(1.9)	(1.8)	
不 明			28	(4.1)	(4.0)		84	(4.6)	(5.3)	
計			686	(100.0)	(100.0)		1,826	(100.0)	(100.0)	

## 3 継続している理由

(単位：人、％)

区 分		校 種 年 度	小 学 校		中 学 校	
			12 (構成比)	11 (構成比)	12 (構成比)	11 (構成比)
1	不安など情緒的混乱		339 (49.4)	(49.0)	708 (38.8)	(36.5)
2	複 合		198 (28.9)	(27.2)	545 (29.8)	(27.2)
3	無 気 力		89 (13.0)	(11.6)	275 (15.1)	(18.2)
4	学 校 生 活 上 の 影 響		17 (2.5)	(2.7)	95 (5.2)	(5.1)
5	意 図 的 な 拒 否		19 (2.8)	(3.7)	76 (4.2)	(6.5)
6	あ そ び ・ 非 行		2 (0.3)	(0.0)	75 (4.1)	(4.3)
7	そ の 他		22 (3.2)	(5.8)	52 (2.8)	(2.1)
計			686 (100.0)	(100.0)	1,826 (100.0)	(100.0)

(注) 1 調査名：文部科学省「学校基本調査」及び「平成12年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」

2 調査対象：県内全小・中学校 612校（国立・私立を含む。）



# 平成13年度上半期不登校児童生徒の状況について

## 長野県教育委員会教学指導課

### 1 不登校児童生徒数

[単位：人]、( ) は前年同期

#### (1) 小学校

学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	合 計
人 数							
男子	3	13	13	30	59	85	203
女子	5	21	26	34	64	85	235
計	8 (13)	34 (26)	39 (30)	64 (77)	123 (104)	170 (150)	438 (400)

#### (2) 中学校

学 年	1 年	2 年	3 年	合 計
人 数				
男子	146	269	338	753
女子	136	268	275	679
計	282 (261)	537 (489)	613 (537)	1,432 (1,287)

### 2 直接のきっかけの状況

[単位：人]、〔( )〕は構成比：%

校種・学年		小 学 校			中 学 校		
区 分		1・2年	3・4年	5・6年	1 年	2 年	3 年
学 校 生 活	友人関係	1 (2.4)	9 (8.7)	27 (9.2)	35 (12.4)	113 (21.0)	106 (17.3)
	学業の不振	1 (2.4)	3 (2.9)	8 (2.7)	14 (5.0)	49 (9.1)	49 (8.0)
	転入時等の不適応	3 (7.1)	2 (1.9)	12 (4.1)	13 (4.6)	16 (3.0)	18 (2.9)
	教師との関係	2 (4.8)	1 (1.0)	9 (3.1)	2 (0.7)	7 (1.3)	13 (2.1)
	部活動等への不適応	0 0.0	0 0.0	1 (0.3)	1 (0.4)	11 (2.0)	15 (2.4)
	学校のきまり	0 0.0	0 0.0	1 (0.3)	1 (0.4)	3 (0.6)	12 (2.0)
	小 計	7 (16.7)	15 (14.6)	58 (19.8)	66 (23.4)	199 (37.1)	213 (34.7)
家 庭	親子関係	3 (7.1)	10 (9.7)	19 (6.5)	7 (2.5)	25 (4.7)	29 (4.7)
	生活環境の急変	2 (4.8)	6 (5.8)	12 (4.1)	11 (3.9)	19 (3.5)	19 (3.1)
	家庭内の不和	1 (2.4)	8 (7.8)	15 (5.1)	9 (3.2)	11 (2.0)	11 (1.8)
	小 計	6 (14.3)	24 (23.3)	46 (15.7)	27 (9.6)	55 (10.2)	59 (9.6)
本 人	病気による欠席	5 (11.9)	4 (3.9)	12 (4.1)	10 (3.5)	20 (3.7)	33 (5.4)
	その他本人の問題	16 (38.1)	48 (46.6)	156 (53.2)	164 (58.2)	230 (42.8)	278 (45.4)
	小 計	21 (50.0)	52 (50.5)	168 (57.3)	174 (61.7)	250 (46.6)	311 (50.7)
そ の 他		7 (16.7)	9 (8.7)	14 (4.8)	6 (2.1)	11 (2.0)	16 (2.6)
不 明		1 (2.4)	3 (2.9)	7 (2.4)	9 (3.2)	22 (4.1)	14 (2.3)
計		42 (100.0)	103 (100.0)	293 (100.0)	282 (100.0)	537 (100.0)	613 (100.0)

(注) 1 調査対象：公立小学校（403校、131,460人）、公立中学校（194校、69,806人）

2 構成比は、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳が小計に一致していない場合がある。



# 1 プラザ 信大牟礼ふるさと農場

## 1. このプラザを始めた理由

私がこの信大牟礼ふるさと農場を始めた理由は、正直に言えばその場の雰囲気からである。YOU遊広場を立ち上げるときに話は戻るのだが、そのときは今ある七つのプラザが用意しており、それぞれのプラザ長を募集して決まったところからプラザ確立ということになっていた。その結果、わたしは茂菅ふるさと農場の農場長として立候補し、他のプラザも長と副のそれぞれが決まったのだが、牟礼ふるさと農場だけは誰も立候補がなかったのである。もしそのまま立候補がなければそのまま一年間はそのプラザは無しということになるか、新しく入ってくる二年生から募るということになっていた。しかし、何も知らない二年生がいきなり長をやってくれる期待もうすく、無しになる可能性が大きいと思われていた。だが、学生の中から「せっかく一年かけて先輩がやってきた牟礼ふるさと農場をここでやめてしまうのはもったいない」という意見が出た。誰しもがその気持ちは持っていたらしく、その意見は重要視された。しかし、実際やっていくのに長がいなくては話にならない。そこでどうしようかと考えた末、同じ農場だからということでわたしがやることになった。

以上で書いたことがきっかけといえそうなるのだが、私自身の中では子どもたちと自然の中で何か一緒にやりたいという思いがあったので、牟礼と茂菅どちらをメインにやっていこうか迷っていたこともあり、引き受けることにした。この思いについては茂菅ふるさと農場のところで詳しく触れるようにしたい。

## 2. 信大牟礼ふるさと農場とは

信大牟礼ふるさと農場が始まったのは平成 12 年度のことである。牟礼村ふるさと振興公社を通じて 20a という広大な農地を借りて、“そばを育ててそばうち体験をしよう”という活動だった。

去年と違う点は、育てる作物がそばだけではなくたことである。今年度は5プラザの里山ふれあいキャンプの中で作る食事の材料を育てたいということから、にんじん、じゃがいも、さつまいもを増やし、その分お借りした農地も 30a に増えている。その農地を使って学生と、参加してくれる子どもたち、そして保護者の方が思いきり楽しみ、そして、多くのことを感じとってってもらうのである。

以上のように、農作物を育てることを通して土と戯れ、自然と触れ合うこと、人と触れ合うことを目的としたものが今年度の信大牟礼ふるさと農場なのである。

## 3. 問題、改善点

牟礼ふるさと農場において考えなければいけないことは二つあった。それは、立ち上げのときからあった人手不足のことと、距離の問題である。牟礼ふるさと農場は、大学から車でも四十分近くかかるほど離れたところにある。そのため、車でも持っていなくては簡単に行き来できないし、また、持っていたとしても移動時間だけで一時間以上かかるので、

なかなか忙しいスケジュールになってしまうのである。だから、細かい草取りや状況把握、土寄せなどの作業ができない。だからといってそれらの作業はないがしろにできつるわけでもない。それをどうするかではあるが、一つの解決策としては牟礼村ふるさと振興公社との連携が挙げられる。今年度の中では草取りなどは振興公社の方に機械で行ってもらった。

また、あまり手のかからない作物を育てるのも一つの解決策であった。その点についてそばは蒔くとすぐに大きくなり、他の草たちが生える前に成長して、根元には光が届かなくなり雑草が生えないため、あまり手のかからない作物だったといえる。他の、じゃがいも、さつまいも、にんじんについては一度根付いてしまえばそれほど問題がなく育ちはするが、やはりいもが小さくなってしまったりする。雑草があまり大きくならないうちに一度や二度の草取りが必要であり、それを子どもたちとの作業に取り入れるなどの工夫が必要である。

人手不足についてはこちらが無理に誰かを引き入れることはできないので、自分たちのやっていることがいかに楽しくて魅力的かをアピールするしかない。それに惹かれて興味を持ってもらえたら、スタッフはどんどんと増えるだろう。

#### 4. 活動報告

今年度の牟礼ふるさと農場での活動を以下にまとめる。

日 時	内 容	参 加 者 数	ス タ ッ フ	備 考
4 月 18 日	牟礼西小、牟礼東小へ資料配布		学生 3 先生 1	
4 月 28 日	じゃがいも植え	子ども 6 { 小学生 4 幼児 2	学生 16	種芋 2 kg
5 月 26 日	さつまいも苗植え にんじん種まき	小学生 11 { 小学生 9 幼児 2	学生 14 先生 2 振興公社 1	さつまいもの 苗 150 本 7 畝 にんじんの種 7 袋 2 畝
7 月 14 日	そばの種まき	子ども 29 { 小学生 25 幼児 4	学生 14 先生 3 振興公社 1	10 畝を手で まく。残りは 機械で
8 月 4 日	じゃがいも収穫	小学生 4	学生 9 先生 2	雨が降り、少 し掘るが途中 で中止
8 月 8 日	じゃがいも収穫 (学生のみ)		学生 2 先生 2	200kg ほど収 穫
9 月 8 日	そばの土寄せ さつまいもの草取 り	小学生 21	学生 6 先生 2	3 年生が教育 実習のため 2 年が中心



10月13日	そば刈り さつまいも、にんじんの収穫	子ども 28 保護者 9	小学生 25 幼児 2 中学生 1	学生 20 先生 3 振興公社 1	おみやげとして子どもにそばの実、にんじん、さつまいもを一袋ずつわたす
11月23日	そばうち	子ども 33 保護者 15	小学生 27 幼児 4 中学生 2	学生 12 先生 2 振興公社 1 よこ亭 3	そばうちの会場は人数が多いためやまぼうしで

(理数科学教育専攻 3年 西澤俊輔)

## 5. 一回の活動の流れ

では、私たちが実際にどのように一回の活動をどのように行なっているのか例を挙げて簡単に、間を追って紹介したい。

—10月13日「そば刈り、さつまいも、にんじん収穫」までの流れ—

10月1日 一日の流れの計画、参加者の持ち物、学生の持ち物を決める。

参加者へ農場パスポートを送る。あわせて、学生スタッフを募集する。

10月5日 参加者から農場パスポートの返信が戻ってくる。出欠確認をして、班分けをする。

10月10日 学生スタッフ打ち合わせ(日程確認、係分け、道具類準備)

10月12日 最終打ち合わせ(日程確認、備品最終準備)

10月13日 当日

8:20 学生スタッフ集合 持ち物を車に積み込む

8:30 農場へ向けて出発

9:00 農場へ到着 休憩スペース作り 受付、道具準備

9:30 受付開始

10:00 開会式

1. 農場長挨拶 2. 土井先生挨拶 3. 竹本さん挨拶
------------------------------------

10:15 作業開始 さつまいも、にんじんを先に収穫する班と、そばを先に刈る班とに分ける。

11:15 作業終了 「おもいでしゃしん」を描く。そばクイズを出す。

11:45 閉会式

1. 農場長挨拶 2. 竹本さん挨拶 3. 和田先生挨拶 4. 土井先生挨拶
---

- 12:00 参加者解散 学生スタッフ片付け
- 12:30 学生スタッフ農場出発
- 13:00 学生スタッフ学校到着 道具類、備品の片付け
- 13:30 反省会

## 6. 参加した学生の感想

牟礼の畑で活動をしているとき、ある男の子が私に言いました。

「この虫、ぴか<sup>ちゅう</sup>って呼ばーっと！」

「ぴかちゅう？それってあのテレビの？」

「違うよ。背中の中がぴかって光っているから、ぴかで、ちゅうは虫って書くの！」

その男の子が指さす、蛍をもう少し大きくしたようなその虫は、たしかに、背中の中が不思議な色をしていて、日にあたると、きらきら光って見え、まさに「ぴか虫」でした。

「ほんとだ！ぴか虫だ！」

子どもの、想像力の豊かさを感じた瞬間でした。そしてその日、その子の「おもいでしゃしん」には、しっかり「ぴか虫」の絵が描かれていました。

牟礼の農場で子どもたちと共に農作業をするなかで、子どもの視点のおもしろさ、やわらかさを感じました。虫や石や草、なんでも子どもたちにとっては「〇〇に見える」もので、何でも楽しいおもちゃで、何でも観察してみたいもの、という様子でした。

また、毎回活動のあとに描いてもらった「おもいでしゃしん」も視点がさまざま、見るのがとても楽しみでした。私が描こうとすると、どうしても人が中心となり、あとのものは背景になってしましますが、子どもたちの絵は、背丈くらいある、そばが中心だったり、使った道具がひとつひとつかかれていたり、また画材も私たちが準備したクレヨンや色鉛筆では足りず、土を画用紙にこすって、色をつけたり、草をそのまま張って、絵にしていくな子もいました。「自由な発想」という言葉をよく聞きますが、これがまさしくそれなのだと感じました。

反省としては、自分が、そばを育てるのが初めてだったので、子どもたちに何か教えるとか、こうすればいいよというアドバイスも全くできなかったことです。もっと事前に勉強していけば、子どもに質問されたときに答えられたのに、「ごめんね。わからないんだ」としか言えず、せっかくの子どもの好奇心を伸ばすことができませんでした。

また、とても難しいと感じたのは、子どもへの注意の仕方です。例えば、くわを振り回している子に「危ないからやめて」と言うときの口調にしても、どれくらいの強さ、どんな調子で言ったらいいのか、また、一度言ってもやめない子に対しては、どう話をしていけばいいのか、考えてしまうことがありました。

また、一度、小学校一年生の女の子同士がけんかをしてしまい、片方の子が相手を突きとばして泣かせてしまったことがありました。たしかに、突きとばしたという行為はいけませんが、それまでの過程を考えると、突きとばした子だけが謝れば全てよしというわけでもなかった上に、お互い「むこうが悪い。私は謝らない」という態度だったので、どういうふうに言葉をかければいいのか、とても困ってしまいました。

なんといえ、子どもが納得するのかわからないのと、正直なところ、あまり強く言っ



てしまい、子どもがどう感じるのか不安もあります。でも、子どもの安全を守るためにも、成長のためにも、言わなければならないことがあるので、そういう時は、きちんと伝えなければならないと感じました。

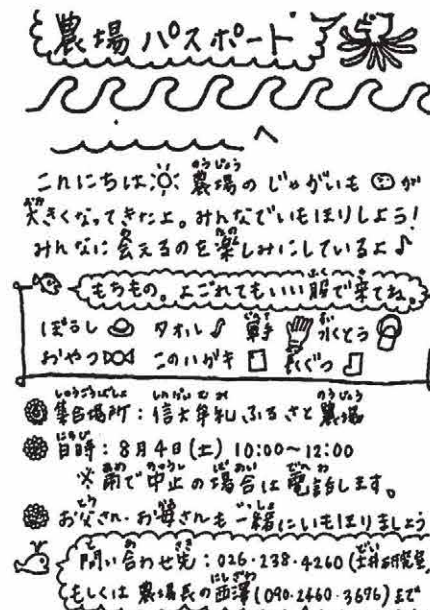
(障害児教育専攻 2年 増田美和)

牟礼の農場では子どもたちといっしょに農作業をしました。様々な子供たちがおり、自分の納得のいくまでしないと次の作業に移らない子や、作業をほとんどしたまらない子や、他の子たちの指導を進んでやる子や……。ほんとに様々な子どもたちばかりでした。一人で何人かの子を相手にして作業をすることが一番困難でした。また、どこまで怒ってよいのかや、どこまで子どもたちのやりたいようにさせるべきなのかなど、考えさせられることばかりでした。しかし、この活動に参加しなければ、そのようなことを考えることもしなかったはずで。その点でも、YOU遊広場に参加してほんとに良かったと思います。反省点として、学生自身も農作業についてこの機会にもっと知ることができれば、なお良いと思います。また、携帯電話の番号を教えるべきではないと思いますが、番号を子どもたちから聞かれたときにどのように言えばよいのか、どのように言えば納得してくれるのかとても困ってしまいました。また、子どもに対する言葉使いについても少し学生で話し合ってみる必要があるように思います。それで結論がでるかどうかはわかりませんが、一度話し合ってみる事が大切なのではないかと思ひます。また、道具で遊び始めたときにどの程度危険だと判断したときに子供たちをやめさせるべきなのかがわかりませんでした。私はできるだけ子供自身でやりたいことはやらせてあげたいと考えるのですが、命に関わる以外止めてなくてもよいのでしょうか。この点についても今後、話し合っていかななくてはならない課題です。

(理数科学教育専攻 2年 岩脇悟子)

## 7. 農場パスポート

農場パスポートとは、わたしたちが活動における連絡事項を書いて、参加の確認をとるためにも参加者に送っている往復はがきのことである。いつも手書きで作り、こちらからも一言、子どもたちからも一言書くようにしている。そうすることによって少しでも楽しめるように、子どもとコミュニケーションが取れるようにと作ったものである。下に挙げておく。





## 8. おもいでしゃしん

活動の記録を楽しみながら残せるようにと学生が考えたもの、それが「おもいでしゃしん」である。その日に行なった活動において印象に残ったことを絵と、何か一言書くことで、より鮮明に残したいという思いからである。毎回子どもたちには描いてもらっているが、みんなそれぞれの思いを本当に個性的な絵で表してくれている。例えば、その日に見つけたおもしろい植物をガムテープで張って絵の一部にしたり、漢字をたくさんつなげて形にしたりと、本当に様々だ。

そして、子どもたちの書いてくれた一言から私たち学生は、多くのことを学ぶのである。子どもが書いてくれたことだからと馬鹿にすることはできない。子どもだからこそ、素直な気持ちをそのまま表してくれる。その日のプログラムで何が面白かったか、興味が持てたか、また逆に、面白くなかったこと、つまらなかったことなど、子どもたちにとって良かったことはこれからも大切にし、さらに良いものへと進化させていくし、良くなかったことは改善していかなくてはならない。

このように、子どもたちにとっては思い出を形にしておけるものであるし、学生にとっては更なる学びの学習材となっているものである。

そして何より、この「おもいでしゃしん」は最後の活動であるそばうちのときに表紙を作って子どもたちに返却したのだが、そのときの笑顔がわたしはとてもうれしかった。そしてその中を見て、自分が描いたものを確認し、一つ一つの活動を思い出しながら友達とうれしそうに話している子どもたちを見て「やってよかったな」と、しみじみ感じた。





## 2 プラザ 信大茂菅ふるさと農場

### 1. このプラザをはじめた理由

私はこの茂菅ふるさと農場には、去年から関わってきている。去年も今と同じように田んぼと畑があり、田んぼでは稲を作って畑ではいろいろな野菜を作り、その過程の中で子どもたちを呼んでいっしょに農作業をしたり、取れた野菜を使っておやきを作ったりしていた。そのようなイベントの中で私がかかわっているときに、カードゲームをしたり、テレビゲームの話をしたりと、自分の目の前にある自然というものに目が向けられていない子どもが、全員ではないにしろ多く見られたのである。このことは、とてももったいないことだと私は思ったのである。というのも、私自身が小学生のころは、このような体験はめったにできることではなかったし、それに、自然の中で自分が体験していることがどんなにすごいことなのかに気づいていないということである。これは少し大げさかもしれない。なにも気づく必要はないのかもしれないが、もっと自然の中にある面白いこと、不思議なこと、そんなことに興味を持ってほしかった。自然の中で自分たちで作物を育て、それを収穫し、その取れたものを使って料理をしてそれを食べる、この一連の流れを体験できるだけでも自分がやったんだという達成感を味わえるだろうし、農作業中にもたくさんの生き物を見ることができ、それに触れるということからもいろんなことが感じられるだろう。このように、自然の中には予想もつかないような楽しいことがたくさんあり、それを見逃している子どもたち、興味がない子どもたちに何とかそのことに気づいてほしくて、私が何かそのためにできることがないかと思ってこのプラザをはじめた。私自身、今大学生だが、ここまで成長してみてつくづく思うのは、小学生だったころの体験はとても大切なものであったということである。今こうして田んぼや畑で作業ができるのは、私が小学校時代に学級農園で稲作りやジャガイモ、サツマイモのどを育てたことがあり、その体験を思い出しながら活動できるからである。それだけではなく、自然を通して学んだことは今でもはっきりと思い出することができる。そのような体験をぜひとも参加者にしてほしいと思った。

### 2. 茂菅ふるさと農場とは

この農場が始まったのは平成12年度のことである。土を耕し、人と触れ合うことを目的とした農場である。そのために、JAを通じて当時休耕田だった土地を田んぼ3a、畑3aとして借りている。休耕田だったため雑草や石が大量にあったが、それを当時の三、四年生が中心になって耕したのである。

場所は、裾花川沿いの長野商業高校のグラウンドをさらに川上へ300mほどさかのぼったところにある。朝日山のふもとにあり日当たりの問題もあるが、秋には紅葉がとてもきれいに見えるのである。川が近くにあるので使った農具を洗ったり、長靴を洗ったりとても便利である。

この田んぼは国際協力田にもなっていて、採れたうるちまいはアフリカにあるマリ共和国へと送られている。餓えに苦しむ人々を助けるべく、利用されているのである。子ども

たちにはそのことを知ってもらい、自分たちがしっかりと国際協力をしていることを理解している。

畑では芋や、夏野菜などを育てて自分たちで作物を作る大変さ、楽しさを体験している。そして、取れた作物を使って料理をすることで、収穫できたことの喜びを味わっている。

### 3. 問題点

茂菅ふるさと農場の問題点としては、一つ目としていつ子どもを呼んでの活動にするか、ということが挙げられる。茂菅ふるさと農場では、学生に中でもいくつかの班ができるほど、さまざまな農作物が育てられる。今年度で言えばそれは、芋班、つる班、果菜班、豆班といった具合だが、それぞれの班で少なくとも三つ以上の種類を育てていた。それらにおいて、子どもたちを呼んでの活動として考えられるのは、種を蒔く、または苗を植えるときと、収穫という大きく二回なのだが、それぞれ蒔く時期や、収穫できる時期というものがあり、それがうまく重なったときにはいくつかを合同でやればよいのだが、そうそううまく重なるとは限らない。そのようなときに起こる問題が、これなのである。たくさんのことを子どもたちに体験させてあげたいし、いろいろな作物の作る過程に携わらせてあげたいと思っても、そのたびに何度も何度も呼んでいたのでは、さすがに家族の交流に差し支えるだろうし、こちらでかけている保険料や、農場パスポートのハガキ代などは足りなくなってしまう。又、学生の負担も大きくなってしまい、活動自体がうまくまわらなくなってしまう。そんなことにならないようにするために、最初に一年間を通しての大まかな予定を立てることはしっかりとやっておいたほうがよいだろう。今年の例で言えば、農場で予定していた収穫祭だが、他のプラザとの兼ね合いから途中まではいっしょにやるようになっていたのが、計画が具体的になるにつれて、まったくの別のものになってしまい、もちつきは急遽年明けに2プラザの締めくくりとして行われることになった。結果的には何の問題もなかったのだが、一つの区切りとしてプラザの締めくくりをYOU遊フェスティバルの終わりと同じに見ていたときになんとなくすっきりしないものが残ったことを覚えている。

もう一つ問題として私を感じたものとして、作業の分業がある。先ほども述べたように、この茂菅ふるさと農場には班がいくつかできるほど学生が登録してくれている。しかし、それぞれの細かな作業において、たくさんの人が集まることが少なく、ごく一部の人はかなり負担になっているように思った。授業があったり、すべてに出ることは不可能だと思うのだが、空いている時間があれば少しでもお互いに手伝いあってみんなでやればそれほど大変な作業は多くはないと思う。しかし、畑の草取りや、田んぼの鳥よけの網かけなど、内地留学の志村先生や少人数でやっている作業があったのではないか。私も含め、もっと多くの学生が自分でやる気を興して畑の面倒を見るようにしていきたいと思った。自転車で十分程度の距離である。みんながもっとできることがあるはずである。



#### 4. 活動報告

今年度の茂菅ふるさと農場での活動を以下にまとめる。

日 時	内 容	参 加 者 数	スタッフ	備 考
4 月 7 日	畑の草取り 田起こし		学生 12 先生 2	
4 月 21 日	じゃがいも植え	子ども 10 { 小学生 8 幼児 2	学生 10 先生 2 林部さん	種芋 3 kg (だんしゃく)
4 月 24 日	苗植え (種まき)		学生 2 先生 2	J A 若槻支所
4 月 25 日	苗植え (伏せ込み)		学生 2 先生 2	J A 若槻支所
5 月 11 日	トマト畝作り		学生 1 先生 1	
5 月 11 日	こにゃく芋植え		学生 5 先生 1	
5 月 12 日	れんげ畑で遊ぼう	子ども 10 { 小学生 7 幼児 3 母親 4	学生 5 先生 2	花摘み、草笛 鬼ごっこなど をして遊ぶ
5 月 14 日	田起こし、石拾い 農具の使い方		学生 17 先生 2 林部さん	みつまた、鍬、 鎌の使い方、 手入れの仕方 を教わる
5 月 21 日	トマト苗植え 果菜班、つる班畝作 り		学生 11 先生 1	
5 月 23 日	田起こし		学生 3 先生 2 林部さん 大内さん	林部さんの耕 運機を借りた 草刈り、木の 剪定もする
5 月 24 日	畦シート張り		学生 2 先生 1	雨が降ってい たが決行
5 月 28 日	苗植え (きゅうり、なす、 ピーマン、カボチ ャ)		学生 10 先生 1	

5月29日	種蒔き(大豆、小豆)		学生 3 先生 1	
5月30日	田の肥料まき、代掻き		学生 3 先生 2 林部さん 大内さん	堆肥 5袋 化成肥料 1袋 林部さんの耕耘機を借りた
6月1日	畦、土手の整備		学生 5 先生 2 林部さん 大内さん	裸足で歩いても大丈夫なように石なども拾う
6月8日	田植え (うるち7:もち3)	子ども 36 小学生 31 幼児 3 中学生 2	学生 25 他大学生 6 先生 5 JA 4 その他大勢	上越教育大学 横浜国立大学 鳴門教育大学 から2名ずつ
7月下旬	追肥			出穂 25日前 頃にチッソと カリ肥料 10a あたり 1.5か ら 2.0kg
7月24日	じゃがいも掘り 野菜収穫	子ども 29 小学生 24 幼児 5	学生 12 先生 2	おやつに蒸かした芋を出す
8月8日	すずめ避けのネット張り		学生 5 先生 2 林部さん 大内さん	
8月20日	カボチャ、スイカの収穫		学生 4 先生 1	
8月下旬	水田中干し			水を抜いて根の成長促進 土がひび割れるくらいまで
9月5日	大根種蒔き		学生 1 先生 1	ねずみ大根
9月19日	田の水が止まる			
9月13日	種蒔き(レンゲ、野沢菜、ほうれん草、たまねぎ) 間引き(ねずみ大根)		学生 3 先生 1	



9月27日	田の網はずし		学生 6 先生 2 林部さん 大内さん	はずした網は 絡まないよう に編んでおく
9月28日	稲刈り(前日準備)		学生 8 先生 2	みんなが集合 できる程度の 稲を刈ってお く
9月29日	稲刈り(本番)	子ども 30 { 小学生 26 幼児 3 中学生 1	学生 20 先生 2 林部さん J A3	
10月2日	田 すずめ避けの網 掛け 畑 間引き		学生 2 先生 2 大内さん	間引きは野沢 菜と大根
10月16日	網はずし 稲はずし		学生 8 先生 2	
10月20日	田 脱穀 畑 さつまいも、こん にゃくいも掘り	子ども 30 { 小学生 25 幼児 4 中学生 1	学生 15 先生 2 林部さん 大内さん	足ふみ脱穀機 と自動脱穀機 を使って比べ る
11月1日	田起こし		学生 17 先生 2 林部さん	来年度使うと きに土が柔ら かくなるため
11月1日	豆類収穫 夏野菜の片付け		学生 3 先生 1	
1月20日	もちつき	子ども 29 { 小学生 24 幼児 5 保護者 7	学生 11 先生 1	取れた野菜を 使った豚汁を 出した

(理数科学教育専攻 3年 西澤俊輔)

## 5. 参加した学生の感想

外＝制約が無い場所。“ここを舞台にして、子どもと関わってみたい。”これが、この活動に参加した、最初の理由でした。当然、子どもの頃は、“外で思いっきり遊ぶ”ことが、その子の成長を促すわけですが、近年、私たちにとって、“外で活動する”ということは、とても稀なことになってしまいました。そんな中、“外で活動する”体験が出来る“茂菅ふるさと農場”という広場にめぐり合いました。今回は、自分が参加し、特に印象に残った“田植え”と“稲刈り”について振り返ってみたいと思います。

田植えは、私にとって、大勢の子どもたちと関わるのが、一年のとき参加した“YOU遊サタデー”以来のことで、とても楽しみにしていました。尻餅について、全身泥だらけになっている子や、稲が上手く植えられずに飽きてしまい、“かえる”に夢中になっている子を見て、子どもたちの素直さに、心が和みました。そして、自分も子どもたちと一緒に足で泥だらけにしたり、田植え競争をしたりして楽しみました。子どもたちが、田植えを通して、新たな具象に直面する場面を見ると、外での活動は有意義だと改めて思いました。最後の“おもいでしゃしん”を書く場面では、一緒にやっていた子どもが、「私、お姉ちゃんも書く」といって、私を書いてくれて、とても嬉しかったです。農業を通して、技術を学んだだけでなく、いかに、人と触れ合ったかもまた、この講座は大事にしているところなのだなと感じました。

秋になって、稲刈りの季節になりました。稲刈りでは、田植えのときとは逆に、“外”という場所の大変さに気がつきました。まずは、安全管理という点です。近くには、川も流れているし、土手もあります。また、稲刈り鎌も切れる道具です。そんな中、私たちがきちんと目を光らせていなければ、子どもがいつどんなけがをするか分かりません。けがをしてしまったのでは、楽しい外の活動がだいなしになってしまいます。しかし、けがが怖いからといって、外では活動させないなどといった考え方をするのも良くありません。だから、この活動をきっかけに、外で起こりうる危険を多く予測し、より安全に子どもたちを外で活動させることの出来るようになっていきたいと思いました。第二に、外は、全体を見渡しにくいという点です。この稲刈りで、私は、班の班長を務めさせてもらいました。そんな中、班の中で、“稲刈りが嫌だ”といていた子が一人いました。しかし、他の子の安全に気を向けるあまり、その子を、そのまま放置し、結局、稲刈りが出来なかったという悲しい事態が起きました。その子は、当然別の人とやっているものだと思い込み、稲刈りの体験を存分にさせてあげることが出来なかった点を深く反省しています。子どもは、一度“嫌だ”と言ってしまうと、なかなか、“やりたい”とは言い出せないものです。そういう“子どもの心理”に気づくことが出来ませんでした。これからは、一度得た子どもの心理を大事に、子どもと上手く向き合えるようになっていきたいです。

これからも、農業を通し、子どもと直に触れ合える機会を大切にしていきたいです。

(生活科学教育専攻 2年 原山美樹)

「こんにちは」、茂菅の一日はこの挨拶から始まる。子どもたちが農場へやって来るとき、スタッフである学生は自然と顔がほころび、大きな声で子どもたちに挨拶し話し始めている。何気ない光景であるかもしれないが、それが重要ではないかと思う。

活動の中で一番思い出深いのはやはり米作りである。実家が農家である私は、農作業をするということは、今まで「お手伝い」をするという意味とほとんど同じであった。特に、稲作に関しては毎年同じことの繰り返しで、しかたなくやるという感じであった。しかし、今年茂菅の農場で子どもたちとともに農作業をして、自分が忘れていた「もの」を子どもたちが気づかせてくれた。

田植えでは、Nさんは裸足で田んぼの中に入ったとき、初めての土の感触に率直な感想を言っていた。そして歩き慣れない田んぼの中で、一生懸命田植えをしていた。Hさんは、苗を植えることだけ夢中になっていた。S君は田植えよりも、泥かけっこや虫に興味を示



していた。稲刈りでは子どもたちは最初、使い慣れていない鎌に苦戦し、なかなか作業が進まなかった。しかしコツを掴み始めると作業のスピードはしだいに増していった。そして「稲を刈る」ことにみんなが夢中になり、日が暮れて始めていることに気づかなかった。田んぼの稲をすべて刈り終わったときに「やったあ」と誰かが言った。また、収穫したもち米とうるち米の違いを見つけ、スタッフにクイズを出している子もいた。脱穀では、足ふみ脱穀機と機械の脱穀機を同時進行で作業をした。機械と足踏み脱穀機の速さの違いに気づき、それをやりながら観察している子もいれば、足ふみ脱穀機に持っていた稲の束を取られ、驚いた表情をしている子もいた。これらの活動中に子どもたちの笑顔が絶えることはなかった。

子どもたちとともに作業をしながら私は、今日のあたりにした子どもたちの姿は、自分が小学生の頃に体験し感じたことではなかっただろうかと思った。作業をしているときの子どもたちの笑顔とともに伝わってくる楽しさ、驚き、達成感、そして初めて体験しての感動や気づきなどは、彼らにとってとても有意義なものであったと思う。それと同時に、私にとっても貴重な体験となった。成長するにつれて農作業の技術は取得していくが、小学生のときに感じていた素直な気持ちはどこへ行ったのか、体験が教えてくれる自然のありがたさや感情をいつのまにか忘れ去っていたことに気づかされた。「初心忘れるべからず」という諺通り、体験が与えてくれる素晴らしい「もの」を常に忘れないようにしたい。

活動をする中で私なりにいくつかの課題も見えてきた。そのうちの 하나가、目的・ねらいについてである。今年は、農作業する「場」があって参加し、活動をしてきた。一つひとつの活動に対し、自分なりの目的意識はあっても、全体を通して「なぜ、農業をするのか」ということに関しては明確でなかった。来年度は、子ども理解も含めながら活動に対する目的意識を持ちつづけて、活動に臨んでいきたい。

(理数科学教育専攻 2 年 花村尚美)

※活動のタイムスケジュール、農場パスポート、おもいでしゃしんについては信大牟礼ふるさと農場で詳しく取り上げているので、そちらをご覧ください。





### 3 プラザ キャンパス教育の森

#### 1. 3 プラザへの想い

3 プラザ「キャンパス教育の森」という名前には2つの想いが込められている。1つ目は、キャンパスを「緑あふれる森にしたい」という想いである。大学のキャンパスを見渡すと、当たり前のようにゴミが落ちていて、その横を当たり前のように通っていく学生。その一方で、落ちているゴミを拾っておられる教官の方々。キャンパスが、学生にとって「通り道」でしかないような気がしてならない。しかし、キャンパスの中をよく見てみると、春になると満開の花で私たちを楽しませてくれるチューリップ、夏にはキャンパス内を流れるシシ沢川で光を放つホタル、学生の手で植樹された2000本の苗木…。普段何気なく通っているキャンパスの中には子どもたちと共に学ぶことの出来る素材がたくさんある。そんなキャンパスを、「学生の手でより緑あふれる森にしよう」、そして「その森で子どもたちと一緒に学びたい」そんな想いが込められている。

そして2つ目は、キャンパスを、子どもたちと学生が一緒になって学ぶ「学びの森にしたい」という想いである。多くが教員を目指す教育学部の学生にとって、子どもたちと実際に関わり、そこから得るものほど貴重なものはないのではないだろうか。また、自らの企画で実際に子どもたちと関わることのできる場は決して多くない。この「学びの森」には「キャンパスの中で、学生自らの企画を通して子どもたちと関わってみたい」という学生の想いが込められている。(教育実践科学専攻 3年 清水美香)

#### 2. 活動内容

このような想いで生まれた3プラザでは、(1)YOU遊花プラザづくり(2)ピオトープ作り(3)YOU遊フェスティバルの3つの活動をした。ここでは(1)YOU遊花プラザづくり(2)ピオトープ作りについての活動内容についての報告する。

(1)YOU遊花プラザづくり <>は参加者

##### ①バンジー

\*前年度内地留学生の海沼正典先生よりバンジーの苗をいただく。

4月5・6日：実践センター前のYOU遊花プラザに254株、旧附属小学校グラウンド北の花壇に200株、同校舎周辺に59株、合計513株のバンジーを移植。<林、町田、清水、土井研究室院生、生活科指導法基礎受講生約10名>

\*その後、毎日夕方に水やりをした。花を長期間咲かせるためには種を作らないようにする。そこで、花が終わるごとに花を摘んだ。その結果、花は7月下旬まで咲き続けた。

##### ②サルビア

5月17日：サルビアの種約60個を発泡スチロール(大きさ21cm×30cm×11cm、側面と底に穴を開けた)の箱に蒔いた。土は茂菅の畑のもの(かなり粒子が細かい)を使用した。発芽まで20℃以上を保たなければならないので、朝晩は箱の上にビニールをかぶせた。<林、清水>

5月30日：2回目の種まき。種約60個を同じく発泡スチロール(30cm×50cm×11cm、底に穴を開けた)に蒔いた。土は茂菅の畑のもの(前回とは異なった質)を使用し、朝晩はビニ



ールをかけた。《白井、林、清水》

6月8日：2回目に蒔いた種のうち18個が発芽。

6月14日：ほとんどの種が発芽し、本葉が大きくなっている。1回目に蒔いた種は結局発芽しなかった。

6月21日：植え替え。ポットに肥料を混ぜた土を8分目ほど入れ、ヘラ等で根を傷つけないようにして取った苗を移植。68個のポットができた。《林、清水》

7月：連日の暑さで、日中は葉がしおれてしまう。1日に数回水やりをすることにした。

\*その後順調に成長していった。

8月10日：開花。

### ③マリーゴールド

5月30日：種まき。YOU遊花プラザに黄色、オレンジ色それぞれ20mlを蒔いた。《白井、林、清水》

6月2日：約20個が発芽。

6月14日：ほとんどの種が発芽し、本葉が出てきた。

6月28日：つぼみが見え始めた。

7月6日：小さな花が咲き始めた。

7月25日：小さな花がたくさん咲いているが、暑さのせいか元気がないので、水を以前より多めにあげるようにした。

8月：1つの花の時期が終わり、新たな花が咲き始めた。

10月31日：まだ咲き続けている。しかし、花の大きさが小さい。

12月：種ができた。

### ④ひまわり

5月30日：種まき。音楽練習棟前の花壇に20cm間隔で3列蒔いた。《白井、林、清水》

6月5日：発芽。高さ約1cm。

6月14日：日に日に成長を続け、高さは6cm程。

6月21日：高さ20cm以上に成長。

6月28日：高さ50cm以上に成長。とても成長が早い。

7月14日：つぼみが現れる。

7月25日：開花。高さ約1m、花の直径約15cm。

9月下旬：種ができた。

(教育実践科学専攻 3年 清水美香)

### ⑤サンビタリア

5月30日：サンビタリアの種2袋分を底に穴のあいた発泡スチロールの箱(大きさ33cm×55cm×12cm)に蒔いた。土は茂菅農場の土を持ってきてざるで細かい土にして使用した。指で5mm程、土をかぶせた。またサンビタリアは加湿を嫌うということなので土が乾いている時にのみ水をあげることにした。《清水、白井、林》

6月4日：1つ、2つ発芽し始める。

6月8日：約25個が発芽。大きいもので高さ5mm程あった。

6月14日：発芽した芽のいくつかから本葉が出てきた。連日雨が降り、気温も低め(20℃前後)だったので水やりは少なめにした。

6月23日：気温が低く雨の日が続いたため発芽数は増えない。しかし発芽したものは、14日以降かなり成長し、7~8cmまで伸びた。土は連日湿っているので水はあげない。

7月4日：数日、晴れの日と雨の日が2、3日ずつ繰り返されて土の状態がとても良い。気温は30℃以上、10cm以上に多くの芽が伸びている。

7月14日：芽が横に這うように伸び12～13cm程になる。

8月4日：開花し始める。サンピタリアの花は黄色。暑さのせいか芽はあまり伸びていない。

#### ⑥ダリア

5月30日：YOU遊花プラザの西側(広さ150cm×70cm)に種を蒔いた。15cm間隔で深さ1cm程の穴をあけて2つずつ種を入れていった。5mm程上から土をかぶせた。《清水、白井、林》

\*すぐ近くに木が植えてあり日陰である。土質もあまり良いとはいえないのでしっかり育つか少し不安。種はとても小さく軽量なので水やりによって流れてしまわないよう、水はホースではなくじょうろを使ってあげることにした。

6月7日：発芽

6月14日：梅雨入りして毎日涼しい。昼間の気温は20℃前後。発芽したものから本葉が出てきた。背丈は2.5cm程に伸びている。発芽数は10個程度であまり増えていない。

6月23日：5月30日には20ヶ所ほど種を植えたが発芽数はその半数程度で増えない。日陰であるせいか。発芽したものは5～6cmまで伸びている。

7月14日：背丈は7～8cmまで伸びたがここ数日ほとんど変化がない。気温はかなり高いが日陰なので水をあげてもなかなか吸水しない。しかしあげないと葉の表面がかわてしまう。

\*その後夏休みに入り水やりを一日おきにやってきたが開花させることができなかった。

#### ⑦チューリップ

11月7日：YOU遊花プラザ東側にチューリップの球根400個(黄150個、赤150個、ピンク50個、白50個)を植えた。花だんの土を鍬で耕し、肥料をまき、その上に土をかぶせそこに球根を植え、さらにその上から土をかぶせた。肥料は生ごみや木の葉などを使って土井先生と志村先生が作っている堆肥をいただいた。球根は膨らんでいる部分と窪んでいる部分が必ずある。その部分の向きを一定の方向にして植えると花の向きもそろうのでそのようにして植えた。《清水、白井、坪野、林一真、林美智子》

\*水やりは春までほとんど必要なし。春が来て芽が伸び、400個の花が一面に咲くのを楽しみに待つ。(教育実践科学専攻3年 林美智子)





## (2) ビオトープ作り

### ◎ ビオトープとは・・・

ビオトープとは、バイオ(生き物)と、トポス(場所)という2つの言葉を合わせたもので、「生き物の生息する自然環境」を意味している。最近では環境教育の一環としてビオトープ作りに取り組む学校が増えている。

\* ビオトープに関して全くの初心者の私達。まずはビオトープ作りを実際にやっている学校を訪問したり本やインターネットを使ってビオトープについて調べることにした。

3月5日：長野市立鍋屋田小学校訪問。鍋屋田小学校では学校付近を流れる川をホタルが生息できる川にしようということでそのためにこれまでしてきた様々な活動についてのお話をお聞きした。《小黑、清水、西澤、林》

3月8日：長野市立川田小学校訪問。川田小学校では、子どもたちが、近くを流れる赤野田川で様々な生物と共に遊ぶことができるようにという学校側の要望により、県によって川に下りるためのステップと、川の中を歩くための大きな石30個が設置されていた。学校内にはPTAの方が作った池があり、赤野田川に生息するメダカを入れていた。また、河川に手を加えるための許可について、シシ沢川のような一級河川は洪水対策等の面で許可を得るのは難しいのではないかとということもお聞きした。《鹿子木、清水、西澤》

\* 実際に川の中に入って、現在川にはどんな生き物がいるのかみてみることにした。

3月19日：大学構内を流れるシシ沢川の中に入ってみた。穏やかな流れで美しい水が流れる川のように今までは見えていた。しかし、いざ川の中に入ってみると流れは急で水深も25cm程までである。生活排水が流れ込んでいる所もあり意外と汚れていた。約1時間川の水や砂をすくった。糸ミミズやカワニナなど小さな生物がたくさんいた。ホタルの幼虫がいる可能性もありそうだった。《清水、林》

4月10日：長野県土木部河川課へ。河川を使用するための一般的な規則について知る。今年度、ビオトープ作りのための補助金は県からは出ないという事がわかる。《土井先生、清水、林》

\* その後何度もの話し合いから、今まではシシ沢川から水をひいて武道場裏の敷地にビオトープ作りをしようと考えてきたが、予算の面から今年度は難しいという結論に至った。そこで今年度はシシ沢川の利用は考えず、武道場裏に池などを作りビオトープ作りの第一歩とすることにした。

### ○ 3 プラザの願い・・・

- ・ 子どもと学生と一緒に自然の中遊べる、学べる場にしたい。
  - ・ 自然を使ってどんな遊びができるだろうか、どんなことが学べるだろうかという事を考えたい。
  - ・ トンボやアメンボ、ホタルやメダカや小鳥・・・たくさんの生物がやって来るにぎやかな場所を作りたい。
  - ・ プレーパークへ遊びに来たみんながぶらっと立ち寄って、昆虫を見つけたり池で遊べたらいいかもしれない。
  - ・ 6プラザと合同でやる秋の企画の中でもビオトープで子どもと何かできたらいいな。
- \* 3プラザではこのような願いを持ってビオトープ作りをスタートさせることになった。

6月21日：ビオトープ作り開始。ビオトープ作りを今後毎週木曜日にやることに決定。

10月25日：梅雨と台風の時期を逃し雨水がなかなか貯まらないため水道から水を引き、入れた。《小林則雄、清水、白井、坪野、林》

(教育実践科学専攻 3年 林美智子)

今後は、今年度作ったビオトープをさらに発展させ、より多くの生物が生息していくことができるようなビオトープを創り上げ、子どもと共に学び、遊ぶことのできる環境を設定していきたい。Y O U遊花プラザについては年間を通した見通しを立て、花を通して学生、教官、地域の人々や子どもたちが四季を感じたり、関わりあったりすることができるようにしていきたい。(教育実践科学専攻 3 年 清水美香)





## 4 プラザ キャンパスプレーパーク

### 1. プレーパークとは

「何かやってみたい!」という欲求や興味をひとつでも多く実現できるように、従来の公園や施設に見られるような「禁止事項」を取り払い、いろいろなことができる場所、それがプレーパークである。プレーパークにはプレーリーダー(キャンパスプレーパークではブレンジャーと呼ぶ)という大人がいて、子どもたちの代弁者になったり、いざという時におたすけマンとなったりし、子どもたちが様々な遊びのできる環境を作り出している。代表的なプレーパークには世田谷区の羽根木プレーパークがあり、今、冒険遊び場の活動は全国に広まりつつある。

キャンパスプレーパーク(通称プレバ)は2001年4月28日にオープンした。大学内のグラウンドを利用し、毎週木曜の15:00~17:00(夏休み中は10:00~17:00)と土曜の10:00~17:00にオープンしており、試行錯誤を続けながら活動が続けている。

(理数科学教育専攻 3年 西澤俊輔)

### 2. プレーパークを作ろうと思ったきっかけ

1年前、YOU遊サタデーに続くこれからの活動をどうしていきたいか繰り返し話し合ったとき、みんなから様々な思いがでてきた。キャンプをしたい、農作業がしたい、不登校の子と関わりたい、三世代交流をしたい、子どもたちと継続してかかわりたい…。これらの多くの思いをどうにかして全て可能にすることはできないだろうかと考えていたとき、ある雑誌で羽根木プレーパークのことを知った。木の上に作られた小屋、読んでいるだけでもドキドキしてくるような遊びの数々、たき火…。私自身、今すぐにも行って遊びたいと思っていた。それと同時に、プレーパークだと不登校の子や障害を持った子も関係なく関わることができる、地域の人もやってきて世代間交流もできる、キャンプだって農作業だってできる!そして、その全てのことがお膳立てされたものでなく自然に行えることに、さらに魅力を感じた。このような思いで始めたプレバ。今は他のプラザとの関わりは少ないが、プレバの中でもっと様々なことができるようになり、他のプラザで活動している人たちの力がプレバでも生かすことができればと思う。

(教育実践科学専攻 3年 小黒あかり)

私は幼いころから、祖父母から昔の遊びや知恵を教えてもらったり、祖父母が小さかったころの話や戦争の話などを聞いて育った。祖父母とのその関わりは私にとって大変な became。そのような経験から、私は子どもとお年寄りとの交流が、今とても重要であると考ええるようになった。

しかし、現在子ども達は習い事で忙しかったり、同年代の友達とテレビゲームをしてしか遊ばないなど、お年寄りや地域の人と交流する機会があまり多いとはいえない。

そこで、子ども、学生、親、お年寄りが世代を超えて伸び伸びと遊び、互いに学び合える場をつくりたいと思いキャンパスにプレーパークをつくることにした。

(社会科学教育専攻 3年 白井克典)

### 3. キャンパスプレーパークでの人数と回数及びその考察

#### 人数と回数

	大学生	中高生	小学生	幼児	大人	お年寄り	先生	その他
4 月(1)	21	0	15	5	4	1	2	0
5 月(6)	38	0	38	3	11	1	1	2
6 月(7)	61	6	48	27	14	6	1	3
7 月(5)	35	0	40	11	14	2	0	2
8 月(6)	31	0	32	11	9	2	0	1
9 月(9)	48	0	97	18	5	4	2	2
10 月(6)	47	0	37	17	13	4	3	2
11 月(8)	32	1	56	19	17	4	3	3
12 月(8)	35	6	31	9	14	0	0	3
合計	348	13	394	120	101	24	12	18

※その他の中には新聞記者の方、プレバ作りに協力してくださっている遠藤さん等

※人数は全て述べ人数。( ) 内の数字は回数を示している

#### 結果・考察

年間を通して週2回というペースを守ってオープンすることができた。雨天は中止だが、雪等の悪条件の中でも来てくれる子どもがいる限りはオープンしようという意思の統一が図られていた結果だと考えている。

表を見ても明らかなように来ていた人は小学生と幼児、その付き添いを含む大人が大半を占めている。中高生、お年寄りの割合が少なく幼児からお年寄りまでの世代間交流の場という点では課題を残した点も多かった。また大学生は、多くの学生が予定をプレバ優先というわけにはいかず、1時間だけ来て帰っていくような人も含めている。そのため、統計上では多くても実際は大学生の数が足りないという場面がしばしば見られた。その解決策として当番制の案も出されたが、プレバらしく大学生の参加にも自由を尊重するという意見で固まった。

4・5月はポスターやビラを見た人、近所の知り合いが大半。6月頃から新聞で見た人、来ている人の友達が遊びにくるようになる。この頃から犬の散歩の人たちが定番となり、いろいろな話をするようになる。それ以降新聞で何回か取り上げられることはしたが、自然に人と人との輪が広がっていくことを目標にあえてそれ以上の宣伝活動は行わなかった。そのためメンバーが固定されていた時期もあり、口コミでの限界を感じたこともあった。また、中高生や大人については、プレバの存在自体を知らない人が大勢いたのではないかと。取材に来られた記者の方や先生等に話を伺ってみると、私たちの予想以上にこのような場を求めている人は多い。保育士志望の高校生が来た時にも子どもと関わる経験ができる場が欲しいということだった。交通手段、オープン日程、時間等の問題はあるが、より多くの方がプレバの存在を知り、より自由に参加ができるような雰囲気作りを目指している。プレバや大学、その周辺地域でイベントが行われた時は一斉に多くの子どもが遊びに来ていた。気軽にふらっと立ち寄って欲しいという意向と、プレバ自身自身が動いていかないと多くの人と関わり、地域交流を図ることが難しいという葛藤に悩まされている。

(教育実践科学専攻 2年 西村崇)



#### 4. プレーパークに関わっている人たちの話

##### (1) プレーパークに来ている子どもの話

プレバのどんなところが好き？—いろいろな人と友だちになれるところ。例えば信大生のお兄さんやお姉さんや他の学年の子。プレバがない日は何をしているの？—ゲーム。プレバとゲームはどっちが楽しい—それはプレバでしょう！これからどんなプレバになったら良いと思う？—ずっとこのままのプレバでいてほしい。プレバ最高！

##### (2) プレーパークに来ている子どもの保護者の話

・最近学校や公園でも自由に遊べないことも多いですが、プレーパークでは子どもが自分のやりたいことを自由にやることができます。私自身なかなか忙しくて遊んであげられないこともあるのですが、こうしてこの場所でいろいろな子どもや大学生のお兄さんたちと友だちになり、一緒に遊んでもらっているのも、本人はもちろん、私自身も大変ありがたいと思っています。子どもを預けているということに関しては、大学生の人たちが見ていてくれているという安心感も手伝って、ついそうしてしまいます。何が起るかわからないのでケガの心配はもちろんありますが、多少のケガならば問題はないと思います。

・これからのプレーパークに関しては、このままでいてほしいというのが本音ですが、大学生だけでやっていくのはなかなか難しいと聞きました。そうすると、私たち保護者の協力が必要となることもあると思います。しかし、保護者が介入することによって保護者の誰かが仕切っていくことになれば、この大学でプレーパークをやっている意味も無くなってしまうし、仲間内の結束力が強くなりすぎてしまい、新しい人が入りづらくなる恐れもあると思います。あくまでも、大学生が主体となり、私たち保護者はサポートするといった形をとらなければいけないと思います。これがうまくいけば、大学生の負担も減り、地域との距離も今より近づくのではないのでしょうか。

##### (3) 遠藤正裕さん(川中島でグリーンファームというプレーパークを運営されている方で、キャンパスプレーパーク作りにも協力してくださっている)の話

駒沢はらっぱプレーパーク(東京・世田谷)での事。2月11日、三連休の中日だった。プレーリーダーの「あちゃ」が僕を呼ぶ。「長野から来たって子がいるよ」。大学にプレーパークを開くために昨日から見学に来ているという。それが、信大の岡部さんとの出会いだった。5日後、長野市内のファミリーレストランで、その中心となる人たちと会うことができた。小黑さんたちとの出会いだった。2時間程話しをする中で、本当にプレーパークを作ろうとしている熱意を感じた。それから僅か2ヶ月あまりでプレーパークはオープンした。やはり、「物事を動かすのは熱意、情熱なのだな」と思った。

ほぼ毎週木・土にオープンする中で、プレンジャーたち自分たちの言葉で「プレーパーク」を伝えている。そしてその思いは見事に子どもたちや近隣のお父さん、お母さんに伝わり、「常連」を生んだ。これは既に、彼ら学生たちだけの活動ではなく、地域に根ざした「冒険遊び場」なのだ。

今後工夫する部分があるとしたら、もっと地域の大人や子どもの力を借りて、町ぐるみで「信大プレーパーク」を創ってみたらどうか。例えば、「プレーパーク友の会」のようなものを作り、運営をサポートする人たちを組織化してみる。現在抱えている資金的な問題の解消や、遊具の充実などが図れるかもしれない。プレーパークが子どもたち居場所としてあるために、何をしていけばいいかをゆっくりと実践していってほしい。

(教育実践科学専攻 2年 西絢平)



## 5. キャンパスプレーパークでの遊び

プレパのオープンには、赤ちゃんからおじいちゃん、おばあちゃんまで、様々な世代の人が大勢遊びにきました。毎週木曜日と土曜日にひらいているプレパでは季節ごとに様々な遊びをしました。

シャベルを使って、水でドロドロにした泥のケーキの出来上がり！のはずが、いつの間にか泥投げに変わってしまいました。泥だらけになりながら、みんな元気に走りまわりました。そして、家に帰って怒られると思っていたら、「よくそんなに汚せたねえ！」と誉められて嬉しかったという女の子も。プレパに用意されたボールでキャッチボールやドッジボールをしたり、サッカーをしたりしました。またプレンジャーやお父さんを中心にベーゴマも人気がありました。子どもたちにはちょっと難しいようです。いつもはごみにしてしまうようなダンボールもプレパでは大活躍し、キャタピラやアクセサリーに変身します。子ども達はダンボールで子ども専用の基地づくり。プレンジャーは入れてくれず…。残念。ちょっとしたことから草投げ大戦争も勃発。草がいっぱいの春のプレパならではの。またシロツメクサもたくさん咲くので、女の子は花かざりや花束をつくったり、お母さんに花束をプレゼントしている姿も見られました。

夏休みのプレパでは、ブルーシートとサッカーゴールで強い日差しを防ぐためのミニテントが出来あがりました。夕立だってこれがあれば一安心。それでもあまりにも暑いので地面に穴を掘って、そこにブルーシートを敷き、水を入れてプールも作りました。最初は手で触っていただけだった子も、最後には全身ずぶ濡れになって楽しみました。竹や木材も手に入り、机やベンチ、ごみ箱を作ったりもしました。木を30分も切り続けていた女の子や、初めてのこぎりを使った子もいました。子ども達は高いところに登るのも大好きで、ゴールポストや物置の上に登っていました。物置の上は涼しくていい気持ち。また、“登ったぞ”という子ども達の勇気のあかしの落書きがたくさんあります。

広いプレパはとても寒いので、秋にはたき火をしました。もちろんたき火で焼き芋をするのも忘れません。また、ある土曜日には、プレパでパンまで焼きました。パン生地を手でこねてから長い竹の先に生地をくっつけて、たき火にかざして焼くと、おいしいパンの出来上がり。焼き加減がなかなか難しくて、焦がしてしまった人も大勢いましたが、中は白くてふかふかのとってもおいしいパンが出来ました。リンゴジャムも作りました。子どもたちは、いつの間にか残った材料を使ってお料理を始めていました。砂糖、りんご、クルミを混ぜ合わせて…「あれっ！？おいしいっ！？」不思議な味がしました。もらってきたタイヤと木材でシーソーやすべり台にもチャレンジ。夏にはテントだったサッカーゴールには竹が吊るされてブランコになりました。

プレパの日当たりがよくて遊びの邪魔にならない場所を選び、そこに畑を作って、野沢菜と春菊の種をまきました。肥料はプレパの雑草を腐らせたものです。クリスマスにはツリーを作ったり、飾りづくりをして楽しみました。雪がたくさん積もった冬休みのプレパでは、雪の中でカレーを作ったり、かまくらを作って、中でお茶を飲んだりして信州の冬を満喫。子ども達はかまくらを壊すのも大好きで、プレンジャーがせっせと作っている横で、かまくらが穴だらけに。雪だるまも作りました。

(教育実践科学専攻 2年 篠原真美、山本真望)



## 6. キャンパスプレーパークでの問題と問題点

### (1) 子どもとの接し方についての問題

子どもがプレンジャーに対して暴力をふるう、ひどい悪口を言う等の問題がある。慣れや自分のスタイルの発見といったことで、こういった問題の対処方法はわかってくるものだと思う。プレンジャーとしては、子どもに振り回されてばかりでなく、嫌なことは嫌と言う、我慢しないで怒るという対処をとっている。これで子ども達の悪口等がなくなるわけではないが、対等な立場でいられ、よい関係ができてきたように思う。また、子ども同士のけんか、仲間はずれ等の問題に対して対処はプレンジャーによって様々だが、子ども同士をつなぐことを念頭におき、きつく注意することもある。プレンジャーが掛け橋となり子ども同士の関係をよくしていこうと努力しているが、プレパという自由に来れる場だけに、子ども同士をつなぐのに他の場とは違う難しさを感じられた。

### (2) プレーパークの理解の問題

保護者の方に、プレパの趣旨をうまく伝えることはなかなか難しい。泥遊びで汚れた服を見て、「もう来れない」と言うお母さんや、「土は汚いから触っちゃだめ!」と子どもに注意していたお母さん。たき火をしたとき、子ども達が火遊びを始め、プレンジャーが注意せずにいるのを見て、「どうして止めないの」と注意されたこともある。親からそのような話が出てくるのは不思議ではないが、それに対し理解を求めることができなかった。また、「先生(プレンジャー)がいるから安心」と、託児所的とらえ方も多く、プレパの理解度はまだ低い。プレパ紹介のビラ等作ったのだが、直接理解を求めることが難しく、大きな問題として残っている。この問題は、保護者のみでなく子ども達にも言える。自由に遊んでいいと言われても、何をしたいかわからず困ってしまう。廃材やタイヤ、ダンボールを用意し、遊びの幅を広げていけるようになったが、それでも、「今日はプレンジャーが少なくてつまらない」と子どもに言われることもあり、自分で遊ぶという意識は低い。

### (3) 安全面についての問題

最も注意しているのが安全に関する問題である。禁止事項をなくしたことにより、プレパではけががつき物になってくる。「危ないからやめなさい」という代わりに、その行為に伴う危険に対して考える機会をつくったり、子どもたちが気付かない危険は見落とさないようにすることが、プレンジャーの役割であると考え。保険に加入し、緊急時の連絡方法も考えている。保護者の方との信頼関係を築き、何か起きた場合もこちらからできる限りのことを尽くすことが重要で、それが理解を得ることにもつながるのではないかと考える。子どもが手を切った時には、その場でできる限りの応急処置をし、保護者の方へ状況を伝えた。しかし、「とんでもないことをしない限り止めない」という理念は、どこまで止めないのか判断するのが難しく、プレンジャーは困惑してしまう。物置の屋根からの飛び降り、ブランコの立ち乗り等、遊びの広がりを感じるものの、ケガをすれば、結局ダメと制限してしまいがちになる。遊びの広がりを大事にしていく上で難しい問題である。

毎回様々なことが起き、ここに挙げた以外でも、運営面や遊具、資材の少なさ等、問題はまだまだいくらかもある。そして、すべての問題に明確な対処方法を探るための深い議論をプレンジャー全員で交わす機会を多くとれず、問題を問題のまま蓄積している状態もあり、さらに、プレンジャーの共通意識の不徹底など、いかにして全員でプレパの問題に向かうかがこれからの大きな課題である。(教育実践科学専攻 2年 山口真史)



## 7. プレーパークが教えてくれたこと

私がこのプレバに参加しようと思った理由は、子どもたちと仲良く、楽しそうに遊ぶ友人の姿への憧れの気持ちと、私自身が抱えている悩み・不安の解決の糸口を見つけるためでした。こんなこと言ったら「どうして教育学部に来たの？」と思われてしまうかもしれませんが、私は子どもに苦手意識を持っていて、子どもたちとどう接したらよいのかが分かりませんでした。その為“子どもと好きに、自由に遊ぶ”という感覚が分からなかったのです。そんな悩みを解決したくて、プレバへ足を運ぶようになりました。

初めの頃は、子どもに嫌われることが怖くて『子ども＝お客さま』的な関わり方しかできず、とても疲れを感じていました。しかし、プレバに何度も足を運ぶようになり、そして仲間との話の中で、私はひとつの糸口を見つけました。それは、子どもとのふれあいのカタチは人それぞれであって、“自分らしく”でいいのだと気づき、そして何よりも『自分自身が楽しめなくてはプレバではない!!』という考えにたどり着きました。私自身が子どもと同じ立場に立ち、子どもたちを友人の一人として思えるようになってからは、プレバを楽しめるようになりました。

この夏、プレバは私を大きく成長させてくれました。子どもたち、仲間たちから友情の気持ちと遊びの楽しさを教えてもらいました。そして、プレバに参加したしている誰もが、何らかのものを感じ取り自らの『生きる力』の糧としているに違いないと、私は思います。これから、そんなプレバを創りだす子どもたちと仲間と共に成長していきたいです。

(生活科学教育専攻 2年 蓼沼夏子)

## 8. キャンパスプレーパークの今後の課題

プレバは日々進化している。それと同時にプレバの中で起こる問題点や私たちの取り組むべき課題も移り変わっている。オープンしてから8ヶ月。常連と言われる人もでき、楽しく遊んでいる。これからの課題は「広がり」であると思う。今のプレバは、プレンジャーが主催して、それに地域の人に参加している。プレバがもっと地域の人に広がって、積極的に関わってもらえるようになり、地域の人とプレンジャーが共に作るプレバになってほしい。それは、自分の責任で遊ぶという冒険遊び場の考えにもつながってくる。大学生と一緒に遊んでくれる遊び場から、自分達のやりたい遊びが自分達の意志で実現する遊び場に変えていく。信大生が子どもを預かってくれる託児所のようにプレバをとらえている大人を減らし、プレンジャーにとっても、プレンジャーの役割をはたす場ではなく、思う存分楽しく遊べる場となるようにしたい。また、遊具を作るのに使う釘代やご飯を作るときの材料費などの金銭問題も、地域の人と相談してうまく出し合っていけるようなればよい。プレンジャーの力だけではなかなか作れなかった小屋や遊具も、地域の人と協力することにより、作る事ができるだろう。このように“広がり”をもつためには、もっと地域の人々への呼びかけが必要となる。まず、もっと多くの人にこの活動を知ってもらい、顔を出してもらうことから始める。大人の人とはただ遊びには来にくいようなので、手伝ってもらうという立場で始めたり、親子のイベントを開いてみたりするとよいと思う。このように、いろいろ試行錯誤しながら、プレンジャーと地域の人にとって、かけがえのないプレバとなるように共にプレバを成長させていきたい。

(教育実践科学専攻 3年 岡部桂子)





←ブレンジャー全員が毎週集まるのは難しいので、情報を共有するために週一回発行している。オープン準備のころから発行しているもので、前週でのブレバの活動やブレンジャーへの提案等を載せている。

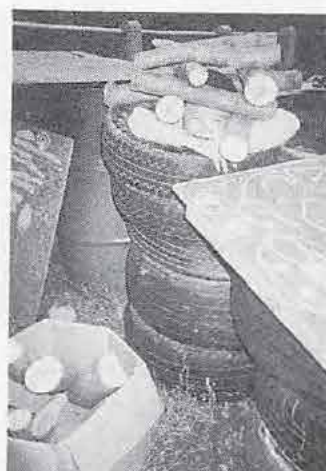


↑ のこぎりと長い木を使って小屋を作りました。

↓ 古タイヤも使って遊びます。



↑ 物置の上から見る景色は、普段とは少し違った眺めでした。



(生活科学教育専攻 2年 中西千草)

## 5 プラザ 里山ふれあいキャンプ

### 1. 5 プラザをやろうと思った動機

私は、小学校の教師を目指しながらも、教員養成課程ではない生涯スポーツ課程に所属している。「生涯スポーツ」とは「だれでも、いつでも、どこでも、だれとでも、なんでも、いつまでもスポーツを楽しむことができる」ということである。「スポーツ」とは、野球やバスケットボールなどいわゆる運動競技はもちろん、キャンプなどの野外活動や、レクリエーションを含む、身体活動そのものである。

私はこの信州に来て、夏山で登山したり、冬山でスキーをしたりと自然の中で活動する機会が増え、その度に自然の美しさ、雄大さ、そして厳しさを実感してきた。また、自然の中では日常生活から離れることで、自分自身を振り返り、新たな自分に気づくこともある。大学の授業で小学校3・4年生の「子どもキャンプ」に2年間携わってきたが、5泊6日で子どもたちの変化がはっきりと見られる。自然の中で活動する中で、「今ここに生きている」ということを感じ、たくましく成長していくのである。私は、このキャンプで「自然の中での活動」に魅力を感じた。

このような体験を今の子ども達や、毎日忙しいお父さん・お母さんが共に共有し、今減少しているとされている「親子のふれあい、そして新たな発見」ができるようなキャンプをしたいと考えた。他のYOU遊広場の活動では、お父さん・お母さんは子どもの送り迎えや子どもを見守るだけであった。このキャンプではみんなで大自然の中に飛び出し、思いっきり活動したいと考えた。

(地域スポーツ専攻 3年 小島真知子)





## 2. 里山ふれあいキャンプの概要

### 《準備の経過報告》

5 プラザ年間計画 (3月1日…スタッフ7名)  
 錬成センター下見 (3月1日…5名)  
 牟礼キャンプ場下見 (3月9日…10名)  
 キャンプ場決定 (3月13日…4名)  
 スタッフ募集開始 (4月12日)  
 富士の塔ハイキングの下見 (5月28日…6名)  
 下見研修キャンプ (6月16・17日…14名)  
 参加者募集開始 (7月1日～16日)  
 「そばまき・夏のキャンプレバ」 (7月14・15日…11名)  
 錬成センター下見 (7月21日…2名)  
 前々日準備 (8月8日)  
 前日準備 (8月9日)

### 《企画会議の過程》

月	日	内容
5	10	スタッフ自己紹介とコンセプトの決定
5	14	参加者募集に向けて
5	21	キャンプ組織の決定 係分担 下見研修キャンプについて
5	23	プログラム概要決定 スタッフ出欠確認
5	25	係分担と仕事内容確認
6	7	募集方法と募集要項の検討
6	11	下見研修キャンプの内容決定 係ごとの仕事
6	15	下見研修キャンプの前日準備
6	18	下見研修キャンプの反省 プログラム担当決定 参加者募集に向けて
7	2	プログラム企画案提出 プログラム内容検討
7	6	各プログラムの検討 「そばまき・夏のキャンプレバ」について
7	9	参加者配布資料、事前アンケートの作成 プログラムの検討
7	16	募集の締め切り プログラムのシミュレーション
7	23	プログラムの検討 しおりの内容検討
7	25	しおりの作成 プログラムの検討
7	30	参加スタッフ確認 しおりの作成 プログラム進行状況の確認 係の進行状況の確認
8	8	進行状況確認
8	9	全体ミーティング

《当日の日程表》

8/10 (金)	8/11 (土)	8/12 (日)
	<p>早朝虫取り[希望者のみ]</p> <p>森の中にはなにがいるかな？ みんなでたんけんだ！</p> <p>7:30 朝食(センター内) おにぎり作り</p> <p>9:00 富士の塔登山 出発</p> 	<p>朝日とともに起床</p> <p>みんなでいい汗かこう！</p> <p>7:30 自炊 B</p> <p>9:00 アスレチック</p> <p>10:30 片付け、そうじ</p> <p>11:15 プレゼント交換 ふりかえり</p> <p>11:45 閉会式</p> <p>12:00 現地解散</p>
<p>13:30 参加者現地集合 開会式 レクリエーションゲーム</p> <p>ゲームしよう！</p> <p>15:00 竹細工 食器づくりをしよう！</p> <p>16:30 野外炊飯 おいしい ひみつは…</p> <p>入浴</p> <p>20:00 キャントルサービス</p>  <p>虫取り準備</p> <p>22:00 就寝(センター内)</p>	<p>12:00 富士の塔 山頂 昼食(おにぎり)</p> <p>富士の塔の上で おにぎりを♪</p> <p>15:30 センター 到着 おやつ</p> <p>プレゼント作り</p> <p>17:30 自炊 A</p> <p>19:30 野外星座教室</p>  <p>星を 見ながら野宿</p>	<p>最後のお別れ、 また会おう！</p> 



### 3. プログラムの反省

#### ◎開会式・閉会式

担当者 小林則雄

目的・ねらい：このキャンプの開始と終了を明示し、キャンプの意味を確認する。

考察

- ・開閉式ともセンターの事情で、当初の開始時刻より遅れてスタートした。
- ・国旗掲揚を行う際の、参加者から予定した掲揚係の選任に手間取った。
- ・国旗や国旗掲揚時のロープさばきについて、事前に練習しておくことが必要である。

#### ◎アイスブレイク

担当者 那須良寛 野口陽子 白井克典

目的・ねらい：オープニングで、参加者の緊張をほぐして、他者との触れ合いを深める。

考察

参加者に大いに緊張をほぐしてもらおうと行ったアイスブレイクであったが、次のプログラムのつながりを考えると、疲労をさせてしまうプログラム構成だったのかなと少し反省している。参加者の層に合った内容を考慮したほうが良かったかもしれない。しかし、内容としては満足のいくものになったと思う。

#### ◎竹細工

担当者 佐間野昌資

目的・ねらい：家族で協力して次のプログラムである野外炊飯に使う食器を作り、野外炊飯への意欲を高める。また、その活動を通して家族間の交流を図る。

考察

竹細工時の安全面の徹底については、①利き手ではない方の手に軍手を二重にはめる。②スタッフがいない場所では、なた、のこぎりを使用しない。（絶対にスタッフ立ち会いのもので作業をすること）の2点を指示した。また、ケガをした時に対応できるように救急用の場所を作った。今回は、打ち身の軽いケガが1件発生したがすぐ対処ができた。

また、プレゼント作りに竹細工用の竹が流用され、子どもが一人ケガをした。対策としては、竹の使用の禁止や安全面を徹底させるなどが必要であった。

#### ◎一日目野外炊飯

担当者 杉山雅幸

目的・ねらい：子どもの力を親に見せつけるために子どもメインで作り食べる。

考察

みんなが集まって初めて一緒に食べる食事。参加者・スタッフ合わせて50人以上の人たちの食事を用意する。参加者の実態から何を作ることができるか、どのように作っていくか、そしてそこで何をしなければならないのか。これらを総合的に練り上げ、企画しなければならなかった。企画ができたなら、次は分量の計算。どれぐらいで人数に見合う量なのか、食料はもちろんのこと物品を忘れてはならない。

作った料理には、子どもの努力の跡が染み出ている。焦げたハンバーグもあり、なかなかの出来映えであった。雨天の為、屋内で食べた分、落ち着かないところもあった。とても残念に思えるが、なんとなくキャンプらしい雰囲気が漂っていた。

一番反省すべきは、責任者の私がその時間その場にいないかったことである。イメージはできていたが、伝えることができなかった。

### ◎キャンドルサービス 担当者 小黒あかり 清水美香

目的・ねらい：家族間の親睦を深める。

#### 考察

家族の出し物が予想以上におもしろかった。どの家族も親子で少し緊張しながらも仲良く発表する様子は、見ていて本当に楽しかった。

外の音楽堂で行うつもりで午前中に準備していたが、突然の雨…。ショックだったが、体育館の中でどのように行うか急遽考え、スタッフに手伝ってもらい対応することができた。倉庫にあった畳で作ったミニ舞台も家族発表をより立てることができて良かった。臨機応変に対応できたことは良かったが、体育館の中でのろうそくの立て方や舞台のライトアップの仕方など、もっと考えておくべきだった。

スタッフの出し物“小さな約束”の練習やキャンドルサービス時のスタッフの動きをキャンプ前に確認しておくべきだった。

### ◎早朝虫取り 担当者 西澤俊輔

目的・ねらい：夜の昆虫たちを観察しよう。普段見ることのできない昆虫を捕まえて、新たな発見、驚きを体験しよう。ぜひ父親達にも参加してもらおう。

#### 考察

早朝虫捕りの反省として、雨対策が挙げられる。この当然の事柄が考慮されていなかった。これは、内容がしっかり煮詰められていなかった現れだと思う。そのため、夜の計画はただ中止となっただけだった。朝出かけてみたものの、やはり昆虫は捕まえることはできず、子どもの中からもつまらないという声が聞こえていた。参加者が納得できていない中途半端なプログラムになってしまった。それから、私自身がしっかり教材研究ができていなかった。昆虫についてだけではなく、植物についても、名前や種類が分かるようにしておくべきだった。参加者の方に「これはなんていう植物なの？」と聞かれても分からないと答えるだけだった。これらを補うためにはもっとしっかり考えて、様々な事態に対応できるようにすることが必要だったのだと思う。

### ◎富士の塔登山 担当者 小島真知子

目的・ねらい：親子で楽しく会話をしながらハイキングをする

#### 考察

- ・全体的に打ち合わせ不足だった。
- ・下りの登山道入り口にスタッフを配置するべきだった。(迷った家族がいた。)
- ・地図の準備が不足だった。(コースの説明不足、みどころ情報など)
- ・ゲームの意味合いをはっきりすべきだった。
- ・安全面で参加者への情報が不足していた。

(緊急時はどうするか?…まむし対策、ささグニやうるしなど)

- ・電波が悪く、携帯電話が通じない所があった。
- ・山頂で休むスペースが少なかった。(ブルーシートが小さかった。)



### ◎自炊 A・B

担当者 宮川幸浩

目的・ねらい：A 食事しながら親交する。

B たくさん食べて一日のパワーを充電する。

#### 考察

自炊は、2・3家族を選んで調理してもらった。部屋のスペースとしても、8人から10人位がちょうど良かった。調理開始から食事終了までの時間は良かったが、就寝時間が遅くなってしまった事を考えると食事の時間を早めたほうが良いと思った。片づけはみんなが協力してやってくれて良かった。しかし、外に出て全員で食事を作るほうが良いのではないかと感じた。また、心配していた通り食事の量がまいちだった。予想してはいたが、ズレが生じてしまうため、ある程度仕方ないと思う。今回の事を参考にして、次回はもっと正確に準備できればよいと思う。

竹細工で作った箸を使うのはすばらしいと思った。自分の手で作った箸を使うということは、嬉しいものである。

キャンプの中の食事とは、とても楽しみで重要な役割であると思うし、もっともっと時間をかけて考えておけばよかったと反省した。来年担当になる人には、よく考えて欲しいと思う。

### ◎☆プレゼント作り☆

担当者 出沢綾子

目的・ねらい：親と子がお互いのためにプレゼントを作り、交換し合う。

#### 考察

普段あまりすることのない、親子でのプレゼント交換をあえてすることで、親子の新しい発見ができたと思う。

けが人を出してしまったことが残念だ。刃物を扱うときは軍手の着用を徹底することと、刃物の取り扱い方を詳しく説明することが必要であると思う。また、子供が刃物を扱っているときは必ずスタッフがそばについて見てあげることが必要だ。

参加者へのプログラム内容の説明が足りなくて、こちらが思っていることと参加者が思っていることが少しいち違っていたような気がする。

### ◎野外星座教室

担当者 鹿子木愛 梅田亜紀子

目的・ねらい：星に感動してもらいたい。

#### 考察

残念ながら、当日は雨だった。本来なら流れ星がたくさん見えたはずなのに……。雨天案が事前に計画できていなかった為、当日のプレゼント作りを抜け出して考えることになってしまった。大まかな流れだけを決めて、本番は全てアドリブ。星が見えない所で星座教室をするなんて無謀なことだと思うけど、そんな状況でも参加者に楽しんでもらえるように努力した。今回は幼児から大人までというように、参加者の年齢層が幅広かった為、全ての人に楽しんでもらえるようなプログラムにすることが一番難しかった。

## ◎野宿

担当者 小林則雄

目的・ねらい：野宿を通して自然の大きさ、美しさを体験する。

### 考察

練成センターのグラウンドであることから、小雨決行を決めていた。雨に濡れてもいい、またそれも楽しいという体験を味わってもらおうと計画した。

しかし、天候が不安定であり且つ施設の使い勝手に不安があったことから中止とした。

参加者が一番残念だった企画のようである。「野宿」という言葉に、多くの憧れがあるかもしれないし、DNA のどこかが騒ぐかもしれない。野原で寝ることは、決して楽でも快適でもない。しかし、なにか不思議な安堵感と不安感があって充実感を味わうことができる。次回ではぜひ体験できる体制を作りたい。

## ◎プレゼント交換・ふりかえり 担当者 小島真知子

目的・ねらい：①キャンプの想いでを親子でふりかえり、一つの絵にまとめる。

②キャンプ中のお父さん、お母さん(子ども)の姿やこれからについて、お父さん、お母さん、子どもへの手紙を書き、プレゼントと一緒に渡す。

### 考察

- ・一枚の絵は、書きっぱなしでよかったか？
- ・スタッフの動きが曖昧であった。(参加者のことをもう少し考えるべきだった。)
- ・プレゼントをなくしてしまった子の対応が不足していた。
- ・ふりかえりの意味合いがコンセプトに即していたか？

(監修 学校教育専修 1年 那須良寛)

## 4. おわりに

私は、初めに述べたように授業でキャンプをした経験はあるが、それらは既に組織ができており、その元で動くのみであった。一方ここでは、何もない所から考え、立ち上げなければならぬため、まず何から始めてよいものか分からない不安と共に、自分達で考えて何でも出来るという期待も感じていた。しかし、話し合いに人は集まらなかったり、リーダーとして話し合いをうまくまとめることができず、時間を無駄に過ごしていたように思う。本番から逆算して、「今しなければいけないことは何なのか」、を常に考えることが重要であると感じた。どれだけ本番を見通し、シミュレーションして考えることができるかが、企画する上でのポイントとなる。また、宿泊を伴う活動であるため、「参加者の命を預かっている。」という意識がもち、安全面には十分注意する必要があることを痛感した。

今回の親子キャンプの実践は、子ども同士・学生と一緒に遊んだり、親同士・学生との交流があったり、親子の中で新たな発見があったり、家族のあり方を見つめ直すきっかけになったと考える。「子どもの社会力が低下している」と言われる今日、このような機会がどんどん必要になってくる。今年から週休二日制が完全に実施され、ますます学校、家庭、地域の連携が重要となる。今後はこちらが完全に提供するのではなく、家庭、地域と一緒に考えて、一つの活動を作り上げていければと思う。

(地域スポーツ専攻 3年 小島真知子)



## 6 プラザ お出かけY O U遊広場

### 1. 今年度の活動内容

今年度の活動は、主に、毎月第二土曜に開かれる湯谷小学校の「子どもランド」に参加したことだ。「子どもランド」は、湯谷小学校に通う子どもの父兄の方が中心となって活動している。体育館で自由に遊んだり、家庭科室でうどんやそばを作ったりした。夏休みには、みんなでキャンプに行ったりもした。この「子どもランド」には、長野県短期大学の人も参加しており、子どもたちと一緒に活動した。

また、このY O U遊広場の4 プラザと一緒にキャンパスプレーパークで「遊ぼうパン」と題して「子どもランド」の子どもたちと一緒にパン焼きをした。

他にも、南長池診療所の「健康まつり」にスタッフとして参加し、「健康まつり」に来てくれた子どもや、お年寄りと一緒に折紙を折ったり、輪投げをした。

今年度は、3 プラザと一緒に「Y O U遊フェスティバル」というものを年度末に行った。これは、今までY O U遊広場に関わってくてくれた子どもたちや、信州大学教育学部周辺の小学校に通っている子どもたちをキャンパス内に呼んで、大学生と一緒に遊べる活動にした。詳しいことは、「Y O U遊フェスティバル」のページを読んでもらいたい。

この6 プラザは、個人的な活動もある。中学校に行って自分の得意なスポーツを教えたり、児童館に行って子どもたちと一緒に遊んだりもした。

(社会科学教育専攻 3 年 梅田亜紀子)

### 2. 今年度の反省と考察

#### 自ら求め、見つけた道

この1年間Y O U遊広場でたくさんの活動をしてきたが、それはたくさんのスタッフとともにいった活動であり、当然自分ひとりに責任がのしかかるわけではなかった。部活動のコーチをやろうと思ったのは、自分の特技を十分に生かせる、そして1対たくさんの生徒という、広場では経験できない状況で自分を磨けると思ったからである。

中学生との関係作りはその日限りでできるようなものではない。警戒心を持つようになっているため、いつもと違う異物が入り込んできたような印象をもつような反応をしてくる。私が初めて行った日は、生徒から話し掛けてくれるということはなく、たくさんの部員がいるのに孤独さを感じる程であった。

しかし、生徒たちとの関係が作れたころには顧問の先生とも話しが弾み、現場の話などなかなか大学では聞くことのできない貴重な話をしていただいた。大学生がこのような地域に入り込んでいくことがもっと容易にできれば、地域の教育力も向上するだろう。

「何かやりたい」この気持ちだけで始めたこの活動は、自分の中で責任を持たせるとともに、大きな力となっていると1年間続けた命は実感している。総合的な学習の時間のねらいには、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。」とある。私たち大学生も自ら学びを求めていかなければそこに成長はないだろうとこの活動を通して学ぶことができた。

(社会科学教育専攻 3 年 町田竜太)

## 私と子どもの接し方

私は、お出かけプラザに所属していました。その中の活動の一つである湯谷小学校の子どもランドに月に一度参加しました。ここでは、湯谷小学校の体育館の中で子どもたちと自由に遊んでました。

私がこの活動を通して考えたことは、私なりの子どもとの接し方とはどのようなものだろうかということでした。私はこの活動を始めた頃は、子どもを叱ることができませんでした。そういうことはしてはだめだよと思っても、子どもに嫌われるのがすごく怖くて口にすることができませんでした。この状態が続いた時、ふと私は、どうしてこの活動を始めたのだろうかということを思い出しました。社会背景や文化、時代によって変わってきていると言われている子どもたちの実態を、ほんの一つまみだが自分の体で触れ合ってみようと思って活動に参加し始めたのに、この時の私は、完全に子どもに振り回されていたように思われます。私らしさというものが出ていませんでした。子ども色に染まることは素晴らしいことだと思います。でもそれと同じくらいに子どもたちを私色に染めてしまうことも大切なことではないかと思い始めました。無理に私色に染めることはいけません。自然と付き合っていくうちに気づいたら子どもたちが染まっていたら、私にとってこんな嬉しいことはないと思います。

そのように思い始めてから、私は少しずつではありますが子どもとの接し方を変えています。変えたことでまた違った問題が出てくるとは思いますが、それはそのときにまた考えていこうと思っています。これからも私はこの活動を続けていこうと思っています。

(教育実践科学専攻 2年 山本公三)

## 子どもとふれあい得たもの

私は、お出かけ広場で湯谷小学校の子どもランドに参加させていただきました。教育学部に籍を置きながら、去年は子どもと触れ合う機会がほとんどなかったため自主的に参加したいと思いました。

しかし、今まで大学で講義を受けたり、話し合いをしてはいますが、実際に子どもと触れ合うことのなかった私が、いざ子どもランドに参加する前日になると、どう子どもと遊んだらいいのか、どう接したらいいのかと、かなり不安になりました。

次の日、そんな不安はすっかり消えました。子どもたちの予想以上の元気さについていくだけで必死でした。子どもたちは慣れているのか、私たちをあっさり迎え入れてくれ、喜んで遊ぶ仲間に入れてくれました。そのうちに、子供達なりに様々な遊びに様々なルールがあることに気づきました。最近では子どもたちが複雑になっていて、いろいろな問題が起きているとよく耳にしますが、そんなことをまったく感じさせない素直でいい子ばかりでした。

私は人間が大好きで、教員になろうと思いました。子どもたちと接していると、つくづくそう思います。

(教育実践科学専攻 2年 原耕平)



開会式で三陽  
中学校アスバント  
部が生演奏!!



とっても  
上手♡

かなげで何が取れるの



折り紙を  
やってまーす!!  
42カシィ!!!

くるみ  
がみ  
たの  
い  
が  
ら  
よ  
は



ハロウに入れる  
くるみをわってまーす。  
みんな、上手にわれた  
かな?

ハロウ生土世を竹に  
まきつけて、みんなでハロウ  
を焚こう!! あんまり火  
に近づけると、真っ  
黒になるから気を  
付けてね。



おしんくしるかな?

IV. 第1回YOU遊フェスティバルの実践記録

## YOU遊フェスティバル本部

### 1. 講座一覧

	No.	講座名	キャプテン	参加者数	対象	使用教室
午前	1	ブレパリッ!?ウイナー!	西 絢平 (実践2年)	19人	年齢制限なし	生協
	2	ハッピークリスマスツリー	岡部桂子 (実践3年)	17人	小1~小6	W505
	3	つくってとばそう!! ふんわりフリスビー	土田みどり (社会3年)	13人	年齢制限なし	N104
	4	ザ しめなわ 講師: 大内清 (JA ながの) 林部信造 (農家)	白井克典 (社会3年)	5人	小1~一般	N103
	5	のりさんのミニミニ子育て談議	小林則雄 (地スポ3年)	10人	一般	泉1号
午後	6	ポストカードを作ろう!!	原山美樹 (生活2年)	7人	小1~小6	センター 103
	7	ピョンピョンとぼう!! なわとびキッズ	小島真知子 (地スポ3年) 片瀬亜希子 (地スポ3年)	24人	小1~小4	体育館
	8	ガムでけしゴムを作ろう!!	角 直子 (実践3年)	16人	小1~小6	N302
	9	ほんとに聞こえる?! かんたん手づくりラジオ	井上将宏 (生活3年)	10人	小5~一般	W506
終日	10	ぺったんぺったんおもちつき!!	鹿子木愛 (実践3年)	11人	小1~小6	N102
	11	そばうち 講師: 竹元清春 (牟礼ふるさと振興公社)	西澤俊輔 (理数3年) 増田美和 (障害児2年)	11月24日(土)に終了しました		





## 2. YOU遊フェスティバル 前日・当日日程表

### ★前日の流れ★

時間	主な動き	場所
9:00～16:30	cooking 隊による朝食準備	センター等
16:00～	キャンパス内清掃	大学各所
16:30～16:50	全体会	体育館
17:00～17:50	午 前 の 講 座 準 備 (午後のみの方はテント張り、受付セッティング)	各会場
18:00～18:50	午 後 の 講 座 準 備 (午前のみの方は会場設営)	各会場
19:00～19:15	最終全体会	体育館
19:15	解散	

### ★当日の流れ★

	時間	主な動き	場所
午前	7:00	cooking 隊による朝食準備	センター等
	7:30	集合	体育館
	7:30～8:00	全体会	体育館
	8:10	当日の仕事配置、開始 (駐車場係は、8:00 から)	仕事各所
	8:20～8:40	受付	体育館前
	8:45～9:00	開会式	体育館
	9:00～11:10	午前・終日の講座開始 (移動時間含む)	各会場
	11:15～11:30	閉会式	体育館
	11:30～11:45	見送り	正門等
	11:45～12:45	お昼タイム兼午後の講座準備	各会場
午後	12:45	当日の仕事配置・開始	仕事各所
	13:00～13:15	受付	体育館前
	13:20～13:35	開会式	体育館
	13:35～15:45	午後の講座開始 (移動時間含む)	各会場
	15:50～16:10	閉会式	体育館
	16:10～16:30	見送り	正門等
	16:30～17:00	午前の講座片付け (午後のみの方は、会場片付け)	各会場
	17:00～17:30	午後の講座片付け (午前のみの方は、会場片付け)	各会場
	17:30～18:00	茶話会の受付開始	生協
	18:00～19:30	茶話会	生協
	19:30	解散	

キャプテンは子どもたちの安全に留意するのはもちろんですが、何か緊急事態が生じたときは、必ず本部に連絡するようにして下さい。本部に人がいない時は、本部役員に連絡をして速やかに対応をお願いします。小さな怪我も子どもにとっては大きな事件かもしれません。できる限りの対応をしましょう。

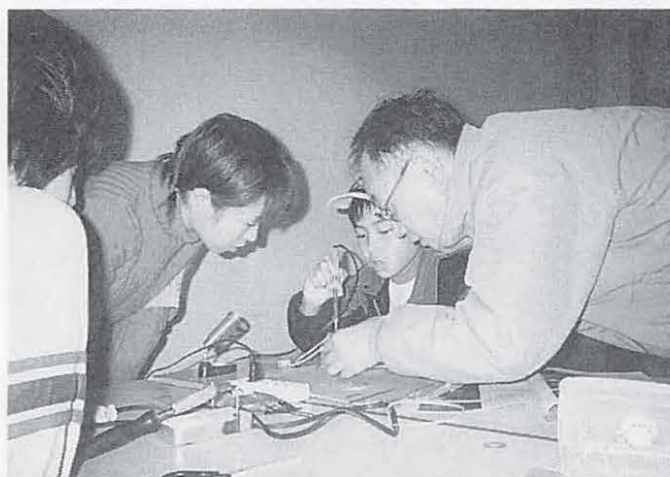




### 3. 当日までの流れ

	キャプテン・講座	本部
6月		7日——第1回話し合い 13日——第2回話し合い 18日——第3回話し合い
7月		6日——第4回話し合い 27日——運営メンバー第1回話し合い 30日——運営メンバー第2回話し合い 10月以降の流れ決め 31日——運営メンバー第3回話し合い
8月		1日——第5回話し合い 7日——第6回話し合い 8日——第7回話し合い
10月	23日——キャプテンが集合し、講座 についての説明を行う 31日——講座企画案締め切り	9日——日程及び本部役員決め 10日——「YOU遊フェスティバル」名称 決定 17日——講座募集のビラを学部学生に配る 18日——YOUプラ定例会で講座募集 全教官にも講座募集
11月	5日——第1回キャプテン定例会 8日——備品一覧表提出締め切り  21日——第1回YOU遊フェスティ バル定例会 26日——キャプテン定例会 29日——第2回YOU遊フェスティ バル定例会	8日——講座スタッフ募集開始 9日——教育参加で1年生スタッフ募集 14日——スタッフ不足のため再度スタッフ 募集 15日——附属長野小・中学校へ案内 16日——スタッフ募集締め切り YOUプラ参加者へ案内を発送 19日～26日——参加者募集期間 28日——加茂・後町・鍋屋田・山王小学校 へ案内を配布 29日——第1弾募集の参加者へ「ゆうゆう パスポート」を発送 30日——報道各社へ案内を発送

12 月	3 日——キャプテン定例会 6 日——YOU遊フェスティバル定例会 7 日——前日準備（cooking 隊、会場準備など）	3 日——全教官へYOUフェス開催のお知らせを配布 6 日——「ビバ★フェス」製本 「おうちでチャレンジ」製本 7 日——参加者アンケート準備 前日準備（開閉会式場の準備など）
	<div>第 1 回 信大YOU遊フェスティバル</div>	
		12 日——お礼状発送 20 日——反省会、備品庫掃除 25 日——会計報告





#### 4. 係長の感想

##### (1)会場

会場の仕事は本番前日までがメインである。主な内容は、開閉会式の会場の飾り作り、看板作り、各講座の部屋の飾りつけ、案内板作りなどである。

今回に限らず、体育館のような広い場所を飾ろうとするとき、どんなもので飾るにしても大量に必要な。それを作る材料も必然的に大量に必要なのである。しかし、それだけ用意する費用はそんなにはないのである。そこで今回は、新聞の中に入ってくる広告を使うことにした。これだったらいくらでも集められるし、いろいろな色が使われているため、下手な上質紙を使うより派手で、きれいなものが出来上がる。看板の文字は、広告を切り貼りしたものだし、アイデアと実行力さえあればお金を使わなくてもそれなり以上のものですら作り出せるのである。

今回もう一つ力を入れたのは、案内板である。特にトイレは可愛くできていて、作ってくれた人のセンスが光っていた。色画用紙を使ってウサギを作ったり、男の子、女の子の形を作ったりと子どもだけではなく、大学の先生方にも大うけである。そしてそれを張るときに気をつけたのは高さである。誰に見てもらいたいのか、誰のための案内なのかということを考えれば必然的にどのあたりに張るのか分かってくるだろう。

当日の仕事は集まった子どもたちが、開会式が始まるまで飽きないようにすることだ。体育館の中でやるので十分なスペースはあるのだが、どんなことをやるかもめた。子どもたちが本当に楽しめるように、学生がいろいろな出し物をするようになった。子どもたちが、暇つぶしとはいえ楽しそうに遊んでいたので良かったと思う。

(理数科学教育専攻 3年 西澤俊輔)

##### (2)駐車場・案内係りの長をしてみても

YOU遊フェスティバルの駐車場・案内の仕事は、子どもたちや親を大学の各門から受付のある体育館前まで、一緒についていってあげて受付係りに渡すことと、車でこられた方を駐車場に案内し、駐車場整備をすることである。

私はこの仕事の長をさせてもらって悩んだことは、どうやって係りの人に決まったことを連絡していけばスムーズに伝わるかということだ。各学年に係りはいて、しかも週一回ある定例会にすべての人が集まるわけではない。来られない人への連絡の仕方として、私はプリントを作って、来ている人の中で知り合いの人に渡してもらうことを考え、行ってみた。

そのときにぶつかった問題は、自分の考えを文章にする難しさだ。私にとって当たり前のことでも相手にとってはそうではないかもしれない。だから、これは書かなくてもわかるだろうと思っても書かなくては相手に伝わらないことを感じた。

当日仕事をしていて感じたことは、私が思っていた様子とは少し違った形でみんなが仕事をしていてくれたことだ。私の作った仕事マニュアルをそれぞれの価値観で捉え、仕事していたように思える。これはこれで良いことだと思うが、長としてはもう少し自分の考えをはっきりみんなに伝えなければならなかったと感じた。それと同時に相手の考えをうまく取り入れていかなければ、長は任せられないだろう。また全体を見るためにはあらゆるトラブルに対処できなければならない。その点が今回の私には欠けていたことだった。

(教育実践科学専攻 2年 山本公三)

### (3) 受付の長を経験して

まず、受付の長は準備段階として受付係りを担当している人で集まり、仕事の概要を説明する前に、受付のマニュアルを用意しておく必要がある。そして、その説明会のときにまず誰がどの講座の受付の係りにあたっているのかを確認しながら、概要を説明していく。また、受付係全員が最後に集まる日までに、参加者に参加費をもらったときに渡す領収書と名札を用意しておき、担当する講座の参加者の名前を書き込んでおいてもらう。また、当日までに、参加者名簿と現金を入れる封筒、筆記用具、余分に領収書と名札、受付の机の前に貼る看板（紙を使えばよい）を用意しておく。当日は受付の場所を確認し、机に必要なものを並べ、待機しておく。お金を扱っていることを十分注意しながら、笑顔を絶やさずに受け付けの仕事をやるようにする。これがだいたいの受付の本番までの流れである。本番が一番忙しい係りだが、準備段階では一番楽な係りである。私自身受付の長をやる事は当然初めてで、どのようにやるべきなのかも全然わからず、長にもかかわらず他の3年生の人を頼り、聞いてばかりだった。まず、もっと時間をさいて、自分で考えていく必要があったと思う。とにかく私は全体の把握がなかった。当日はたばたしていたのもあるが、小さい子に名札をつけてあげることを忘れて、シールの裏のゴミをそこらへんに捨ててしまうことになったり、連絡が係りの人に上手く伝わってはず、参加者を少し待たせてしまったり。大きなトラブルはなかったが、細かいところまで注意が行き届いておらず、その場その場で対処の仕方を考えるしまつだった。名札を名簿順に並べておいて、もっとスムーズに受け付けができるようにするなど、どんなことが起こるだろうかと様々なことを想定して準備しておく必要があると感じた。

(理数科学教育専攻 2年 岩脇悟子)





## 5. YOU遊フェスティバル参加者アンケート

YOU遊フェスティバルの参加者にアンケートを配布し、その結果からこれからのYOU遊広場のあり方や、今回のようなイベント的なフェスティバルをこれからどのように実施していくべきなのか考えていきたい。

### (1)参加者アンケートの内容

I. あなた（参加者）について教えてください。

☆年齢（ ）才

☆性別 ①女 ②男

☆所属 ①幼稚園・保育園（入園前のお子様も含む） ②小学校 1～3 年

③小学校 4～6 年 ④中学校 ⑤高校 ⑥大学 ⑦一般

II. お子様は土曜日は普段どのようなことをされていますか？

III. 参加費はどれくらいまで出せますか？ \_\_\_\_\_ 円くらい

IV. 今回の参加費は？

①高い ②普通 ③安い

V. 今回終日の講座がありましたが、終日でなければ参加できたなど、時間的な問題はありましたか？

VI. 地域等の活動で、YOU遊フェスティバルのようなものがありましたか？

①ある ②ない

VII. ①ある と答えた方にお聞きします。それはどんな活動でしたか？

VIII. 私たち大学生、信大YOU遊プラザに何を望んでいますか？

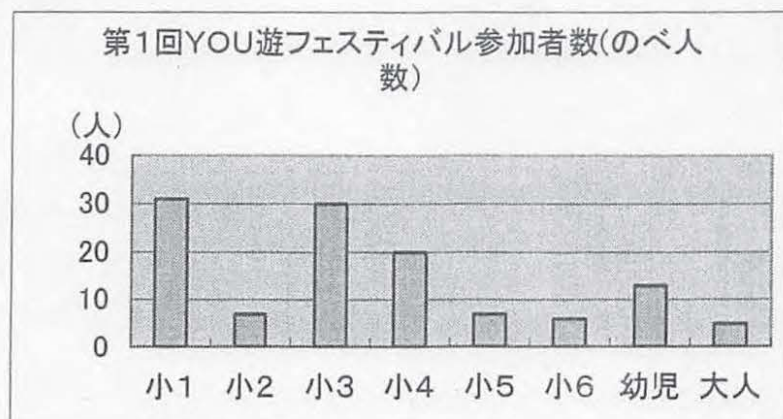
IX. 来年度から完全週5日制がスタートしますが、土曜日は忙しくなりますか？

親 ①忙しい ②前と変わらない ③暇になる

子 ①忙しい ②前と変わらない ③暇になる

### (2)アンケート結果(回答数 16)

I. 参加者について



II. 土曜日の過ごし方

・ TVゲーム

- ・ 友達と遊ぶ
- ・ Y O U遊広場プレーパークで遊ぶ
- ・ 習い事、工作、料理等
- ・ 家族と一緒に活動
- ・ パソコン
- ・ 各種イベントに参加

### Ⅲ. 参加費について

- ① 500 円から 1000 円 6 人
- ② 1000 円から 2000 円 7 人
- ③ 2000 円以上 1 人
- ④ いくらでもよい 2 人

### Ⅳ. 今回の参加費について

- ① 高い 0 人
- ② 普通 11 人
- ③ 安い 3 人

### Ⅴ. 参加するに当たっての時間的問題

- ・ 習い事があるため 1 日参加できない
- ・ 8:20 受付が早すぎる
- ・ 午前、午後に分けたのはよい
- ・ 12 月は時期的に忙しい

### Ⅵ. Ⅶ. 地域での活動など

- ・ 育成会でのイベント
- ・ 牟礼の森の学校
- ・ 青年会議所の花火の講座
- ・ 生協の各種イベント
- ・ 博物館のイベント

### Ⅷ. Y O U遊広場に何を望むか

- ・ 人とかかわり方や遊び方
- ・ 親、先生以外の年上の人との関係作り
- ・ 子どもの気持ちを考える学生
- ・ 一人では出来ない遊び仲間と協力しなければ出来ないような遊びを企画してもらいたい
- ・ 学生の出張講座
- ・ フェスティバルのようなものを定期的にやってもらいたい
- ・ 地域の教育力の活性化
- ・ 小中高大縦の交流
- ・ 折り紙の講座

### Ⅸ. 来年度からの完全週 5 日制スタートにあたり、土曜日の状況

- |   |          |               |           |
|---|----------|---------------|-----------|
| 親 | ①忙しい 4 人 | ②前と変わらない 10 人 | ③暇になる 0 人 |
| 子 | ①忙しい 0 人 | ②前と変わらない 6 人  | ③暇になる 8 人 |



### (3) アンケート結果からの考察

まず参加者の年齢であるが、このフェスティバルだけではなく、YOU遊広場全体を通して低学年中心で、小学校5年生より上の学年になると極端に参加人数が減ってくる。その原因は、プラザが高学年対象の企画をあまり考えないからではないかと考えられる。今回のフェスティバルでも10出された講座のうち高学年を対象としたものは1つしかない。もちろん年齢に制限のない講座も多数あったが、どちらかといえば低学年向きであったといえる。

キャプテンが小学校1年生から6年生まで一緒に出来る活動を企画するのはとても難しいことである。実際に現場でも全校で同じ活動に取り組むということは少ないであろう。しかし、このままの状況では今来てくれている子どもたちが高学年になったときにこの活動に興味を持てず、参加してこなくなるということは予想できる。どこまでを対象とするかという問題もあるが、低学年だけが来るような活動では、この活動のよさが半減してしまうだろう。普段教室で同じ学年の子と生活しているのとはまた異なり、プラザに来ることによって自分の学年の上も下もいるような状況が望ましいと私は考える。そうなることによって普段経験できないような経験や遊びが生まれてくるのではないだろうか。土曜日の過ごし方を見ても、個人で何かをすることが多い。プラザにはたくさんの人とかかわりながらその中で子どもたちが自分で社会性を高めていける場を保護者は望んでいるということがアンケートから読み取れた。

また、参加費については、今回のフェスティバルでは参加者から「高い」の声は聞かなかったが、今回の額が適当だと感じた方が多かったようだ。実際にキャプテンや本部ではお金がなくて節約することが大変であったがこの額で何とかやりくりすることが出来た。しかし、教材研究を計画的に行った講座と、そうでない講座とでかなり金額に差が出た。学級を持てば学級費というものを集めたりして計画的に利用していくと思うが、今回予算オーバーしてしまった講座は勉強になったのではないだろうか。見通しを立て、その中で活動することは重要なことである。参加者も今回の参加費が妥当なところであると感じているのだからこれ以上の贅沢はむしろ自分たちの為にならないといえる。

地域でこのような活動があるかという質問に対して、私は夏に青年会議所主催の「地域共生シンポジウム」に参加したが、そこでは子どもたちと全部で5回の活動を通して自分だけの花火を作ろうという企画をしていた。このような動きはたくさんの団体が始めているようで、今やこのフェスティバルも珍しいものではない。完全週5日制の実施に当たり、地域でも休みになる土曜日の使い方について試行錯誤している状況であると思うが、YOU遊広場では、イベントではなく年間を通した継続した活動をしてきた。今回のフェスティバルも初めて会う子どもたちだけでなく、1年間関わってきた子どもたちが中心である。このような活動をより日常的なものにしていくことで、地域の教育力が向上し、主催者側と参加者側でしだいに連携が生まれていくのではないだろうか。4月から暇になる子どもたちの興味を引きつけ、多少忙しい中でも子どもの活動に参加していけるようなものを目指していけたらと思う。

フェスティバルに参加してくださり、アンケートに答えてくださった方に感謝し、来年度のこのような活動に生かしていきたいと思う。 (社会科学教育専攻 3年 町田竜太)

## 6. Y O U遊フェスティバルスタッフアンケート

### (1)アンケート結果(回答数 24)

#### I. 定例会について

- ・ わずかな時間の中で定例会として機能していなかった
- ・ 出欠をとった方がよい
- ・ じっくり時間をとるために、別の日に変えてもよかった

#### II. Y O U遊フェスティバル全体について

- ・ 1回きりには1回きりの良さがある
- ・ 多くの講座があるので普段のY O Uプラに比べてスタッフの意識の差が少なかった
- ・ 開閉会式の進め方に改善の余地あり
- ・ 子ども募集、宣伝をもっと早めにやるべき
- ・ 本格的に動き出すのが遅かった
- ・ 雑用をもっと多くの人にやらせるべき
- ・ 時間的なゆとりが欲しかった
- ・ 講座の会場が離れすぎていた
- ・ 子どもが活動中の父母の方への対応を考える必要がある
- ・ 一部の人しか活動していない。気軽に学部生みんなが参加できるようにするべき

### (2)アンケート結果からの考察

まず、定例会についてであるが、Y O U遊フェスティバルの定例会は、毎週木曜日 12:40 から行われていたY O U遊広場の定例会に合わせて、同じ日の 12:20 から行った。授業終了後わずか 10 分で開始ということもあり、定刻通りに開始するのが困難な状況であった。このような短時間の中で、そしてスタッフ全体が集まる定例会として、どのような内容を、どのような方法で行うのが重要であったと考える。内容としては、主に当日の係の打ち合わせやスタッフ全体への諸連絡などがあったが、その内容と方法を本部がもう少し細部まで考えておくことが必要であったと考えられる。子どもたちに伝える時と同様に、ただ口頭で伝えるだけではなく、資料を使って示すことで、情報をより確実にかつわかりやすく伝えることができたのではないかと思う。また、係ごとの話し合いなどの活動に移る際には、これからどのようなことをどのような方法で行うのかをはっきりとした形で示すことも大切であったと考える。時間に遅れてきたスタッフのためにも常に全体を見回して指示を出していくことも必要であった。

次に当日の開閉会式についてであるが、開閉会式の意義について考えていきたい。開閉会式はY O U遊広場のその他の活動と同様に、その活動にまとまりを持たせるためにも行われたが、Y O U遊フェスティバルの開閉会式はその他にも意味をもっていた。開会式は、子どもたちとスタッフの最初のアイスブレイクの場として、また講座紹介では、これからどんなことをするのか、子どもたちに興味をもって講座に参加して欲しいという願いで行われた。また、閉会式は講座の活動を通して作った作品や、行ったことを発表する場としての意味をもつ。発表を通して、講座で行ったことが子どもたち自身にとってより印象深いものになり、さらに他の講座ではどんなことをしたのかを知ることによって、新たな興味を広げることができると考えられる。その興味から実際に活動ができるように、各講座の内容(作り方、遊び方など)をまとめた「おうちでチャレンジ」を全参加者に配布した。



学校でもこのように自らが行ってきた活動を発信するということはとても大切であると考えられる。発表をすることで、自らが行ってきた活動をふりかえり、それらを相手によりわかりやすく伝えるためにはどうしたらよいのかを考える機会にもなる。また、相手に伝える中から何らかの反応を得ることで、自らの活動を認められたという意識を持つことができ、さらに意欲を持って活動ができるのではないかと思う。学校では子どもたち同士での学びが多いと考えられるが、その根本にあるものはやはり自らが学んだこと、知っていることを何らかの形で伝えることではないかと思う。

最後に1年生スタッフの参加についてであるが、YOU遊フェスティバルには18人の1年生が参加した。1年生スタッフの感想を見ると、最初は子どもたちと接することに対して緊張や戸惑いがあったようであるが、次第にそれぞれ自分なりの子どもたちとの接し方を見つけていったようである。1年次には教育学部の高年次生と共に活動することがないが、このような活動の中で、言葉では伝えきれない子どもたちとの関わりを感じ取っていくことができると考えられる。逆に、2年生以上のスタッフも、純粹に子どもたちと一緒にになって関わっていく1年生の姿から得るものがあるのではないかと思う。

1年生スタッフの参加の問題点としては事前の打ち合わせが難しい点が挙げられる。各講座のキャプテンがどのように考えるかによって1年生スタッフの参加の仕方は異なり、2年生以上のスタッフと同様に教材研究に参加していた講座や、当日に参加者と同様に活動に参加していた講座もあった。しかし、どのような形で参加したかという差はあったものの、子どもたちとの活動に対して、楽しさと同時に自らの課題を見つけていたのではないかと思う。そして1年生の時のこのような体験が来年以降につながっていくと考えられる。今後のYOU遊広場の活動の中でも、1年生に積極的にこのような場を提供していくことができればよいと思う。

(教育実践科学専攻 3年 清水美香)

## YOU遊フェスティバル 会計報告

備品会計係

\*各講座参加費(教材費)

講座名	参加者数	教材費	収入合計	支出	差し引き
ウイナー	19	900×19	17,100	24,095	-6,995
ツリー	17	400×17	6,800	3,982	2,818
フリスビー	13	100×13	1,300	315	985
しめなわ	5	100×5	500	315	185
もちつき	11	300×11	3,300	1,429	1,871
ポストカード	7	200×7	1,400	1,763	-363
なわとび	22	50×22	1,100	2,100	-1,000
けしゴム	16	250×15	3,750	4,238	-488
ラジオ	10	1,000×10	10,000	19,502	-9,502
子育て		0	0	0	0

講座参加費合計:45,250

講座支出合計:57,739

\*参加者保険代:100円×120人=12,000

\*当日保険費用:1,010

\*海沼正典先生より:3,000

\*備品代:7,696

\*茶話会費残金:8,800

\*交通費:3,941

**◎収入合計: ¥69,050**

**◎支出:69,050**

**◎差し引き合計:(収入合計)-(支出合計)=69,050-69,050=0**

# ハッピークリスマスツリー

## —子どもの発想を広げるクリスマスツリー作り—

岡部桂子 教育実践科学専攻 3年

### 1. 講座を開こうと思ったきっかけと講座の目的

自分の得意なことを生かして、子どもたちと一緒に活動したいという思いから、子どもたちと一緒にクリスマスツリーを作る講座を開くことに決めた。私は幼い頃から工作が好きだったので、クリスマスツリーもよく画用紙や布を使って作って飾っていた。街で見かけるクリスマスツリーとは違い、きれいではないが自分で考えて作り出したクリスマスツリーでクリスマスを祝うのはとてもうれしかった。子どもたちにもそのような喜びを経験してほしいと思う。夢中になって何かを作るという経験をするのと、自分で考え自分で作るということにこの講座の意味があるのだ。型が決まっていて、みんなで同じ形を作るのではおもしろくない。身近な材料から世界に一つしかない自分なりのクリスマスツリーを作り出すことがこの講座の目的である。

### 2. 講座の流れ

- ・スタッフの自己紹介 〈5分〉
- ・クリスマスツリーの由来の説明 〈5分〉
- ・スタッフの作ったツリーの紹介 〈5分〉
- ・クリスマスツリー作り 〈100分〉
- ・片付け 〈5分〉



### 3. 子どもたちの作ったツリー

子どもたちはツリー作りに夢中になっていた。私たちの試作のツリーを見せたが、初めからそれとは全く違う形のツリーを作り出す子もいれば、その形からどんどん発展させていって、自分なりのツリーを作る子もいた。どの子も人の模倣ではない、自分のアイデアを取り入れたツリーを作ることができていた。

#### 4年生の男の子の作ったツリー

太い薪とラップの芯を組み合わせ、70cm ほどもある大きなツリーを作った。芯と薪をつけるのに、ボンドやガムテープを使ってとれないように工夫していた。そのツリーに毛糸やモールを巻いて飾りをつけ、立てられるようにするためにダンボールで土台を作った。

#### 1年生の女の子の作ったツリー

周りの子どもたちとは全く違う形のツリーを作っていた。どんなツリーを作るのか聞いてみたが、できてからの楽しみだと教えてくれなかった。3本の木の枝を毛糸で束ね、それにギザギザに切れ込みをいれた緑の画用紙の葉っぱを一枚ずつつけていった。そしてそこに画用紙で作ったろうそくを飾っていた。スタッフが説明した、木にろうそくを飾ったというツリーの由来にちなんだもので、できあがると、「さっき教えてくれたろうそくのツリーだよ」と見せてくれた。さらに、これを立てるために、トイレットペーパーの芯をダンボールに貼り付け、花瓶のようなものを作っていた。



ツリー作りの時間は 85 分の予定だったが、ほとんどの子どもが作り終われなかった。途中で終わりにしたくはなかったので、作ったツリーを発表するための時間をあてて、片付けの時間をぎりぎりまで削り、そのままツリー作りを続けた。

#### 4. 考察

##### (1) 環境—クリスマスの雰囲気を出したことによる効果—

工作はイメージを膨らませてそれを形にしていくものなので、できるだけ工作をしやすくなるような環境を作ってあげたかった。今回はツリー作りなので、クリスマス間近のワクワクした気分を引き出すために、部屋に飾り付けをしたり、クリスマスソングをかけたたり、スタッフがサンタの服を着たりして、ムードを盛り上げる工夫をした。また、クリスマスツリーについて知ってもらうためにツリーの由来を調べて模造紙に書き、子どもたちに分かりやすく説明した。工作の材料は、子どもたちの発想が広がるようなものをたくさん用意しておいた。お金をかけていい材料を集めるよりも、あまりお金をかけずに身の回りにあるもので作れるように、身近にあるものを集めた。どの子どももツリー作りになると材料置き場から自分の気に入ったものを見つけ、すぐに作り始めていたので、これらの配慮は効果があったのではないかと思う。「家では作らないけど、ここだと作れる」と言う子どももいて、私たちの考える講座の目的は達成されていたことがうかがえる。

##### (2) スタッフの役割

この講座におけるスタッフの役目は、子どもたちの支援である。まず、ツリーを作るというのはどのような事であるのか実際にスタッフが試作してみた。それにより必要な道具がわかったり、大変な作業の方法を理解する事ができた。この試作のツリーは子どもたちに講座の始めに紹介したが、全く見本がないほうが子どものオリジナルの発想が出てよかったのかもしれない。しかし、今回はスタッフがいろいろな材料で作ったツリーは子どもに工作の可能性を伝え、発想を浮かびやすくする意味でとても役に立っていた。スタッフの作ったものを見て、参考にしてアレンジしたり、新たな作り方を開発したりしていた。この講座の参加者は低学年が多かったため、スタッフが手伝ってばかりで、自分で作ったという達成感を得られないのではないかと心配していたが、実際は自分で作るという意思が強く、アイデアすら教えてくれずに内緒で作る子もいた。スタッフの支援には二つのポイントがある。一つは、子どもがイメージしたものがどうしても形にできなかったり、作業の能率が悪かったりしたときに、そっとさりげなくアドバイスし、子どもが作業しやすいように手伝ってあげることである。どのスタッフもその場の状況をよくとらえ、適切に対処できていたように思う。そしてもう一つは、子どもの作ったツリーを見て、話を聞いてあげることである。作ったものを人から認めてもらうのはとてもうれしい。講座の間中、スタッフは常に子どもに語りかけ、子どもたちも笑顔でツリーの説明をしていた。

##### (3) 講座運営における反省点

時間配分を計画する段階で、子どもだから 85 分もあれば飽きるだろうし、十分作れるだろうと考えたのは間違いであった。子どもが夢中になって取り組めば、ツリーはどんどん展開していくので、私たちが作るよりもさらに時間がかかるものであることがわかった。もっと長く時間をとって、満足のいくまであせらず作り、部屋の片づけまでしっかりやるとよかった。また、大きなものを作った子どもが多く、どのように持ち帰ったらいいか困った。事前にそこまで考えて、箱などを用意しておくよかった。反省点もいろいろあ

るが、全員の子どもがそれぞれ自分の作ったツリーに満足して持って帰っていったので、よい講座であったといえるであろう。

## 5. 子ども達にとってのこの講座の意義

この講座で子どもたちがクリスマスツリーを作る姿から、子どもと大人の違いに気づく事ができた。子どもたちの素晴らしいところは、作りながら完成のイメージが發展していくところである。作っていくとどんどん新しい考えが浮かんできて、おもしろい形のものできていく。私たちの想像をはるかに越えたすばらしいものを作る子どもたちの無限の発想力にとっても驚かされた。大人は頭の中に一般的な基準ができていて、一度そのイメージを描いてしまったら、それが完成型となってしまふ。しかし、子どもたちの描くイメージには個性があり、さらにそれは完成型ではなく、どんどん進化していくことができる。大人がいくら考えても、子どもたちのバラエティーに富んだ発想にはかなわないのだ。発想力は、使わないとどんどん鈍ってしまうものなのかもしれない。私たちが育ってきた過程や今の子どもの生活を見ても、発想力を発揮する機会は少ない。学校の工作では、皆で決まった同じ物を作ることが多く、家では既成のおもちゃやゲームで遊ぶ。しかし、今の社会ではこの発想力と発想を形にする行動力こそが求められている。これらの力は工作以外でもあらゆる場面で活躍する。発想は目の前に立ちはだかった問題を解決する手段としても役立つ。自分で考え行動する、「生きる力」にもつながってくるのだ。もっとこのように子どもたちが発想を生かして物を作る活動をする機会を増やしたい。今回この講座に参加した子どもたちは自分の頭の中で思い描いているものを形にするという経験をした。失敗してもあきらめず、いろいろ試行錯誤しながら夢中で作った。このように自分で考え、物を作るという活動はとても面白いものだということを知ることができた。この魅力を知った事は子どもたちにとって、とても貴重なものになるだろう。この講座での楽しい思いを忘れず、これからも発想する事と、それを行動に移す事を続けていってもらいたい。そしてYOU遊プラザがそのような機会をもつための手段としてこれからも活用されればよい。

## 6. 私にとってのYOU遊広場

私がなぜYOU遊広場の活動をやっているかといえば、このような子どもたちと関わっている瞬間が私にとって、とても楽しいものだからである。子どもたちと遊んでいると、自分が夢中になっていることに気づく。子どもたちが目を輝かせてなにかに取り組む姿を見るのはとてもうれしいし、そのような状況をつくることができると、とても充実感を味わえる。また、YOU遊広場では子どもたちが遊びながら成長する場面をたくさん見ることができる。学びとは教室の机の上だけで行われるものではない。生活の中で日々子どもたちは学んでいるのだということを知ることができた。

将来教師になってもこのYOU遊広場での経験を生かし、今までの知識注入型の教育ではなく、子どもたちの本来の学びの姿に即した、生活や遊びの中からの自然な流れでの学びの方法を学校教育に取り入れてみたい。そしてその中で、子どもたちが夢中になって学びを追究していく姿が見られたらよいと思う。学校の授業においても、教師の授業の作り方次第では今回の講座で子どもたちが見せたような、目が輝く瞬間がみられると思う。そのような授業を作るのはとても難しいことだろうが、それでもこの喜びを忘れず、常に子どもの輝きを引き出すような授業を作っていく教師になりたい。



# つくってとばそう！ふんわりフリスビー

## —紙バックのリサイクル—

土田みどり 社会科学教育専攻 3年

### 1. 何をやろうか…

YOU遊フェスティバルが開催されると知った時から、何らかの形で携わりたいと思っていました。YOU遊フェスティバルの計画が持ち上がって、話し合いが始まってから、具体的に形になってくるまでに、教育実習をはさむことになりました。教育実習をはさんだことにより、私は、ぜひ講座を開きたいと考えるようになったのです。

教育実習では10回ほど授業を経験したのですが、何かが掴めそうで掴めないといった、自分の中では未消化のままで、教育実習が終わってしまいました。その部分を少しでも埋められればと思い、講座を企画して、子どもたちと時間を共有しようと思ったのです。

私が最初考えていた企画は、“白樺工芸”“竹細工”など、たくさんやりたいことがあって、何をやろうか非常に迷いました。そこで、私がどういう条件で企画を決めたかというところ、「①みんなで楽しめそうなもの ②誰でも作れそうな簡単なもの ③それぞれの個性が生かせそうなもの ④そのとき限りでなく、その後の生活でも生かせそうなもの ⑤今日の社会問題にかかわる社会的意味のあるもの」の五つを満たすものにしようと考えました。その結果、リサイクルの学習ということも含めて、紙バックを使ってつくるフリスビーの講座を出すことに決めたのです。

### 2. あわただしい一週間

講座を出すことに決めて、スタッフが集まり、子どもたちの数が確定したのが、YOU遊フェスティバルの約一週間前でした。この一週間、講座の準備に追われて、非常にあわただしく過ごすことになりました。

最初はあまり準備するものもないし、一週間もあれば十分だと高をくくっていたのですが、準備しているうちに、あれもやらなきゃ、これもやらなきゃということが出てきたりして、当日が近づくほど、時間の足りなさを嘆くようになりました。しかし、「こうした方が、子どもたちはもっと楽しめるんじゃないか」という、子どもたちのために講座をよりよくしようしたことによる忙しさであったので、苦痛より楽しさのほうが勝っていました。

この準備期間では、スタッフが全員で集まれる機会があまり取れなかったことが、私の心配の種でした。講座が成功するためには、スタッフが講座について共通理解を持って臨むことが重要だと思います。私たちの講座はあまり集まれなかったけれど、心を一つにして当日迎えることができたのではないかと思います。

何とか準備は間に合ったのですが、結局、睡眠時間ゼロで当日に臨むことになってしまいました。

### 3. 子どもたちとの出会い

当日を迎えました。その日一緒に午前のひとときを共有する子どもたちとの出会いは、

とてもドキドキしました。それは子どもたちも同じだったと思います。しかし、その緊張もすぐに解け、開会式から会場へ向かう途中は初対面とは思えないくらい打ち解けていました。

講座が始まって、自己紹介や紙パックのリサイクルに関するクイズをして、フリスビーを作り始めました。子どもたちはみんな夢中になって、フリスビー作りに取り組んでいました。

私は、子どもたちがそれぞれ自分の個性の光るフリスビーをつくることを大切にしたいと思っていました。私の願い通りに、子どもたちは個性的な姿をいっぱい見せてくれました。つくるスピードも、こだわりを見せる所も、関心を持つ所も、一人一人ですら違っており、改めて子どもたちは一人一人大きく違うんだということを実感させられました。その違いに対しては、ゲームの内容を大きく変更したりして臨機応変に対応し、子どもたちを縛り付けることなく、思いっきり楽しむことができました。フリスビーに描く絵にこだわり、作るのが遅れてしまった子も、何とか講座が終わるまでに完成させることができました、ほっとしました。

閉会式の成果を発表するときの、子どもたちの自分の作品を自信満々で飛ばしている姿に、みんな思うようなフリスビーが作れたんだということが伝わってきて、改めて、良い二時間だったなあと感じました。

自分の納得のいくフリスビーができ、楽しく遊べたので、閉会式がおわり、見送りする時には、子どもたちも、スタッフも、みんな笑顔でバイバイをすることができました。

#### 4. 講座を終えて

講座を終えて、楽しかったという思い、誰も怪我することなく無事に終えることができ、ほっとしたという思い、子どもたちと楽しく過ごした分おそってくる寂しい思いなど、さまざまな思いが交錯して、とても複雑でした。

子どもたちと、笑顔で、楽しい時間を共有できたのが一番良かった点だと思います。子どもたちの笑顔を見ると、とてもうれしくなります。さらに、子どもたちから「帰って、また作ってみよう」とか、「もっと遠くにとばせるように、家でやってみよう」といった声が聞かれたことがとてもうれしかったです。また、YOU遊フェスティバルが終わってから、「フリスビーが飛んだのを見て興味を持ったみたいで、帰ってから“おうちでチャレンジ”で作り方を見ながら、作って遊んでいた」という声を聞いて、改めて「やって良かった」と強く感じました。

講座を振り返ってみると、こうすればよかったという反省点は次から次へとあがってきます。反省点としては、教育実習中にも言われていて、講座の最中に「またやっちゃった」と思ったことがあります。それは、子どもたちの意識の高まりを生かせなかったということです。紙パックのリサイクルに関するクイズが始まったとき、子どもたちはフリスビーを作りたいという意識が高まっていました。それでも、クイズが三択であったり、紙芝居方式で進行していたこともあり、子どもたちはクイズに入っていました。しかし、クイズが子どもたちにとってはあまりに長かったようで、だんだんうずうずしてきているのが見て取れました。このように、子どもたちの作りたいという意識が高まっているのを、押さえつけてしまったのは、反省すべき点の一つです。私が、自分の尺度でクイズの量を設



定してしまったのでこのように、子どもたちを縛り付けることになってしまったのだと思います。もっと、参加する子どもたちの年齢層を考えて、子どもたちの立場にたって、計画を立てればよかったと思います。

ほかにも、細かくはさまざまな反省点はあるのですが、もう一つ、目立ったのがものさしの使い方についてです。フリスビーを作る過程で、ものさしを使って、測ったり、線を引いたりするところがありました。私は、子どもたちがものさしの使い方に戸惑っている姿を見て、「まだ、使い方を学校でやっていないんだ」ということに気づかされました。私は、自分がものさしを使えることが当たり前になっていたため、ものさしが使えるか、使えないかということに疑問をもつことがなくなっていたのだと思います。これは、自分が子どもたちの立場になって考えられる体になっていない証拠だと思います。結局、自分の尺度で考えてしまっていたのです。

この講座を終えて、「子どもの立場で考えよう」と、かなり意識していたのですが、結局、自分の立場から講座を考えていて、十分に子どもの目線に立つことができていなかったという点に気づかされました。これからは、自分にとっては当たり前のことも、常にこの子どもたちにとってはどうなんだろうと考えることが、自然にできるよう、意識していきたいと思います。

## 5. 最後に・・・

YOU遊フェスティバルで講座を出したことは、子どもたちと素敵な時間を共有できたこと、自分の課題を見つけられたことなど、様々な点で良い経験になりました。一つの講座をスタッフの仲間と協力して作り上げ、子どもたちの笑顔を見れたということに、大変満足しています。また、一つのことをやり遂げたということは、自分の中で自信につながったと思います。

このYOU遊フェスティバルから、子どもたちと過ごせることがいかに幸せか、みんなで協力することが良いものを作り上げるためにどんなに大切かを、経験を通して学ぶことができました。この経験は、これからの私の希望と勇気となることでしょう。

ありがとうございました。



# ガムでけしゴムをつくろう！！

## —世界で一つのけしゴム—

角直子 教育実践科学専攻 3年

### 1. 講座開講までの経緯

私は、一年生の頃から教育学部主催のYOU遊サタデーに興味を持ち、先輩が開く講座のスタッフとして参加していた。子どもと一緒に遊ぶことが大好きな私にとって、YOU遊サタデーは大学生である自分が子どもとかがかわることができる数少ない貴重な場だった。しかし三年になり、YOU遊サタデーがYOU遊広場へと生まれ変わってからは、参加するきっかけをつかめず、ときどき顔を出すだけの程度になってしまった。

三年の夏、教育実習を体験したことで“子どもたちとかがかわることができる場が欲しい”という強い思いが再び私の中に生まれた。秋になって、YOU遊広場の一日版「YOU遊フェスティバル」の講座募集を知った私は、悩んだ結果、思い切って参加することに決めたのだ。学生のうちに自分の力でどれだけやれるか試してみたい、そしてそんな機会は今しかないという気持ちが背中を押した。

とはいえ、自分で講座を立ち上げるなど初めての経験。“本当に自分が講座など開けるのか”という不安が日に日に大きくなっていくので、講座の内容を「けしゴム作り」に決めてからはけしゴムの作り方のことを考えることで頭をいっぱいにして、余計なことを考えないようにした。インターネットで手作りけしゴムの作り方を調べたところ、二つの方法が見つかった。そのうち、“ポリ塩化ビニル”などの化学物質を使って作る方法が面白そうだと思い、そのような化学物質が入手可能かどうかを理科専攻で化学専門の漆戸教授に相談した。すると、なんと材料のうちのある一つの化学物質が環境ホルモンに指定されていることが判明した。子どもの体に悪影響を及ぼす危険性があるので、即刻作り方を変更しなければならなくなった。ネットで調べたもう一つの手作りけしゴムの作り方、それこそ「ガムからけしゴムを作る」というものだった。よく口で噛んだガムを使うというところに少なからず抵抗を感じていたが、こうなればやるしかない。さっそく講座名を「ガムでけしゴムを作ろう」に変更し、教材研究が始まったのである。

その作り方は、①よく噛んだガムを、ビニール袋の中に入れる。②クレンザーと台所用洗剤を加えて、よくもんで混ぜる。③硬くなったら出して、板などの上でこねる。④形を整えて固まるまで置いておく、というとても簡単なものだった。とても単純な作り方だからきつとすぐにできるだろうと思い、さっそくスタッフを集めて作ってみた。ところが、思うように硬くならない。何度か教材研究を重ねたが、ビニール袋の中で気色の悪いアメーバ状になったガムにいくら希望を託しても、この先けしゴムらしいものになろうという気配は感じられない。すでに子どもたちからは多くの参加希望があり、参加する子どもの名簿も届いている。もうあと戻りはできない・・・どうしよう。切羽詰まった私はもう一度この作り方を載せているホームページを見直し、作り方をもう一度探し直すことにした。そしてついに「ガムでけしゴムを作る」新しい方法を発見したのである！！これだ！と思い、さっそくその日帰ってから一人で実際に作ってみた。出来上がったものは、これぞけ



しゴムとまでは言えないまでも、いままで作ってきたものよりは断然けしゴムに近い。もうこれでいくしかない、二日後最後の教材研究を行ったのである。

その作り方とは、チョークをヤスリで削って粉末にし、よく噛んだガムに混ぜて練るというこれまた簡単なもの。この方法なら、好きな色、好きな形のけしゴムを作ることが出来る！教材研究でもスタッフが動物や果物など楽しい形のけしゴムを作り、これなら来てくれた子どもたちも楽しめるに違いないぞ！明るい兆しが見えてきた。当日壁に貼るための作り方の説明やチョークを混ぜて新しい色を作る方法、注意事項を模造紙に書く作業、けしゴムに関するクイズを考える作業、プレゼント用のバッグ作りなどの作業をスタッフで手分けして行い、ついに当日を迎えた。

## 2. 講座本番！！

不安だったのは、一年生スタッフのことだった。三人が決まっていたが、結局事前に会うことはできなかったのだ。当日の昼、初めて顔を合わせた一年生スタッフに、講座の流れや役割についてすぐに把握できるよう、プリントを作って配った。

開会式が行われる体育館で、講座に参加してくれる子どもたちとご対面。「どんなガム持ってきた？」「ガムからけしゴムってどうやって作るの？早く教えてー！」「その看板僕が持ちたい！」そんな子どもたちの表情から今日の講座をとっても楽しみにしていてくれたことがよく伝わってきて、なんだかうれしい気持ちが胸にこみあげてきた。

式が終わるとさっそく会場であるN302へ15人の子どもと大移動。何とか会場に着き、床に敷いたビニルシートにあらかじめ貼り付けた名札の位置に座ってもらう。名札の通りに座ると、子ども2～3人とスタッフ一人のグループがいくつかできるようになっているのだ。一年生が多いだけあって、室内は元気な騒ぎ声であふれていた。何とか静かにさせて自己紹介を始めたが、人数が多すぎてだらだらとした時間になってしまった。子どもたちが退屈し始めたころ、けしゴムに関する三択クイズが始まる。正解だと思った番号カードの周りに集まるという形を採ったので、体を動かして子どもたちも楽しんでいた様子。答えに一喜一憂する子どもたちの様子がとてもかわいい。

いよいよ持ってきたガムを口に入れて、けしゴムの作り方の説明を聞く時間。ついさっきまで騒いでいたみんなが、私の説明を真剣な表情でじっと聞いている。急に静かになったので、私の方があがってしまった。

注意事項の説明も終え、ついにけしゴム作り開始！！五色のチョークはすべて紙皿の上に載せて前の方に並べておき、自由に持っていけるようにしておいた。小学一年生がうまく紙やすりでチョークを削ることができるだろうかと少し不安だったが、さすが説明をしつかり聞いていただけあって手際がいい。みんな一生懸命紙皿の上に好きな色のチョークを削っている。少し時間が経つと、何色か色を混ぜて新しい色を作ろうと、紙皿の中を何色ものチョーク粉でいっぱいになっている男の子も見受けられてきた。女の子ではやはり白チョークと赤チョークでピンクを作る子が目立つ。グループのスタッフの指示で、子どもたちは次々に口からガムを出してチョーク粉と練り合わせ始めた。練っていったら硬くなったら出来上がりなのだが、「これでもういい？」「うーん、もう少しがんばれ！」といった子どもとスタッフの会話があちこちで聞こえる。スタッフからOKをもらった子は、サイコロなどの形に整えている。私はグループを転々としながら子どもたちの様子を見て回っ



たのだが、どの子も服が汚れるのもおかまいなしでチョークまみれになりながらけしゴム作りに没頭していた。そんな作業の中、スタッフと子どもが楽しそうに会話する様子が印象的だった。子どもたちは学校での出来事や普段の遊びの話などを、笑顔でうなずきながら聞いてくれるスタッフにむかって嬉しそうに話していた。私たちスタッフにとっても、子どもたちとじかに接することはとても楽しかった。15人の子どもたちは実に個性豊かで、初め「板ガムなら3枚程度が目安」と言っておいたのだが、もっと大きいのが作りたい！となんと一気に10枚のガムを噛みだした子がいてびっくり。口から出して練ってみるがやはり大きすぎてチョーク粉が追いつかない。不満そうで何とかしてあげたかったが、すでに時間が迫っていた。「あと10分で閉会式だから、まだ完成していない人はがんばれ！」慌ただしく手を洗い、閉会式に急ぐ形になってしまった。

閉会式では、作ったけしゴムを入れるための手作りバッグをプレゼントした。予定では閉会式に向かう前に会場で今日の感想やどんなけしゴムを作ったのかを発表し合い、その時にバッグを手渡すはずだったのだが、時間が足りなくなりできなかった。おかげでどの子がどんなけしゴムを作ったのか、今日けしゴムを作ってみて何を感じたのか、知ることができなかった。15人の子どもたちと出会い、共に過ごした2時間はまさにあっという間であった。あの時一生懸命ガムを練っていたあの子は結局どんなけしゴムを作ったのかな、うまくできなくて泣きそうになっていたあの子はちゃんと作れたのかな、などと考えると、やはり最後にちゃんと気持ちの共有をし合いたかったなと強く思う。しかし、作業中の楽しい雰囲気や、閉会式で作ったけしゴムを入れたバッグを大事そうに持っている子どもたちの姿は今でも忘れられない。頑張ってよかった！！しみじみそう思った。

### 3. 振り返って

後の反省会では至らなかった部分が次々と挙がったが、それでも今回の講座に後悔は全くない。一つのことをやり遂げたという充実感が、これから生きていく上で大きな自信となっていこう。「講座を開こう」と決意した日から、やはり無理かもしれないと諦めかけたことが何度かあった。それでも頑張ってきたのは、参加してくれる子どもたちを楽しませてあげたいという強い思い、そして何よりスタッフや周りの人の応援があったからだ。お世話になった皆さん、本当にありがとうございました！！





# ほんとに聞こえる？簡単“てづくりラジオ”

井上将宏 生活科学教育専攻 3年

## 1. 講座設定の理由

普段の生活で何気なく聞いているラジオ。音や声が電波で送られてきてそれをラジオでキャッチする。でも、こんなラジオを自分で作ってみたらどうだろう。作っている間は難しい作業ばかりかもしれないが、完成したときの喜び、ラジオが聞こえた時の喜びは、作った本人にしか分からないはずだと考え、今回の講座を開くことに決めた。

また、てづくりラジオを通してものを作ることの驚きや、完成したときの喜びを知ってほしかった。

## 2. 教材について

今回の教材は、「おもしろ電気工作」という本のクモノ巢型コイルでラジオを作るというものを参考にしてラジオを作った(参考資料:「おもしろ電気工作」民衆社 古川明信著 1986年発行)。

私達スタッフもてづくりラジオを作るのは初めてだったので、ラジオが聞こえるまでには相当苦労した。バリコンやダイオードなど、小学生には難しい部品も出てきていたし、試作品を一つ作るのに私達が作っても2時間はかかるのに、子ども達が2時間で作り上げるということは無理であるということなど、いろいろな点で悩んだ。また、配線も複雑で何度も修正してやっと試作品が完成した。初めて作った試作品で本当にラジオが聞こえたときは、スタッフみんなで喜んだ。それと同時に、子ども達がこのラジオを作った時、そのラジオから音や声が聞こえた時は今の私達と同じように喜んでくれるだろうと確信した。

その後はもっと分かりやすく作業のしやすいようにと、教材研究に移った。小学生にとっては、かなり難しい作業になってしまうため、どの作業を実際にやらせようかということでもかなり悩んだ。そこで、子ども達には、はんだごてでの配線の接続を中心とした作業をやらせようことにした。また、アンテナコイルを作る作業で半分の時間を取ってしまうので事前に用意しておいたり、コードの配線も複雑になってしまうので、ラグ盤で綺麗にまとめたりとスタッフと共に意見を出し合い、より良いものを探っていた。しかし、試作品を改良していくと新しい問題も生まれてきた。なかなか思うようにラジオがなってくれない。配線方法もいろいろ考えてもう一度やり直すということが何回かあった。そのかいあって、予想以上に綺麗にまとまった試作品のてづくりラジオが出来あがった。

事前にはスタッフ全員で集まり、全体の流れを把握してもらうために説明をした。また、今回のてづくりラジオは自分自身で作らないと子どもに教えることは出来ないと思い、スタッフ全員にラジオを作ってもらうようにした。

## 3. 当日の様子

当日は準備不足であったため、朝からスタッフ全員が動き回っていた。講座は午後からであったため、準備の方も何とか間に合った。最初は、私達スタッフも子ども達も緊張が

感じられた。自己紹介をし合ったあと、それぞれの参加者にスタッフがついた。スタッフの人数は多かったので、一人の参加者に対して一人は必ずついて作業が進められた。私達の用意した説明書にしたがって簡単に手順を説明した。しかし、今回の最も注意しなければいけない点は、はんだごての扱い方であった。参加した子ども達の中には小学生の低学年の子もいたので、はんだごての扱いには特に説明をした。

だいたいの説明をしたら、あとはラジオを作っていくだけである。担当のスタッフと一緒にラジオリオを作り始めた。スタッフは事前にラジオの作り方を理解していたため説明に戸惑っている様子は見られず、作業もスムーズに進んでいった。当日にも自分たちで作ったラジオをお手本として見せて、それのおりに作っていく方法を取っていたので、見本があることでより分かりやすく作る事が出来たと思う。しかし、はんだごての使い方は難しいようであった。「(はんだごてを) つける、(はんだを) つける、(はんだを) はなす、(はんだごてを) はなすというようなりズムをつけると簡単だよ」と教えると、すぐにコツをつかんだ様で上手にはんだを付けられるようになった。

1 時間を過ぎると一人の参加者が完成した。アンテナの所に実際につないでラジオが聞こえるか聞いてみる。しかし、音が予想以上に小さい。他の参加者も次々とラジオが完成し、本当に聞こえるのか確かめるためにアンテナにつないでみるが、私達の作った試作品のラジオと明らかに音の大きさが違う。ラジオの回路の中に入っている抵抗の値を間違えて買って来たものが混ざっていて、それを使ったためだった。原因が分かったので付けかえられる参加者は急いで付け替えた。そしてもう一度聞いてみるとはっきりと聞こえるようになった。子ども達は大喜びであった。電池も使っていないのにほんの少しの努力で世界に一つしかない自分だけのてづくりラジオが完成したのである。こうやって子ども達がスタッフや他の参加者と目をきらきらさせて喜んでくれたことが本当にうれしかった。

#### 4. まとめ

全体の流れや、最終的にはラジオがきちんと聞こえたので良かったが、改善の余地はたくさんあった。まず、抵抗の値を間違えて買って来てしまい、ラジオの音が小さいというアクシデントは予想外だったのでとても驚いた。すぐに付け替えて聞き直してみたら大きな音で聞こえるようになったのでよいが、私達スタッフの準備の徹底不足であった。時間のほうは予想以上に早く出来あがる子ども達が多く、はんだづけの覚えの良さに驚かされた。小学校低学年の子どもでも一度見本を見せるだけで、あとはすべて自分ではんだづけをするほど覚えは早かった。

参加者のみんなはとても細かな作業でも集中してやってくれて、ラジオが聞こえれば大喜びしてくれた。また、時間がない中スタッフの皆さんも協力してくれた。当日まであと数日しかないのに、試作品を作ってラジオの仕組みを少しでも理解してほしいと、無理をいって作ってもらった。前日の準備も協力して出来たし、頼んだ仕事はきちんとこなしてくれた。多くの反省点や改善点があるが、全体の流れとしてはとてもよい講座が出来たと思っている。スタッフのみなさん、本当にありがとう。

#### 5. スタッフの声

・難しかったけど、今回の講座を通してとてもいい体験が出来たと思っています。この



経験がまたどこか違うところでも生かせたらと思います。

(社会科学教育専攻 3年 岩倉鮎美)

- ・子ども達ははんだを溶かすという経験が始めてだったようで楽しんでた。私自身も子どもと一つのものを作ることは楽しかったです。

(生活科学教育専攻 2年 宮尾さやか)

- ・あまり大きな音で聞こえなかったけど、聞こえた時はとても嬉しそうだったので良かったです。

(生活科学教育専攻 2年 藤森美紀)

- ・一番印象に残っているのは、「ラジオから音が聞こえた!」と言った時の子どもの笑顔で、この講座に参加して良かったと感じた。

(技術科 4年 小松 慎)

- ・材料費や製作時間、子どもに対する配慮など悩むところが多かったが、その分学ぶことも多く非常に自分のためになったと思う。

(生活科学教育専攻 3年 田中信竹)



# ピョンピョンとぼう！なわとび kids

## —なわとびを通しての仲間作り—

片瀬亜希子 地域スポーツ専攻 3年

### 1. 講座開講までの経緯

キャプテンである私と小島真知子さんが、『ピョンピョンとぼう！なわとびKids』を開講しようとした動機は、「子どもと学生と一緒に体を動かして楽しみたい。」と考えたからである。日頃、友達と運動やスポーツをして体を動かし、楽しんだり、気分をリフレッシュしたりしている。このように、私が感じている体を動かすことのよさを、子どもたちにも伝えたいと思った。体を動かせる運動やスポーツはたくさんあるが、「なわとび」を選択したことには意味がある。小学校で必ずといってよいほどやっているもので、たいした道具も必要なく、みんなで一斉に跳ぶだけでも楽しめ、手軽でおもしろいという点から、なわとびを選んだ。そこで、この講座の目的を「子どもたちと学生がなわで遊んだり、新しい跳び方に挑戦したりすることで、なわとびを楽しみ、仲間作りをする。」とした。

スタッフを募るまでに、私と小島さんで大まかな講座の流れを考えたが、スタッフで集まってみんなで講座を作り上げていきたいと考え、何度かみんなで集まり、教材研究をして講座の流れを決めていった。教材研究をするとき、みんなが知っているおもしろい跳び方や挑戦してみたい跳び方を持ち寄り、実際に跳んで、「子どもたちにもできそうか」、「興味・関心を持つか」など、子どものことを考えた。私たちスタッフが汗を流し、声を掛け合い、みんなで楽しんで準備を進めた。これは、面倒臭いとか、必要ないというようなものではなく、よりよい講座を開講するためには欠かせないものである。教材研究をしていて、段階を追って、徐々に難しい跳び方に挑戦するようにするか、それほど難しくない跳び方を提示し、こんな跳び方もあるぞということをわかってもらうようにするか迷ったが、後者にし、「みんなでやればこんなことでもおもしろい」ということを伝える講座をスタッフで作上げていった。

### 2. 当日の講座の様子

YOU遊フェスティバル当日、天気にも恵まれ、ポカポカ陽気の中で『ピョンピョンとぼう！なわとび kids』を開催することができた。体を動かすことが大好きな年長さんから小学5年生の子どもたちが20人も集まって、12人のスタッフと共に準備してきたことを実践するときがきた。

子どもたちは講座が始まる前から、持ってきたなわとびを跳んでいて、私は講座が楽しみだと思うと同時に、子どもたちは満足してくれるのだろうかという不安を抱いていた。簡単にはじめの会をやり、スタッフ紹介や準備体操を行った。この時点で、輪に入ろうとしない子どもや落ち着きのない子どもがいた。怪我が発生しなければいいなという思いで準備体操を進めた。はじめの会の後30分ほどアイスブレイクを行い、子どもとスタッフ、子ども同士のコミュニケーションをとるために、カウントダウンとネームキャッチ、島とび鬼の3つのゲームを行った。これらの活動は、みんながすぐにルールを理解し、楽しむことができた。しかし、カウントダウンはグループを作るゲームであるのに、1人がいい



という子どもがいたり、ネームキャッチで恥ずかしがって友達の名前だけでなく自分の名前すら元気に言えない子どもがいたりした。

アイスブレイクで心の氷を少しでも壊した後、それぞれが持ってきた短なわとびを使って活動をした。すぐに二重回しや交差とびなどをするのではなく、まずなわとびを使った簡単な遊びをした。高学年の子どもたちには面白くなかったかもしれないけれど、大体の子どもは夢中になって、足だけを使って丸めたなわを直線や円、魚の形にし、そのなわをピョンピョンと跳んでいた。みんな、負けまいとして夢中になってやるのだが、友達より早く終わると、その子を見る様子はなく、ボーッとしていたり、なわとびを跳んだりして自分のことばかりしていた。スタッフは時間がかかっている子どもにやる気を失わせないように、「がんばれ!」「もう少しだ!」などと声を掛けるが、子どもたちからは声が掛からなかった。なわ遊びの後、実際になわとびを跳んでみた。2人組になり、1人がなわを回しながら跳び、もう1人がそのなわに入ったり出たりしたり、なわを回している人が動いてもう1人の人をなわに入れてあげるという跳び方に挑戦した。予想以上に盛り上がり、2人から3人、4人…、みんな仲間が増えていった。子どもたちも夢中になり、いつの間にかみんなが一行に並んで順番を待っていたり、掛け声をしていたりしていた。引っこかってしまったお友達がいたとしても「お〜いっ!」などと文句をいう子もいなく、とても楽しい雰囲気の中でこの跳び方に挑戦することができた。スタッフの中にははしゃぎすぎたのか、疲れが見える人もいたが、子どもと一緒に楽しんでいた。

この後、子どもというよりスタッフが疲れていたし、水分を補給しなければいけなかったので、休憩時間にした。休憩時間になっても子どもたちは元気いっぱい、「見てて!」と言っては二重回しを披露してくれたり、追いかけてこをする子もいたりした。子どももスタッフもそれぞれ一息ついていてるとき、1人の女の子が飾りの紙テープに足を引っ掛け、前にあった黒板の角に耳の裏をぶつけて怪我をしてしまった。その子は「痛いよ。」と泣き叫び、その声に私が気付いた。このとき、「なぜ黒板をこんなところに出したままにしておいたのだろう。」と反省したが、遅かった。一息つくときに一番危険が潜んでいるものなのかもしれないと思った。消毒をしたら「気持ちいい。」と言って泣きやんでだが、安全に対しての不注意が浮き彫りとなる怪我で、注意力散漫な自分に反省した。

怪我をした子は私が見て、講座を進めることにした。休憩前の跳び方が子どもの興味・関心を引き、休憩後も短なわとびを使ってみんなで跳ぶという跳び方に夢中になっていた。スタッフが率先して声を出し、輪から外れる子や小さくて跳べない子にはスタッフが個人的に付いていたが、全体でやろうとしすぎたために子どもの動きをしっかりと把握できなかった。短なわとびに飽きてきた頃に長なわとびで3グループに分けて全員とびに挑戦することにした。しかし、これには子どもたちが興味・関心を持たず、活動を円滑に楽しく進めることができなかった。なわとびを終え、終わりの会でスタッフが紙粘土で作った人形をプレゼントしたら、「何これ?」と言いながらも笑って受け取ってくれた。当日参加の子どもがいたので人形が足りなくなったが、子どもが帰る前までには間に合ったが、その子はいじけてしまっていた。これもスタッフの配慮不足であり、反省点となった。

閉会式を終え、人形を手にも帰る子どもたちが笑顔だったので、怪我や人形のアクシデントはあったけれども、講座は成功に終わったと思っている。子どもの笑顔を見るために準備に力を入れることができ、子どもの笑顔があるから満足できたのだと思った。



### 3. 講座を通して学んだこと

講座中や帰っていくときに、子どもの笑顔がたくさん見られたから、成功を収めることができたかもしれないけれど、反省すべき点もいくつかある。1つ目は安全面である。運動をするときに絶対に整えなければいけないものであるのに、黒板や紙テープ、使わないなわとびなどがそこらじゅうに放置され、危険が数多く潜んでいた。子どものことばかりでなく、子どもが活動する場にも常に目を配れるようになっていかなければいけない。2つ目として、活動中に輪に入ろうとしない子どもを配慮できなかったことである。今回は個人技を磨くというよりも、みんなでいろいろな跳び方に挑戦するという内容にしたので、それがその子には合わなかったのかもしれないけれど、スタッフが上手に声を掛けることができれば、そのような子も輪に入れたはずである。子どもの興味・関心を引く教材作りは教師としても親としても、ずっと考え続けていくものであり、子どもが「これだ!」と思うものを作れるように自分自身が興味・関心を持ってこれからも様々な活動をし、学んでいかなければいけない。満足せず、いつまでも追求していきたい。3つ目として、みんなで跳ぶということを強調しすぎて、個人差を配慮できなかった。上手に跳べない子どもに教えてあげるというよりも、勢いで跳ばせてしまっていた。参加対象を小学1~4年生というように幅広く設定したので、身体能力や技術に差があり、低学年の子にとっては高レベルな内容になってしまっていた。しかし、引っかかって誰も責めなかったため、みんなが楽しくなわとびをすることができたのだと思う。「なわとびを楽しむ」ことがこの講座の目的であったので、目的には反していないが、もう少し個人差を配慮して、より楽しく充実した講座にすればよかった。

反省すべき点もいくつか残ったけれど、この講座の目的である「子どもたちと学生がなわで遊んだり、新しい跳び方に挑戦したりすることで、なわとびを楽しみ、仲間作りをする。」は達成されたと、私も他のスタッフも感じている。この講座を通して、私が最も感じたことは、人が集まってワイワイするだけで楽しめ、自然と仲間が作れるということである。人は生きていく上で、人を支えたり、人に支えられたりしていて、必ず人と接し、仲間を必要とするものであると思う。仲間作りをする方法はいくつもあるけれど、今回はなわとびという活動を通して行った。2時間だけの活動の中で仲良くなることは難しいことかもしれないけれど、子どももスタッフも「なわとびを跳ぶ」という1つのことを通して、声を掛け合ったり、息を合わせてジャンプしたりして、ふれ合っていた。大した道具がなくても仲間作りはでき、みんなで集まって何かをすることがとても大切なことだと、再認識することができた。人が集まって何か活動をすれば、嬉しいこと、楽しいこと、悔しいこと、ムカつくこと、感動することなど、様々なことを感じるができる。様々なことを感じるができること、そこから、自分の好きなことがわかったり、されると嬉しいことがわかったり、されたら悲しいことがわかったりできる。子どもがただ活動するだけではなく、その活動から何かを感じるができるように、活動を設定したり、声を掛けたり、見守ったりすることが私たちに必要になってくると思う。子どもも私たちも、様々な活動を通して、何かを感じるができること、自分では気付かなくても「何か」を学ぶことができる。「何か」とは、「生きる力」というものだと思う。「生きる力」を身に付けることができれば、より充実した日々を送れると思う。だから、私はこれからも仲間や人とのふれ合いを大切に、その大切さをかみしめ、それを子どもたちに伝えられるように、私も子どもたちと共に「生きる力」を身に付けていきたい。



# プレバリッ!?ウイナー!

## —実践をしてみてわかったこと—

西絢平 教育実践科学専攻 2年

### 1. 講座開講まで

私はこの一年間、YOU遊広場の4プラザ「キャンパスプレーパーク」にかかわってきた。しかし、それは自分にとって充分にかかわれたといえるものではなかった。自分の中で、まだ2年生だからという気持ちが強く、どうしても3年生に頼りがちな面が多かったように思う。このYOU遊フェスティバルで「キャンパスプレーパーク」として一つの講座を出すと思ったときも、キャプテンは3年生がやるだろう、自分はスタッフとして参加しようとは思っていなかった。まさか自分がキャプテンになるとは思ってもみなかったが、スタッフの話し合いの結果、自分がキャプテンとなることになった。しかし、これはそんな自分を変えるいい機会だと思った。これから3年生となり、YOU遊広場を引っ張っていく立場になる自分にとって、大きく成長できるかもしれないと思ったからである。結果的に、キャプテンとしてこの講座をやり遂げ、得たものは大きかった。

ところで、この「プレバリッ!?ウイナー!」という講座は、私だけが考えたものではない。私を含む「キャンパスプレーパーク」のスタッフたちで考えたものである。そのため、それぞれこの講座に対する思いは異なり、意見がぶつかり合うことも少なくなかった。そのなかにグループの問題があった。グループごとにウイナーを作るか、それとも、グループを作らないでそれぞれ自由にやっていくかというものである。子どもの安全面や、進行の面からいうと、グループを作ったほうが対処しやすい。しかし、こちらが勝手にグループを決めるというのは子どもの自由を奪うものではないかという意見もあった。「キャンパスプレーパーク」は、自由に自分のやりたいことを何でもできる場所である。そういう意味もあつての意見であった。私は前者のほうの意見であったが、子どもたちにウイナー作りを思い切り楽しんでもらいたいという気持ちは、両者とも同じであった。長い話し合いの結果、グループを作ることに決まったが、子どもたちを無理にグループに押し付けることはせず、なるべく子どもたちの意見を尊重していこうという意見で一致した。長い時間を費やしてしまったが、子どもたちのことについていろいろと考えさせられた問題だった。

教材研究も大変苦労した。実際に誰もウイナー作りを経験したことがなく、作り方から材料、費用のことまで全て調べなければならなかった。いざ作り始めても、羊腸内を水で洗う作業(のちに乾燥した豚腸を使うことになり、この作業はなくなった)や、肉を腸に詰める作業に思っていた以上に時間がかかり、2時間という限られた時間のなかでどういうふうに行うか悪戦苦闘した。また、出来上がりも味や香りなど満足いくものがなかなかできず、塩の分量や燻製の時間など試行錯誤を繰り返した。そうして教材研究を重ねていくうちに、だんだんと味や香りなど、ウイナーの出来そのものに考えが集中してしまい、それを作ることで自体の楽しみや驚きを私たちは忘れてしまっていた。私たちが初めてウイナーを作ったとき、その出来がどうであれ、肉を腸に詰める作業や燻製など、作ることで自体が楽しくて仕方なかった。子どもたちがこの講座に求めるものは、果たして

おいしいウインナーであろうか。おいしいウインナーならば、レストランや家庭でも食べることができる。子どもたちがこの講座に求めるものはウインナー作りそのものではないだろうか。この教材研究を通して、このことに改めて気が付き、この講座の意義が明確になったように思う。

## 2. 実際の活動を通して

子どもたちと一緒にウインナーを作るのは初めてだったが、この実践を通して様々なことを学んだ。先程も記したとおり、この講座はグループを作って行った。私はグループの中には入らず、本部という形で講座全体を見ていたが、時折、各グループのところに顔を出しては、直接子どもたちと触れ合ったり、子どもたちの様子を見たりしていた。

子どもたちはウインナーを作るのは初めてであり、肉をこねる作業、腸に肉を詰める作業など、一つ一つの作業に真剣になって取り組んでいた。私たちには見慣れた光景であっても、子どもたちには何もかもが新鮮で、出来上がりを自分たちで想像しながら楽しんでやっている様子だった。しかし、中には飽きてしまう子どももいて、グループを飛び出してしまい、他のグループにいる仲の良い子どもとどこかに行ってしまう場面もしばしばあった。そういった場面でも、無理にグループに戻そうとはせず、なるべく子どもの自主性を尊重しようとしたが、あまりにも野放しにしておくとう収集がつかなくなり、大けがにもつながる可能性もあるので、できるだけグループ内の子どもはそのグループのスタッフが見るようにした。しかし、どんな場面でも、スタッフは子どもたちとうまくコミュニケーションをとりながら楽しんでやっている様子だったので、それほど心配することもなかったのかもしれない。子どもたちは、それぞれのやり方で自由にこの講座を楽しんでいる様子だった。

このように、子どもたちはウインナー作り自体もちろん楽しんでいたが、作業を中断してスタッフと話をしたり、遊んだりするなど、スタッフとの交流も楽しんでいる様子であった。私や他のグループのスタッフの手を引っ張って自分のグループの所に連れて行き、まだ出来上がっていないにもかかわらず、自分たちのウインナーを見せては嬉しそうにしていた。そこで私たちがほめてあげると、さらに嬉しそうな顔をしてウインナーを作り始めるのだった。子どもにとって、自分が作ったものをほめられることは、最高の喜びであるのだろう。そうすることで、子どもの自信にもつながるし、やる気もわいてくると思う。私は「叱る」ということも大事だと思うが、それ以上に「ほめる」ということも大事なことになるのではないかと思う。子どもにとって、ほめられるということは、自分自身を認めてもらっていることの証でもある。「うまいね」「すごいね」といった言葉だけでいい。子どもが一生懸命やった結果のことならば、たとえ失敗したとしても、ほめてあげることが大事なことだと私は思う。

教材研究では何度も失敗したこのウインナー作りであったが、本番では子どもたちに味付けや塩の分量など、ほとんど自由にやらせたにもかかわらず、これまでで一番のウインナーが出来た。また、ある子どもはウインナーの茹で汁を使ってスープまで作った。子どものすごいところは、一つのものに対して何通りもの見方ができる発想力だと私は思った。遊びでも何でも型にとらわれない。どんどん新しいものを創造していく。私たちにとっては、奇怪なものに見えることもあるかもしれない。しかし、それを全部否定してはいけない。その一つ一つをしっかりと目で見で、認めてあげることが大事なことでありと私



は思う。

### 3. まとめ

キャプテンとしてこの講座を行ってきたが、今まで3年生や4年生に頼ってばかりいた自分が、初めて責任をもってやり通せたのではないと思う。この講座を通して、物事を判断することの難しさや、人をまとめていくことの大変さを知ったし、その分、こういった力も少しばかりついたのではないと思う。必ず将来の自分にとってプラスになるだろう。

また、子どもたちとの接し方についてだが、遊びでも何でも真剣に子どもたちと向き合うことが大切なことであると思う。子どもだからといって適当にあしらってはいけない。子どもたちは大人の表情を、私たちが思っている以上に敏感に感じ取っているのである。私たちが適当にやっていたら、子どもたちはついてこない。時には手を抜くことも必要だが、子どもたちと触れ合う時には、私たち自身が楽しみ、喜びを共有することが大切なことではないだろうか。

最後に、この講座に参加してくれた子どもから私宛に年賀状が届いた。その年賀状には「ウイナーおいしかったよ。教えてくれてありがとう。」と書かれてあった。これを見たとき、本当にこの講座を開いてよかったと心から思った。またこういった機会があれば、キャプテンとしてもう一度やりたいと思う。



# オリジナルポストカードを作ろう

## ーコンピュータを使ったポストカード作りー

原山美樹 生活科学教育専攻 2年

### 1. 講座設定の理由

「子どもとコンピュータを使って何かやってみたいな」と思ったのは、コンピュータ利用教育の授業がきっかけでした。「大学に入ったら、コンピュータが得意になりたい」と思っていた私にとって、コンピュータ利用教育の授業は、とても面白く感じました。

そんな中、この授業の集中講義で、ある小学校の先生が、講義をして下さいました。そして、小学校六年生の子どもたちが、コンピュータで作った“卒業論文”を見せていただきました。それは、子どもが作ったものとは思えないほど、とても素晴らしいものでした。また、突拍子もない発想をしていて、見ていてとても面白いものでした。

そこで、私も実際に、子どもと一緒にコンピュータを使って、絵や字を書いてみたいと思うようになりました。そこに、子どもたちの創造力がどれだけ出されるのか見てみたいと思ったからです。

そこで、今回は、子どもたちが年賀状やクリスマスカードを作ることを通して、一枚のカードに“自分らしさ”を出せる喜びを味わえる。また、一緒に作った学生も、それを見て、喜びを味わえるような、「ポストカードを作ろう」という講座を設定させていただくことにしました。

しかし、コンピュータというものは、技能や知識が要求され、且つ、コミュニケーションが取りにくいものです。子どもたちに、感動や楽しさを与えるものとして、果たして合っているのか、不安は募るばかりでした。そこで、今回は、“コンピュータの使い方を覚える”といった学習的な要素の強いものではなく、“コンピュータを使って楽しむ”という遊び的な要素に重点を置くことにしました。

### 2. 教材研究

“教材研究”を行うに当たって、“ポストカードを作る方法”を考えるのが、一番大変でした。

なぜなら、子どもたちの技術がどのくらいあるのか、見当もつかなかったからです。取り敢えず、ソフトは、もっとも身近な「ペイント」を使うことに決めました。

次に、「ペイントを使って、どのように子どもたちが、絵や字を書くだろうか？」ということを、予想しておく必要がありました。このパターンを、私は、四つあると考えました。

第一に、絵も字も自分で書くという単純なパターンです。次に、「絵は自分で書きたくない」と思う子がいるのではないかと考え、そういう子には、あらかじめ用意した素材を使って、塗り絵をしてもらおうと考えました。そして、書いたサンタやツリー、馬や門松などの絵を、スキャナで取り込み、加工処理をしました。次に、字については、Word artを使ってみたら、より面白くなるのではないかと考え、これを素材として用意しておくことにしました。

すなわち、四つのパターンとは、“絵も字も自分で書く”、“絵は素材を使い、字は自分で



書く”、“絵は自分で書き、字は素材を使う”、“絵も字も素材を使う”というパターンであり、これを基に、教材研究を進めることにしました。

教材研究は、全部で二回行いました。

一回目は、スタッフの皆さんに、ペイントの使い方を覚えてもらったり、この四つのパターンを想定して、実際にカードを作ってもらったりしました。子どもたちに、何かを教える前には、自分たちが、知っていなければならないからです。そして、躓いたところや問題点を出してもらい、自分なりの解決方法を見つけて貰いました。問題点をあげてもらって、“時間の使い方にも工夫が必要だ”と新たに気づきました。“一枚も完成出来ずに終わってしまう”なんていうことが、あってはならないからです。

二回目は、この問題点や躓いた点に対し、解決方法を共通理解し、本番でスタッフ自身が、躓くことをなるべく、避けるようにしました。

また、印刷を担当して戴いたスタッフとの教材研究では、葉書のサイズからずれてしまう問題が発生し、困惑しましたが、ペイントのサイズを雛型で用意しておくことにより解決しました。また、背景もグラデーションで用意しておきました。

最終的に、教材として用意したものは、ポストカードの雛型、ポストカードの背景として“グラデーション”を付けた雛型、Web から拾ってきた素材くただ貼り付けるだけのもの>、塗り絵の素材、文字の素材の五種類です。それぞれ、フォルダに保存し、当日は、まず、雛型を開き、次に、Web から拾ってきた素材くただ貼り付けるだけのもの>、塗り絵の素材、文字の素材のフォルダから、適切なファイルを貼り付けし、色々組み合わせて作れるようにしました。

以上の研究は、皆が協力してくれたからこそ、良いものになりました。素材の絵を書いてくれた友達、字を作ってくれたスタッフ、印刷の仕方を研究してくれたスタッフ、ポストカードの試作品を手を抜かずに作ってくれたスタッフの皆さんの、一生懸命な姿勢に感動するとともに、「一つの講座は、皆の力で出来ていくものであるな」と本番前ながら実感しました。

### 3. 当日の流れ

- |                     |         |
|---------------------|---------|
| <1> 自己紹介            | <4> 製作  |
| <2> ポストカード製作についての説明 | <5> 印刷  |
| <3> ペイントになれる        | <6> 発表  |
|                     | <7> まとめ |

時間の流れは、想像していたよりスムーズで良かったです。また、ネットワークを使って、印刷を担当してくれるスタッフのノートパソコンに保存する形式を取ることで、子どもたちは、印刷をしている時間も、カードを作ることが出来て、とても効率が良かったです。

### 4. 当日の反省・感想・今後の課題

いよいよ本番がやってきました。スタッフは、子ども一人一人にマンツーマンでつきました。そのためか、皆二枚以上のポストカードを製作することが出来ました。何枚も作る事に意義を置いている子、一枚を丁寧に作っている子と様々でした。また、技能面においても、「全く初めてで困っている」というより、「楽しく使っている」感じを受けました。

最初は、不安いっぱいだったこの講座も良かった点、反省点ともに色々見つかりました。

第一に“素材の工夫”という点です。素材は、何枚も違う種類のカードをつくりたいという子どもには、とても有効であったと思います。しかし、素材など使わなくても、上手に絵をかけていて、“自分らしさ”を出している子が目立ちました。やはり、“個性”というものを考えた場合、自分で書いた絵のほうがずっと親しみが持てるし、その子らしくなるのではないかと思います。私自身、創造力を発揮することを願って、立ち上げた講座であったはずなのに、“素材を使う”ことを強調しすぎたところもありました。“自分で書く”というところにもう少し重点を置いた方が良かったと思います。

第二に、“コミュニケーション”という点です。先にも述べた通り、コンピュータを使うことで、“学生と子どもとのコミュニケーションが取りにくいのではないか”と懸念していました。しかし、一緒にカードの構想を練り上げていく場面においては、コミュニケーションが見られ、良かったと思います。また、子どもの笑顔も見られ、良かったです。しかし、時間に終われる余り一方的になってしまったり、なかなか会話を楽しむというところまでいけなかったりして残念だったと思います。

第三に、“援助”という点です。“子どもと一緒に作る”とはいっても、カードは、子どものものであり、あまり援助し過ぎると、「自分が作った」という実感がなくなります。“援助”においてもまた、時間のことを考えるあまり、あせって援助している場面も多く、“楽しく作る”というより“早く時間内に作る”という方に重点が置かれてしまった点を反省しています。援助は、もっとゆっくり、コミュニケーションを取り合いながらしていきたいと思いました。

最後に、今回一番見たかった“子どもの創造力”という点です。この点では、期待していた以上に、子どもの創造力の凄さに触れることが出来ました。自分で絵を書いていた子は、思いつきもしないデザインをしていて感心しました。また、一年生の子は、字をやっと書ける位の段階なので、やっと書いた字が“味があるな”と思わせてくれました。

“創造性”という点では、何かを使う技能は、あまり必要で無いように思いました。大事なものは、やはり、“何か手段を使って、子どもたちが自分をどう表現するかが大事なのではないか”と改めて感じました。今回は、たまたま個性を出すのに、“コンピュータ”を使っただけで、子どもの無限の創造力は、色々な場面で見られるものなのであるはずだと思います。そして、これからもそういう場面に出会うことが出来るのだと思うと、とても楽しみです。

この講座で、100%、子どもたちが個性を出せたかというところはないと思います。上記の反省点を考慮して、これからも、「子どもの個性を出せるもの」をもっと研究し、企画していきたいらと思います。スタッフの皆さん本当に有難うございました。



## 「信大YOU遊広場」の総合的な学習

—1年間の活動で身についたもの—

町田竜太 社会科学教育専攻 3年

## Interdisciplinary Learning of Shin-dai YOU-Yu Plaza

—One Year of Experiences in Working with Children—

MACHIDA Ryuta : Major: Social Science, junior

I consider what I have learned through a year of helping students with interdisciplinary learning through participation in their activities. And it looks back upon what practical teaching skills I acquired.

【キーワード】 総合的な学習の時間 生活科教育 フレンドシップ事業 自然体験  
農業体験

### 1. はじめに

今年の4月からついに総合的な学習の時間が学校現場に導入されることになるが、その時間を指導していく教師は自分が学生の時に学習した経験のないものを指導していかなければならないのが現状である。

総合的な学習の時間には何をしていけば子どもたちにねらいであった「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えるができるようにすること。」を身につけさせることができるのか。暗中模索のなかでスタートするこの問題を、総合・生活科教育分野の1期生として少しでも専門性を出せたらと思いこのテーマを設定した。

YOU遊広場の活動をしている時、この活動で私たちにどのような力が身についているのかというのは分からなかった。しかし、1年間の活動をする中で、この活動は大学生の総合的な学習であったという1つの結論に達することができた。

今回は、活動の中でいくつか焦点を絞り、その中から信大YOU遊広場の総合的な学習を考察していきたい。

### 2. 農業体験の活動からの考察

小学校で行われている生活科や、総合的な学習の時間の準備段階で、農業体験をしているという実践記録をよく耳にする。学校の地域の特性を生かした内容を当然選んでいると

は思うが、なぜ農業体験を生活科教育として実施している学校が多いのであろうか。その理由は、以下の4点が主な要因ではないかと考える。

(1) 季節を感じとることができる

農業体験で何を作ることになっても、時期というものを無視して実施することは不可能である。子どもたちは何を作るか考える際に本当にできるのかということを考えて、今からでは何ができるのかを調べ、どうせやるなら収穫までしたいという願いを持つであろう。

生活科の教科書を見てみると、春には春探し、秋にも秋探しなど季節の移り変わりを実際に体験して感じていく学習が多い。生活科教育で農業体験をすることにより、子どもたちは自然と外に出るようになり、その中で季節を感じとっていくのではないだろうか。また、収穫をしたいという願いから、四季の移り変わりを自分たちから進んで学んでいくだろう。

(2) 失敗から学習を発展できる

失敗からの学習の発展を例にあげて考えてみると、

「豆を作ろうといって学級園で種からの栽培を始めたが、芽が出てくるころになるとさかんに鳥が学級園の周りをうろつき、食べごろの新芽をどんどん食べてしまった。子どもたちは芽が出てきたことに喜ぶ間もなく、目の前に突きつけられた事実には落とすばかりであった。しかし、子どもたちの中から今度は鳥さんに食べられないようにするにはどうしたらよいかみんなで考えようよ。という意見が出た。そこで学級担任は、時間を取ってこれからの学級園の使い方について今一度話し合うことにした。」

この話は、私が実習をさせていただいた学級で実際にあった話だが、子どもたちはこの体験を通してよりよく問題を解決する能力が養われているといえるだろう。失敗をすることで学級全体の問題として学級が1つにまとまるきっかけにもなるだろう。

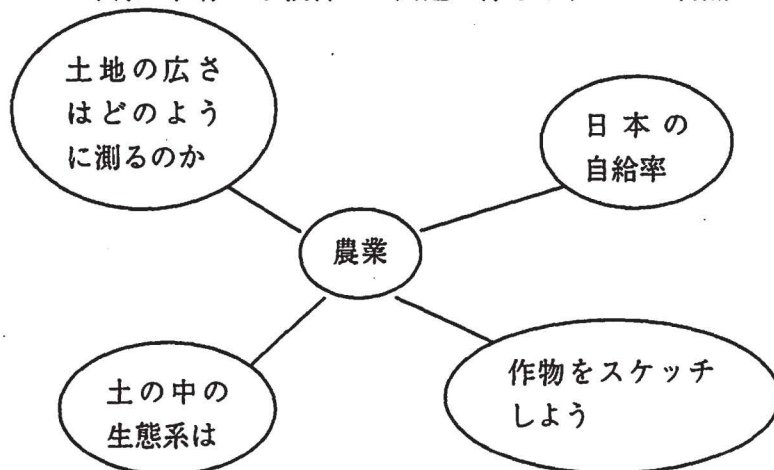
(3) 学級園など身近な場所で比較的簡単に実施できる

生活科や総合的な学習をしていく際に、授業をしていくメインとなるフィールドが教室から近ければ近いほど有利なのは言うまでもない。学習環境面において、農業体験をしていくことは、他の教材を選ぶより優れているといえるだろう。

また、指導していく教師側が、農業についての知識が多くななくても、事前に調べていれば、子どもたちに指導していくことはできるはずである。

(4) 農業から他の方面への関連付けがしやすい

図のように、1つの事から関連付けて発展させ、その中から個人のやりたいテーマなどを見つけるという際に、様々な教科との関連が付きやすいのが利点といえよう。





以上取り上げたことが1つのきっかけとなり、農業体験を生活科教育として実施している学校が多いと考えられる。

私たちの行った信大YOU遊広場の活動では、まず自分たちが体験したことのない農業体験をすることを通して、この活動のすばらしさを知ることができ、そして学生が企画・運営・実行していくため、このような活動をしていく時に事前の準備として何をしてあげばよいのか、どんな知識を身に付けさせたいのかなど、教師側の立場も経験することができた。

しかし信大YOU遊広場では、学生だけの企画・運営であり、参加してくる子どもたちは当日に体験して帰っていくいわばお客さんのような存在であった。学校現場では、子どもたちが中心となって企画し、そこに教師が支援していくようにならないといけない。そこで来年度の活動には、子どもたちも運営に加わって、より現場に近いような環境で実践的な指導力を身につけていけたらと思う。

### 3. 運営委員会からの考察

信大YOU遊プラザでは毎週火曜日に運営委員会を行い、各プラザ長をはじめ、活動の中心となってくれた人で1週間の反省や今後の活動について話し合いをした。

この運営委員会で学び得たものや、そこで身についた力が今後どのような場面で活かされていくのか、自分自身が経験した運営委員長という立場から考察していきたい。

#### (1) 運営委員長の役割とは

一言で言えばプラザの中ではすべてのプラザの副プラザ長役、そして、外部から見れば全体の代表というところであろうか。これが私が1年間運営委員長をして出した結論である。

具体的に自分の役割は、いかにプラザ長がプラザの活動に専念できるように助けられるかということである。例を挙げると、あるプラザが企画したイベント当日、プラザ長はとても忙しい。いつにもない緊張もあるだろうし、自分が進めていかなければいけないというあせりもある。そんな時に全体を見回し、プラザ長が気づかないところを手伝っていく。あまり目立った活動ではないが、とても重要な役割だと感じた。

1歩後ろに下がり活動を見渡すことで見えてくることもたくさんある。折角子どもたちが来ているのに一緒になって活動できないことを寂しく感じる時もあったが、それ以上に得る物は多かった。現場に出た時に子どもたちが活動するのにいつも教師と一緒にできるとは限らない。時には安全に配慮して子どもたちを見渡せる場所にいることもあるだろう。子どもたちが安全にそして楽しく活動ができるための裏方の仕事を経験することができた。

#### (2) 先を見通すことの難しさ

運営委員会は前週の反省とこれからの活動について話し合うことが多い。しかし、その日常的な活動のほかにも突然入ってきた活動や、今までの予定を変更していかなければならないこともたくさんあった。運営委員会の前には、必ずこれからのプラザの予定を見直し、これから何を話し合っていけばよいのか、何を決めなければいけないのかを考えるようにしていた。

このことは、どのようにして生きてくるのか。総合的な学習だけにとどまらず、これは、学級を運営していく上では必ず必要な実践力だと思うが、これから先に起こりうるであろうことを予測し、事前に準備をしておくことである。子どもたちから出てくる意見を予測しあらかじめ準備をしておくことは、授業を円滑に、そして子どもと教師の願いをつなげる意味でも重要なことといえよう。

運営委員会を取り仕切ることで、先のことを考えて今を迎えるという力が身についたと思う。

### (3) 司会者から授業者へ

また、運営委員会の司会をすることによって、人の話を聞いてその意見をもとに話を進める力がついた。授業に置き換えれば、子どもたちの意見を聞きそれをもとに話を発展させていく能力が身についたといえよう。教師が話しつづける一方的な授業ではなかなか子どもたちの考えを引き出すことはできない。どちらかと言えば教師が多く話すより、子どもたちの意見を聞くことのほうが大事なはずである。

ここでの司会者の経験が、教師として子どもたちを前にしたときに活かされる経験であり、教師として身につけるべき能力であると考ええる。

以上が運営委員会の考察であるが、ここでは信大YOU遊広場を運営していく際に必要なことを、話し合いそして決定し動き出すということをする中で、学級で言えば1つの問題を解決していく過程を繰り返すことができた。見通しを持ちながら子どもの意見を十分に生かしていく、そして実際に動き出す場面では1歩後ろに下がり支援していくことも重要なことであることが学ぶことができた。

## 4. 他大学とのシンポジウムからの考察

私はこの1年間の活動で上越教育大学、福島大学、鳴門教育大学のフレンドシップ事業やシンポジウムに参加した。そこでは、実践報告の他に今抱えている問題点を出し合ったりすることで、自分たちの活動と比較してきた。YOU遊広場もフレンドシップ事業の1つであるが、他大学との交流を通して何を学ぶことができたのか、そしてそこでの学びをこれからどのように生かしていくべきなのか考えていきたい。

### (1) フレンドシップ事業の問題点

信州大学教育学部では、フレンドシップ事業として1年次の「教育参加」が1つ挙げられる。教育参加ではたくさんの連携機関の協力を経て学生の実践の場として活躍しているが、当日の無断欠席や学生の一方的な理由によるキャンセルなどもあり、連携機関と信頼関係を築いていくのがなかなか難しいと私は考える。

大学の中だけでの活動ならばこのような状況でもよいが、外部の連携機関と関わっている以上責任を持たなければならない。福島大学、上越教育大学でも、シンポジウムの際に、学生の意識の差が大きく、そのことが活動していく上で大きな問題になっているということを聞くことができた。

フレンドシップ事業を行う上でどの大学もぶつかる学生の意識の差という問題を、どのように考えていけばよいのだろうか。

### (2) 学生の意識の差



他大学ではこのフレンドシップ事業を授業科目としているために学生全員が参加をしている。教育参加も必修の授業であるので同じ状況といえるが、信大YOU遊広場は授業科目にはなっているとはいえ必修ではないので、この活動に興味がありその中で自分で何かを見つけていきたいと考えている学生がほとんどである。この必修か選択かが大きな分かれ目であり、運営する側には重要な問題になるのである。

他大学の抱えている問題は、必修だからという意識で活動に参加してくる学生が多いということである。このような活動に興味がない学生は、当然子どもたちの扱いにも慣れていない。イベント当日不安な顔で参加してくる子どもたちに対して、このような学生は自ら進んで子どもたちに歩み寄っていくわけでもなく、学生の中で雑談をしているようだ。子どもたちの中には、学生の対応を見て傷つく子もいるであろう。

この意識の差を埋め、当日にスタッフ全員が同じ意識を持てるようにするためには、やはり、全体のミーティングが必要になるだろう。信大YOU遊広場では子どもたちが来る前に当日の流れを確認し、その中で毎回言葉の災害には気をつけましょうということを伝えている。1回だけのミーティングで効果が得られないのならば、前日、当日など意識を徐々に高めていく方法をとればよいのではないだろうか。

学級の話し合いの中でも全員が同じ意識で動いてくれることなどまずないであろう。その意識のずれがある状態をいかに小さくして全員が同じ目標に向かって取り組めるかが重要になってくる。永遠につきまとうこの意識の差の問題は、学級の中でも同じように存在すると思うが、動き出す前に一言あるとないのでは、その後の動きがだいぶ変わっていくはずだ。他大学との交流から共通の問題点を見つけることができ、特に12月8日のフェスティバルでは、当日のみのスタッフに対してその成果を出すことができた。

## 5. 来年度へ向けて

自分達が活動しているときは、前しか見えず、何とかやりきろうという気持ちが先行してなかなか1歩下がった視点から物事を捉えることができない。しかし、広場の問題としてこれから改善していかなければならない点はたくさんある。第2期が立ち上がろうとしている今、1年間の活動をし終えた1期の役割としては、この活動を陰で支えていくことが大事なことを考える。

ここでは、先輩や他大学の学生からいただいた広場の問題点をこの場に残し、来年度へ繋げていきたい。

YOU遊広場の問題点・改善すべき点について

2001.6.3の茂菅田植え後の茶話会での他大学生や先輩方からの指摘

- ・ 一度に7つのことに手を出すなんて、本当にきちんとやりきれているか。たくさんありすぎて一つのことがいいかげんになってはいないか。
- ・ YOUサタでは、執行部との壁や、定例会のやり方が問題となっていたが、その反省が全く生かされていない。
- ・ 定例会に行けないと、全く情報が入ってこない。(いつどこでどの活動をやっているのかなど) 掲示板などの情報提供の場が欲しい。
- ・ パソコンを使いこなせる人がいない。使いこなそうと努力しない。正式な文書を作りたいときや、名簿の管理、ホームページ作成の時に困るのでは。
- ・ プラザ長は、もとは連絡係として作ったのに、仕事が覆い被さってしまっているのでは

ないか。一人で頑張っている気がした。

- ・ 人不足だと聞いた。だったら、もっと人を誘うように努力しないのか。教育学部全体に声がけするのではなく、身近な友達一人から引っ張り込んでくれれば……。全員が一人ずつ誘えば2倍になるよ。
- ・ 3年生だけで(しかも大半は生活科)でまわしていて、後継ぎがいないのでは？これでは1年でつぶれてしまうよ。
- ・ 忙しそうで、目の前のイベントを成功させることにとらわれていて、周りが見えていない。
- ・ これらの活動を大学で行う意義は？

以上挙げられた問題点は、実際に活動している人間にはなかなか見えない点であり、このようなアドバイスをいただくことは、自分達の活動をよりよくしていくためにはとても重要なことであると考えます。しかし、現実的にはこの出てきた問題点を解決するまでには至らなかった。運営委員会で1つ1つの問題を取り上げ、どのようにしたら良いかを話し合ったが、ほとんどの問題がすぐに解決できるようなものではなかった。

1番改善すべき点として多い意見が、運営委員とその他のスタッフとの壁の問題である。誰もが気軽に参加できるような環境にすることは困難であるし、そのようにした事で生じる問題もあるだろう。大事なことは、学生が自分達は頑張っているのだからといって人の意見に耳を傾けないことがないようにすることである。たくさんの人の協力を経てこの広場が成り立っていることを常に頭の中に入れておくべきである。

## 6. 終わりに

「やってみなければわからない」これが信大YOU遊広場のメンバーが悩んだときに私が言った言葉である。マニュアルもなく先が全く見えない状態で活動していくのには、本当にできるのかという不安がいつも付きまとった。しかし、そのような中で動き出し、継続することでこの活動の意義を見出せた。生活科や総合的な学習も、子どもたちはもちろん教師もやったことのないものを創り上げていくものであると思うので、ここでの経験が必ず役に立つときが来ることを確信している。

最後に、この活動を常に支えてくれた土井先生をはじめ、諸先生方、そして活動を共にした最高の仲間へ感謝の気持ちを述べ、1年間のまとめにしたいと思う。本当にありがとうございました。



# 0 プラザの活動で身についてきた 2 つの力

## —連携する力・コミュニケーションの力—

富山裕子 障害児教育専攻 3 年

## Two Abilities Enhanced by Shin-dai YOU-Yu Plaza

### Activities

#### —Interpersonal Relations and Communication Ability—

TOYAMA Yuko : Major: Handicapped Education, junior

I believe that my participation in Shinshu university YOU-Yu Plaza activities enhanced my ability to relate to others and communicate better with them. This report discusses three points to consider when we establish a relationship with others and suggests three tricks for improving communication.

【キーワード】 不登校 障害児 連携 コミュニケーション 交流教育

#### 1. 0 プラザの活動に込めた私の願い

「自分のやりたいことができる場にしよう」ということで立ち上げられた信大YOU遊広場。この、「自分のやりたいこと」という言葉を聞いた時、私の頭の中に真っ先に浮かんだことがある。それは、「障害をもっている人と一緒に活動したい」という願いである。信大YOU遊サタデーの時は、誰もが参加できるように全ての人に平等に門を開いていた。しかし、この「平等」とは、私たち信大YOU遊サタデーの学生から見たものであり、信大YOU遊サタデーに参加する子どもたち、保護者の方から見たら、「平等」と言えたのだろうか。私はそうは思わない。

私がこのようなことを考えたのは、自閉症児とのキャンプに参加したことがきっかけである。そのキャンプで、あるお母さんの「うちの子どもがみんなに迷惑をかけるのではないかって、参加しようか悩んだ」という言葉を聞き、私は驚いてしまった。自閉症児のためのキャンプでさえ、保護者の方がこんなにも周りに気を使うことを知り、びっくりしたのである。ならば、信大YOU遊サタデーのように、広範囲の子どもたちに参加を呼びかけている場合、なかなか参加に踏み切れない保護者の方の思い、子どもの思いというものがあるのではないか。子どもの「参加してみたいなあ」という気持ちや、保護者の方の「参加させてあげたいなあ」という気持ちを、心配や不安、遠慮など別の気持ちが妨げているならば、その心配や不安を取り除くために私には何ができるのだろうか、と考えるようになった。

今までは、門を開き、そこに入ってくる子どもたちだけを受け入れていた。私は、入り

たくても入れない子どもたちがいると知り、自分自身が門の外に出て行けばいいことに気づいた。子どもに応じて、門の中で迎えることもできれば、門の外へ出かけて行くこともできる。子どもたち一人一人の対応に差があってよいのだと思う。見た目には差があっても、全ての子どもの「参加したい」という気持ちを大切に扱うことが、本当の意味での「平等」なのではないだろうか。

このようなことを考え、障害を持つ子どもたちと活動したいなあと思っていた時、長野市にも不登校で悩んでいる多くの子どもたちがいることを聞いた。そんな子どもたちに少しでも元気を取り戻して欲しいという願い、そして何よりも、障害児教育という自分の専攻、興味を生かしていきたいという2つの願いから、不登校の子ども、障害を持つ子どもを対象に活動していくことを決めた。

## 2. 0 プラザの活動を通して身についてきた力

このような私たちの願いが実現したのが0 プラザ「鉄腕アトム」である。0 プラザでは、「不登校の子どもや障害を持つ子どもと、日常的に関わり合う活動を通して、互いに理解を深め合うことを目指し、活動する」を共通の目標に、メンタルフレンド・心の教室相談員として、不登校の子どもと関わったり、附属養護学校に学生が出かけて行き、障害を持つ子どもたちと触れ合う活動を行ってきた。

私は、附属養護学校での活動を主に行ったのだが、このような実際に子どもたちと触れ合う活動や、それに向けての準備など、0 プラザでの活動を通して身についてきた力として、2つの力を挙げることができる。1つ目は、長野県教育委員会や長野市教育委員会、附属養護学校など外部と協力していくことのでついた「連携する力」、2つ目は、子どもたちと接する中で身についてきた「コミュニケーションの力」である。

## 3. 連携する力

2月に入ってから、0 プラザでどのような活動をしていきたいかを本格的に学生の間で話し合うようになった。不登校の子どもとの活動に関しては、長野県教育委員会、長野市教育委員会の方から、「心の教室相談員」や「メンタルフレンド」として悩みを抱えた子どもたちと関われることを紹介して頂き、私たちの願いを具体的にしていけることができた。しかし、障害を持つ子どもとの活動に関しては、こんなこともやってみたい、あんなこともやってみたいという気持ちが膨らんでいくばかりで、具体的な活動内容は一向に決まらなかった。

このような何も決まっていない、行き詰まった状態で、2月20日に附属養護学校を訪れた。しかも、アポイントも取らず、突然押しかける形で行って来たのである。1分でも2分でもいいから、私たちの相談にのって欲しい、そのような思いからの行動であった。アポイントも取らない、失礼な行為であったにもかかわらず、金田教頭先生がすぐに応じてくれ、私たちの話を聞いてくれた。これまでの学生だけの話し合いでは、学生側の願いばかりが話し合われていたが、金田先生は、何より大切な子どもや保護者の側からの視点、そして協力してくれる学校側の視点にも気づかせてくれた。10分程度の訪問であったが、ここで得た視点をきっかけに、それ以後はポイントを絞って話し合うことができるようになり、活動案をどんどん深めていくことができた。

このようにして深まってきた活動案を附属養護学校側に FAX や電話で連絡し、金田先



生から御指摘を頂くというやり取りが3月26日、3月27日、4月16日にあった。しかし、4月16日以降は、電話がつながらなかったり、附属養護学校からの連絡も途絶え、連絡が取れない状態が続いた。

しかし、偶然にも附属養護学校の市澤校長先生から学校の先生方の気持ちを聞かせてもらうことができた。5月24日のことである。それは、「子どもたちと一緒に農業をしたい、放課後に子どもたちを集めて遊びたい、という学生側の願いを言われても、学校には決められた授業があるし、子どもたちの都合もある」という内容だった。私はこの話を聞いた時、何がどうなっているのか分からず、ぼう然としてしまった。私は授業をどうしよう、全ての子どもを強制的に参加させようなんて全然考えておらず、放課後の時間を使って、私たちの活動に興味を持ってくれる子どもたち、保護者の方に参加して欲しいと思っていたからだ。そして、そのような私の気持ちは伝えていたし、先生方にも伝わっているつもりでいた。だから、この話を聞いても理解できず、自分の気持ちをわかってもらえないことを悔しく思っていた。

しかし、冷静になって、0プラザの仲間と話をしていると、私たちは確実に先生方の仕事を増やしていることがわかってきた。私たちが連絡したことを、他の先生方や保護者の方に伝えたり、その結果をまた私たちに報告したり、一番大変なのは附属養護学校の先生だったのかもしれない。また、私は、子どもたちと触れ合いたい、一緒に活動したいという願いを持っているから面倒くさいことも進んでできるが、先生たちはこの活動に対して願いを持っていない。このように考えてみると、今までの私の行動には、先生の苦労を理解し先生に感謝する態度が欠け、自分の気持ちをわかってもらい、協力を願う熱意を伝えられずにいたように思う。そして、気持ちのズレが生まれた一番の原因は、連絡のやり取りをFAXや電話で済ませていたことにあったと気づいた。

私が、附属養護学校を訪れたのは、5月24日まででただ一度、最初に相談に訪れた時のみである。一度しか顔を見たことがない人から依頼を受けたらどう思うだろうか。また、電話やFAXでは用件しか伝えようとしないが、顔を合わせれば用件以外にも話が及ぶだろうし、言葉だけでなく、表情や外見から「私」を知ってもらうこともできる。それに気づいてからはできる限り、直接お会いして用件を話すようにしたのだが、直接出かけて行くことの良さは他にもあった。それは、電話やFAXでは一対一でしかつながることができないが、出かけて行けば、事務室の方や先生方などたくさんの人とつながりをもつことができることである。時には、子どもたちやお家の人と挨拶を交わすこともできた。出かけて行くには時間もお金もかかるが、時間やお金ではどうにもならない人とのつながりを生むことができる。この経験を通して私はとても悔しい気持ちを味わったが、電話やFAXにはない直接会うことの良さや、お互いに「見える関係」になることの大切さを実感することができた。

このようなやり取りの結果、6月22日から活動がスタートした。附属養護学校の高等部の授業に入れてもらって、子どもたちと一緒に活動をする、という内容である。6月22日から7月23日までの間で、私は7回附属養護学校を訪れ、一緒に販売活動を行ったり、プールで遊んだり、泳ぎ方の指導をしたり、掃除をしたり、様々な場面に参加させて頂いた。販売活動や遊びの場面では、自分の元気の良さが生かしたり、自分がどう動けばいいのか考えて、ゆとりを持って活動することができた。しかし、学校生活の流れがよくわかっていない私は、自分が先生や子どもたちのリズムを崩しているのではないか、自分の関

わりが迷惑になっているのではないか、と感ずることが多かった。そのように感じてはいたものの、先生方に直接聞くことができないまま、一学期の活動を終えた。

しかし、子どもたちや先生方のペースを乱してまで、私たちの触れ合いたいという希望を押し付けていたとしたら、それはあってはならないことである。また、自分が迷惑なのではないかという疑問を持ったまま、子どもたちや先生と接することは自分の中でも嫌な気分だった。そのような思いから、二学期の初めに挨拶に訪れた時に、附属養護学校の窓口になってくれている東條先生に思い切って聞いてみた。「私たちが学校に入っていくことで、子どもたちや先生のリズムを崩しているように感じるのですが、迷惑になっていませんか」と言うと、東條先生は、「そんなことはないですよ、他の先生からもそのようなことは聞いていません」と、おっしゃってくれた。その一言を聞いて、それからは迷惑だったら嫌だという不安を抱えながら子どもたちと関わることは少なくなってきたし、今までのような関わり方でいいのだという自信にもつながった。

このような附属養護学校の先生方との関わりを通して、外部と連携していくために必要だと思ったことは3つある。まず1つ目は、連携の際には一人で悩んでも始まらない、ということである。自分一人でプランを形にしようと悩むのではなく、行き詰まったらどんどん相談するべきだと思った。そうすることで、連携の際に重要な相手の立場というものが見えてくるし、両者にとって都合のいい形が生まれやすいからだ。

2つ目は、見える関係になるまでは、出かける時間を惜しまない、ということである。自分の考えが相手に伝わりきっていないうちに、電話やFAXなどを用いて連絡を取り合うと誤解が生まれやすい。自分の思いや人柄をわかってもらおうとするなら、直接会って話をするのが一番である。また、相手にとって見れば、時間をかけて話をしに来たのと、電話一本で用件を済ませるのとでは、話を聞く姿勢が変わってくるだろう。その点でも、出かける時間を惜しまずに出かけて行くことの意義は大きい。

3つ目は、関係を続けていくためにも、お互いの思いを出し合う、ということである。言い出しにくいこともあるかもしれないが、無理をして、不安や不満を抱えていると、ゆとりを持って接していくことができず、関係自体が苦痛になってしまう。不安や不満などの問題点は出し合い、両者の立場から考えていくことが必要だと感じた。

この3つが、附属養護学校との関わりから、私が見つけた連携の際に留意すべき3つの基本姿勢である。教師となつてからは、「総合的な学習の時間」や「生活科」の授業作りにおいて学校外部の方と連携が不可欠であるが、その際に生かしていくことができるだろう。

#### 4. コミュニケーションの力

私は、子どもたちと接するにあたって、0プラザ全体の目標とは別に、自分なりの課題を持って臨んだ。それは、「自分の思いを伝える力、子どもたちの思いを受け取る力(コミュニケーションの力)をつけたい」というものである。この目標を持ったのも、2年生のときに参加した自閉症児のキャンプがきっかけである。そのキャンプで私は、ある自閉症の男の子とペアを組んで2泊3日を一緒に過ごした。キャンプ中には、その子の具合の悪さを察知することができず、おねしょをさせて気持ちの悪い思いをさせてしまったり、彼が泣いて手足をバタバタさせている時、何かを訴えようとしていることはわかるのだが、何を言いたいのか理解することができなかつたりと、彼に辛い経験をさせてしまったように思う。



これまで私は、喋れない子どもたちをいかに喋れるようにするか、いかに自分の気持ちを表現できるように教育するか、といった子どもの力を伸ばすことばかりに着目して障害児教育というものを考えていた。しかし、汗だくになりながら一生懸命訴えつづけている彼の姿を見た時、こんなにも体全体で表現している彼の気持ちをわからないなんて、私の方こそコミュニケーションの力をつけるべきだと思った。言葉を取られたら、自分の思いを伝えることも、人の気持ちを理解することもできない、そんな自分の存在の小ささに気づき、自分のコミュニケーション能力を高めていく必要性を感じた。そこで、自分の言葉をいかに伝えるか、子どもたちの気持ちをいかに受け取るか、という2点に留意して、附属養護学校の子どもたちと関わるように心がけた。

私は、6月22日から12月17日までで23回附属養護学校を訪れた。今では、子どもたちとたくさん会話を交わせるようになったが、初めの頃は、なかなか会話が成立しなかった。積極的に話しかけてくれる子どもたちもいたが、うまく言葉を聞き取ることができず、曖昧に返事をしたり、わかっていないのに相槌を打つこともあった。このようなことが続くと、子どもの言っていることがわからなかったらと思うと不安で、子どもたちから話しかけられるのがすごく怖くなった。そして、子どもたちと話す時に身構えている自分に気づき、悲しくなった。しかし、あるものを大切にするようにしてからは、自分から進んで子どもたちに関わっていけるようになった。それは、子どもの名前と挨拶である。「〇〇さん、おはよう」と言うと、「先生、おはよう」と返してくれる。「〇〇くん、おはよう」と言うと、ちらっと私の方を見る。自分の働きかけに対して、反応してもらえたことが嬉しくて、子どもたちと話をするに自信がついてきた。自分と子どもとのやり取りが楽しいと思えると、自然に会話の数も増えていった。最も大切だったのは、コミュニケーションを楽しむゆとりだったのかもしれない。

改めて子どもたちに、コミュニケーションの楽しさ、伝わる嬉しさというものを教えてもらった私だったが、コミュニケーションの難しさを実感する出来事もあった。10月31日のことである。この日は公開研究会に向けた劇の練習があり、お化粧もして、衣装もつけて、本番と同じように行った。準備が整い、みんなで体育館に移動しようとした時、Nさんだけは、教室の隅から動こうとしない。私はNさんの所に行き、「ステージ練習だよ。行こう」と、声をかけた。しかし、何を言っても、Nさんは「お家帰る」と言うばかり。私はだんだん焦ってきて、何とかしてNさんを移動させなければ、ということばかり考えていた。そこに、堀内先生がやって来て、Nさんの話を聞こうとしている。Nさんの話を聞いて、「そっか、お姉ちゃんの口紅持ってきたんだ。じゃあ、今度その口紅使おうね」と言うと、Nさんは立ち上がり、体育館へと向かうことができた。Nさんの言葉は私にとっては何て言っているのかわからなかったけれど、堀内先生が聞いたらきちんとした言葉。聞く人によって、同じ言葉の持つ力が全く異なることに驚き、自分にはまだまだ言葉を受け取る力が足りないことがわかった。堀内先生は、私よりもNさんのことを理解し、Nさんの言葉に慣れている。しかし、この時の対応の差はこの違いだけではない。私と堀内先生の対応の中で最も違っていたのは、Nさんの気持ちを聞こうとしていたかどうかだと思う。よく考えてみると、私はNさんを移動させることだけを考えて、「体育館行こう、ステージ練習だよ」という自分の言葉ばかり押し付けていた。しかし、堀内先生はまず初めにNさんの気持ちを聞いていた。自分の気持ちや、自分の立場ばかり押し付けるのではなく、子どもの気持ちをわかろうとする態度、どうやってNさんを動かそうか考えるのではなく、

なぜNさんが動かないのかを考えようとする態度が、私には欠けていたように思う。

附属養護学校の子どもたちと関わってきたり、先生方の関わり方を見ていて、コミュニケーションをうまく行う3つの秘訣を見つけた。1つ目は、相手の名前を早く覚えて、挨拶を大切にすること、2つ目は、自分の気持ちや立場をぐっと堪えて子どもの気持ちを聞こうとすること、3つ目は、言葉以外の手段をもっと大切にすることである。先生方の関わり方をしていると、子どもに顔を近づけて目をじっと見つめて話かけることが多かったように思う。

そして、これらの3つの秘訣の基本ともなっているものは、コミュニケーションを楽しむ気持ちである。この気持ちがあったからこそ、3つの秘訣に気づくことができたし、不安を乗り越えて子どもたちともっと話したいと思えるようになった。コミュニケーションに困難があると言われている子どもたちに対して、発音を教えることよりも、語彙を増やすことよりも、コミュニケーションの楽しさに触れさせてあげることが先決である。それが、コミュニケーションの力を高める第一歩であると感じた。

## 5. 0プラザの活動を通して見つけた課題

私は、附属養護学校での活動の中で、ひどくショックを受けたことがある。それは、帰りの場面での出来事である。高等部の子どもたちの多くは、電車で通学をしているので、駅まで見送りに行った。すると、耳を両手で押さえてしゃがんでいる高等部のHくんの周りを附属小学校の子どもたちが5、6人で取り囲むように立っていた。何か話かけようとしているのかな、と思って見ていると、1人の男の子が笑いながらHくんの頭をなで始めた。他の子どもたちのにやにや笑いながらその様子をじっと見ていた。私はその光景を見て、とても不自然だと思った。高校生の頭を小学校低学年の子どもたちが笑いながらなでているなんて、どう考えてもおかしい。また、高等部のHさんが、「附属小学校の子たち嫌い。あっかんべーするから嫌い。あっかんべーしちゃいけないんだよね」と、何度も何度も確認するように言っているのを聞いたことがある。

このような、附属小学校の子どもたちが附属養護学校の子どもたちに接する態度を知って、とてもショックを受けた。そして、このような障害を持つ人との関わり方がわからない子どもたちが、大人になって社会を築いていくことに不安を感じる。しかし、これは子どもたちのせいではない。子どもたち同士が接し方を学ぶ場を与えてあげることができなかった教師の責任である。

私は、教師になったら、障害を持つ子と持たない子との交流教育に力を注ぎたいと思っている。様々な人と関わることは、子どもたちの成長にとって良い影響を及ぼすだろう。しかし何よりも、関わり合って、お互いを理解しようとする経験を重ねることで、障害者の視点に立てる人間に育って欲しいというのが最も大きな願いである。そのためにも、養護学校と普通学校の教師がますます連携していくことが必要となるが、この活動で得た「連携する力」を生かして、教師という立場から障害者が住みよい社会をつくっていきたいと考えている。「交流教育による社会づくり」が、私の生涯をかけての課題である。



# 世代間交流の可能性

## —「信大YOU遊広場」の実践を通して—

白井克典 社会科学教育専攻 3年

# Possibility of Intergenerational Exchange

## —Through Practice of Shin-dai YOU-Yu Plaza—

SHIRAI Katsunori : Major: Social Science Education, Junior

I think that intergenerational exchange is important for children because of what I learned during my experience with Shin-dai YOU-Yu Plaza.

So I consider the importance and possibility of promoting such exchange through the YOU-Yu Plaza program at Shinshu University.

【キーワード】世代間交流 プレーパーク YOU遊フェスティバル 学校教育

### 1. 世代間交流の必要性

私は大学に入学するまで祖父母、両親、兄弟の住む実家で生活していた。幼い頃から祖父母に昔の遊びや昔の知恵を教わったり、祖父母がまだ若かった時の話や祖父母が体験した戦争の話など様々な話を聞いたりして育った。祖父母の話をワクワクしながら聞いた思い出は今でも鮮明に覚えている。戦争のことを学校で教科書を使い習った時はたいして戦争について深く考えなかったが、しかし祖父が戦争に出兵した時の実体験を話してくれたとき戦争について真剣に考えなくてはならないと思い一生懸命勉強したということがあった。祖父母から教えてもらったことや聞いたことは幼かった頃の私にも今の私にとっても大変貴重な経験となっている。このような自分の経験から子どもはお年寄りと接することで様々なことを学んでいくことができるのではないかと考えるようになった。

また、祖父母と生活を共にすることで私は様々なことを教えてもらったが、またそれと同時に人を尊敬し思いやる人間性が育まれたように思う。祖父の手はとても大きく、とても硬い。幼い時に「どうしてこんなにおじいちゃんの手は大きくて硬いの。」と聞いたことがあった。そうすると祖父は「小さい時から鋤を持って畑仕事をたくさんしてきたからこんなに大きくて硬い手になったんだよ。」と教えてくれた。その時、おじいちゃんてすごいなと感心したことがある。お年寄りを尊敬し思いやりなさいと口で言われただけで子どもが実際にお年寄りを尊敬し思いやることができるのかということそれは難しいのではないか。私はお年寄りを尊重する態度や尊敬する気持ち、思いやる豊かな人間性は先に述べた私の経験のように実際にお年寄りと関わることを通してはじめて育まれていくものであると考える。

平成8年2月10日発行、東京書籍株式会社出版の『新編新しい社会6年上』の教科書では「長く続いた戦争と新しい日本の出発」という項目で子どもたちが戦争の様子をおじいさんとおばあさんに伺うという設定で104ページから112ページの文章が構成されている。

このように教科書からも子どもたちがお年寄りから様々な話を聞くといった学習活動の必要性を読み取ることができる。つまり、このような子どもとお年寄りとの交流という教科書の構成は学校教育において教科書だけで戦争のことを教えるのではなく地域のお年寄りと実際に交流し、話を聞くという学習が子どもたちにとってよりよい学びであるということであると表していると考えることができる。

また、第16期中央教育審議会第二次答申からも子どもとお年寄りとの交流の必要性を見ることができる。

来年度(2002年度)から総合的な学習の時間が全面実施されるが、平成9年6月26日に発表された第16期中央教育審議会第二次答申では、総合的な時間の活用として「高齢社会についての基礎的な理解を深め、介護や福祉の問題などの高齢社会の課題について考えを深めていく」ことが、道徳や特別活動をはじめ各教科間の関連づけを図ることとともに述べられている。(山崎保寿 『総合的な学習の教育経営ビジョン』 信濃教育会出版部 2000年 p13～p14)

また第二次答申では、子どもたちに他者を尊重する態度や尊敬する気持ち、他人を思いやる豊かな人間性を育むために子どもたちと高齢者が実際に交流し、触れ合う体験活動などを一層重視していくことが必要であると述べられており、このことから子どもの豊かな人間性を育むためにはお年寄りとの交流が重要であることがわかる。

以上で述べてきたように自分の経験や教科書、第16期中央教育審議会第二次答申などから私はお年寄りとの交流が今の子どもたちにとって重要なのではないかと考えるようになった。

## 2. 世代間交流と現代の子どもたち

現代の子どもたちはお年寄りと接する機会が極めて少ない。家にお年寄りのいない家庭(核家族)が増えていることがひとつの大きな原因であると考えられる。そして、それ以上に子どもがお年寄りだけではなく他者との交流をあまりしなくなったということが考えられる。昼間は学校に行き、放課後は学習塾行き、家に帰ったら自分の部屋に閉じこもりテレビゲーム、というような子どもが増えたのである。私が小学生の時には家から外に一歩出ればそこには友達、上級生、下級生、大人、お年寄り、いろいろな世代の人達がいた。他人の家のビニールハウスを改造して基地にしてその家のおばあさんに怒られるといったこともあった。私の幼い時には、昼間は学校に行き、放課後は学習塾行き、家に帰ったら自分の部屋に閉じこもりテレビゲーム、というような子どもよりは他者との交流があったことは確かである。

大学2年の夏に介護等体験で一週間特別養護老人ホームに行きボランティアをしたことがあった。その時、寮母さんが「この施設にも大学生など様々な人がボランティアにきてくれるが、お年寄りとの接し方が分からずお年寄りと話ができなかったりお年寄りを敬うことができなかったりする人が多い。」ということをやっていた。このことから子どもだけ



ではなく大学生、そして大人までもがお年寄りと交流する機会が少なくなっていることがわかる。

今日、このように子どもとお年寄りとの交流の機会が少なくなっているが、「1. 世代間交流の必要性」で述べたように自分の経験や教科書、第16期中央教育審議会第二次答申などからお年寄りとの交流が今の子どもたちにとって重要なのではないかと考えていた私は信大YOU遊広場で子どもとお年寄りが交流できる活動を展開していこうと決めたのである。

信大YOU遊広場の活動は茂菅ふるさと農場や牟礼ふるさと農場など子どもと学生、親子、お年寄りなど世代間で交流する場は数多くあるが、ここでは私が深く活動にかかわったキャンパスプレーパークと信大YOU遊フェスティバルでのしめ縄作りでの実践を通して世代間交流、得に子どもとお年寄りとの交流の重要性、そして可能性について以下では考えていきたい。

### 3. プレーパークでの世代間交流

できることが制限されてしまい思いきり遊ぶことのできない今日。好奇心の旺盛な子どもたちのさまざまな力は発揮されないまま眠っている。そんな子どもたちをはじめ、それを取り巻く大人達や大学生の好奇心や欲求を大切に、できる限りやりたいことのできる場所をつくりたい。継続的に子どもたちと関わる活動をしたい。大学での授業を生かした活動をしたい。また、近年少なくなっている世代間の交流の場（お年寄りから昔のあそびを教えてもらったり、お父さんやお母さんと思いきり遊ぶことなどができる場）を作りたい。このような学生の想いを実現するためにキャンパスにプレーパークを作ることにした。プレーパークの場所として信州大学教育学部内W館横の空き地を貸していただきそこにプレーパークを作ることになった。（キャンパスプレーパーク設立の理由より）

私がプレーパークに関わろうと思ったきっかけは、子どもがお年寄りと接することで様々なことを学び、子どもたちにお年寄りを尊重する態度や尊敬する気持ち、お年寄りを思いやる豊かな人間性を育んでほしいと考え、子どもとお年寄りとの交流の場を作りたいという願いを持っていたからである。

キャンパスプレーパークは平成13年4月28日に開園し、木曜日15時から17時と土曜日の10時から17時まで毎週2回オープンしている。12月現在計47回一度も休むことなくオープンしている。子どもたちはベゴマ、釘さし、フリスビー、縄跳び、バドミントン、サッカー、折り紙、竹とんぼ、泥遊び、小屋作り、雪合戦など様々なことをして遊んでいる。学生はプレンジャー（子どもと遊んだり、子ども達の代弁者になったり、いざという時の責任者）として子どもに関わっている。

・キャンパスプレーパークへの世代別来園者数は以下の通りである。

	大学生	中高生	小学生	幼児	大人	お年寄り	先生	その他
人数	334	13	381	118	95	24	12	17

・人数は全て述べ人数

子どもとお年寄りとの交流という観点でキャンパスプレーパークへの世代別来園者数を

みるとお年寄りのプレーパークへの来園人数は年間 24 人であり小学生の 381 人に比べかなり低い。また、活動自体を振り返ってみても子どもとお年寄りとの交流はさほど見られず、私が考えていた子どもとお年寄りとの交流の場としてのプレーパークは多くの課題を残した。

子どもとお年寄りとの交流は少なかったが、しかし、子どもとお年寄りとの交流がなかったわけではない。数少ない交流ではあったがある出来事が子どもとお年寄りとの交流の重要性と子どもとお年寄りとの交流の新たな可能性を明らかにしてくれた。

その出来事とは、たまたまプレーパークの横を通りかかった 90 歳のおばあさんがグラウンドで子どもたちが遊んでいるのをみて何かと思いプレーパークに立ち寄ってくれたのである。子どもたちとの交流はなかったが、私達学生に戦争の話や、おばあさんの少女時代の話や昔の遊びを話してくれたのであった。私達に話をしているそのおばあさんの顔はとても生き生きとしていた。そして、おばあさんは「今日はとても楽しかったです。若い人とこんなに話すことができて、こんな楽しい日は久々です。また、機会があったら寄らせていただきます。」と笑顔で帰っていかれた。その後、おばあさんは何度かプレーパークを訪れてくれた。

この出来事を通して子どものために子どもとお年寄りとの交流が必要であると私は考えていたが、お年寄りにとっても子どもとの交流は重要であると考えようになったのである。日本社会は 1970 年に高齢化社会に突入し 1994 年には 65 歳人口が人口全体の 14 パーセントを超え高齢社会になった。そして、今後ますます高齢者が増えることが予想されている。そのような高齢社会の中でお年寄りも子ども以上に生き生きと生活していく必要がある。先に述べたおばあさんは私達と話している時、とても生き生きとした顔をしていた。そして若い人と話すことができてとても良かったと言って帰っていかれた。おばあさんは私達と話すことをとても喜んでくれた。お年寄りにとって若い世代と関わりあうということとはとても嬉しいことなのであると思う。

子どもにとってだけ「子どもとお年寄りとの交流」が重要であるだけでなく、お年寄りにとっても「子どもとお年寄りとの交流」は重要なのであると気づき、子どもとお年寄りの交流の新たな可能性について知ることができた。

最近プレーパークのオープン日以外にプレーパークで遊んでいる子どもを見かけるようになった。そのような光景を見ているとプレーパークが地域に少しずつ親しまれ地域教育の場として根付いてきているように感じられる。今後ますますプレーパークを子ども、学生、親、お年寄りが世代を超えて伸び伸びと遊び、互いに生き生きと学びあえる場にしていきたいと考えている。

#### 4. Y O U遊フェスティバルでの世代間交流

12 月 8 日に信州大学のキャンパスにおいて Y O U遊フェスティバルが開催された。この Y O U遊フェスティバルで私は「信大茂菅ふるさと農場」で取れたわらを使い子どもたちと一緒にしめ縄を作る講座「ザ・しめ縄」を開いた。

私がこの講座を開こうと思ったきっかけは 3 点ある。信大茂菅ふるさと農場で取れたわらを活用し、子どもたちにわらの利用方法について学んでほしかったということが 1 つめの理由である。2 つめは子どもたちにしめ縄を作ることを通して日本の伝統文化を学んで



ほしかったということである。3 つめは外部から講師を招くことで子どもが年上の方（学生を除いた）と接する機会をつくりたかったということである。「ザ・しめ縄」ではしめ縄を作ることが一番の目的だが、それだけではなくわらの利用法について知ること環境について考えたり、日本の伝統文化について学んだり、年上の方と交流することを通して子どもに様々なことを学んでもらうことも大きな目的であった。

外部講師として信大茂菅ふるさと農場でお世話になっているJA長野の大内さん、農家の林部さん、大内さんから紹介していただいた牟礼村の高嶋さんにしめ縄の作り方を教えていただくことになった。しめ縄の作り方すら分らなかった私たちはまず子どもたちに教える前に自分たちがしめ縄作りの作り方を知らなければならぬと考え、教材研究として12月30日、12月1日の2日間、大内さん、林部さん、高嶋さんの三人の講師にお出でいただき、しめ縄の講習会を開くことになった。三人の講師を招いての講習会は驚きの連続であった。講師の方々のしめ縄の教え方は言うまでもなく、とても丁寧で分かりやすかった。そして、それ以上に講師の方々の姿から多くのことを学ぶことができた。講師の方々がしめ縄を作る姿から私たち学生にはない力強さを感じる事ができ、また、わらを縫うその手つきからは力強さだけではなく繊細さを感じる事ができた。講師の方々が何も語らないときでも講師の方々の姿から私たちは自分達にはない力強さや繊細さを感じる事ができたのである。私は子どもたちが講師の方々と接する中で子どもたちが自分たちにはない力強さや繊細さを講師の方から感じてくれたらとても素晴らしいことだと強く感じたのである。

12月8日のYOU遊フェスティバル当日は林部さんが講師として「ザ・しめ縄」に参加して下さった。しめ縄の作り方を学生に教えてもらう子どもや、林部さんがしめ縄をつくる姿を見て、見よう見まねで悪戦苦闘しながらもしめ縄を作る子どもなど様々な子どもの姿を見ることができた。林部さんと子どもとの交流も多くあり、子どもたちは林部さんの姿から物づくりの本質など多くのことを感じ、学んでくれたに違いないと思う。悪戦苦闘しながらも子どもたちは全員、自分のしめ縄を作ることができ、笑顔で帰っていった。

今回の「ザ・しめ縄」では林部さんの姿を真似て、しめ縄を作ろうとする子ども達の姿を何度も見る事ができた。

門脇厚司氏はその著者『子どもの社会力』の中で模倣について次のように述べている。『他人の動作や振る舞いを見て、多くのことを学んでいくことは誰でも知っている事実である。「真似ぶは学ぶに通ず」ということわざがあるように、物心ついた人間が他人のすることなすことを意図的に真似ることによって社会生活に必要な多くのことを学んでいくことは確かなことである。模倣は人間の社会力を培い、その社会の成員として相応しい社会的要素を共有する上で重要な役割を果たしている。』（門脇厚司 『子どもの社会力』 岩波書店 1999年 p88）このように子どもがお年寄りと交流し、お年寄りの姿をみて様々なことを学ぶことは人間の社会力の育成に大きな役割を果たしているといえる。

## 5. 学校に世代間交流を取り入れる

今までの教育は教師が生徒に全てを教えるというものであった。教師は絶対的なものであるという考えは薄れてきているにせよ、今までは学校という場所で教師だけが生徒に教えるということだけが学びの形態であった。

来年度（2002年度）から総合的な学習が全面実施される。平成10年7月29日に出された教育課程審議会答申では総合的な学習の時間のねらいを次のように述べている。『「総合的な学習の時間」のねらいは、各学校の創意工夫を生かした横断的・総合的な学習や児童生徒の興味・関心等に基づく学習などを通じて、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てることである。』（以下省略）

ここで注目すべきことは「各学校が創意工夫を生かした」という部分である。私は学校というものは地域から独立したものではないと考えている。子どもにとって学校は地域の中の一部である。特色のない地域などどこにもない。このことから地域の特色を生かした学校づくりが、各学校の創意工夫を生かした学習につながると考えることができる。

学校と地域との連帯を図っていくことが総合的な学習の時間では重要なことである。地域に出かけたりや地域の人々と接する中で子どもたちは地域の一員である事を自覚し、郷土の歴史や文化、伝統についてより深く、広い学習活動を展開していくことができると考える。そして私は、子どもが地域の歴史や文化を学んでいくためにもお年寄りとの交流が必要であるとする。YOU遊フェスティバルでのしめ縄作りの実践は子どもとお年寄りとの交流が子どもの社会力の育成にとって重要であるということと共に、学校教育においても世代間交流を取り入れることができるというあらたな可能性を明らかにしてくれた。

## 6. 終わりに

以上のように世代間交流、特に子どもとお年寄りとの交流の重要性と可能性を信大YOU遊広場の実践を通して考察してきたが、私は改めて世代間交流の重要性を感じるようになった。

子どもとお年寄りとの交流する機会が増え、互いに学び合い、生き生きと生活できるようになれば素晴らしいことであると思う。

今後ますます子どものお年寄りとの交流の場を築いていけたらと考えている。

### （参考文献）

門脇厚司 『子どもの社会力』 岩波書店 1999年

山崎保寿 『総合的な学習の教育経営ビジョン』 信濃教育会出版部 2000年





# 人間関係、そして「信大YOU遊広場」

一出会うことが出来た人から学んだこと一

西澤俊輔 理数科学教育専攻 3年

## Human Relationships And Shin-dai YOU-Yu Plaza

—What I Learned from People I Met—

NISHIZAWA Shunsuke : Major, Science and Mathematics Education, junior

This paper deals with the people I met at YOU-Yu Plaza farms and "Play-park" held by Shinshu University for elementary school students. It considers what is important for good communication and the meaning of human relationships.

【キーワード】 牟礼ふるさと農場 茂菅ふるさと農場 プレーパーク 他人との関わり  
スタッフ 地域の方々 親と子 あいさつ

### 1. はじめに

わたしはこのYOU遊広場において、とても多くのことを学ぶことができた。

一番わたしに影響を与えたことは、他人と関わるということである。YOU遊広場の活動に参加すれば、自然と多くの人間と関わることになる。それはスタッフという仲間だったり、参加者だったり、その親という場合もあったし、協力してくれる地域の人たち、といったようにさまざまである。

スタッフとの関わりについてであるが、スタッフは主に同じ信州大学の教育学部で学んでいる仲間である。教師になるという同じ夢をもっている場合が多く、同じものを目指すということであまり話がまとまることも多かった。しかし、逆にぶつかり合うときもあった。激しい口論となったときもある。しかし、それが自分にとって、また相手にとってもマイナスであったかという、そうではなかったように思う。むしろ自分以外の他人と口論することによって自分の考えを基にまとめようとする力、自分の意見をはっきり相手に伝え、相手を納得させようとする力、そして、相手の意見を聞くことによって自分の考えに新しい展開が見えたりと、自分の心が豊かになるということ、などプラスになっていることのほうが多いように思う。それに、自分も相手も、はっきりものを言うという行為をして初めてお互いを分かり合えるということもあるのではないだろうか。お互いの意見をぶつけ合ってお互いが磨きあってさらによいものが出来上がるということになるだろう。だからといって、ぶつかり合うことが良いというわけではない。意見がうまく合えばそこは協力してやっていけばよいのである。同じことを考えながら一緒に活動できる仲間がいるということが、喜び、励みになるだろう。また、いろいろな意見を取り入れるという点から見れば、信大は日本全国から学生が集まってきているため、その人たちと交流することでとても広い視野をもつことができるようになると思う。スタッフは先輩後輩という違

いはあっても学生という立場は同じであるし、年齢も近いので本音を語りやすいと思う。だから、ぜひこれからも学生同士の交流は大事にするべきだと思う。

## 2. 農場において

参加者との関わりについてであるが、このYOU遊広場の特徴として参加者は一年間通しての登録である。だから、活動しているうちにスタッフはみんなの顔や名前を覚えるし、参加者も他の参加者の名前や顔、スタッフの名前や顔を覚えてくれる。そうすると、二度目三度目の活動ともなれば子どもたちが来ると「〇〇ちゃん、おはよう！」という学生からのあいさつがあったり、「あー〇〇だー！」と子どもたちが笑顔で駆け寄ってきてくれたりする。相手の顔を見るだけで、自然と楽しい気分になって、声が出てしまうのである。そんなときは心と心のつながりが持てているような気がしてとてもうれしくなる。しかし、そのようなうれしさを味わえるのは仲良くなってからに限ったことではない。各プラザの最初の活動だったり、一年間を通しての登録とはいっても、「話を聞いた」と一年の途中から登録をしてくれたりして初めて活動に参加してくれる子どもたちは当然、緊張している。初めての活動のときはスタッフですら緊張しているのである。そんなぎこちない動きの中でも何とかうまく打ち解けるようにと「おはよう！」と声をかけたり、「一緒に遊ぼうよ！」と誘ってみたりしたときに、最初は母親の陰に隠れてしまうような子が、母親から離れて一緒に活動できたときは自分を信用してくれたのかなと、思ってうれしくなる。ただ、このときに自分はひざを折ったりして子どもの顔と自分の顔を同じ高さにもってくることが大切である。自分は立ったままで、いくらやさしい声をかけても子どもたちには上からの圧迫感のほうが強いのだろうか、なかなか心を開いてはくれない。小さな子どもの場合はむしろ余計に親の陰に隠れてしまう。よく子どもと同じ視線で、という言葉聞くが、それにはまず物理的に目線を下げることが必要だということである。

このようなちょっとしたことでも、子どもは感受性が豊かなためにしっかりと感じ取ってしまうのである。同じようにわたしたちはなんでもな**い**つもりでも、子どもにとってはとても重要な問題になりえるものがある。このエピソードは、私自身が体験したものである。牟礼ふるさと農場での初めての活動のときに、それ自体はうまくいった。そして、活動が終わったあと学生スタッフが片付けなどをしている間も家の人の迎えが来ないで、わたしたちと一緒に遊んでいる子どもがいた。子ども一人という状況と、その一日でそれなりに仲良くなれたという勝手な思い込みから、わたしはその子に対して冗談のつもりであることを言ったのだが、それはその子にとっては、とてもひどい、ナイフのように心を傷つけるものとなってしまった。帰り際にその子は泣いてしまうほど傷ついていた。そしてその後一度もその子は活動に参加してくれていない。それほどその言葉は言われた子自身や親を傷つけてしまったのである。このときわたしはその旨を土井先生に話し、お詫びの電話を入れていただき、自分自身もその日のうちにお詫びのはがきを送った。もちろんこれで完璧だとは思わないが、そのとき最善と思われる対応をしたつもりである。それでもわかってもらえなかったのだから仕方がないと考えることにした。しかし、ずっとどこかで気になっていて、農場パスポートが返ってこないたびにその子のことを考え、自分の行動を悔やんでいた。そして、最後の活動のそばうちが終わったあと、もう一度家までいき、採れた野菜とその子**が**書いた「おもいでしゃしん」を持ってお詫びと来年度の**こ**についてあいさつに行った。すると、その子は笑顔でわたしたちに手を振ってくれて、うれしそ



うに「おもいでしゃしん」などを受け取ってくれた。そのとき初めてわたしも心から納得できたし、晴れ晴れとした気持ちになれた。

このことを通して学んだことは大きく二つあり、一つ目は言葉の持つ力の大きさということである。上でも書いたように子どもはいろいろなことを感じやすいしまった、子どもに限らず自分の発した言葉が思った以上に人を傷つけているものなのである。そのようなことを無くすためにも、ちょっと考えてから言葉を選べるようになりたいと思う。もう一つは、自分が失敗したときにいかに頭を下げられるかということである。人間誰しも自分の非というものは認めたくないものである。しかし、そのときにうそを言ったり、ごまかそうとしたりすると余計に自分の立場は悪くなる一方である。このときもその日のうちに相手に電話をしたり手紙を書いたりしたことによって、一年もかかってしまったが納得できる結果を得ることができたのではないかと思う。あのときに土井先生に打ち明けずにいたらこんなにうまくはまとまらずに、もっと大変なことになっていただろう。間違ったことをしてしまうことは誰にでもあると思う。いくら気をつけていてもなくすことはできないだろう。だったら、その後でどれだけ自分の誠意を見せて挽回するか、ということが大切なのだと思う。これらのことに気付くことができたように、失敗とは言ってもそこから学び取ることはたくさんある。ただ気に病むよりも一つの体験として大事にしていくべきなのではないだろうか。

活動していく中で忘れてはいけないことの一つとして、地域の人との関わりがある。わたしがプラザ長を務めた牟礼、茂菅の両農場では特に地域の方との協力が必要不可欠だった。牟礼ふるさと農場では、大学から離れた広大な畑の草取りや、畑の準備など細かい作業は、牟礼村ふるさと振興公社の方にやっていただいた。そうしなければ、とてもじゃないがわたしたちだけでは面倒見切れなかったと思う。また、何か作物を植えるときや、収穫するときにもわざわざ農場まで来てくださって、手順を説明したり、お手伝いをしたりしてくださった。そばうちの時には会場の手配などをしていただきとても助かった。茂菅ふるさと農場ではJAを通じて地主の方から農地を借りたし、田植えを始め、多くの作業のたびに近所で農家を営んでいらっしゃる林部さんのご指導をいただいた。田んぼに稲を植えた後では、水利組合の方に無理を言ってポンプの当番を教育実習からはずしてもらったりした。時には学生にさし入れを持ってきてくれる人もいて、とてもありがたく思った。このように、いろいろな人と協力しながらやっていくことはとても大切である。わたしたちはあくまで学生であり、できることには限界がある。他の機関の手を借りなければできないこと、誰かに教えてもらわなければならないことはたくさんあり、そんなときには遠慮しないで協力をお願いすればよいと思う。ただ協力をお願いするだけではなくて、こちらからはできる限りの地域貢献ができればそれでよいと思う。何か物で返すというのではなく、わたしたち学生ができることでよいのではないだろうか。採れた野菜をお分けするとか、何か体力的なことで作業を手伝うとかそれで十分だと思う。そういうつながりを持っていく中で、茂菅ふるさと農場に関係している多くの学生は、地域の農家の林部さんとても仲良くさせていただいている。このような関係はこれからもたくさん持てるようにしたいし、大切にすべきだと思う。

また、いろいろな活動のときに、保護者の方からたくさんのさし入れをもらったこともあった。こちらで準備するものの足しにと家から持ってきてくれたりしてくれて、わたしたちはとても助かった。このようなちょっとした心使いはわたしも見習って、今後わたし

自身も気が付けられるようになりたいと思う。

### 3. プレーパークにおいて

もう一つわたしが今まで主に関わってきたものに、プレーパークがある。プレーパークについての説明は別にあるのでそちらを参考にしてもらいたい。こちらでも多くの人との交流があり、とても考えることが多かった。プレンジャーとしてわたしはあの場にいるわけだが、いつもというわけにはいかないが、学校が終わってから、お昼を食べてから、それぞれ子どもたちは遊びにきてくれる。毎週木曜日と土曜日にオープンしているので、ほとんど毎日遊びにきている子はとてもなれた様子で遊びにくる。そういった場合は、わたしたちも子どもたちも大きな声でいつものようにあいさつをして、それぞれ好きなことをして遊ぶのである。たまに友達をつれて遊びにきてくれる子もいて、そんなときには両方を知っている子を中心に自己紹介があって、お互いの名前を覚えてから、遊ぶようにしている。このように、ある程度なれている場合には、子どももわたしたちプレンジャーもとてもやりやすい。しかし、初めて遊びにくる子たちにとってはあの広くて、大学生たちのいるスペースは入りにくらしく、出入り口のところでもぞもぞしていることが多い。そうしたときに、プレンジャーの出番である。せっかくプレーパークに興味をもってきてくれたのだから楽しく遊んでももらいたい、そんな気持ちを持ってわたしたちが呼びに行くのである。ここでプレンジャーが気負いしては始まらない。子どもたちは勇気を持って遊びにきてくれたのだから、それに対してわたしたちも勇気を返すように一言話しかけるのである。はじめのうちは緊張もしたし、何を言ってよいのかも分からなかったが、とても簡単なことだということが分かった。笑顔で「おはよう」の一言でよいのである。このことは農場についてのときにも書いたが、それほどあいさつというものは大切なのだということである。その一言さえ言えればそれまで硬かった雰囲気はやわらかくなる。それから名前を教えあえば、もう今まで遊びにきていた子どもたちと変わらない。思いっきり遊べるようになる。

プレーパークとは、基本的に何をしても自由だし、自分のやりたいことができる場を目指している。しかし、実際に遊びにきている子どもたちを見ていると、自分が同じ年頃だった時とは少し違っているように思える。それはどんなときかといえば、自分から遊べないということである。それでも最近子どもたちが自分から何かを始めることも多くなってきたが、こちらから「〇〇しよう」と持ちかけなければ「やることないから帰る」といって家に帰ってしまう子が何人もいたのである。プレーパークには何か作れるようにと木切れや、とんかち、竹なども用意してあるし、ある程度の広場もある。それだけあったら工作や、鬼ごっこ、草花もあるときにはそれを使った遊びなど、何でもできると思っていた。家からボールをもってきて、バットとグローブも持ってくれば野球だってサッカーだってできるはずだ。なぜ自分から遊ぶことができないのだろうか。プレーパークは自分が思ったことを何でも形にできる場所なのだから、もっと自分の自由な発想を生かしてもらいたい。そうやって自分で遊びを創造することを通して、自ら考える力が育っていくのだと思う。そして、いろんなことを体験し、学び取ってってもらいたいと思う。焚き火をしたり、思いっきり走り回ったり、普段ではできないようなことができるのだから、それをぜひ体験してもらいたい。また、それができるようなプレーパークを目指していきたいと思う。



自分のやりたいことができる場所について、最近困っていることがあり、みんなで話すこともあった。わたしたちブレンジャーに対して主に子供たちはいたずらをしてくるわけだが、それがわたしにとってどのようなつもりでやっているのか判断しにくいのである。子どもたちの力はそのくらい強いわけではないのでたいして痛くないから大概のことは笑ってすませられる。それに、わたしたちだからこそ大丈夫と思ってやっていることならば、一種の愛情表現として受け止めてあげたいと思う。しかし、たまに木の棒を使ったり、噛み付いたり、行き過ぎていると思われることや、ブレンジャーに対して、首や手、腰にひもをつけてまるでペットや奴隷のようにしようとするというような、見ていてあまり良い気のしないようなことについてはどうすべきなのか迷うのである。もちろん周りの子どもたちに危険性がある時や、他の子に対してひどいことをしたときにはしっかりと注意している。しかし、それ以外の場合、上にもあるように愛情表現としてわたしたちは受け止めるべきなのか、それとも行き過ぎた場合にははっきりと拒否すべきなのかいつも答えが出ないままなのである。

どんなことでも子どもの愛情表現として受け止めるという意見も分かる。というのも、子どもたちがそのようなことをするのはわたしたちブレンジャーだけで、しかもブレンジャーの中でも力の強そうな男子や、女子の中でもごく限られた人なのである。ということは、子どもたちはしっかりと相手を見極めて、自分なりに考えながら遊んでいるということではないだろうか。そのように子どもたちが考えながらやっていくことやめさせてしまうことをわたしたちは望んではない。むしろ、そこから遊びの輪が広がっていくのであれば、わたしたちが多少の犠牲になるくらいは何てことはない。しかし、そうやって良い方に良い方にと考えて、全てを許すことにわたしとしては不安を感じるのである。なぜならば、いくら考えながらやっているとはいえ、暴力を許してしまっている状況をそこに作り出してしまっているのである。はたしてそれで良いのだろうか。プレーパークにはまだ小学校にも行ってないような小さな子どもも遊びに来る。そのようなこれから思考能力が成長していく子の前で、木の棒を振り回したり、人に噛み付いたり、というような行動はあまり良い影響を与えないものだろう。むしろ、そういった行動は許されることなのだと間違った認識をさせかねないのではないだろうか。周りで見ている人間だけではなく、やっている本人でさえ、そのうちに他人に対して叩くなどの行為はしてもいいものなのだと勘違いしかねないような気がする。普段行っていることは、ふとした拍子に思わぬところで出てしまうものである。そうならないためにも危ないことは危ない、痛いことは痛い、自分が嫌なことは人も嫌なのだというをはっきりと伝えて、やらないように言うことの方が本人にとっても、周りにとっても必要なことだと考えている。

このような話し合いをする中で、最近わたしが思うのは注意のしかたの問題ではないか、ということである。自分が嫌だと感じたことに関して遊びの延長のように、注意しているのかそうでないかわからないような言い方では、子どもたちに本当に伝えたいことは伝わらない。注意するときにはしっかりと子どもの目を見ながら、理由を言ってからやめるように言うべきだと思う。ただ「やめて」というだけでは子どもは納得してくれない。子どもだからといっていい加減に扱って良い訳がない。同等に接する事で始めて相手に伝えられるのだと思う。このことはある人の受け売りなのだが、自由とわがままは全く別のものである。自由になんでも出来るからこそ、そこに関わるもの全てに共通のルールが必要なのである。そして、それは自然と発生するものである。それに逆らうものには何らかのペ



ナルティーがあるだろうし、こちらが何かしなくてはと変に構えるよりは、自然のままで行けば逆にうまくいくようになるのではないだろうか。

もう一つプレーパークにいて感じたことがある。それは親の意識の違いである。最近の子供たちは外で元気に遊ばなくなったとか、家の中にばかりいる、というようなことを耳にしたことがあるが、その原因の一つとして親からのプレッシャーがあると考えられる。プレーパークに遊びに来ている子どもの中にも泥遊びが好きで思いっきりやっている子や、その周りで羨ましそうにみているだけの子がいる。周りでみているだけの子に対して一緒に遊ぼうと誘っても母親に怒られるからいやとか、この前汚して怒られたからいや、と言うのである。一度子どもを連れて遊びに来た母親が、子どもが泥遊びをして服が汚れている姿を見て、「もうここには来られないね」と言うことがあった。また、別の母親においては、自分の子どもに「走ったりしておいで」と言っておきながら、土に触ろうとすると「汚いからそんなことしないで」と言うのである。いったい子どもはなにをして外で遊べばいいのか。服が汚くなっただけ、洗えばすむことではないのか。子どもたちは自分で見るもの、触るもの全てから様々なことを吸収していくのである。何が子どもにとって必要なものだったのかなんて誰にもわからないのである。だったら大人の勝手な判断で取りあげてしまうことは言語道断である。親やわたしたち教師を目指すものというような、子どもと関わるものとしてはできる限りの手助けと、体験できるチャンスを与えてあげたいと思う。いろいろと偉そうなことを書いてきたが、結局わたしはプレーパークではプレーンジャーニッシーとして子どもたちと思いっきり遊ぶことが楽しくて仕方がない。

#### 4. 最後に

わたしはこの二つ以外にも、メンタルフレンドで城山中間教室に通っているし、長池診療所の健康祭りにもお手伝いをしに行ったこともある。どこに行ってもいろんな個性を持った素敵な人との出会いがあった。その度にここでは書ききれないような体験をし、いろいろな事を学ばせてもらった。教師を目指しているわたしとしては、今後の生活に必ず生きてくるであろう貴重な体験だったと思っている。今のこの学生という立場でしか知ることができないこと、出来ないことはまだまだたくさんあり、それが出来る場所がこのYOU遊広場だと思う。ここでは自分の可能性を思う存分発揮できる。そしてそれを支えあうことが出来る仲間もいるし、サポートしてくれる素晴らしい先生方もいる。言葉は良くないが、これからの学生にはもちろん、私自身もまだ一年という時間があるのでYOU遊広場を利用して、いろいろなことにチャレンジしていきたいと思う。また、シンポジウムや、全国フレンドシップ活動を通しての他大学生との交流はぜひ大事にしたいものである。他の大学の活動を通して自分たちの活動を見直すことによって、お互いがさらによいものになっていくからだ。また、他大学の学生と意見の交流することによって活動の幅も、自分の視野も広がる。自分が楽しむという面でも大切にしていきたい。

この一年間、頼りない農場長としてやってくることができたのは素晴らしい先生方、かけがえのない仲間たち、そして地域の方々が惜しむことなく協力して下さったおかげだと思っている。みなさんにこの場を借りてお礼をしたいと思う。本当にありがとうございました。



# 学びの場

## —「信大YOU遊広場」における子ども理解—

清水美香 教育実践科学専攻 3年

# The Field of Learning

## —Understanding of Children in Shin-dai YOU-Yu Plaza—

SHIMIZU Mika : Major: Educational Science, junior

I think that the root of practical teaching skills is the understanding of children. I learned more about this through working with them during Shinshu University YOU-Yu Plaza activities. I consider how such activities are helpful for the student who aims to become a teacher by comparing Shin-dai YOU-Yu Plaza with a school.

【キーワード】 子ども理解 実践的指導力 継続的な活動 体験

### 1. はじめに

信大YOU遊サタデーが閉幕し、今年度新たに信大YOU遊広場がスタートした。活動が継続的になり、7つのプラザにわかれるなど内容にも多くの相違点がある。しかしこの2つの活動に共通するものは「実践的指導力」の向上をねらいの一つにしている点である。机上の理論のみでは得ることのできない体験を通した「実践的指導力」の獲得の場として多くの学生が参加してきたが、具体的にどんな力が身に付いたのかを振り返ることで、このような活動が更に有意義なものに発展していくであろう。

そこで、1年間を通した信大YOU遊広場の活動を終え、教員を目指す学生にどんな「実践的指導力」が身に付いたのか、そしてそれはどんな活動・場面で得られたものであるかを、教師に求められるさまざまな能力の面から考察していきたい。

### 2. 継続的な活動を通して

#### (1) 子ども理解・自己理解

私は教育実習で、実践的指導力の根本にあるものは、1人ひとりの子どもを理解することであるということを学んだ。授業、休み時間、給食、清掃、その他学校生活すべてが子どもを理解することから始まる。どんなに素晴らしい指導案を作っても、実際の子どもの性格や能力、学び方の過程を理解していなければ全く意味がない。ではどのようにしたら子ども理解ができるのか。

教員を目指す学生にとって、子ども理解のためにはやはり多くの子どもたちと関わりを持つことが重要だ。多くの子どもたちと関わる中で1人ひとりの個性や特徴が見えてくる。しかし普段の学生生活の中で子どもと触れ合う機会は少ない。さらに、その日その場限りの関わりとなってしまうことが多い。短時間の関わりの中で見られる子どもの姿はその子

のごく一部であり、自らがその姿から何を学んだのか、そこから得る自らの課題はどこにあるのかを認識するのは難しい。そうした中で、子どもたちと継続的な関わりを持つ信大Y O U遊広場の活動は、一時的な関わりの中だけでは理解しきれない1人ひとりの子どもたちについての理解を深めるための、また、客観的に自らを知るための大きな機会を与えている。

教育実習中には、「子どもの中に入りすぎる」ことで生まれる弊害があることも知った。教師はあくまで教師であって、常に授業全体を見ていなければならない。子どもと接し、子どもの中に入っていき、子どもと同じ目線に立つことだけが子ども理解ではなく、子どもを客観的に見ることも必要だ。Y O U遊広場の活動中も同様であった。子どもと一緒に活動するスタッフがいる一方で、常に誰かが活動全体を見渡していた。それはプラザ長や運営委員長であったり、先輩方あるいは先生方であったりした。子どもと活動しているスタッフは、このような人たちの存在があることを忘れがちであるが、活動を円滑に進めるためにも、また、こういった活動を客観的に考えていくためにも重要であったと考える。

## (2)目的意識

こうした活動を継続的に行うためには、参加学生の意識の維持が必要である。1つの活動を終えそれで満足してしまうと活動が続いていかない。教師も同じように、日々成長を続ける子どもたちに対して、常に自らが働きかけていくべき課題について意識していなければならない。

Y O U遊広場では活動ごとに反省を行うことで学生の意識を維持していた。1つの活動に対する多様な視点からの反省や、他者の意見を知ることによって、無意識の部分が意識化され、Y O U遊プラザ全体として、また個人として新たな課題をつかんでその後の活動に取り組むことができる。この例として、1プラザ牟礼ふるさと農場での言葉の災害があった。何気なく発した言葉が子どもの心を傷つけてしまったという出来事だ。この出来事で改めて言葉の重みを知り、それ以後スタッフは「ゼロ言葉災害」を意識しながら活動を続けた。

しかし課題もある。それは「反省」の中身である。ただ個人の反省を列挙するだけでは意味がなく、それらを通して今後どう改善すべきなのかといった、次につながる話し合いがもたれることが必要である。また、反省の時期も十分考慮しなければならない。反省点は活動中のその瞬間ごとの出来事から挙がるものであるもので、活動後時間が経てば経つほどその瞬間を忘れてしまう。活動後できるだけ早く反省の時間をもつことでより意義のある反省となるだろう。

## 3. 学びの場

信大Y O U遊広場は7つのプラザにわかれているが、それぞれのプラザが異なった環境のもとで活動している。ここでは私が活動に参加した各プラザが、教員を目指す学生に対して、具体的にどのような実践的指導力を身に付けるための場となっているのかについて考える。

### (1)「教材研究」の場

#### ①3プラザ：キャンパス教育の森

私がプラザ長を務めた「3プラザキャンパス教育の森」の今年度の活動では、「Y O U遊



フェスティバル」を除いて、子どもたちとの活動は行っていない。しかし、これを子どもたちと関わる以前の環境設定のためのものであったと考えることができる。まず私たち学生が体験し、それを子どもたちに伝える。いわば素材研究・教材研究である。その素材が「自然」であるため、花を植えたり、ビオトープを作ったりする時に途中から子どもたちと関わることは難しい。また、定期的な活動が必要であるため、今年度は子どもたちとの活動を見送ることとした。子どもとの関わりはなかったものの、ビオトープ作りにおいての長野市内小学校での活動の見学、活動予定地の環境調査、県土木課への訪問など、活動を始める前に知っておくべきことや整えておくべき環境の必要性を知った。

このように、今までなかった学生だけの活動をしてみて、教師が本当の意味で子どもたちに伝えていくことができるものは、自らが経験したことなのではないかと思う。そこには真実味があり、親近感がある。子どもと関わり伝える前に、教師の中に蓄えておくべきことや、準備しておくべきことがあることを思い知らされた。

素材・教材は子どもたちの身近に潜んでいる。キャンパスの中も同様に、教材となり得るものはさまざまな場所・場面にある。今年度の活動の中ではそれらを十分に生かすことができなかった。今後は子どもとの関わりを視野に入れた活動をしていくことも検討の余地がある。

#### ② 1・2 プラザ：牟礼ふるさと農場・茂菅ふるさと農場

農場では農作業自体が教材であるが、その教材をさらに生かすための教材研究が行われた。これらの農場では、毎回それぞれの活動にちなんだ学生手作りの紙芝居を行ってきた。紙芝居の内容は、それぞれの作物の特徴や歴史、その作物をめぐる文化、作業の方法など、学生がその活動を通して子どもたちに伝えたいことを取り上げてきた。それらをどのように伝えるのかその伝え方もさまざまであり、そこに教材研究の場があった。

例えば稲かりおよび脱穀の活動の際には、農業機械の普及によって変化した農作業をテーマに紙芝居が作られた。この紙芝居では子どもたちが楽しみながら学んでほしいという願いからクイズ形式が取り入れられた。さらに、実際の稲刈りでは稲刈り鎌を、脱穀では機械と足踏み脱穀機の両方を用いるなどして農作業の移り変わりを実体験することができた。稲刈り鎌で稲を刈るときの音を楽しむ姿や、勢いよく回転する脱穀機からモミだけが出てきたときの歓声から、子どもたちは農作業に対して、楽しさや新たな発見をしていたと思われる。

茂菅ふるさと農場には教材として大きな意味をもつものがある。それはこの田んぼが子どもたちの農業体験の場であると同時に国際協力田であるということだ。茂菅の農場で子どもたちと学生が作ったお米がマリ共和国へ送られていく様子を目の当たりにして初めて自覚したことではあるが、子どもたちと学生が作ったお米がマリ共和国の子どもたちの飢餓を救っているのである。子どもたちや学生にはそのことを理解した上で「農作業を楽しむ」喜びを感じてほしい。今後の活動では国際協力田について更に子どもたちに伝えていくことも必要なのではないだろうか。

#### (2) 「環境設定」の場

##### ① 4 プラザ：キャンパスプレーパーク

「遊び」は子どもの成長を支える大きな要素である。他者や物と関わる中で、さまざまな面での発達が促される。体を動かして遊ぶことによる運動的な発達、遊びの中で発生す

る役割分担や問題を通して人といかに交渉するかという社会的な発達、その時同時に起こる言語的な発達や情緒的な発達も促進されるだろう。遊びは自然発生的に起こる遊びや、何らかの意図をもっておこなわれる遊びがあるが、どちらもその「環境」が大きく影響してくる。遊びは子どもたちが作っていくものであるが、この「環境」を大人あるいは教師がさらに支えていくことで子どもたちの想像力や意欲を増進させることが可能である。

キャンパスプレーパークは子どもたちが自ら遊びを創造する場を目指して活動が行われた。子どもたちが本来持っている遊ぶ力を引き出すために、木材やタイヤ、ダンボールなどの素材や、のこぎりや金づちといった道具が用意された。「ブレンジャー」と呼ばれる学生は子どもたちの遊びを引き出すための手助けの役割した。その結果、子どもたちは体を動かしたり、手と頭を使って物を創り出したり、私たちにさまざまな遊びを見せてくれた。プレーパーク自体の自然をつかった遊びや子どもたち同士の間で作られたルールでの遊びも生まれた。

環境構成の場として大きな意味をもったプレーパークは学生にとっては子どもたちと遊ぶ中で学ぶ子ども理解の場でもあった。その子ども理解から関連して、プレーパークでは子どもを「叱る」ということも学んだ。私は今まで子どもと接する活動においてはどうしても子どもたちを楽しませたい、喜んでほしいと考えるあまり、子どもを「叱る」ということにはなかなか踏み出せないでいた。しかし1年間の活動が進むにつれて、私を含めてYOU遊広場の学生が子どもを叱るという光景があちこちで見られるようになった。1人の大人として子どもに対して、してはいけないことを「してはいけない」と言うことは、当たり前のように現在大人にはできていないといわれる。なぜいけないことなのかを子どもたちにしっかり伝えれば、子どもたちは自分がなぜ叱られたのか納得できる。活動を通して学生がこの大切さに気づいたことは大きな成果であると考ええる。禁止事項のない公園であるプレーパークでどこまでを容認し、どこからをしてはいけない行為と考えるのか、学生個々が考えていくことが今後の課題であろう。

### (3)「企画・運営」の場

#### ①5 プラザ：里山ふれあいキャンプ

学校行事の中でも宿泊行事は、子どもたちにとって思い出深いものであると同時に、教師の企画力や判断力が求められる。里山ふれあいキャンプは学生が一から企画したもので、夏休み中に2泊3日の日程で行われた。何を目的に行い、そのためにどんなプログラムを用意するのか、何が必要でどんな流れにするのか。行事の企画には、はっきりとした目的意識と柔軟な想像力が必要であることを痛感した。

キャンプ当日は悪天候で予定していた企画に変更が必要であり、その場に応じた臨機応変な対応が求められた。活動中は何が起こるか分からない。事前にさまざまな状況や事態を想定しておくことも重要であるが、予期せぬことが起きてしまったときにどのように対応するのかがその企画者の能力が問われるところである。今回のキャンプでは悪天候の場合のプログラムが細部まで考えられていなかったことが反省すべき点であったが、代用の物を探したり、思い切って考えていたプログラムを中止したりするなどして対応できた。

今回のキャンプはスケジュールに余裕がなく、子どもたちにとっても親にとっても、そして学生スタッフにとっても体力的に辛いものになってしまった。参加者の年齢や体力、能力を充分把握した上で企画をしなければならないことを思い知らされた。学校生活の中



で子ども理解が大切であるのと同じように、集団活動や宿泊行事でも参加者の現状を正確に見極めなければならない。

## ②Y O U遊フェスティバル

第1期信大Y O U遊広場の集大成として開催された「Y O U遊フェスティバル」は3・6プラザ合同の企画・運営のもとで行われた。年間の活動の中で最も参加者・学生スタッフ数が多く、そのため仕事も多かった。

私は本部で子ども・スタッフ募集を担当した。参加者とスタッフがいないとフェスティバルは成立しない。思うように参加者・スタッフが集まらず多少焦っていたところもあったが、なんとか当初の予定に近い人数が集まった。しかし、集まってくれたのに申し訳ないという気持ちと、仕事の多さの焦りで、スタッフにうまく仕事を分担することができなかった。本部が仕事に追われ、Y O U遊フェスティバル全体が見えていなかったように思う。当日までの見通しをもつことができずにただ焦るばかりで、その結果、後になって多くの問題が起きた。それが各講座のキャプテンへの過重負担にもなってしまった。スタッフにもう少し仕事を分担してもらうことで、スタッフ自身ももっとこのフェスティバルに参加したという実感が湧いたのかもしれない。

行事等を企画・運営していく時には、その規模が大きくなればなるほど細かい仕事が増えることを知った。運営側がその1つひとつの仕事にとらわれすぎると、運営側としてやらなければならない全体の進行状況の把握ができなくなってしまう。これは先に述べた「子どもの中に入りすぎない」ことと同様である。また、仕事を分担するということも、授業中に子ども1人ひとりに役割を持たせて、子どもたち全員が授業に参加しているという意識をもたせることと共通する部分であると考える。

## (4)「連携」の場

もし地域や家庭との連携がなかったらY O U遊広場はどうなっていただろう。農場での農作業や、そのための送り迎え、親子キャンプもできなかった。プレーパークにも子どもが来なかっただろう。そして教官の方々や学生、プラザ同士の連携がなかったらどうなっていただろう。Y O U遊フェスティバルの施設や備品を借りることもできなかった。他大学のフレンドシップ活動を知らずに終えていただろう。挙げればきりが無い。

Y O U遊広場はさまざまな機関や地域・家庭、そして教官や学生の連携によって活動が成り立っていた。実際の教育現場も同様だ。同僚の先生方や家庭、地域との連携があってこそ学校生活や授業が成り立つ。特に生活科や総合的な学習の時間で育てたい力である「生きる力」は、さまざまな人やものとの関わりの中で育まれるものである。日常的に子どもたちをとりまいている学校、地域、家庭の連携が不可欠である。

Y O U遊広場、学校の両者にいえることは、活動の目的や内容に対する理解が必要であるということだ。Y O U遊広場では、活動を始めるにあたって報道各社に活動の説明をしたり、教官の方々に案内を出したり、プレーパークでは大学周辺にビラを配ったりと、活動に対する理解と協力をお願いした。その結果、さまざまな方面からの協力を得ることができた。しかし、Y O U遊広場の存在が広く知れ渡り、十分に理解されたわけではない。これからも実際に活動を続け成果をあげることで、少しずつY O U遊広場の存在が広まってほしい。そしてY O U遊広場の活動がきっかけとなって地域全体がそれぞれの立場から、子どもたちとの関わり方を考えていくことができるようになることを期待する。

#### 4. 今後の課題

第1期の活動を終え、私たち学生にとってさまざまな財産を残したYOU遊広場であったが、参加者にとってはどうであろう。きっと今まで体験したことのないことを体験し、何かを得てくれているにちがいない。しかし、今後は参加者同士の結びつきも大切にしたい。今年度の活動では、参加者と学生の関わりはあったものの、参加者同士の関わりはあまりなかったように思う。YOU遊広場は、少子化といわれる社会の中で、異なった学年の子どもたちが関わり合いをもったり、保護者の方同士が関わったりするよい機会である。学生はその橋渡し役として活動を行うことも考慮に入れるとよいのではないだろうか。

また、継続的な活動であるため、今までの活動に何らかの変化を加えていくことも必要であるが、ようやく定着しつつあるこの活動をどう変えていくかが難しい点である。参加者を混乱させることにならないように、学生にとっても、そして参加者にとっても、さらに有意義な活動に発展させていきたい。

#### 5. おわりに

継続的な活動であったYOU遊広場の活動と教育実習を終えて考えたことがある。それは見通しを持つことが大切であるということだ。子どもも自然もそして私も生き物である。後戻りはできない。花を咲かせたり、稲に穂を実らせたりするためには、成長に応じてしなければならない作業がある。その時を逃してしまうと、花は咲かないし、稲も実らない。子どもも同じである。教師は子どもたちにどうなってほしいのか、どんな力をつけてほしいのかという明確な意思や目標をもち、そのためにはどんな段階でどんな支援や指導をしなければならないのかを考えていなければならない。そして子どもたちそれぞれの発達や状況に応じて、常にその時の最善の方法を模索していかなければならない。それが「子ども理解」であり、「子どもの中に入りすぎない」ことの意味なのだと思う。

YOU遊広場を振り返ってみると、そこは小さな学校であったような気がする。土井先生をはじめとする先生方や地域の方々の支えの中、学生がそれぞれ自分のしたいことを追求する。その追求の中で個々がさまざまな学びをいただろう。「体験」したことが知識や技能になって「経験」になる。YOU遊広場での体験は、今、経験として私にたくさんのものを残してくれた。実際の体験の中から、体験しなければわからないことがあることを知った。自らがこうした経験をしたからこそ、子どもたちにも自信をもって体験をさせることができるのではないかと思う。

そしてYOU遊広場は私に忘れかけていた人の温かさをもう一度蘇らせてくれた。たくさん子どもたちや地域の方々そして学生と接することで、人はそれぞれ違って、それぞれ良いところをもっているということを改めて感じた。「人」そのものや、そこにある人間関係について考えたことは数知れない。そして仲間の温かさを知った。私が1年間YOU遊広場の活動を続けることができたのも、素晴らしい仲間に恵まれ、支えられていたからである。共に悩み、喜び、涙を流した。時にはぶつかり、挫折しそうになった。しかしそれら全てを含めて、最後は「楽しかった」の一言に尽きる。この仲間に出会えて本当に幸せだと思う。本当にありがとう。

YOU遊広場は、多くの方々の理解や協力のおかげで活動を続けることができました。土井先生をはじめとするYOU遊広場に参加、協力して下さったすべての方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



# 四季と「信大YOU遊広場」

—花、生き物、人との関わりを通して—

林美智子 教育実践科学専攻 3年

## The Seasons and Shin-dai YOU-Yu Plaza

—Observing the Relationship Between Flowers, Creatures and People—

HAYASHI Michiko : Major: Educational Science, Junior

During all four seasons, as I participate in YOU-Yu Plaza activities, I was concerned with flowers, creatures, people and so on. From this experience, I learned why it is important to have contact with nature and its relationship with education.

【キーワード】 植物 生き物 四季 学校教育 見通し 子供 関わり

### 1. きっかけ

私はこの1年間、第3プラザ「キャンパス教育の森」の副プラザ長として活動をしてきた。このプラザをやろうとしたきっかけは三つある。一つにはキャンパスを緑と花がいっぱいの場所にしようというこのプラザの方針が気に入ったからだ。長野県は自然がとても豊かな県だ。私もこの土地で生まれてからずっとここで育ってきた。この自然豊かな場所に信州大学はある。信大ももちろん緑がたくさんある場所だと入学するまで思っていた。しかし現実はそうではなかった。美しい木々や花はとても少なかった。代わりに古くて閑散としたキャンパスが目に入って来た。「大学ってこんなものか。」と思った。しかしYOU遊広場の発足準備会のなかで第3プラザの話が出て来た時「なんだかこれをやったら気持ちいい大学ができるんじゃないだろうか、子ども達や地域の人ももっと信大に来てみたいと思えるんじゃないか、子どもと一緒に長野の自然や四季を味わってみたいな。」という思いが広がっていった。それが一つ目のきっかけだ。二つ目としては花や植物ともっとふれ合いたい、それについてもっと知る必要があるのではないかと感じていたからだった。2年の時茂菅ふるさと農場で様々な農作物を育ててみることを体験した。農作物のことやその育ち方など、こんなにも私は何も知らなかったのかと正直恥ずかしい思いをした。そして自分の母親のことを思い出した。私の母親は家の畑や庭で野菜や花を育てている。当たり前のように季節ごとの花をたくさん育て家の中に生けていた。私もその植物を当たり前にあるものとして幼い頃から見てきた。しかしあの花は一体どうやって育てるのか、名前は何なのか、思い出してもわからないことばかりだった。「花が好き、きれい。」といってもそれがどうやって育ってくるのか全く知らなかった。知りたくなった。そしてなんだか漠然と知る必要があるのではないかと感じた。それが二つ目のきっかけだ。三つ目

は大学の構内でなにかしてみたいという思いだった。昨年まではYOU遊サタデーというものがあつた。大学のキャンパス内に子ども達が大勢来て一緒に様々なことをして楽しんだ。またやりたいと思っていた。しかしYOU遊サタデーはなくなった。YOU遊広場が発足した時「また子ども達と大勢の学生がふれ合える企画をキャンパス内でやりたい」と強く思った。これが「キャンパス教育の森」をやろうと思った三つ目のきっかけだ。このようにまとめて書き上げるとなにかすごいことを思い立ってこの活動をすることに決めたようだが要するにわたしは花や緑のキャンパスという言葉に勝手に魅力を感じ、植物を育ててみたい、四季を感じたい、とりあえず子どもと何かしたいという漠然としたあやふやな気持ちからこのYOU遊広場で一年間何か自分のしたい事をする事になった。

## 2. YOU遊花プラザについて

YOU遊花プラザでは年間を通して様々な花を育て咲かせることをしてきた。実際にやってみて私たちが普段近所や小、中、高、大学と様々な所で見ている花は決して簡単に咲いてきたものではないということがわかった。そんな花との年間を通した関わりを四季ごとに振り返ってみたいと思う。

春、花を育てていくことが簡単ではないことを最初に実感したのは4月上旬のパンジーの苗植え作業だった。513株もの苗をプラザ長の清水さん、その他の学生、先生方と一緒にYOU遊花プラザと旧附属小前の花壇（教育学部グラウンドの北側）に植えていった。春の日差しがこんなにも眩しくて暑いものなのかと驚いた。しかも夕方になるとすぐに冷え込んでくる。一日中外で花の苗植えや草取りをしてみて春に対するイメージが一転した。それまで「春」というと、太陽の光はやわらかく穏やかな陽気が朝から夕方まで続くとても気持ちの良い季節、というイメージが私の中にはあつた。確かに気持ちが良くぽかぽかと過ごしやすい時間帯もある。しかし足先が縮むような気温の時や逆に暑さで体力を奪われてしまう時間帯もあった。私たちは普段の生活の中で一日中外に出ているということはほとんどない。昼間は室内からガラス越しに春の光を浴びたり、夜は外気に触れることなく家の中で布団に入って眠る。しかし私たちが植えた植物はそうではない。一日中どころか一生を外で過ごす。これはすごいことなのだと花の苗や種を植えながら感じた。そして自分とは生き方のこんなにも違う花をこれからたくさん育てていくことは大変なことに違いないと気付いた。実際、毎日の水やりや草取り、土の渴き具合や花の様子を見る、など細かい気使いが必要になった。また5月上旬から下旬に種を植えたサルビアやサンビタリア、ダリアなどは気温や湿度にとっても敏感であったためそういったことに気を配ったりこれから夏にかけてどんな世話をしていたら良いのかという見通しを持った植物との関わりが春は特に必要になった。

夏、夏はイメージ通りとても暑い季節。しかし案外夕方は春の日中と同じくらい過ごしやすく植物もこの時間帯、とても生き生きとしているように感じた。何もしなくてもぐんぐん育っていくような時もあった。しかし目を離し過ぎるとすぐに枯れてしまったり、弱ってしまった。夏という気温の高い季節なのだから少し位日陰でも良く育つのではないかと思いきやそれでは全く成長せず花が咲かないということもあった。それでも雑草はどんどん生えてゆき草取りは欠かせない作業となった。夏のこの時期感じたことは、植物は人間（子ども）ととてもよく似ているということだ。植物がそれぞれ育ち方が違うように子



どももそれぞれ育ち方が違い、「こうしたら必ずよい方向に行く、こうすれば必ず大丈夫」というマニュアルのようなものを作ることはお互い難しい。その時々気候や周りの環境、状況、関わり方によって事態や対応の仕方が異なる。その対応の仕方は自分がそういったあらゆる場面を体験しておかないと全くわからない。また、少し目を向けないとだめになってしまうこともあればちょっとのことでは負けない時もある。とても気まぐれなのかもしれないが人も花もとても繊細なのだろうと感じた。また、春の時期にも感じたことだが、見通しを持つということが植物を育てる上でも子どもを育てたり教育をする上でもとても大切なのではないかということを実感した。次はこうなるのではないか、こうしたらよりよくなっていくのではないか、ここに気を使っていく必要があるのではないかということを考えながら関わっていくことでよりそのものや人のことを考え、目線を合わせるということができるようになるのではないだろうか。

秋・冬。見通しを持って十分気を使うことが必要な花。足りなかった。夏休みの間、教育実習に行っていたこともあって十分に目を向けることができず多くの花を枯らせてしまった。秋には花プラザにたくさんの花が咲く予定だったが思いのほか寂しい花壇になってしまった。なんとか咲かせることができないかと太陽の光がいっぱいあたる場所に苗を植え替えてみることもしてみたがほとんど咲かせられなかった。花は季節にとっても敏感で植え替えたり、日光をたくさんあてたところでなかなか成長しない。春の終わり、種を植え、夏にたっぷりの水を与え暑い太陽の光を浴びさせようやく秋に花を咲かせる。どの季節を省いても花は咲かない。花を枯らせてしまったり咲かせられないものがあつたことはとても残念であつたし、私自身が気を抜いていたところがあつたことを教えられたようで少し辛かった。植物を育てていく上では季節ひとつひとつ、その時その時が大切だ。それぞれに役割があり意味を持ち季節ごとの繋がりもとても大事であることがわかった。

春、夏、秋、冬、年間を通してYOU遊花プラザと関わってきた。初めは農場での活動のように今年度は子どもと一緒に花を育ててみたい、苗を植えようというふうに子どもとの関わりを中心に活動をしてみたいと私は考えていた。しかしいろいろな話し合いや衝突もありながら今年度は学生のみでやることとなった。最初、私の中には子どもと一緒にやらなければ何も得られないし実になることはほとんどないのではないかという思いがあつた。だから学生のみで活動を始めた時、心のどこかにいつも不安があつた。しかし上に記したように花プラザを通して今まで感じたことのなかった思いを持ったり体験したことのないこと事をしてみたりができたことはとても幸せだった。また今までは咲いている花を当然あるものとして見逃したりきれいだなと表面的にしか見ていなかった。しかし実際に育てる体験をして植物や生き物全般に対する私の見方は変わった。植物や動物のように生き物を子ども達と育ててみることは子どもにとって良いことであるようによく言われている。しかしそこにどんな良さがあるのか楽しみはどこにあるのかは私はよくわかっていなかった。今年度は子どもと関わりを持ちながら花プラザで活動することはなかったが子どもと関わらずに自分が思う存分に体験してみることで、そのものの良さや楽しさを実感し知ることができた。また、もし子どもたちと活動する場合にはこんなことを教えてあげたい、知ってほしい、こんなところに注意を払いたいという自分なりの願いを持つことができたり、冷静に考えてみることもできたこともとても貴重だった。

### 3. ビオトープについて

ビオトープ作りは初め、大学のキャンパス内をホタルが飛び回るような「ホタルの森」を作ってみたいという思いから始まった。学校の構内を流れるシシ沢川を利用しようということだったが様々な事情から今年はシシ沢川に頼らず大学の武道場裏の敷地に池を作るなどしてそこからビオトープ作りを始めることになった。ビオトープを作るにあたってまず初めにあたった大きな壁として、生き物のことや生態系のことなど生物学的なことに関して私自身が全く無知だったということがあった。そのためまずは実際に川に入ったり、生物を調べたり、小学校の先生にビオトープについてお話を伺いに行ったりして生物のことやビオトープのことについて少し勉強した。これこそ総合的な学習というような普段の生活では全くしないことを多く体験した。また6月からはスコップで土を掘り、池作りを始めた。土がとても重いこと、同じ土地であっても様々な質の土があることがよくわかった。池作りをしていく中で時には池の中に生物が生息するようになることもあった。今までは目にとまる事も無かった小さな生き物が目に入ってくるようになりなんだかうれしい気持ちになった。こういう喜びを子どもとともに感じることはできたらとてもよいだろうと思う。今年度のビオトープの活動は池を作るということにとどまってしまった。しかしこの池を作る作業一つにしても想像以上の体力と労力が必要だった。またこの活動から生き物に関して様々なことを感じ得た。それは、私たちが普段生きている世界はとても小さいということだった。私たちは様々な生物と共存し共生しているがその実感はほとんど無く、人間の生活環境や生き方についてしかほとんど知らない。本当はどんなに小さい生物でも生きている意味があってどこかで必ず人間に影響を及ぼしている。生きていることはとても大事だとか、命は尊いとはよく言われることだが、ただそれを鵜呑みにしているだけではその本当の意味はわからないし、人（子ども）にもそれを親身に伝えることはなかなか難しいような気がした。私自身もまだわかっていない。ただ、ビオトープでの活動を通してほんの少しだけれど、そういう言葉の重みや意味がわかったような気がする来年度からは、ビオトープに関わったことが行われるかはわからない。しかし、もしできることならやってみたいことがある。それは子どもと一緒にビオトープ作りに取り組んでみるということだ。鈍感な私が今年度、池を掘っただけで様々なことを感じ得た。子どもがもしやればもっと、もっといろいろなことに気づき、今まで感じたことのない様々な思いを持つことができるのではないかと思う。

### 4. Y O U遊フェスティバルについて

子どもや地域の人と学生とで大学内で何かしたい、という共通の願いから3プラザと6プラザが合同となって軽い気持ちで始めたこの企画だった。Y O U遊サタデーを体験したことは私にとってとても大きなことでその体験があってこそ今の自分の活動があるといえた。だからこそ、Y O Uサタでやったようなことをまた企画したいという思いと、Y O Uサタとは違ったこともしてみたいという思いが交差して6月初旬あたりから始めた話し合いもなかなか進まなかった。とりあえず何かしたい、ではなくこういう思いや願いがあるからこんなことをしたい、ということこそそろそろ決める時期がその時だったのだと思う。しかしそれが決まり、意思統一がなされるのは後期が始まってからだった。Y O U遊広場発足の時もそうであったが、何も無いところから何か考え出したり生み出すということは、



こんなにも頭を使い労力があることなのか、多くの批判も受けなければいけないことなのか、とあらためて実感した。また、YOU遊花プラザでの活動と共通することとして「見通しを持った活動」ということが今回、実行委員としては最も重要になった。私は今回、資材・経理の担当になりその仕事に多く携わった。とても細かいことの多い仕事だった。この仕事に限らず、いつもみんなで次はどんなことをしたら良いか、数日先ではなく一ヶ月、二ヶ月先まで考えなければならなかった。いついつまでに何をしなければならないかということは常に毎日考える必要があった。そういったことをしてみると、毎日毎日とにかくやるべき事だらけで、それを考え、終わらせるだけで一日の大半が過ぎていた。このようなことをきちんとできるという力がしばしば耳にする、企画力や運営力というものなのだろうと思う。私にはこれらの力がほとんどなかったのだなということを今さらながら気付かされた。しかし、力がないだけで済まされることなく、とにかく毎日他の実行委員3人や周りの人たちに教えられたり、協力してもらいながら乗り切っていた。自分のためだけでなく周りのためや、子どものために、こうしたらやりやすいのではないかと、こうなったときはどうするか、ということをごここまで考えるということもなかなかできないことだったのでとても貴重な時間を過ごしたと思う。教育現場ではこうした時間が常となるのではないだろうか。

YOU遊フェスティバル当日、この日は各講座や子ども達や全体を見守るというとても地味だが、気を許すことのできない活動をしていた。そわそわ走り回り続け、気がつくとも一日が終わりYOU遊フェスティバルも終わっていた。ふっと、YOU遊フェスティバルを最初にやろうとした時にみんなで悩んでいたことを思い出した。「YOUサタのようなことをまたしたい、だけどYOUサタと同じじゃつまらないし、なにか違ったことをしたい」ということだ。さて実際にやってみてどうだったろうか。講座の中身や形は違っていた。今年一年YOU遊広場に関わってきた子ども達を中心に呼んだことから明らかに子どもの様子、スタッフの様子は違っていた。けれどYOU遊フェスティバルに初めて参加した子どもや親、学生もたくさんいた。全体の流れもほとんど変わらなかった。YOUサタのミニ版になっていた部分もあったかもしれない。しかし私はここで重要なことに気がついた。主役は子どもだということだ。それは人それぞれなのかもしれないが少なくとも私はこの企画をしたいと思った時子どもを中心としてまず考えた。そしてそこからたくさんの学生が参加できること、参加したいと思えることを企画したいと考えていた。主役は子ども。それなら子ども達は今回の企画をYOU遊サタデーみたいじゃ嫌だ、ミニ版でつまらないと思っただろうか。すべてのプログラムが終わって子ども達が笑顔で帰っていく時そんな姿は全くなかった。つまらなかったという意見があったとしても理由は他にあるはずだし、その理由を知って私たちは反省しなければいけない。実際反省し、改善することはたくさんあった。私は大きな勘違いをしていた。YOUサタとはまた違ったこともしたいという純粋な気持ちもあったが、同じ事をするのはよくない、というような気持ちもあった。しかし子どもにとっては今回、たくさんの友達や学生と出会ったことや様々な体験をしたことは、「同じ事」では決してないし、にこにこ笑顔で帰って行った時の気持ちも今までとは違う初体験なのだ。もちろん私にとってもそうだ。子どもを中心に考えていくということの大変さ、重要性に気づかされた。今回の企画は子ども達を私たち学生が迎え入れるという形だった。これも良いが今後のこととして次がもしあるなら子どもが企画運営

に参加するという形がとても良いのではないかと思う。形自体を子ども中心にすることで私たちはそれを支えたり援助するという立場に立つことができ、また違った視点から活動することができ今までとは異なった大事な力が身につけられるかもしれないと思う。

## 5. おわりに

今年度はY O U遊広場で3 プラザを中心として活動をしてきた。前にも記したように3 プラザでは子どもとの直接的な関わりは今年度ほとんどなかった。そこで初め、私には不安と焦りがあった。しかし一方で子どもとただ接するということや、子どもの思いにいつでも左右されてしまうような自分にも不安を感じていた。自分は何をしたいのかわからなくなる時期もあった。そういった中で3 プラザとして今年度、子どもとふれ合わなかったり、逆に子どもとのふれ合いを通した企画に携わったりをしてきて、様々なことを考えたり体験したり、少しでも力がつけられたことは私にとってとても大切な時間だった。

花を育てたり、ビオトープで生き物について考えたり関わったことでそのものの良さや素晴らしさなど様々なことを感じることはできた。しかしこうした活動をしながらかたなく私にはっきりしない疑問があった。それは、植物や生き物と関わるのがどうして大切なのかということだ。命の大切さを知るためかもしれないが、それだけではない気もした。小学校の生活科の教科書を見ると春、夏、秋、冬、と分かれてそこに植物やその他の季節を感じさせる様々なものが絵や文字で書かれている。なぜ四季を感じる必要があるのか。漠然と必要なのだろう、大切だとは思いますが本当のところがよく分からない。しかし私は思いもよらないところで「それはこういうことなのではないか」という考えが浮かんだ。それは、Y O U遊フェスティバル当日に来て来てくださったお母さん方やそれ以前の準備段階に関わった時に接した多くの大人（地域の大人や大学の先生方など）との会話からだった。そこでは必ずといっていいほど季節や気候、天気に関する話をした。とてもたあいのない話なのだがそういった会話はなぜか心地良いものだった。また以前までは私自身、そういった話を進んで人とするというわけではなかったが、最近は自然と勝手に自らそういうことを好んで話すようになった。そういう体験から「これだ」と感じた。花や植物、生き物と関わることや春夏秋冬、四季を感じることは人と人とのコミュニケーションをつくり人間同士の関わりを作る役目も持っているのだ。春はこんな季節、夏はこう、秋は、冬は、と言えること知っていることは当たり前前でそうではない。現在、子ども達は外に出て遊ぶことがとても少ないという。Y O U遊フェスティバル後のおうちの方に配られたアンケートにも「外に出て遊ぶことが少ない」「人と一緒になにかしたり遊んだりすることが少ない」ということが書かれていた。四季や自然はどんな子どもにも体感させられることだ。四季や自然を体感することから様々なことを感じ取ったり、そこから人とのあらゆる関わりが持てたらとても良いと思う。私はそういったことを子どもたちに伝えられるようになりたいと思う。Y O U遊広場を通して様々な力が身につけられたと思う。しかし、子どものそばについて子どもの勢いに吞まれるだけでなくにか自分のしたいことや伝えたいことをしっかり持って、子どもとふれあいたいと感じてきた。その伝えたいと思うことを一つだけでも見つけられたことはY O U遊プラザに今年度参加してきた一番の力になったと思う。そしてここから自分の伝えたいことを実際どうやって子ども達に伝えていくかが今後の私の大きな課題だ。



# 私と子どもの“自然”な関係

—自分なりの子どもとの関わり方を追って—

小黒あかり 教育実践科学専攻 3年

## My “Natural/Nature” Relationship with Children

—My Way of Being Dealing with Children—

OGURO Akari major: Educational Science, junior

Campus Play-park, an adventure playground held at Shinshu University on every Thursdays and Saturdays, strongly influenced my views about children. I hope to bridge the gap between children and myself and continue exploring how to relate to children.

【キーワード】 キャンパスプレーパーク（通称プレバ） 子ども プレンジャー 遊び  
遊ぶ 子どもの本当の姿 子どもとの関わり方 総合的な学習

### 1. 私の大学生生活の原点

大学一年の時の授業で子どもとのキャンプに参加した。山の朝の気持ち良さ、きらきらと輝く木漏れ日、夜空の満天の星、流れ星…。そこにいるだけで幸せな気分になった。自然の中になるとなぜか心が開放されて、自然と自分が出せた、いろんな人と仲良くなれた。

キャンプ中に一本の竹から竹とんぼを作った。子どもの頃、店で買ってもらった竹とんぼ。「本当に竹から作れるんだ！私にも作れてしまうんだ！」頭では分かっていたことだが、心で実感した。買った物からではなく、自然の物から物が作れることがうれしかった。

このキャンプは不登校の子も参加するキャンプだったため、学校色をなくそう、一人一人を大切にし尊重しようという思いが、いたるところに詰まっていた。子どもたちはのびのびと過ごし、壁にぶつかった時も、スタッフを含めた仲間と共に乗り越えていった。子どもたちも、スタッフである私たちも、あの6日間で本当に多くのことを感じ、学んだ。

自然の中で子どもと関わりたい。みんなが同じことをするのではなく、一人一人が自分を出せる環境がほしい。子どもたちと日常的に関わりたい。普段はできないことをたくさんしたい。そのように感じていた私は、羽根木プレーパークを雑誌で知ったとき、一瞬のうちにそのとりこになった。プレーパークは、それら全てが実行できる場所ではないか。このような思いで、この1年間「第4プラザ キャンパスプレーパーク」の中心となって活動してきた。

### 2. キャンパスプレーパークの意義

第4プラザのページでも述べたように、プレーパークとは冒険遊び場のことである。キャンパスプレーパーク（通称プレバ）は、大学内のグラウンドを利用し、毎週木、土曜日

に、子どもを中心とした地域の方々と思い思いのことをして遊んでいる。では、このプレパは、関わっている人々にとってどのような価値があるのだろうか。

・小学校1年生のHくんは、ミミズが触れなかった。学校でも土をいじることはよくあったが、ミミズは触れなかったという。ところが、プレパでの畑を作りで、たくさんのミミズが出てきた時、Hくんは自然と手でミミズを集め始めていた。また、ラディッシュができたときには、畑からとってきてすぐに洗って食べた。とても気に入ったようで、たくさん食べたあと、さらに家にお土産として持って帰る分まで取った。お迎えに来られたお母さんは、「家では全然食べないのに。」と驚かれた様子だった。

・その日、始めてやってきたSちゃんは、常連の子がのこぎりで机の角を切り落としている様子を、興味深そうに見ていた。数分後、Sちゃんはこのこぎりで木を切り始めていた。この日初めてののこぎりを使ったらしく、最初は片方の手を逆手にして持っていたが、そのうち、持ちにくいことに気付く自然と持ち直していた。Sちゃんは30分以上、ただただ木を切り続けた。このような様子は多くの子に見られる。「何かを作る」という目的もなく、ただ、木や竹を切り続け、切り終えた後、何を作るか考える。子どもにとっては、のこぎりを使うこと自体が楽しい遊びである。

・プレパでは人一倍元気で、常に歌ったり踊ったりしているTくん。しかし、Tくんは学校ではあまり目立たない子だという。また、ストレスを発散させているかのように、プレンジャーに暴力をふるってくる子も見受けられる。

子どもたちにとってプレパは、普段の生活ではすることのできないことができる場、遊びを通して様々な人と関われる場となっている。様々な制限の出来てしまっている社会の中では出来ない遊びができるということは大きな魅力だ。また、遊びを通して人と関わることで自然と仲良くなることができたり、コミュニケーション力が身についたりもする。プレンジャーと遊ぶのが好きでやってくる子も多いように思う。プレンジャーが子どもたちを、かけがえのない仲間として接することにより、Tくんのように自分を飾ることなく本当の姿を出せる場にもなっているのではないだろうか。

プレパには、お父さんやお母さんもいらっしゃる。お母さん方の子どもたちへの接し方は大変勉強になる。また、地域の方と仲良くなったことにより、生活が何倍も楽しくなった。私が悩んでいることを相談したら快く相談にのってくださったことや、逆に相談されたこともあった。あるお母さんは、「これまでは、学生の迷惑な面しか見えなかったが、プレパができて、顔が見えてきて、良い面がたくさん見えてきたし、何かあっても『まあ、ちょっとくらいいいか。』と思うようになった。」とおっしゃった。

プレパでは、私たちプレンジャーも少しずつ成長していく。週2回という日常的な子どもとの関わりの中では、問題点や悩みも多く出てくる。そこから、子どもとの自分なりの自然な接し方を見つけていく。また、自分自身の課題の解決をする場ともなっている。

### 3. 遊ぶために遊ぶ ～プレーリーダーとの話から～

あるプレーパークのプレーリーダーは「遊ぶことによりあんな力やこんな力が身につくとかいろいろ言われているけど、プレーリーダーはそんなこと考えず、その遊びが楽しければ良いのではないかな。「遊ぶために遊ぶ」でいいのではないかな。」という。プレーパークは冒険遊び場であり、決してしつけや教育の場ではない。もちろん、遊びの中で自然と教育的なことがあったりはするだろうが、それは別として、しつけや教育は他の場所に任せ



ればよい、という考えである。

この考え方に衝撃を受けた。教育学部ということもあり、自分でも知らないうちに自然と、遊びの価値、子どもとの接し方、しつけ等について考えていることがある。もちろんこれは、他のプレーパークのプレーリーダーの考えであり、私たちのプレパの考えではない。私たちは、私たちにあった、私たちのプレパを作っていくべきであると思う。教育学部的には、教育やしつけについて考えることが望ましいのだろうし、必要なことでもあると思う。しかし、遊びの価値、子どもとの接し方等を知れば知るほど、そのことを意識してしまい、子どもとの間に距離ができてしまったのを感じる。子どもとの間に距離ができてしまえば、子どもと関わる楽しさが激減してしまう。教師になったら、教師としての立場もでてきて、自然と子どもとの間に距離はできるものだと思う。その距離は子どもを冷静な目で見つめるために必要な距離であると思う。しかし、私は教師になったとしても、必要な時には少し距離を持って冷静な目で見ることができるとは思うが、普段はプレーリーダーのように、子どもとの間には距離を作らず、子どもの代弁者となるような関わり方をしたい。しかし、私が今教師になってしまうと、ベテランの先生の最もな意見に流され、子どもとの間に、距離だけでなく壁まで作ってしまう気がする。教育学部にいれば、しつけや教育については、嫌でも耳にするものであるから、何歳になっても子どもとの間に壁を作らずにいられるためにも、プレパに来る子どものためにも、子どもと“遊ぶために遊ぶ”プレンジャーとして関わり、子どもと関わる楽しさをずっと忘れないようにしたい。

#### 4. 子どもたちとの知恵比べ

子どもたちはなかなか片付けをしない。プレパで、初日から出ているプレンジャーの悩みである。プレパでは子どもの遊びを大切にするため、「片付けをなさい」とはあまり言いたくない。だからといって、プレンジャーだけが片付けるような場所になってしまうと、それはまるで遊園地のようになってしまう、子どもたちには片付けをしない習慣がついてしまう。そこで、プレンジャーはいろいろ考えた。

① 子どもたちは17:00頃には帰り始めるので、10分くらい前から片付けを始める。

→「そろそろ片付けようか」とは言うが、その誘いにのって来る子は限られている。

② 片付けを遊びにしてしまう。

→うまくいけばのってくる。しかし、片付けを遊びにするのは、なかなか難しい。草刈り、物置の大掃除、灰を入れる穴掘りなどは、私が楽しそうにやっていたら、興味をもってやってきた。

③ いたるところに“かたづけ”と書いた看板を付ける。

→看板をたくさん作っていたら、興味を持って一緒につくり始めた。「成功？」と少し期待したが、看板を作り終わると、子どもたちはペンなどを散らかしたまま、他の遊びに行ってしまった。失敗。しかし数日後、つけてある看板見た子が「“かたづけ”って書いてあるから片付けよう」と言って片付けを始めた。少し成功。

このように、プレンジャーは子どもたちとの知恵比べを、楽しみながら続けている。

この考えを勉強にも置き換えてみてはどうだろうか。小学校に入学してすぐの頃は勉強を楽しく感じている子が多い。しかし、数ヵ月後には『勉強＝嫌な物』と多くの子が感じるようになり、中高生においては勉強好きな子を見つけるのは至難の技である。そのような子どもたちを勉強させるのに大人はいつも苦労する。「勉強しなさい！」と口うるさく言



ってみるがそれでは逆効果。もし、それで勉強を始めたとしても嫌々勉強したのでは身につかない。どうすれば子どもは自ら「やりたい!」と思って勉強をするのだろうか。子どもが楽しんで勉強できることは、大人にとっても子どもにとっても良い。どうすれば子どもは勉強を進んでするのかを、子どもとの知恵比べとして大人も楽しんで考えてみてはどうだろうか。その第1の手として、私は、生活の中で必要が生じた時に教科の内容も学ぶ総合学習的な勉強方法と、私自身が楽しんで一緒に勉強することを実行したいと考える。

## 5. 伝えることの難しさ

私は、この一年間プレパの中心で活動してきたことにより、伝えることの難しさを身をもって実感した。プレパの活動は地域の方の理解がないとできない。プレパの主旨、プレンジャーの役割・思いなどをしっかりと伝えないと託児所化してしまったり、子どもが思い切り遊べない場所になってしまったりする。そうなってしまうのを防ぐのもプレンジャーの役割であるにもかかわらず、うまく伝えることができていない。態度で示すだけでも、言葉で伝えるだけでもうまく伝わらない。言葉と態度、その両方で、繰り返し、繰り返し伝えていくことで伝わっていくのだろう。

大学生に関しても同様である。プレンジャー同士の意識（どのようなプレパにしていくか等）の統一、情報の共有はより良いプレパを作っていくためには不可欠だろう。そのために、話し合いを繰り返し行ったり、YOU遊広場の定例会で『あっぱれば』（前の週の活動の様子を伝える通信。第4プラザのページに掲載。）を配ったりしているが、「やりたい人がやりたい時にやる」という活動だけに、全員にうまく伝えることは難しいのが現状だ。

この一年で、YOU遊広場に関わる学生数は確実に増えた。しかし、大学内にはYOU遊広場のことをあまり知らず、話をすると「行ってみたい」と言う学生や、「私も関わってみたい。でも、何だか行きづらい。」という学生がまだまだいる。今活動している私たちは「もっと多くの人と一緒に活動したい。」と思っている。需要と供給があるにもかかわらず、それらがうまくかみ合わない。

YOU遊広場にしても、プレパにしても、やりたい人がいなければ無理をしてまで残していなくて良いと思う。しかし、どちらも残っていくべき、広めていくべき活動である。これまで活動してきた私たちは、この活動の楽しさや価値を後輩はもちろん、今はまだ関心をもっていない人（学内だけでなく他大学や地域の人）にも伝えていくべきではないだろうか。楽しさや価値を伝えることにより、興味を持ち始める人もきっといるだろうし、ただ、「そんな活動があるんだ。」と知ってもらえるだけでも良いと思う。何も伝えず、「やりたい」と思っている人だけが知っているYOU遊広場では、身内だけで楽しんでいる活動になってしまいもったいない。

伝えたいと思っていることは数多くあるが、なかなかうまく伝えることができない。人が言っていることがどこかしっくりこなくても、それがなぜなのかが自分でもよく分からず、伝えようとすると「なんとなくイヤ」としか言えない自分。これまでは自分の中の感覚だけを頼りにしてきたが、言葉を使わなければうまく伝わらない。自分の気持ちや考えをうまく言葉に表すことは、これからの私自身の大きな課題である。

## 6. 「やりたい!」ということをする

一年前、総合・生活科教育分野の第一期生である私は、「一体、何をすれば総合・生活



科の“プロ”になれるのだろう」と悩んでいた。「他の専攻、他の分野の人たちは、どんどん専門的な知識を身に付けていっているのに、私たちは、畑をやったり、とれたイモで様々な料理を作ったり、竹とんぼを作ったり。それはそれでとても楽しく価値のあることであるが、こういうことをするだけでは総合・生活科の“プロ”になれる気がしない。一体どうすればいいのだろう…。」などと考えているうちに、「教科と体験を結び付けていけば良いのではないだろうか。」「実際に子どもと一緒に、体験活動をしていけば良いのではないか。」「実際に行われている授業を、もっと見てみるべきなのではないか。」などの考えが出てきた。そのような思いも持ちながら始まったY O U遊広場では、総合・生活科教育分野の誰もが、多かれ少なかれ総合・生活科との関連を意識していたのではないだろうか。それは、総合・生活科に限ったことではなく、他の分野の人もそれぞれの専門を意識していたり、特技を生かしていたりしていたように思う。

プレバを続ける上で辛いこと、泣きたくなることはたくさんあった。他の行事と重なった時にみんなを見送らなければならない、みんなが卒礼や茂菅の活動に来ている子のお話を楽しそうにしているのに活動に参加していないため話に入れない、アルバイトがあまりできない、遊べない…。しかし、不思議なことに、「やめたい」と思ったことは一度もなかった。それは、「やりたい」という大きな気持ちが初めにあり、自分の中で「やる」と決めていたからだろう。今では、辛かったことも逆に、そんなことがあったからこそ、「私は一年間プレバをやった」という達成感が得られたのだと思える。

「Y O U遊広場は大学生の総合的な学習だ」と内地留学生の志村先生が最近よくおっしゃる。そのように意識したことはなかったが、その言葉を聞いてからどこかホッとするようになった。私は総合的な学習を受けたことがないため、総合的な学習にはどのような価値があるのか、どのような力がつくのか、どのような授業なのか、など頭でしか分からなかった。しかし、それらのことが実感でき、今では、総合的な学習を身近に考えられるようになった。総合的な学習を実際に体験した今、その活動が子どもたちにとって、どれだけ意味のある活動になり得るかは、「やりたい」という思いを、初めにいかに強く持てるのかにかかっていると言える。

## 7. 自然な自分で

「どうすれば子どもたちは楽しんでくれるだろう…。」このように考えている人は多くいるのではないだろうか。私自身、以前は、子どもの言うことは何でも聞いてあげようとし、いけないことをしても注意をすることができなかった。子どもから好かれたいという思いが強かったのかもしれない。しかし、多く子どもと関わるうちに、いろいろと考えすぎず、自然な自分で関わることが一番良いということに気付いた。自分がやりたいことをやっていると、その楽しそうな様子を見た子どもたちが、知らないうちに一緒にやっているとということもよくある。逆に、自分自身が楽しくないと子どもたちも楽しくない。数日だけの関わりなら、多少無理をしても平気なのかもしれないが、プレバのように日常的に関わっていく場合、自然体で自分のやりたいことをしていないと自分自身が辛くなり、それは同時に子どもたちも一緒にいて楽しくないことにつながる。

子どもから大人気のAさんがいるとする。Aさんの周りにはいつも多くの子どもたちが集まってきて、おもしろいAさんのことをからかいながらも楽しそうである。その様子を見てみると、「Aさんのような人こそが子どもに必要な人であり、自分もAさんのような

りたい」と思ってしまうかもしれない。Aさんの良い所をうまく自分の中に取り入れることができたなら、それはすばらしいことである。しかし、Aさんのような人だけが子どもに必要なわけではない。Aさんの方から目はずし、周りを見渡してみると、そこにはAさんとは合わない子たちもいることに気付くだろう。プレバは来たい子だけがやってくるので、よく顔を出すプレンジャーと合う子が常連として来ている。実際、常駐のプレーリーダーのいる世田谷区内のプレーパークでは、プレーリーダーが代わると常連も代わり、プレーパークの雰囲気ガラッと代わるという。各々のプレンジャーが他の人とは違った色を出すことで、より多くの子にとって居心地のいいプレバができるのではないだろうか。だから、無理をして自分自身を変える必要は全くなく、自分なりの関わり方を見つけ、自分自身が楽しむことが、自分にとっても子どもたちにとっても良いのではないだろうか。

プレバでは様々な悩みにぶつかる。そのときに考えたこと、相談したこと、自然と解決されたこと、全てが自らの成長につながる。プレバで活動が続けることで、子どもを始めとする地域の方々との、自分なりの自然な関わり方ができていくのではないだろうか。

## 8. プレーパークで見つめた自分の将来

以前から、子どもを叱ることは大変難しいと感じていた。子どもはしてはいけないことをよくする。その場面に出くわした時、どのように対処すればよいのだろうか。人に尋ねると、「いけないことをしたら、しっかり叱るべきだ。」「基本的に叱らない。愛情表現の1つだと受けとめる。」などの様々な意見が返ってきた。しかし、どれについても「そうだな…」と思いながらもどこか納得がいかなかった。そう悩んでいたとき、ある先輩が「腹が立ったら“いかる”。“叱る”というよりも“いかる”という感じ。」とおっしゃった。今まで突っかかっていたものが、パッと消えた気がした。

「プレバの子どもたちの話を人にするとき、『小学生の友達がね…』って自然と言ってるよね」と、プレバで一緒に活動する友人に言われ妙に納得してしまった。プレバに来ている子どもたちとプレンジャーの間には壁がなく、同じ空間にいる仲間として接することができるのだ。子どもとだけでなくお母さん方に関しても同じことが言えるのではないだろうか。

今まで9ヶ月間続けてきたプレバの活動の中で、自分なりの子どもとの関わり方が少しずつ分かってきた。子どもたちの上に立って、いろいろ指示を出して引っ張っていく関わり方をするのではなく、子どもたちとの間に壁を作らず、仲間として関わりたい、野外活動や工作など、自分の好きなことを一緒にしたい、ということ。また、自分の将来についてもいろいろ考えた。やはり、子どもと関わる職業につきたい、どのような職業についたとしても自分なりの子どもとの関わり方をしていきたい。もし、教師になるとしても同様だ。先生だからといって完璧でなくても良いと思う。分からないことは分からない、できないことはできないと言って良いと思う。教師自身が自然体でいて本当の自分を見せることで、プレバでのTくんのように、子どもも本当の姿を見せてくれるのではないだろうか。

ただ単に、「子ども好きだから先生になりたい」と思い続け教育学部を目指した。入学してからは教師だけでなく、子どもと関わる他の仕事にも興味をもち始めた。自分が元気な時はもちろん、どんなに落ちこんでいるときも、子どもと一緒にいるだけでなぜか楽しい。いつも子どもは私にパワーをくれる。YOU遊広場での活動は「子どもと関わる仕事につきたい」という思いを確かなものにしてくれた。



# たくさんの学びと自信

## —「信大YOU遊広場」の実践を通して—

鹿子木愛 教育実践科学専攻 3年

## A Year of Learning and Confidence Building

### —Through Practice of Shin-dai YOU-Yu Plaza—

KANAKOGI Ai : Major: Educational Science, junior

This paper deals with various YOU-Yu Plaza activities and what I learned from them. This program sponsored by Shinshu University gave me a lot of contact with children and showed me my strength and weakness.

【キーワード】 発足準備会 YOU遊フェスティバル 子どもと関わる 学校週5日制

長かったようでとても短かった発足準備会から第1期閉幕まで。YOU遊サタデーが終わって何も無い真っ白な状態から、新しい組織を立ち上げるのは想像以上にとても大変なことだった。誰もが初めてのことで、何から決めて良いのか分からず戸惑ってばかりいた発足準備会も、回を重ねるごとにだんだんと形になっていくのが見えた。みんなが納得するものを作ろうと7回もの準備会で意見を出し合った頃がとても懐かしく感じる。

私は準備会の時から参加し、発足後も運営委員としてプラザに関わってきた。0 プラザでは、後期から附属養護学校で障害をもっている子どもたちと継続的に関わってきた。また、11月下旬からはメンタルフレンドとして、不登校の子どもたちと関わっている。2 プラザでは、子どもたちと一緒に農作業をしてきた。4 プラザではプレーパークで子どもや地域の方たちと関わるのができた。5 プラザでは夏の親子キャンプに参加した。6 プラザでは、週に一度児童館にボランティアで行っていた。運営委員会では各プラザの一週間の予定を確認し、プラザを進めていく上で出てきた問題点などを随時話し合ってきた。

どの活動も大学の授業では得られないような貴重な経験だったと思う。この経験から自分にどんな力がついたのか、はっきり言って今はよくわからない。この活動を振り返って今言えることは、自分の欠点にたくさん気づかされたということだ。プラザの1回の活動が終わる度、子どもたちへの接し方を中心に、自分自身を反省してきた。そして、良くなかったと思ったことは必ず次の活動に活かすように心がけた。プラザの活動は、自分自身を見つめ直すきっかけを与えてくれ、自分に足りない力を教えてくれた。足りない力を自覚することで、それを補い克服するためにはどうしたら良いかを考えた。考えながら多くのことを学んできた。それだけでも十分意味のある活動だったと思う。また、プラザの活動を通して、先生や地域の方や仲間から、自分のした活動を誉められたり、子どもから嬉しいことを言われたことが、こんな私にも何回かあった。その時は本当に嬉しく、かなり

の自信となった。

## 1. 信大YOU遊広場発足準備会

1年生で教育参加として子どもと関わり、2年生では1年生の時以上に子どもと関わってきた。学校の田んぼや畑でお米や野菜と一緒に作ったり、茂菅育成会のクリスマス会やお泊り会に呼んでいただいたり、畑で取れたかぼちゃやなすでおやきを作ったり、YOU遊サタデーでアイスクリームを作ったり、キャンプに行ったり…。子どもが大好きだから、子どもたちと一緒に活動できることがとても楽しく、2年生の後期まではこのような学生生活に十分満足していた。しかし、2年生の後期になって、ふと今までしてきたことに疑問をもった。子どもと関わるのは楽しい、でも楽しいだけで良いのだろうか？このままの状態ですべて卒業して教師となり、子どもたちの前に立てるのだろうか？土井先生がよくおっしゃられている実践的指導力が身につけていないのではないかと考えた。このようなことを考え始めた。そして、今までは楽しむために活動していて、一つの活動が終わった後に自分自身を反省することもなく、「あー、楽しかった！次の活動が待ち遠しいなあ。」とだけ思っていた。これでは遊んでいるだけで、何の意味もない。今までのことを反省し、活動への関わり方を改め、この活動を通して力をつけたいと思った。そんなことを自分自身で思い始め、身近にいる総合・生活科分野の仲間と相談していると、突然7年間続いた信大YOU遊サタデーが閉幕することを聞いた。とても驚いたが、新たなプロジェクトをみんなで作り上げていこうということになったので安心したことを覚えている。でも安心するのは早すぎた。プロジェクトという大きな組織を一から作っていくのは、とんでもなく大変なことだった。授業が終わったら集まって話し合い、家に帰っても一人で考えるという日々が続いた。考えても考えてもなかなか良い案は出てこず、本当に苦労した。それでも途中で挫折せず乗り越えられたのは、やはり楽しいという経験があったからだと思う。楽しいからこそもっと深く関わりたいと思い、やる気になれた気がする。楽しいだけの期間は無駄ではなく、むしろ貴重なものだったと思えるようになった。

また、みんなで意見を言い合う場ってすごく良いなあとも思った。大学の授業は受身的なもので、自分の夢や教育観を語り合ったりすることはめったにない。みんなの立派な考えを聞くことは、自分にとってとても良い刺激だった。このような場に参加でき、YOU遊広場という大きな組織を作り上げたうちの一人に自分がなれたことを、今はとても嬉しく思う。

## 2. YOU遊フェスティバル

私は「べったんべったんおもちつき」のキャプテンとしてYOU遊フェスティバルに参加した。初めてのキャプテンで戸惑うことが多かったが、ここから学んだこともたくさんあった。慣れない私を助けてくれ、一緒に頑張ってくれたスタッフに、まずは感謝したい。ありがとう！！

### 講座を開こうと思った動機

第一の理由は、単に私自身がおもちつきをしたかったからである。私の実家の方では、お正月におもちつきをするという習慣がなかったため、杵と臼で作るおもちにとっても興味をもっていた。つきたてのおもちは、スーパーで売っているおもちとは比べ物にならない



くらいおいしいという噂も聞いていたし…。

また、昔はほとんどの家で行われていたお正月の恒例行事であるおもちつきを、今の子どもたちにも体験してほしいと思った。どうせやるならとことんこだわり、子どもたちの心に残るようなものにしたいと思い、もちつき機などを使わず、せいろで蒸すところからやろうと思った。そして、わざわざせいろを使って最初から作るのなら、おもちにつけるきなこやあんこも最初から作ってみようと考えた。子どもたちにとっても、きなこを大豆から作るという経験はあまりしたことがなく、新鮮なことに違いない。

### 準備段階

まずは作り方を調べることから始めた。何しろ私自身、もちつきをするのも、大豆からきなこを作るのも、小豆からぜんざいを作るのも初めてで、全く分からない。図書館で本を探したり、林部さんに教えていただいた。

作り方が分かったら、次は実際に作ってみる。事前に作ることで、だいたいの時間配分も分かるし、子どもたちと一緒にする時に気を付けなければいけないことも分かってくる。当日成功するかどうかは、この事前の教材研究で決まってくると言える。どうしたら子どもたちが楽しんでくれるのか、どうやって説明すれば子どもたちに分かりやすいかななどもみんなで考えた。また、子どもたちに楽しんでもらうことはもちろん、この活動を通して何かを学んでほしいとも思い、おもちと大豆に関するクイズを用意した。「楽しみながら学ぶ」大切なことだと思う。

おもちつきをするための道具を揃えるのは大変だった。杵と臼、子ども用の杵と臼、せいろ、鍋、すりばち・すりこぎ、のし板…。たくさんあった。快く貸してくださった、林部さん、善光寺保育園の方々、家庭科の粟津原先生、生協の方、清水美香さん。また、運ぶのを手伝ってくださった志村先生、町田竜太くん、本当にありがとうございました。たくさんの方の協力があったからこそ、おもちつきができたのだと思っています。また、林部さんには事前の教材研究の時から、いろいろと教えてくださり、気にかけていただいてとても感謝しています。本当にありがとうございました！！

この準備段階で一番苦労したことは、2年生以上の講座スタッフ7人で集まることであった。2年生の後期は授業やレポートもたくさんあるし、放課後はバイトやサークルもあるしでそれぞれが忙しく、なかなか全員が集まらない。しかも、おもちつきの講座は終日というだけあって、考えることがとても多かった。それに一度作ってみると言っても、簡単なことではない。もち米を前日からつけておいて、蒸すのにもとても時間がかかる。火を起こし、かまにお湯を沸かし、蒸しあがったら杵と臼でおもちをつく。とても手間がかかるのだ。他にも考えることがあり、そんなに何回も作ってみることは時間的に難しく、1回が限界だった。この時もやはり全員が集まることはできなかった。大豆からきなこを作る時もぜんざいを作る時もやはり全員は集まらない。このような事は昨年までのYOU遊サタデーの時にも言われていたことなので、来られなかったスタッフには次回説明するとか、プリントをこまめに作って確実に全員に情報が伝わるようにするなどと、自分なりに工夫はしてみた。しかし、当日になって分かったのだが、やはり経験した人にはかなわなかった。一度事前に経験して本番を迎えるのと、本番で初めて経験するのとではかなり違う。一度経験しておけば、次する時にはどんなことに気を付けて動けば良いのか分かるし、次に起こることを予測できて当日もスムーズに動ける。全員が一度は経験した状態で



当日を迎えるのが一番望ましいのだが、前述した理由から、今回のこれが限界だった。どうしたら良いのかは未だに解決できずにいる。経験した人が率先してやるしかないのだろうか？今回のことで、経験の大切さと共に、経験しておくことにはかなわないことを実感した。今回のことを失敗と考えず、今後の教訓にし、新しいことにどんどん挑戦する姿勢を大切にしていきたい。

## 当日

当日は一年生も6人参加してくれた。朝早く松本から来てくれてありがとう。一年生には子どもたちと思いきり接して、楽しんでもらいたいと思っていた。前述したように、私がこのようなフレンドシップ活動に興味を持ち、もっともっと深く関わりたいと思ったきっかけには、やはり楽しいと思える経験がある。これからフレンドシップ活動をしていく上で、今日のことがきっかけとなって、フレンドシップ活動の楽しさを知ってもらえたかった。

午前中にはきなこ作りをした。茂菅の畑で採れた大豆を乾燥させ、さやから豆を取るところから始めた。この作業に子どもたちは予想外にも真剣に取り組んでいた。すぐ飽きてしまうかなあと思っていただけに驚いた。「大豆をさやからとるなんて初めてー！」と喜んでくれた子もいた。グループごとに分かれてやったので、スタッフと子どもとの会話の場面が見られて良かった。また、子どもが子どもに教えている場面もみられて嬉しくなった。大豆をすりばちとすりこぎでつぶすのはけっこう力があるため、小さい子には少し難しかったように思う。出来上がったきなこは、市販されているきなこに比べるとどうしても粒が残ってしまうが、そこが手作りっぽくて逆に良かった。普段食べているきなことは違った手作りきなこの味は絶品だった。

お昼ご飯を食べながら、大豆とおもちに関するクイズをした。大豆は枝豆が成長したものだということを小学校3年生の子が知っていたことには、スタッフ全員が驚かされた。このクイズは子どもたちを驚かせようと思って考えたものだったので正直言って少し悔しかった。スタッフの中には、このクイズを考えている時に初めて知ったという人が何人もいたのに…。また、スタッフが考えてもいなかったような答えがでてきたりで、子どもの想像力の豊かさを感じた。

ぜんざい作りやおもちつきをする前に、作り方を子どもたちに説明しようと思い、作り方を書いた模造紙の前に子どもたちを集めた。しかし、子どものほとんどが、幼稚園から小学校の低学年くらいまでだったため、作り方を説明してもあまり響かなかった。これくらいの子は、説明や理屈を聞くより、自分で実際に活動したいという気持ちが強いのだということを、教育実習の時に学んだことを忘れていた。単純に説明するだけではなく、作りながらその都度説明していくとか、事前にするなら紙芝居や劇にするなどと、子どもの興味をひくような工夫をすれば良かったと反省している。

いよいよメインの活動、おもちつき！！せいろで蒸して、杵と臼でおもちをついた。子どもたちも順番につき、全員が本当に楽しそうにみんなが経験できて良かった。ここまでは順調に進んでいたが、ついたおもちを丸め始める時に問題が起こった。最初の予定では、丸めている途中に食えず、全部丸め終わってからみんなで一緒に食べ始めるという形をとることにしていた。ついたおもちをすぐに食べたいという子どもの気持ちは十分分かる。私だってすぐに食べたいと思う。しかし、食べながら丸めると場がめっちゃめっちゃになって



しまい、たくさん食べられる子とあまり食べられない子がでそうな気がして、講座のスタッフと話し合った結果そう決めたのだ。集団で活動する時には、他の子を思いやり、我慢することの大切さも学んでほしいという願いもあった。しかし一部の子が丸める前に食べ始めた。丸め終わった後、一人で10個も取っていく子もいた。スタッフがたくさんいたにも関わらず、どうにもならない状態になってしまった。今までの経験から、当日は何とかなるだろうと甘く考えていたのが間違いだった。前日までにもっともっと細かいところまでの動きを確認すべきだったかもしれない。スタッフ間の連絡が不十分だったと反省している。一つの活動を企画し、みんなが楽しめるようにするのは本当に大変なことだと思った。一人で10個もとっていく子は悪気があったのではないと思うが、そういう子に対して上手く注意する力が私には足りないと感じた。

### 3. 教師として子どもと関わること

私は、今までYOU遊広場や教育実習でたくさんの子どもと触れ合ってきた。その中で、子どもの数だけ、考え方も興味をもつことも違うということに身をもって感じさせられた。また、教師や周りの人が子どもに与える影響の大きさも感じた。物事を一方向からしか見られないと子どもの旺盛な好奇心を駄目にしてしまう。そこで私は教師になるにあたって、様々な価値観の人と触れ合いたいと思った。いろんな考え方・世界を知りたかった。たくさんさんの経験をしたかった。YOU遊広場は私のそんな願いをかなえてくれた場であった。

最近読んだ本の中に次のようなことが書かれていた。少し長いが私が普段から思っていたことがまさにそのまま書かれていたので引用する。

『教師に重要な資質・力量として、子どもがもっているあこがれのベクトル(ここでは、あこがれを、新しい世界へ向かうベクトルとして例えられていた。ベクトルは周知の通り、方向性と量を同時に表すことのできる記号だ。)に寄り添う力を挙げることができる。この場合は、単純にひきつけられるということではなく、積極的に寄り添うのである。単純な意味で言えば、その子どもが好きだと思ってやっていることに興味を持ち、一緒にそれを楽しむということである。自分が好きなことを他者が共鳴してくれると嬉しくなる。そしてあこがれのベクトルも強くなる。ましてや教師や親が、そのベクトルに寄り添って自分のあこがれのベクトルを誘発させてくれれば、励まされエネルギーがわく。

ベクトルにベクトルとして寄り添うということも、教師という職業においては一つの高度な技である。というのは、教師が相手にするのは多数の子どもだからである。それぞれの子どもの興味と関心のベクトルの方向性はずれている。その一つひとつに完全にではなくとも寄り添っていくことは多大なエネルギーと興味と関心の柔軟さを要求する。これはプロフェッショナルな技と言ってもよいものだ。相手があこがれている世界について全く無知であれば、話がかみ合わない。ある程度の知識を持っていることによって、寄り添うこともできる。

したがって、教師というのは、子どもと一緒にあって、幅広い好奇心の矢をあちこちに張りめぐらせるライフスタイルが、本来求められる仕事である。自分があこがれていることにのみ関心があり、他者のあこがれに関心を持たないタイプの人間は、研究者にはなれても、教師としては必ずしも十分であるとは言えない。相手の世界と自分の世界をすり合わせることでできる力があれば、子どもの興味と関心の幅はあっという間に広がってくる。

教師自身が広い世界を持ち、さまざまなものにあこがれのベクトルを持っていることに



よって、ベクトルごとにひきつけられる子どもが出てくる。子どもによってひきつけられるベクトルは、微妙に異なる。集団を自分の強烈な一本のベクトルで染め上げることも魅力的だが、さまざまなベクトルを見せることによって、それぞれの子どもの内に異なるベクトルを芽生えさせるということがおこる。

また、教師は子どもに「何が好きか」と聞くだけではなく、まず「自分はこれが好きだ」という姿勢を見せることが、子どもの興味と関心を生み出す。自分が出会ったことがないもの、まったく知らないものに対して興味と関心をもつことはできない。そうしたまったく新しい世界に出会う媒介となるのが、教師の役割である。その出会わせ方は、教師自身がその世界にあこがれているという仕方でひきつけていくのが、もっとも自然でありかつ効果的である。』(斎藤孝：子どもに伝えたい三つの力)

まさに、教師の子どもに与える影響の大きさが書かれている。また、子どもに多くの興味と関心をもたせ、知ることや学ぶことの楽しさをどれだけ伝えられるかは、教師の経験の豊富さがものをいうことも書かれている。YOU遊広場は大学の授業では学べないことをたくさん経験させてくれる場であった。

#### 4. 学校週5日制とYOU遊広場

今までの知識詰め込み型の教育が見直され、総合的な学習やゆとりの教育が重要視されてきた。ゆとりの教育の一つとして、今までの3割ほど学習内容が減らされる。そして、今年の4月からはついに国公立で学校週5日制が完全実施されることになる。これと同時に、新聞では毎日のように学力低下についての話題が取り上げられている。授業内容が3割も減り、学習する時間が減れば学力が低下することを危惧しているのだ。そのため、一部の私立学校では来年度からの学校週5日制に反対し、今まで通り授業をするという記事が先日新聞にでていた。学校を休みにしても、大学受験に響くだけという理由からだそうだ。これらの私立学校の言い分も分かる。しかし、学校週5日制やゆとりの教育が何故実施されることになったのかを考えなければいけないと思う。何故今まで通りの教育方法ではいけないのか？何故変える必要があるのか？貴重なはずの学習時間を削ってまで実施する必要性は、学習よりも大切な何か欠けてしまって、それを補うためではないだろうか。それが今言われている「生きる力」だと思う。学習能力をつける前に人間らしい生きる力をつける方が先だと考えられているのだ。「生きる力」という言葉は抽象的すぎていまいち実感がわかない言葉だが、要するに、生きていく上で大切な力である。人とコミュニケーションをする力、自分の意見を人に伝える力、人の意見を受け入れる力、人を思いやる力、人と協力する力……。これらは全て人と関わることによって自然と身につく力だと思う。漢字力や計算力のように一人でもつけることのできる力ではない。少子化、核家族化などの影響で、昔に比べて同世代の子と関わる機会が減ってきている。同世代の子ともっとも関わる機会を子どもたちに与えてあげる必要がある。こんな時にこそ、地域が立ち上がるべきではないか。地域にはたくさんの方がいる。ただ、集まる機会がないだけだと思う。そのきっかけ作りに、YOU遊広場のような活動はもってこいだ。地域に欠けているものを的確に提供している場のように思う。また地域のためだけでなく、学生の勉強にもなっている。

やっと軌道に乗り始めたYOU遊広場。これからも地域のためのYOU遊広場、学生のためのYOU遊広場であり続けてほしい。



# 地域と学生がつくるコミュニティー

## —『里山ふれあいキャンプ』を通して—

小島真知子 地域スポーツ専攻 3年

# Community Made by Local Citizens and Students

## —Through the "Family Camp"—

KOJIMA Machiko : Major: Lifetime Sports, junior

We Lifetime Sports majors planned and managed a family camp. We referred to the participants' advice and opinions to do that. So the participants and we had various activities together. As a result, I think the students and local citizens made good relationships. We hope that this sense of community will spread and expand.

【キーワード】 里山ふれあいキャンプ 親子 地域 学生 コミュニティー

### 1. はじめに

#### 1.1 Y O U遊広場を始めたきっかけ

私は、小学校の教師を目指し、信州大学教育学部に入学してきた。そのため、1年生の教育参加で「Y O U遊サタデー」の存在を知り、興味を持った。しかし、小学校の頃から続けてきたバスケットボールをまだやりたいと思い、私は信大バスケットボール部に所属した。バスケット部はインカレ(全国大会)に出場している強い部である。そのため、土・日は「練習に出なければいけない」という義務のようなものを感じ、「Y O U遊サタデー」には参加することなく過ごしていた。2年生になり西長野キャンパスに来ると、体育館で練習をしている横目で、実際に子ども達と学生が楽しそうに活動をしているのを見て、自分の中で意識が変わっていった。「このまま、部活だけ一生懸命やっていていいのか？もっと子どもと関わりたい。もっと自分自身を広げていきたい。」と思い始めた2年生の後半、「Y O U遊サタデー」が終わると聞き、驚いた。しかし、新しく何か始めると聞き、「これは、チャンスだ。」と思い、飛び込む決意をした。

#### 1.2 信大Y O U遊広場で得たもの

このように始めた「Y O U遊広場」。5プラザの長としてキャンプを中心にいろいろな活動を行い、早一年がたち、第二期に引き継がれようとしている。今年一年でいろいろなことを実践する中で多くの事を学んできた。

5プラザでは何もないところからキャンプをたちあげる企画力、またリーダーとしてスタッフをまとめ、動かす力、本番中の雨や思いもよらないけがに対し、臨機応変に対応す

る力、運営力、そしてキャンプが終わっても、実践したことを報告書にまとめる力。宿泊を伴い、子どもを預かるという大きな責任の中で、「第1回里山ふれあいキャンプ」が実施できたことは、私に大きな自信となった。

また、私は「YOU遊広場」で、共に何かに真剣に取り組める仲間達に出会い、助け合い支えあい、時には意見をぶつけ合いながら過ごしてきた。それは学生の中だけではない。私は他のプラザの活動にも積極的に関わる中で、多くの子ども達や、お父さん・お母さんと継続的に付き合い仲良くなった。つまり、様々な人と接する機会が増え、自分自身のコミュニティ(地域社会の場)が広がった。「YOU遊広場」の良いところはそこにあるように思う。そこで、地域と学生がつくるコミュニティについて、今年1年の活動、主に「里山ふれあいキャンプ」の実践を通して考察する。

## 2. 「里山ふれあいキャンプ」事前準備の過程

### 2.1 「里山ふれあいキャンプ」にかける思い

「里山ふれあいキャンプ」を始めた動機は、5プラザの中で詳しく報告しているが、特に「自然の中での親子のふれあい」の機会を作りたかったからである。「YOU遊広場」の活動では子ども中心のものが多く、お父さん・お母さんは子どもの送り迎えや、子どもの活動を見守るという関わりが多いように思った。そこで、このキャンプでは子どもだけでなくお父さん・お母さん、そして学生が一緒になって自然の中へ飛び出し、思いっきり活動したいと考えた。

また、学生にとっては野外教育を創造する実践力を身につけ、親子のふれあいの場に関わり、家族のあり方を考える場とし、実際に親の方や子ども達と宿泊を通して交流を大切にしたいと考えた。

### 2.2 参加者募集、参加者との情報交換

そして、「YOU遊広場」の活動に関わっている家族に募集の案内を配った所、13家族37名からの反応があった。私は、毎日申し込みのはがきが届くのを楽しみにしていた。自分達が企画したものであるからこそその緊張感であった。しかし「希望者が殺到するのは・・・」とひそかに期待と不安を感じていた私にとってこの結果は、意外なものとなった。「なぜ、人が集まらないのだろう。」と私を悩ませた。しかし、このことは後で触れることにする。

このキャンプがもつ、他にないメリットは、「YOU遊広場」の活動を通して参加者と出会うことができるという点である。これを生かさないわけにはいかないと思い、参加者が決まってから、私は他の活動に積極的に参加し、キャンプに参加してくれる子ども達や親の方と話すように心掛けた。また、キャンプを楽しみにして来てもらいたいと思い、参加者に伝えたいこと・考えてきてもらいたいことなど、簡単なプログラム紹介をつけ、参加者に事前に渡した。そして、事前アンケートとして心配なこと、特に子どもの健康面や性格面、プログラムに関して意見を聞き、それを生かしていこうと考えた。その中で、下記のような鋭い意見を頂いた。

- ・楽しいキャンプであるほど、子どもと親は一緒に行動しなくてもいいのでは？
- ・持ち物を全て統一しておかないと、子ども同士で問題になるのでは？



・緊急時の対応（応急処置、搬送体制、受け入れ病院）はどうなっているのか？

このアンケートは、秘密書類としたが、事前に参加者のことを互いに知っておきたいと思い、しおりに自己紹介を載せ、キャンプで楽しみなことも書いて頂いた。その中である親の方は、

- ・子どもの新たな一面が発見できることや友達を作ってくれることが楽しみ。
- ・自然や子ども達と接する中で、これから親として地域の一人の人間としてどう関わっていけばよいか学ぶ機会にしたい。

と、高い意識を持ち、期待して下さり一方、子ども達は、

- ・虫をたくさん捕まえたい。ハイキングを頑張る。
- ・友達をたくさん作りたい。

と、楽しみにしてくれている事が分かった。これを読んでいると、予定より参加者は少なくなったものの、参加者の一人ひとりの期待が伝わり、参加者があって実施できることを改めて実感し、感謝しなければいけないと感じた。また、やる気がみなぎると同時に、期待に応えられるかという不安とあせりが募ってきた。しかし、このように参加者の声があらかじめ聞けたことは大きな糧となった。

### 3. 「里山ふれあいキャンプ」本番

私は、はじめの挨拶の中で「13 家族 37 名と学生スタッフ 17 名、そして土井先生が大家族となって一つ屋根の下で 2 泊 3 日を過ごし、良い思い出を作ろう。」と話した。つまり、一つのコミュニティ形成を目指したのである。

竹細工では、お父さんが力を発揮し、協力し、教えあいながら家族で食器を作っていく。その後の親と子を分けてのプログラムでは、親の方達は子どもと離れ、ほっとし、世間話をしながらもブルーシートの上で車座になり、夢中で家族の食器を仕上げていく。一方、子ども達は、学生と共に夕食づくり。いつもお世話になっているお父さん・お母さんにおいしいハンバーグを作ろうと必死だ。

このようにして出来たものを互いに持ち寄り、雨のため狭い研修室で皿に盛った子ども達が作った料理を、親の方達が仕上げた竹の箸でつつきながら食べた。まさに、大家族である。

しかし良いことばかりではなく、参加者から不満の声があちこちで挙がった。

- ・プログラムが詰まりすぎている。（睡眠時間は確保してもらいたい。）
- ・水分補給が必要。
- ・正確な細かい指示がほしい。

これらはスタッフである学生にとって痛い指摘であったが、真剣に受け止め、みんなで話し合い、改善策を考えてすぐにお茶を用意したり、連絡黒板を作ったりという対策を立てることができた。ある参加者からも、「連絡黒板ができ、行動しやすくなった。」と声を掛けてくださり、すぐに対応できたことは良かったと思う。

2 日目のメインイベントの一つである富士の塔ハイキングでは、スタッフとして先頭を歩きながら、課題である「林間ことばあつめ」をしながらそれぞれの家族と楽しく歩くことができた。そして、狭い山頂に大きなブルーシートを引いてその上で食べたスタッフ特製おにぎりは、最高のものとなった。予定よりかなりペースが速く時間に余裕ができ、前

夜は遅かった事もあるので、お昼寝タイムを取る事にした。これらも参加者の意見があった出来た対策である。

しかし2日目も、良いことばかりでは終わらなかった。ハイキング中にマムシを発見してしまい、そこでまた、参加者の不安を募らせることになってしまった。

- ・マムシについて事前に情報はなかったのか？
- ・マムシ対策はどうなっているのか？

さらに、一番恐れていたことが起こってしまった。プレゼント作りの時、小刀で女の子が指を切ってしまったのである。その時、私は何もできなかった。事前に、スタッフ緊急マニュアルを作り、ある程度対応はしておいたが、その「ある程度」がいかに形だけのものであったかを痛いほど感じた。

- ・けがはつきものであるが、細心の注意が必要。
- ・安全管理・対策は地味で裏方の仕事であるが一番大事。

と、どの活動においても一番重要な安全について、参加者から学ばせて頂いた。参加者の命を預かっている以上、けがが起こることを常に想定し、実際に起こった時に迅速に対処できるようにしていく必要がある。

子ども達や親の方と触れ合い、大家族として過ごした2泊3日、楽しいことはもちろんたくさんあった。しかしそれ以上に私は、参加者の皆さんからたくさんの意見を頂き、多くの事を学ぶことができた。初めは参加者から指摘を頂くにつれ、自分達の穴が浮き彫りになり、参加者の信用を失ってしまうのではと逃げ出したい気持ちになった。しかし、その指摘は「私達を非難しよう」などと低いレベルのものではなく、私たちに学ぶ機会を与えてくださるありがたい指摘であった。その事によってスタッフである学生みんなで話し合い、改善していくことができた。学生と参加者の皆さんとが宿泊を共にし、コミュニケーションを図ることで、コミュニティが広がっていったように思う。

#### 4. 「里山ふれあいキャンプ」を終えて

##### 4.1 アンケート集計・報告書作成

参加者の皆さんにアンケートに協力して頂き、そこでもたくさんの意見を頂いた。

- ・「何かあったらここへ」という本部は徹夜するくらいの覚悟が必要。
- ・遊び相手だけでなく「命を預かっている」という意識が必要。
- ・危険なこと、人に迷惑かけることは大人として注意してほしい。
- ・参加者は「楽しかった」という思いで帰宅すればよいが、スタッフは「何もなくて良かった」で終了してほしい。

と私たちの反省点を鋭く指摘してくださる意見や、

- ・みんながどんな思いでキャンプに参加したのか聞きたかった。
- ・親子のふれあいを重視していたが他家族と触れ合う時間がもっとほしかった。
- ・先生、学生、親のお茶会があれば良かった。
- ・何から何まで学生さんが用意してくださり、もっと参加者に協力を呼び掛ける部分があっても良かった。親も手助けし協力して何かできればいい。
- ・これから完全週5日制になるが、学校だけでは学べないことをどんどんフォローしていきけるよう、さらに工夫して頂きたい。



- ・1 家族ではできないことを地域の方々の力を借りて共に成長できる企画があればどんどん参加していきたい。

など、これからの課題や要望まで挙げて下さり、「里山ふれあいキャンプ」をもう一度反省し、これからにつなげる材料となった。また厳しい指摘も頂いたが、参加者の皆さんは私たち学生のことを思って下さっている証拠だと感じた。お世辞ばかりの関係では発展していかない。地域と学生が意見を出し合い、指摘し合い共に作り上げていく必要があると考える。

#### 4.2 感想文を思い出文集に

その後、参加者の皆さんに書いて頂いた感想文、スタッフの感想文、写真などを思い出文集にまとめた。どの感想文からも、キャンプを通して出来上がったコミュニティが読み取れた。子どもの感想文には楽しかった事と共に、必ず学生の名前が記載されている。また、ある学生の感想文の中にも

・普段は子ども達と関わるだけであったが親の方とも仲良くなった。どんな活動にも保護者の方や地域の方の理解が必要であるため、今後理解や協力を得ながらさらに活動を活発にしていきたい。

と、学生にとってもコミュニティの大切さを実感する意義あるキャンプになったことが分かる。

このコミュニティがここで終わらないのが「YOU遊広場」の良い所である。私は出来上がった思い出文集をできるだけ自分の手で渡そうと、その後も色々な活動に参加した。そして、プレーパークや農場そしてYOU遊フェスティバルでたくさんの方々と二度三度会うことができた。再び子ども達と遊ぶことができる喜びはもちろん、保護者の方とも顔なじみとなり声を掛け合い、思い出を語り合い、世間話ができることは、本当に嬉しい。

特に卒礼の最後の活動で、キャンプでけがをさせてしまった家族とも出会うことができた。その時、私が声を掛ける前に「けが治ったよ。」と笑顔で声を掛けてきてくれた。また、親の方に文集を渡しながらかけがの事をもう一度謝ると「子どもの不注意でもありましたし、子どもにとって良い経験になりました。」と答えて下さった。キャンプを終えてからもずっと気にかかっていたことが子どもの笑顔と保護者の方の暖かい言葉で癒され、非常に嬉しく思った。しかしこの家族から得た教訓を一生忘れず、これからは活かしていきたい。

#### 5. 考察

このように地域の皆さんとのふれあいを通してたくさんのことを学び、私自身のコミュニティは本当に広がったと言える。しかし、キャンプを実例としても、意識のずれが多少あったように思う。私たちは「親子のふれあい」を一番としたが、参加者はそれを超えた交流を求めている事が後で分かった。そのように、子どもや親が求めているものをしっかりと理解し、対応していく必要がある。一方的にお膳立てしてしまうのではなく、共に作り上げていくことが大切だろう。

また、私は「里山ふれあいキャンプ」において参加者が楽しんでもくださるよう、プログラムばかりに目が向いていた。しかし、参加者の皆さんはプログラムの充実だけでなく、安全面について厳しく評価して下さり、これからいろいろな活動を行っていく時、全て

は安全が基本となりその上で信頼関係ができていくに違いないと考える。

今、子どもの社会力が低下していると言われる。門脇厚司氏も『子どもの社会力』（岩波書店 1999 年）の中で「子どもの社会力は、地域社会の中での相互行為によって培われる。」と述べている。これから完全週五日制がスタートする。子ども達が「生きる力」をつけていくためには、自然体験や社会体験を通して人と人とが触れ合える場、コミュニティが求められる。これから完全週五日制がスタートするため、ますます地域社会が重要な役割を担うことになる。最近では、キャンプや「YOU遊フェスティバル」のようなイベント的なものには人が集まりにくくなってきている。1 回きりのイベントでは、完全に社会力が身についたとは言えず、それを次につなげていく場が必要であると考え。そのためにも継続的に活動し、継続的に様々な人とふれあえる場、コミュニティ作りを地域の中で行っていく必要があると考える。

この 1 年、「YOU遊広場」ではキャンプをはじめ、ふるさと農場やキャンパスプレーパークを通してコミュニティが形成されてきた。これから、よりよいコミュニティを広げ、築いていくにはどうすればよいか、さらに「YOU遊広場」のあり方が問われ、大きな課題になっていくに違いない。

## 6. おわりに

今、5 プラザでは冬の「ふきのとうキャンプ」を控えている。募集の案内を「YOU遊広場」の子ども達に書く時、一人ひとりにメッセージを添えた。子どもの顔を思い浮かべながら「また、キャンプで会おうね。」と。そしてこのキャンプには、是非不登校生も一緒に行きたいと考えている。今不登校生が求めているものは、まさにコミュニティであると考え。キャンプだけ来てそれで終わるのではなく、キャンプまでに不登校生と積極的に関係を作り、キャンプをきっかけに今後も、「YOU遊広場」の活動でさらにより良いコミュニティが広がっていくことを期待している。

コミュニティは、人と人とのふれあいによってつくられる、温かみのある居場所である。これからも常に、人との出会い、人との関わりを大切にしていきたい。





# 「信大YOU遊広場」と私の体験

—汗と涙を流して覚えたものは、一生忘れない—

小林則雄 地域スポーツ専攻 3年

## My Experiences with Shin-dai YOU-Yu Plaza

—Hard Work with Great Emotional Rewards—

KOBAYASHI Norio: Major: Lifetime Sports, junior

This report deals with the demands, rewards and experiences of working with Shinshu University's YOU-Yu Plaza program. In it I review some of the highlights, difficulties and results of participation in it. I conclude by explaining how it has reinforced my desire to become a teacher.

【キーワード】 児童厚生施設 社会力 プレーリーダー キャンプ 子育て 心の相談員

### 1. はじめに

今年1年YOU遊広場に参加し種々の得がたい体験をすることができた。この体験があればこそ教育実習も無事乗り切る事ができた。

YOU遊広場への参加は、それまでボランティアのキャンプを一緒におこなっていた仲間からの呼掛けが一つのきっかけであった。大学入学まで(今も)地元でスポーツ少年団のお手伝いを廿余年お手伝いをしている。この体験からボランティアで子ども達と本当に接するにはスポットではなく、継続的に行う事が大事ではないかという思いがあった。

YOU遊サタデーのメンバーの若くて爽やかな姿は、羨望でもあった。「全力を尽した者だけに許される内なる満足が得られる」ものを体験したいという思いもあった。

社会人としてこれらの活動に参加するのに、学生達に受け入れてもらえるかどうか正直なところ若干の不安もあった。幸い多くの仲間がいたことから、杞憂に終った。

一番の関心ごとは、清水のスポーツ少年団のように定期的に子どもたちに接する機会があるという点であった。授業で習ったことが実践できるという期待も大いにあった。

### 2. YOU遊広場組織運営の特徴

YOU遊広場に参加を決めて準備段階から関わった。組織がたちあがるまでの間は、混沌としている。どんな組織でも同じである。学生だから、社会人だからという差はないことを実感として感じた。まったくゼロからのたちあげという体験は幾つもあるが、それでも会社という組織内のことであり、そこには経営方針や工場のポリシーあるいは部門のトップの意向が少なからずあって、その上で組織運営やそれら目標を具現化するにはどうするかという中での混沌であった。グラスルーツのグランドデザインを考えるにしても同様

であった。

Y O U遊広場の場合は、まったくの白紙ではないもののポリシーなどがあまり全面に大きく現れていない点が大きく異なっていた。「汗を流して憶えたものは、一生忘れない…」というコマーシャルがあったが、まさにY O U遊広場の立ち上げは、これに近いものとの印象をもった。一見無駄とも思える延々の論議、なかなか結論がです、なんども繰り返される。当初は非常に違和感を覚えた。さっさとリーダーが決断すべし。次へ進もうという気持ちは何度もあった。でも考えてみると、会社のようにある前提条件があるわけではなく、みんなほとんど経験がない中では、必要な助走時間である。種をまく前のあの単調な土起しにも似ている作業である。この体験はこれまでになく、一番戸惑いを覚えた。気がつくのに少々時間がかかった。

この度重なる論議が結局は、みんなにとっての共通の畑になり、それぞれ好きな種類の種を蒔き手入れをし、収穫を得るというプロセスをこなす力となっている。

体験的教育法とでもいうべきものである。十分な時間があつたとは思えないが必要な時間があればこそその方法であるといえる。なかなか社会では体験できない貴重なものである。

参加するプラザは、いくつでも良いというおおらかさで、バイキング料理よろしくいずれも魅力的なプラザが並んでおり選択に悩むほどであった。自由選択は良い方法である。ただまとめる方は大変である。掛け持ち組が多いと打ち合せなど行事が競合することがあるからである。

それらを調整する仕事は、プラザ長とその補佐2名の3名である。これは適正な構成員数である。「委員会の構成メンバーに最適の値を求める公式を見出すことができるはずで

ある。その<sup>ゴールドマン</sup>黄金数は三(これ以下では定数にたりない)と二十一(これ以上では全組織が崩壊する)の間にあるはずである。その数が八だといいたある面白い理論がある。その理由はこの数がすべての国が避けている唯一の数だということにある。(パーキンソン著 森永晴彦訳『パーキンソンの法則』至誠堂新書 P70)」各プラザに3人の委員がおりそれが切り盛りする運営方法は、なかなか快適で良かった。

リーダーを置かないという論議が随分あつた。結果として連絡を主務ということで落ち着いた。しかしながら組織の運営をしていく上で、リーダーは必要不可欠である。

「海兵隊はすべての階層にわたって、リーダーはあくまでも選別でなく訓練によって育成されているのだ。指導力は磨き上げるものであり、どの志願者もリーダーになる可能性をもっている。」(『アメリカ海兵隊式最強の組織』日経BP P26) このY O U遊広場の体験は、単なる実践だけではなく、指導者としての訓練も含まれている。むしろ大きなウェイトを占めていると考える。特定のリーダーがいるが、その構成員もこの体験を通して指導力を身につけていく。Y O U遊広場は、そんな組織にしていきたいし、すでにそのような組織になっているのではあるまいか。

### 3. プレーパークについて

日常的でかつ継続的な活動を行うことから一番興味を持った活動であった。発想も学校を開放し冒険的な遊びを行うとい趣旨には多いに興味をもった。

スタートまでの準備は、Y O U遊広場の設立と同じ状況で混沌としていた。これは非常



に良い手法であった。

次世代を担う子どもたちが健全に育成していくことを願って、具体的な施策がいくつも行われている。その代表に児童厚生施設がある。

児童厚生施設とは、「児童厚生設備は、児童遊園、児童館等児童に健全な遊びを与えて、その健康を増進し、また情操をゆたかにすることを目的とする施設とする。」と児童福祉法第四十条に定めている施設をいう。児童厚生施設は、他の児童福祉施設がなんらかの意味において保護を必要とする児童を入所させることを目的としているのにたいし、ひろく一般児童のために健全な遊びを与えて、その健康を増進し情操をゆたかにすることを目的とし、積極的に一般児童の健全な育成と福祉の向上をはかろうとするものである。児童憲章にいう「児童はよい環境に育てられる」という精神を具現したものであり児童福祉法に、児童に関するたんなる消極的な保護法でなく、積極的な福祉法としての地位を与えている。

わが国においてはとくに子どもの健全な遊び場がないといわれており児童厚生施設の果たすべき役割はきわめて大きい。1998年現在全国で4,323の児童館、4,142の児童公園が作られている。さらに児童専用と言うわけではないが公民館も多数存在している。

「地域にはさまざま施設がありさまざま場所がある。そのどれもがアイデア次第で、地域活動の場として活用できるものである。しかし、都市化した社会では、それらのどれもが、何か特定の目的をもって作られている。・・・施設ばかりではない。今では、街のどこかに空き地を見つけたとしても、所有者や管理者の許可なくしては出入りも利用も出来ないのが実情である。子どもの成育環境としての地域社会がこのようになってしまっている今日、子どもたちに必要なのは、届け出や準備などを必要とせず、子どもがその気になったときに、そこに行けばいつでも誰かと出会うことができ、やりたいことがあれば、そこですぐにやれるような場所である。そういう場所が地域の中に、しかも子どもが歩いて行けるような距離内にあったとしたら、子どもにとっての地域社会は、大きくその意味を変えるはずであり、子どもの日頃の行動も大きく変わるはずである。そしてまた、大人が仕掛ける地域活動もその質を大きく変えることになるはずである。」(門脇厚司著『子どもの社会力』岩波新書P P 187~188)

1959年、国連で「児童権利宣言」が採択されることになった。宣言の第7条には、教育権と並んで遊びの権利(遊育権)も明記されていた。このような冒険遊び場(プレーパーク)とは、どんなものか「冒険遊び場は、狭苦しくなった都市空間ではできなくなった多くのことが自由にできる場所である。・・・そこでは廃材を使って小屋や登り搭を作ったり、焚き火をしたり、料理をしたり、穴を掘ったり、野菜を栽培したり、動物を飼ったり、砂や水や粘土で遊んだりすることができる。その雰囲気は自由であり寛大である。プレーパークには、必ず常駐のプレーリーダーがいる。・・・それぞれの子の実際を見極めながら、それぞれの子の発達を援助することを仕事とする専門識者たるプレーリーダーが常駐しているもの冒険遊び場の特徴である。」(前出 P P 193~194)

信大のプレーリーダーは、専門識者たるものではないが、少なくとも教育学部のなかでその指導の一端を学んだ準専門識者である。今年の後半期は、教育実習も終え教師の実地訓練を終えておりすでに専門識者に成長したともいえる。

門脇厚司はその著書のなかで、羽根木プレーパーク(世田谷区が児童年を記念して単年度事業として開設、現在に至る先駆的プレーパーク)の存在価値を①子どもに多様な大人と



出合わせ、彼らと相互行為できる機会を与えたこと。②子どもにさまざまな体験をさせることで、身体で学ぶ場を用意したこと。③遊び場での、子どもと子ども、子どもと大人、大人と大人の出会いが、地域での新しい活動を作り出すきっかけを作ったこと。(前出 P 198)と整理している。

信大のプレーパークには、更に教育学部学生に子どもらとの交流を通じて教師としての教育実践の場でもあると評価できる。大学の地域への開放という役割も期待できる面もある。またY O U遊広場の他の活動への参加の基盤として有効に活動している。

Y O U遊フェスティバルの企画、参加者は③の成果を如実に示すものである。日常的に参加している子どもたちを中心に他の活動も発展していく。プレーリーダーとの結びつきもそれだけ深まり、子どもとの関わりが増えていく。運営開始時には、積極的に参加した。中盤以降少し足が遠のいたのは反省点である。中核となったリーダーの熱意は大きく評価される。

今後は、どのようにして継続させていくかが、課題となる。これまでのボランティアの経験から学生組織の一番の問題点は、構成員が年々変化するという点である。場所は地域に存在するがそのソフトは、毎年毎年更新されていく。バージョンアップになる保障はどこにもない。この継続をどうするが、一番難しい課題である。

#### 4. 親子ふれあいキャンプについて

第5プラザとして『親子ふれあいキャンプ』を主催した。ここでの主眼は、親子が自然のなかで対峙し相互理解を深める場の提供とした。非日常のなかで語らい活動し日頃あまり見えない部分について、お互いが知るということは、大事なコミュニケーションである。自然のなかのキャンプは少なからず緊張をもたらす。小学生の低学年では、不安も増加する。親が身近にいることにより、一層親に対する頼もしさ、信頼も増す。また見知らぬ家族とのキャンプは社会力を育てる意味でも良い機会である。

「自発的な運動が能力の発達を促すという報告や、運動不足及びコミュニケーション体験の不足が、前頭葉機能の遅れを生じさせたという寺沢の仮説をあわせて考えると、行動制御の障害の要因を持つ者に限らず、いわゆる健常児の場合でも、チャレンジ体験を重ね、他者と出会い共同で課題解決を行い、何かに挑戦できる自己を見出していくことが社会的知性や自我機能の発達にとって重要であると思われる。(途中略)キャンプ活動は、子どもたちに自然の中での活発な身体活動の機会、人間同士の密接なふれ合いの機会、さらには未来に挑戦できる自己を発見する機会を提供する。」(平野・篠原・柳沢・田中・根本・寺沢・西條・正木『長期キャンプ体験が子どもの大脳活動に与える影響』国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 2001 P 267)

これらの研究を待つまでもなく、キャンプがもたらす効果を体験的に感じている。

個人的には、今回のキャンプのメインに野宿を置いていた。親子にとって未体験のイベントになるはずであった。生憎の天候で安全を考え中止とした。雨に濡れて途中撤退もおもしろい体験であると考えているが、雨による途中撤退について事前に施設と対応について検討を重ねてこなかったこと、今回は初めてのキャンプであることから、中止とした。

「雨の中でキャンプが楽しめるようになれば、一人前」という言葉もあるが、今後の課題としたい。



安全対策についても、自己管理、自己責任が基本とはいいいながらも、事前の十分な検討が必要であったと反省している。

## 5. Y O U遊フェスティバル「ひげののりさんミニミニ子育て談義」

Y O U遊フェスティバルは、子ども主体のイベントである。従来のY O U遊サタデーの延長でもあり、Y O U遊広場の今年の総括の場でもあった。より多くのイベントを個人の発意で提案し実施していくという実践の場でもある。

打ち合わせの場で、子ども主体のイベントばかりで良いのかな？とふと疑問が湧いた。雑談の話から、「面白い」となって父母を対象に開催することとした。子育て中のお父さん、お母さんにエールや、次世代を担う子どもにお父さん、お母さんを通じて健やかに育つてというメッセージを送りたいというのが趣旨であった。

プレーパーク、牟礼村ふるさと農場・茂菅ふるさと農場らの参加者を中心に案内をだしたが、なかなか参加者が集まらなかった。個人的な口コミ、当日の必死の呼掛けでお母さん5名の参加を得ることが出来た。親子との対話を想定し子ども役として大学生9名が参加し実施した。

子育ての体験談に終始してしまい、参加大学生の反省にもっと対話の時間が欲しかったとの指摘があった。初対面の中でその反応が読みきれなかったと反省している。テーマを決めてディスカッションする方法もあるとの指摘もあった。テーマの設定は幅広い内容のため、事前の検討が必要となる。そんな意味ではいささか準備不足であったかもしれない。

子育ては、これだというマニュアルはない。子ども一人一人違うし、また家庭の歴史もありいろんな子育て方法がある。今回の談義で主張したかった一番の点は、「お父さん、お母さん自信をもって子育てしてください。」である。体験的に実感していることがどれだけ伝わったかと、不安な点もある。Y O U遊フェスティバルに大人を対象にしたイベントがあるというもう一つの目的はなんとか達成できた。今後も子どもばかりでなく、大人を対象としたイベントを加えて行って欲しいと考えている。

## 6. Oプラザ「心の相談員」になって

Oプラザの一つとして「心の相談員」を行った。これは、県の「中学校心の相談員配置等調査研究事業」として長野市に再委託して行う事業である。趣旨は、悩みやストレスを抱える中学生のために、心にゆとりを持てるように相談員を中学校に配置して相談に応ずるなどとともに、市町村においては「心の教室」(カウンセリングルーム)等の整備を行い、「心の教育」を推進するとしている。大学生心の相談員として2週間に1回程度の相談が勤務として定められている。信大から5人が長野市内の中学校に配置されている。

12月末までに延べ75時間、対応人数263名の実績となった。当初は、心の相談員の業務をどのように進めたら良いかなかなかかわからなかった。心の相談という言葉は、自分に対しても、とても重い名称でいささか負担になった。教育実習が終って、中学校の様子もある程度体験からえることができ、生徒の関わりかたにも多少は自信がもてるようになった。大学生の相談員としてダブル配置の配慮がされているのもたいへん役立った。先輩のアドバイスは初心者にとって貴重なもので、スムーズに相談員の仕事を理解することが出来た。学校も相談室の設置をはじめ全面的にサポートする体制がとられ非常に助けられた。

生徒の心を開くのは難しい。まず生徒から信頼されなければ話してもらえない現実がある。まして社会人学生とはいえ、親もしくはそれ以上の年齢のものには、ジェネレーションギャップもある。ヨットを通じて子どもたちに接していた体験を活かし、すべてを船に見立てて活動することとした。心の相談室は、船長の部屋。部屋にはヨットのセイルを飾り、登校日には、国際信号P旗(意味「われ出航準備中、各員直ちに帰艦せよ。=全員集合」)を掲揚し全校生徒に知らせた。

学校の協力を得て、特活の時間に全教室を歩き自己紹介し詩を読んでアピールした。この時、生徒に詩が強くアピールすることを体感することができた。また何人かの生徒から朗読会賛同を得たことから秋の読書週間を機会に朗読会を開催した。参加者は10名と少なかったが参加者よりも朗読した方が感動するほどであった。これに自信をもった。大学生活を『のりちゃんの夢航海』と位置付けておりこの朗読会を機会に心の相談員たよりを『のりちゃんの夢航海 航海日誌』として発行、今日現在までに7号の発行を行った。

生徒たちとは、少しずつ交流がうまれ、深刻な相談はまだないが進路や友達関係についての手紙をもらうようになった。また学校へ来るのを待っていてくれる生徒も増えてきた。朗読した詩についての反響も大きく、カードにして配っているが欲しいという要望も多い。

親でもない先生でもない相談員との交流が生徒にとってどれだけの価値があるのか、まだ実感として不明である。しかし、少なくとも笑顔で話をする一時は、生徒でなくても貴重な時間であろう。生徒よりも相談員の方が癒されている感じがしないでもない。

この1年間の体験は、教育実習とは異なるが将来教師を目指すものとして生徒の実態を知る上で有意義であった。この体験を今後に生かしていきたい。

## 7. まとめ

この1年多様な活動に関わった。「汗を流しておぼえたものは、一生忘れない」という言葉の重みを実感した。25年余のヨットスポーツ少年団のボランティア体験も無駄ではなかった。また授業で種々学んだこともこれらの活動を通じて実践できた。

自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、より良く問題を解決する資質や能力を実践する場がY O U遊広場であることを再認識した。パソコンソフトのバージョンアップは、取捨選択しなから改善されているという。Y O U遊広場も的確にバージョンアップし有名ブランドとして育てて欲しい、「育てろ」「育てる」である。



# ビバ★★YOUプラ

—「信大YOU遊広場」を通して—

梅田亜紀子 社会科学教育専攻 3年

# Viva★★YOU Pla

—Through The Shin-dai YOU-Yu Plaza—

UMEDA Akiko : Major: Social Science Education, Junior

I participated in Shin-dai YOU-Yu Plaza for a year. This action taught me many important things, for example, meeting with local people, building relationships between children, and so on.

These valuable experiences will remain with me forever.

【キーワード】 出会い お出かけ 子ども 地域 協力 達成感・充実感

## 1. 6プラザをやろうと思った動機

私は、この1年間6プラザのプラザ長をやらせてもらった。頼りないプラザ長だったと思うが、活動に参加してくれたみんなが頑張ってくれたおかげで、1年間頑張ってくれたのだと思う。この場をかりてお礼を言いたい。本当にありがとうございました。

2年生の冬の時期、図書館2階やN館でみんなが集まって、この「信大YOU遊広場」立ち上げるために、寒い中何回も話し合いをした。時には野沢菜を食べたり、大根を食べたりしながら話した。

私がこのプロジェクトに参加したのは、もちろん理由がある。それは何かというと、何かしでかしたかったからだ。私は、大学に入っているんな講義を受けた。しかしそれは、自分の取りたい免許に必要な単位を取っていることなだけに気が付いた。大学に入った当初は、「先生になりたい」という目的がはっきりしていて一生懸命勉強していたのだが、だんだん「自分は本当に先生になりたいのか」と思い始め、講義に意味が見出せなくなった。そうすると、ただ単位を取っているだけの自分がいた。「これでは駄目だ」と思っではいたものの、どうすればいいのかわからなかった。そんな時、YOU遊サタデーに参加した。何も考えないで、ただおもしろそうだったから参加してみた。参加してみて、その組織力に驚いた。学生だけで動かしているとは思えないほど、しっかりしていた。先輩とは言えど、同じ大学生の自分とは明らかに違っていた。「こんなこと、私には出来ない」という反面、「やってみたい」という気持ちも出てきた。そしていつの間にか、「やりたい」という気持ちが強くなった。

しかし、YOU遊サタデーがなくなることになった。そして、YOU遊サタデーとは違うプロジェクトをやることを知らされた。YOU遊サタデーがなくなることを聞いたとき

は、「これからどうなるのだろう」という気持ちしもなく、不安になったが、新しいプロジェクトをやると聞いたとき、「これだ!!」と思った。一から自分たちで考えて進めていくのだ。一から何かをするというのは、とても大変なことだ。それは分かっていたし、やってみて本当に大変だった。しかし、大変なことほどやりがいがあるし、達成したときの喜びは大きい。「やってやろう」と直感的に感じた。

「子どもとの関わり方をきちんと考えたい」「もっと地域との関わりをもちたい」と考えていた私は、子どもや地域との接点がある活動をしたかった。そして、6プラザ‘お出かけYOU遊広場’をやろうと思った。YOU遊広場がもっと外に出て行ける活動になるように、と思って‘お出かけ’という言葉をつけた。この名前は、これから6プラザの活動を一緒にやっていこうとするときに、たくさんの候補の中からみんなで考えた名前なので、これからも大切にしてもらいたい。

## 2. 今年度の6プラザの活動を通しての考察

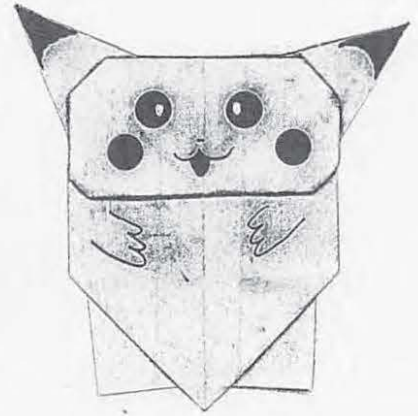
6プラザを始めた当初は、6プラザに参加していきたいと思っている人に何をやってみたいか紙に書いてもらったりしていた。書いてもらったときは、一人ひとりの願いが叶うためにはどうすればいいのか、と考えていたのだが、なかなか一人ひとりの願いを叶えるのは容易いことではなく、考えているうちに1年間が過ぎてしまったように思う。自分のやりたいことが中心になってしまった。もっと真剣に一人ひとりのことを考えていれば解決できたことかもしれない。それは、反省すべき点である。また、初めの話し合いのときは積極的に話し合いに参加してくれていたが、だんだん来なくなり、最終的には何にも参加していない人が出た。本人のやる気の問題もあるかもしれないが、私の情報伝達の方法や、呼びかけが不十分であった、ということなどの原因もあると思う。もっと積極的に活動に参加できる環境を作るべきであった。

本年度の6プラザとしての活動は、湯谷小学校の「子どもランド」の活動が主であった。6月から毎月第2土曜日は、「子どもランド」に参加していた。この活動は、湯谷小学校に通う父兄の方々がやっているものなので、子どもとの関わりだけでなく、父兄の方々との関わりも多かった。7月14日に行われた‘うどんとおやきをつくろう’では、子どもと一緒に参加していたあるお父さんにいろいろなことを質問され、うどんやおやきを作りながらいろいろな話題について話した。長い間話したわけではなかったが、このYOU遊広場の意義やYOU遊広場を通して何を学ぼうとしているのかを考えるきっかけになった。そして、自分は何のためにYOU遊広場をやっているのか、考えるようになった。「子どもランド」では、そういった父兄の方々と話す機会が多くあったので、いろんな子どもと出会えただけでなく、いろんなお母さんやお父さんと出会えたので、十分に意義のある活動であったと思う。

出会いといえば、湯谷小学校の「子どもランド」だけでなく、南長池診療所の「健康まつり」でもたくさんの人に出会った。この「健康まつり」には、スタッフとして参加したのだが、参加者と一緒になってやっていた。折り紙博士と呼ばれる人に、ピカチュウのバックやワッペンの折り方、簡単なこまの作り方を教えてもらった。これが、のちに私の教育実習で大変役に立つこととなった。他にも、参加した学生の似顔絵をととても上手く描いてもらった。よく似ていて、とてもうれしかった。



私は、6 プラザの活動を通して出会いの大切さ、喜びを改めて感じた。お出かけの名の下、学校から出て出張できて本当に良かったと思う。



### 3. 「YOU遊フェスティバル」を通しての考察

「なんか、お祭りみたいなのしたいよね！」で始まったのがこの「YOU遊フェスティバル」である。そこで意気投合した3 プラザと6 プラザが中心となって活動をし始めた。実は、計画をし始めたのは6 月だった。そして予定では、11 月に開催する予定だった。しかし、ここに書き出すと書ききれないくらい、小さいものから大きなものまでいろんな問題が湧き出てきて、もちろん準備不足もあり、最終的に開催は、12 月8 日となった。次に、日程は決まったものの、実行委員長が決まらない。なかなか決まらない。「みんなに迷惑かけることになると思うけど…」と言いつつ、私が実行委員長をやることになった。実際、本当にいろいろな迷惑をかけてしまったと思う。特に他の実行委員の3 人には多大なる迷惑をかけたに違いない。申し訳ありませんでした。

日程も実行委員のメンバーも決まった。しかし私たちは、「次は、何をすればいいのだろうか…」という感じだった。何から動き始めればいいのか分からなかったのだ。そこで私たちは、YOU遊サタデーの実践記録を頼りに行動を開始した。講座募集、スタッフ募集、子ども募集、ビラ作りなどなどをいつまでにする、という予定を立てて動き始めた。ビラを配りに周辺の小学校に行ったりもした。いつも何かに追われながら私たちは進んでいった。12 月に入ってから、やはり焦りだし、みんなで夜遅くまでやっていた。そんなときは当然のごとく疲れているのだが、なんだかとても楽しかった。みんなで一つのものを創り上げていっている実感があった。夜遅くまで仕事をするのも苦ではなかった。自分のやりたいことのための苦労は、苦労ではないことを強く感じた。

開閉会式の会場である体育館の飾り付けは、お金がかからないように、と広告を使ってわかを作った。出来栄は、広告とは思えないほどきれいだった。飾り付けが終わったときは、みんなで頑張って作ったこともあって、とても感動した。



#### 4. 信大YOU遊広場の活動を通しての考察

この一年間、6プラザの活動だけでなく、いろいろなプラザの活動に参加した。2プラザの「茂菅ふるさと農場」では、野菜班としてトマト、なす、きゅうりなどを植えた。夏前に植えて夏頃に収穫予定だったのだが、教育実習が重なってしまい、結局自分で植えたものは食べられなかった。しかし、植えただけであまり水やりに行くことができなかったのも、仕方ないといえは仕方ない。この茂菅の農場には、畑だけでなく田んぼもある。だから、田んぼの苗植えや稲刈りにも参加した。田んぼの苗植えは、他大学からの参加者もいて盛大に開催された。子どもと一緒にしてはしゃいで植えていた。苗植えは、実家でも手伝ったことがあるのでどういうふうにするのか分かっていたが、やはり、子どもと一緒にやるのはとてもおもしろかった。急がなくても苗は逃げないのに、どうしても急いで植えたいらしく、どんどん植えていく子がいた。そんな子がいるなかで、なかなか植えたくても植えられない子もいたりした。そういうときは、私から話しかけてなんとか植えられるようにした。苗植えに飽きてしまう子もやはり出てきて、そんな子に無理に「苗植えをしろ」と言っても仕方がないので、畑の周りに咲いていたシロツメクサで冠と一緒に作った。その子は作り方に興味を示し、何度も私に尋ねてはせせせと冠を作っていた。冠が出来上がると、その冠を私と一緒に頭にのせたまま、また苗植をし始めた。「子どもの興味は、移り変わりが激しいなあ」と思いながら、「子どもの興味を引きつけるのにはどうしたらいいのだろう」と考えながら苗植えをした一日だった。

また、10月には4プラザの「キャンパスプレーパーク」で、湯谷小学校の「子どもランド」などと一緒に「遊ぼうパン」と題してパン焼きをした。プレーパークに大きな穴を掘って、その中に薪や新聞紙などを入れて燃やし、竹の先っぽにパン生地をつけて焼く、というものだ。これが予想以上に疲れる。パンをつけた竹を、火に近づけた状態でパンが焼けるまで待たなければいけない。近づけすぎるとパンが焦げてしまい、かといって近づけないとなかなかパンは焼けない。その微妙な距離感が難しい。子どもの中には、パンを真っ黒に焦がしてしまった子もいた。しかし、みんなあまり上手には焼けなかったが、そのパンの味はとてもおいしかった。外で焼いて食べるせいなのか、ただ単にパン生地がおいしかっただけなのか分からないが、みんな「おいしい！おいしい！」と言って食べていた。私も、本当においしいと思った。用意していただくみや手作りりんごジャムをつけて食べるとより一層おいしかった。

5プラザの「里山ふれあいキャンプ」にも参加した。当日のキャンプには参加できなかったが、事前の下見キャンプには参加した。下見キャンプに行って、当日のキャンプに参加したい気持ちがとても強くなったが、どうしてもなかったので諦めるより仕方なかった。下見キャンプは、学生と先生だけで行ったのだが、子どもがいることを予想していろいろなところを見回った。しかし、やはり私の性格上、自分が楽しんでしまうところがあるので、観察が甘かった部分があったと思う。その分、当日のキャンプのときに問題が出てきてしまったかもしれない。もう少し緊張感をもって下見キャンプに臨めば良かった。

他にも、1プラザの「牟礼ふるさと農場」にも少し参加した。1年間でたくさんの活動に参加したが、終わった後、どれも自分のことを振り返る機会があった。「次やるときは、もっといいものを」と思い、次の活動につなげていった。この反省をもとに、これから



もっといいものを作っていきたいと思う。

## 5. 課題と展望

私の今年一年間の「YOU遊広場」の活動が終わった。活動をやり始めた頃は、自分のやりたいことが何なのかははっきりしておらず、何から始めたらいいのか全く分からなかった。プラザ長をやろうとする気持ちは強かったものの、どんな活動をしていくのかははっきりしていなかった。6プラザに参加していこうとするみんなで、これから一年間の活動予定を決めようとしても、なかなか上手く決まらなかった。そんな中考えたのは、自分達ができること、やってみたいことを持ち寄って、それを様々なところに紹介し、需要のあるところに‘お出かけ’しようというものだった。だから、そういった内容の紹介のピラを作り、春休みのうちに自分のできる範囲で学校や社会施設を回ろうという計画を立てた。しかし、春休みという期間のため、何の連絡も取れなかったことや意識の統一ができなかったために、思うようには進まなかった。結局、春休みが明けても何も進んでいない状態だった。はっきりいってかなり不安だった。どうすればいいのか分からなかった。自分は、何のために6プラザをやろうとしているさえも分からなくなっていた。そんなとき、湯谷小学校の「子どもランド」に参加してほしい、というお願いが舞い込んできた。4プラザのプレーパークに遊びに来ていたお母さんが、6プラザの活動を知り、誘ってくれたのだ。何をしたいのか分からなくなっていた私は、すぐに参加することにした。そして、それを「YOU遊広場」に参加している人に呼びかけた。ここから「子どもランド」との関係ができたのだ。ひょんなことから始まった関係だが、これからも続けていけるのであれば、続けていってほしいと思う。

1年間「YOU遊広場」をやって、私の中で一番大きかったことといえば、「YOU遊フェスティバル」だと思う。なんと、私が実行委員長をやってしまったのだ。何か、この1年間で大きなことがやりたかった、というのが本心である。地道に小さな活動をしていくのも、もちろん大切なことだと思う。しかし、何か大きなこともやってみたいものである。やり終える充実感がほしかったのかもしれない。ともあれ、「YOU遊フェスティバル」は何においても大きかった。しかし、実行委員長という立場に重荷は感じなかった。私が楽観的に考えた過ぎていたのかもしれないが、自由にやらせてもらったと思っている。それも、実行委員の清水美香さん、林美智子さん、町田竜太くんの力が大きかったからである。時には、「どうにかなる!」と思いつづけた私に喝をいれてくれたり、仕事に行き詰まったときには、一緒になってバカなことを言ってくれて気を紛らわせてくれた。いい実行委員に恵まれて、私は本当に幸せ者である。この3人がいてくれたからこそ、「YOU遊フェスティバル」ができたと言っても過言ではない。私は、実行委員長なので、具体的に仕事ははっきりしていないため、動きが悪かったかもしれない。しかし、4人で何度も話し合い、多くのことを決めた。その中で、協力することの重要性、やり通したときの充実感は、どんな苦労にも勝るものがあることを強く感じた。

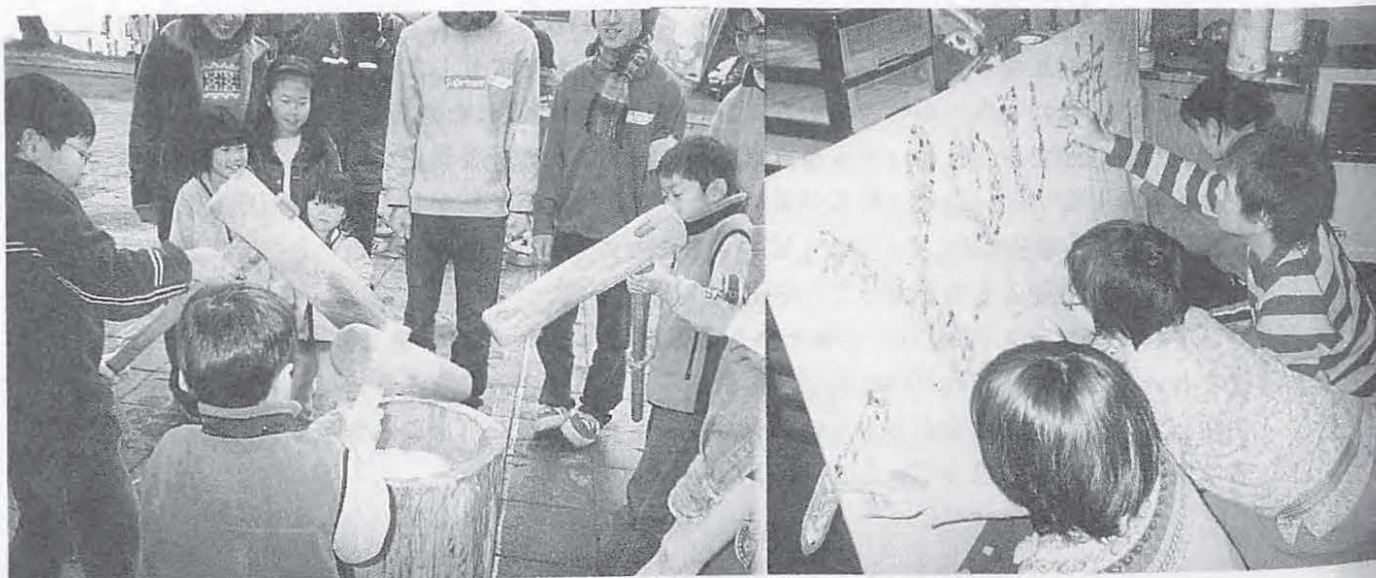
「YOU遊フェスティバル」が終わった後の茶話会では、感動のあまり泣いてしまった。泣くということは、それだけの想いがあるからだと思う。そんなふうに思うのは、普通に生活しているだけではなかなかない。そんなふうに感じたことをこれからも大切にしていきたいと心の底から思っている。



問題を一つ一つ解決しながら向かえた「YOU遊フェスティバル」当日。予想していた以上に1年生も参加してくれ、10の講座も順調に進んでいった。少しのアクシデントはあったものの、私の中では満足のいく「YOU遊フェスティバル」だった。

満足のいった「YOU遊フェスティバル」でも、もちろん反省点はたくさん出た。やはり、12月という寒い時期にやるよりも、もう少し早い時期の方が良かった。これは、早くからしっかり計画を立てていればできることである。「まだ先だから」といって自分を甘やかさないほうがいい。他にも、開閉会式の有無が挙げられた。確かにまったく聞いていない子もいた。しかし、しっかり聞いている子もいることに目を向けてほしい。また、開閉会式がなくなると、「YOU遊フェスティバル」自体に締まりがなくなってしまう気がする。これは、開閉会式のやり方を変えるなど、議論の余地があると思うので、もし来年もやることになったら議論してもらいたいと思う。

この「YOU遊フェスティバル」で実行委員長をやって、上に立つ難しさを痛感した。一応、実行委員長という立場だったが、みんなに助けてもらう部分が多かったと思う。「YOU遊フェスティバル」に参加してくれたみんなに感謝しています。ありがとうございました。そして、やっぱり最後にみんなに言いたい…。ビバ★フェス！！





# 「信大茂菅ふるさと農場」における自然体験が 子どもの人間形成に及ぼした影響

相磯素子 幼児教育専攻 4年

## A practice of the effect of natural experience for the growth of children at Shinshu University farm “Mosuge-Furusato”

AISO Motoko : Infant Education, Senior

Agricultural activities at rice field are effective for the all-round growth including physical, mental and social aspects. We considered the following points from the practice;

1. Children who go to kindergartens or elementary schools are interested in and have concern for the nature through agricultural activities at the rice field,
2. The rice field is the great environment as stimulator for the all-round growth. The activities at the rice field include health, human relations, environment, language and expression, and;
3. The agricultural activities at the rice field are not only good for natural experience but also for human relations.

【キーワード】「信大茂菅ふるさと農場」 自然体験 田んぼ 興味・関心 総合的な発達

### 1. 研究の目的と方法

「信大茂菅ふるさと農場」とかかわる活動の中で、子どもたちがどのようなところに興味や関心を抱き、何を学び、どのような育ちの姿が見られるのかを観察し、分析・考察することを通して、田んぼの持つ魅力と教育力を明らかにすることを目的とする。

- (1) 観察対象：「信大茂菅ふるさと農場」において学生と共に自然体験を行うという趣旨で応募してきた、保育園から小学校に通う幼児・児童を対象とする。対象人数は活動の度に異なるが、およそ10名から30名である。
- (2) 観察場所：主に長野市内茂菅地区にある「信大茂菅ふるさと農場」で行う。「みんなでつくろう！わらのおうち」の活動に限り、信州大学教育学部校舎で行う。
- (3) 観察方法：田んぼと触れ合う活動を通して、ありのままの子どもたちの心の動きや育ちの様子を、あらゆる発達段階の視点から捉えたいと考え、自然観察法を用いる。

(4) 観察期間：2000年10月19日から2002年1月20日までとする。

## 2. 事例と考察

### (1) 脱穀一藁の再利用について学ぶ(2000.10.19 信大茂菅ふるさと農場)

子どもたちは、学校が終わってから来たので、途中から脱穀を手伝ってもらう。最初は、稲を機械に通すときに、「わー」という歓声をあげながら恐る恐るやっている様子だったが、慣れてくるとペースも速くなってきた。

脱穀が一通り終わり、学生や先生が藁を燃やしていると、子どもたちも一緒に火を囲んでおしゃべりをする。活動に参加している先生から、「藁を燃やすと藁灰というとてもいい肥料になるんだよ」と教えてもらい、学生たちと一緒に感心する。稲から米が取られた後の藁は、一見、もう用のないもののように思える。しかし、これを燃やすことで、再び田んぼの栄養として活用されることを知り、子どもたちは自然界の循環系について学ぶことができたのではないかと考える。このことを今後社会科や理科などで扱う、生活用品のリサイクルや環境問題などにも結びつけて考えていけたらいいと思う。

そのうち、学生の1人が落穂を火であぶってポンポン菓子を作ってみせると、自分たちも落穂を拾ってきて一緒に作っていた。用具の片付けなどをした後、田んぼに戻ると、子どもたちは私に弾んだ口調で、「これ食べれるんだよ」と言って自分たちがあぶっていた落穂を分けてくれた。落穂からポンポン菓子を作ったことは、子どもたちにとって驚きと発見の場であったと思われる。こんな食べ方もあるのだということを知り、さらに米への関心と理解が高まったと考える。

### (2) みんなでつくろう！わらのおうち一遊びの素材としての藁

(2000.11.11 信州大学教育学部N103、N104)

Mさん(小2)とその友達(小2)は学生に、「ここにはテーブルが来るの」などと話しながら、藁とダンボール箱を使ってソファのようなものを一緒に作っている。大きなダンボール箱に藁をいっぱい詰め込むと、その上から2人でお風呂に入るような格好で座り、「気持ちいいです」とピースをして見せる。そこへ、先ほどの学生が、「はい、テーブルです」と言いながら藁をMさんたちのひざの上に乗せ、さらに米粒の入ったお皿とスプーンを2セット持ってきて、「ごはんです」と言って2人に手渡す。すると2人はスプーンを動かして笑顔でこれを食べる仕草をしている。Mさんは、「これ、初穀とったの」と言って、私にお皿の中の米粒を見せてくれた。そこには十数粒の精米が入っており、これは自分で剥いたものだと思う。私が、「おいしいですか」と尋ねると、Mさんは笑いながら、「まずいでーす」と冗談を言う。そして、Mさんは一緒にソファを作っていた学生に、「次ベッド持ってこようか、あそこの星の(模様ががついている)…」と言って細長い大きなダンボール箱を指差す。学生が、「(ダンボール箱を)持ってこようか」と言うと、「うん」と言って頷く。学生がダンボール箱を取りに行くと、自分たちも藁で作ったソファから立ち上がる。しかし、学生が戻ってきて、「あれね、別のお友達が使ってた」という報告をすると、少し残念そうな表情をする。

これらMさんとその友達が遊んでいる姿を見ていると、藁を柔らかいクッションや、ごはんに見立てたり、こういった空想の世界を友達と共有したりすることを楽しみ、遊びに打ち込んでいるように感じる。この理由としては、友達と一緒にでの参加ということで、自



分の思いを受け止めてくれる存在があったことが良かったと考える。また、Mさんの父兄の方へのアンケートから、これまでの生活の中での薬とのかかわる経験（直接的に薬に触れて遊んだことがある、間接的に話しを聞いたことがあるなど）が、遊びに非常に強く影響を及ぼすということが窺える。Mさんの場合、母親が農家出身であったことから、これまでMさんにも薬について話しをしてきたという。そのため、初めて出会う薬という素材に対して親しみをもち、また遊びに見通しを持ってかかわることができたと考えられる。

### (3) レンゲ畑で遊ぼうー子どもたちの興味や関心を引き出す春の田んぼ

(2001.5.12 信大茂菅ふるさと農場)

みんなで草花遊びをしていると、途中でUくん(小3)、Nくん(小3)、Yくん(小1)が田んぼで見た花の名前を知りたいと言ってきた。私は用意してきた『はるのたんぼ』と『学校の周りの草花』という本を2冊渡すと、すぐに自分たちで調べ始める。知りたいという欲求が強いようだ。調べていた花は『はるのたんぼ』の本に載っていて、名前はタネツケバナということが分かった。本の挿絵と実物の花を見比べながら、「これだよなあ」とうれしそうに友達と確認していた。一緒にこの花を見つけた学生にも後で報告していた。ここで見られた姿は、近年重要視されている問題解決能力と言われるものであるが、その根本にあるものは知りたいと強く思うことに他ならない。まず、興味・関心を持つ対象が田んぼにあったこと、そして、自分たちが疑問を抱いたときに解決する手立てがあったことがここでは有効であったと考えられる。また、友達や他の学生とも疑問が解決した喜びを分かち合うことができたことも良かった。

子どもたちは次にタンポポ笛作りに挑戦していた。これは私も作り方を知らなかったもので、試行錯誤しながら作るとようやく鳴った。子どもたちは、どうやって作るのか、どうやって鳴らすのか、真剣に私の口元を見ている。Yくんは真剣に私の口元を見ながら、どうにか鳴らそうと真似をしてみる。私は、「もっと(タンポポの茎を)口の奥まで入れて吹いてごらん」、「そんなに口元に力をいれなくてもいいんだよ」とアドバイスするが、音を出すことは難しいようである。そこで、私が鳴らしていたものなら鳴るかなと思い、自分のタンポポ笛を貸してみるが、それでも鳴らなかった。Iさん(小4)とAさん(小6)、Mさん(小4)が、「それ作りたい。どこにあったの」と聞くので、私は、「こっちに生えているんだよ」と言って、一緒に畑のほうに降りて行った。茎を折って作ろうとするが、彼女たちもなかなか鳴らすことができない。さきほどしたようなアドバイスをしても鳴らないと分かったら、AさんとMさんはあきらめてしまった。Iさんは私の口元を一生懸命見ながら、「鳴らない」と言いつつ何度も挑戦していた。その後、何度も何度も「鳴らない」と言っでは見せにきた。これら子どもたちの姿からも、ナズナを鳴らしたりタンポポ笛を作ったりする活動は子どもたちの興味を引いたようだ。これは、ナズナやタンポポは草花であるという概念を破り、音も鳴るのだという驚きから、自分たちもぜひ鳴らしてみたいという好奇心が生まれたからだろう。また、これらの遊びは伝承遊びの一つに分類されているように、人から人へ伝え受け継がれていくものである。本やテレビの情報を媒体とした一人遊びとは違い、人とのかかわり合いながら生まれる遊びの楽しさを、十分に味わうことができたと考える。

Kさん(3歳)は学生のKくん(小3)にカラスノエンドウの種を掌にのせてもらっていた。両手を合わせ、落とさないように慎重に掌にのせられた種を見つめている。そして、「ちっち

ゃなおまめがたくさん!」と笑顔で喜んでいて。その後、みんなで鬼ごっこを始めるが、Kさんとその姉のHさん(小1)、Rさん(3歳)の3人はこれに加わずに土手で遊んでいた。私は途中で彼女たちに声をかけに行くが、「(ゲームに入らなくても)いい」と言われたので、その場は学生のKくんをお願いをして再びゲームに戻る。それにしても彼女たちの集中力には驚かされる。ずっと草で遊んでいる。よく見るとさきほどのカラスノエンドウの種をまだ集めているようである。これは、学生のKくんにかラスノエンドウの種の大きさを、色、形など自然の美しさやよさに心を動かされたためだと思われる。このように、自然と触れ合うことで、豊かな感性は育っていくと考える。このためには、幼児が身近な自然と触れ合う機会を多くするとともに、他の幼児や大人の言動が重要な意味を持つということが言える。

#### (4) 田植え一思い出写真から見えるもの(2001.6.2 信大茂菅ふるさと農場)

活動の終わりにはほとんどの場合、子どもたち全員に思い出写真という形で、活動を通しての感想を絵と文字でかいてもらっている。これには、2つの意味があり、1つには子どもたちの思いを表現する場を与えるということ、もう1つは子どもたちの思いを学生たちがそこから読み取ったり、後から見返せたりするという点で今後の活動や研究に生かしていけるという利点がある。(以下は思い出写真より)

##### a. のうじょうにさんかしたりゆうをかいてください

- ・ 田うえをやってみたかったから。(小3 女)
- ・ 農じょうをやってみたかったから。(小4 女)
- ・ 信大の人と協力してやりたかったから。(小6 男)
- ・ しんだいせいと田うえをするのがたのしそだったから。(小6 女)

##### b. きょう、たうえをして、おもったこと(たのしかったことやがんばったこと)をかいてください

- ・ だろんこにさわったらきもちわるかった。(小1 男)
- ・ かえるをつかまえたこと。(小1 男)
- ・ かえるをつかまえておもしろかった。(小1 男)
- ・ だろんこになってなえをうえたので早く米になってもらいたい。(小2 女)
- ・ さいしょからさいごまでちゃんとやったからつかれた。(小3 男)
- ・ たうえをするとき土がきたなかったけどたくさんできた。(小4 女)
- ・ だろをふんだかんしょくがきもちよかった。(小6 女)
- ・ しんだいせいとたのしく田うえができてよかった。(小6 女)
- ・ みんなといっしょにいねをやったたのしかった。(小6 男)

##### c. たんぼやおこめのことで、もっとしらべたいことやべんきょうしてみたいことがあったらかいてください

- ・ たんぼは、日本中でなんこあるかしらべてみたい。(小2 女)
- ・ いつかるの?(小3 女)



- ・ おこめのしゅるい（名前）をたくさんしらべたい。（小4 女）
- ・ そだてた米がたべたい。（小4 男）

このように思い出写真を見ていて気付くことは、同じ活動をしていても、子どもたちが心を動かされる場面はそれぞれに違うということだ。泥の感触やカエルを捕まえることに楽しさを感じたり、早くお米になってもらいたいと願う子どもなど、様々である。小学校高学年では比較的、学生や友達と一緒に活動できたことが楽しいと感じている子どもが多かった。また、今回の田植えをきっかけに、各自で課題を持つこともできた。これらは、まさに田植えの活動という体験から田んぼや米に対する興味や関心が高まった証しである。小学校ではこれらを生活科や社会科、家庭科などにも発展させることができ、教材としても大きな可能性を持っていると考える。

#### （5）稲刈り一本物に触れる大切さ（2001.9.29 信大茂菅ふるさと農場）

後半一緒に活動をしたCくん（3歳）は6月に行われた田植えにも参加していたが、そのときは水の張った田んぼに入る恐怖と人見知りからなかなか活動には参加できなかったが、今回のCくんの鎌を持つ顔は真剣そのものである。最初は私が稲の上のほうを持ち、その下に彼が両手で持った鎌をあてて引いていたが、私が記録用の写真をとったり、刈り取った稲をまとめたりする際に少し手を離す場面があると、片手で稲を持ち、もう片方の手で鎌を持って刈っていた。なかなか稲が切れないと、また両手で鎌を持とうとするので、そのときには私が稲の上部を倒れないように支えるようにした。ものすごい速さで一帯の稲を刈り取ると、「もうないか」と言っとうろうろとあたりを歩き始めた。奥のほうにはまだ稲が残っていたので、一緒にそちらのほうに行ってみると、部分部分刈り取られ、そこだけ道のようになっているところがあった。少しの間、鎌を持ったまま稲を刈るでもなく歩き回り、自分の背丈ほどもある稲に囲まれている様子は、まるで自然の迷路を楽しんでいるようだった。その後また稲を刈り始めるが、他の男の子たちが持ってきたカエルに興味を示し、あぜの方へ行く。するとあぜに生えている草を切るようにして、「はっ」と掛け声をかけながら鎌を振り回していた。

稲刈りが終わると、再びブルーシートのところにみんなで集まり、学生の作った紙芝居を見たり思い出写真の記入をしたりした。思い出写真をかいているとき、Cくんはお母さんから今日の感想を聞かれると、「かまでぎこぎこがつかれちゃって、それで…」と笑顔で今日の頑張りをお母さんに報告していた。Cくんの稲刈りの様子から、彼の鎌に対する興味や関心はとても強いものであったことが窺われる。鎌は刃物であるため、安全面には十分な注意を払わなければならない。しかし、危険だからといってこれを遠ざけてしまうのではなく、使い方さえ説明すれば、自分なりにその性質や仕組みに気付き、使いこなせるようになるのだということを彼の姿から教えてもらうことができた。それと同時に、本物に触れる大切さも実感した。

### 3. 考察

「信大茂菅ふるさと農場」での幼児・児童の活動の様子を観察し、分析・考察した結果から、まず第1点に、田んぼでの活動は幼児にとっても、児童にとっても、どの発達段階の子どもにとっても興味や関心を引き出すものが存在するといえる。農作業体



験や草花遊び、学生との交流、生き物との触れ合いなど、1年を通した活動の中で子どもたちは多くの場面で心を動かし、興味や関心を抱いたものに対して積極的に関わろうとする姿が見られた。これは、学びの根本であり、生きる力につながるものでもあると同時に、感性を育む上で、貴重な体験になったと考える。

また2点目に、田んぼは総合的な発達を促す環境としても優れているということが言える。これについては、『幼稚園教育要領』を例にとり説明したいと思う。『幼稚園教育要領』では幼児の発達の側面からまとめて5つの領域を編成している。これらは、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」であり、環境を通して総合的に指導されることが望ましいとしている。「信大茂菅ふるさと農場」での活動は挨拶に始まり、農作業や遊びを通して体を動かしたり、人とかかわったり、自然とかかわったりする。そして、その中で感じたことを最後に思い出写真などに表現するといった、上記5つ全ての領域を含んでいるのである。総合的な発達は環境を通して行われるべきであり、その環境として田んぼはとても優れていると考える。

3点目には、「信大茂菅ふるさと農場」での活動は、自然体験を中心にしたものであったが、それと同じくらい人とかかわりが重要な柱であったということが言える。なぜなら、農作業や自然遊びというのは、人から人へと伝えられることで今日まで残ってきた文化である。よって、「信大茂菅ふるさと農場」での活動も、人と人とかかわりを切り離して考えることはできないのである。活動の度に地域の農家の方やJAの方々に参加していただき、農具の使い方や作業方法、安全面について教えていただいた。学生や友達とは協力をしながら共に作業を行い、異年齢児と遊ぶ場面では、幼い子どもを思いやる姿や、年上の子どもたちに追いつこうと真似する幼い子どもたちの姿も見られた。最初は、自然体験を目的に応募してきてくれた子どもたちも、自然体験や農作業を通して、人と人との交流も学ぶことができたと思われる。このことは、核家族化や少子化などの影響で、老人や異年齢児との交流が減ってきている現代の子どもたちにとって、貴重な体験となったと考える。

#### 参考文献

- ・ 井上勝・深田昭三・山崎晃・米神博子・林よし恵・道下真穂・松本信吾「幼児の自然環境に対する関わり方の特質とその発達の変化」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第26号、1998年
- ・ 海沼正典・土井進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義」『信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 教育実践研究』第2号、2001年
- ・ 土井進「信大茂菅ふるさと農場と信大牟礼ふるさと農場の創設」『信州大学教育学部・附属共同研究報告書』2001年
- ・ 富田陽子「幼児期にみる遊びのメカニズムと援助のキーポイント(Ⅱ)」『千葉経済大学短期大学部初等教育科研究紀要』第22号、1999年、第23号、2000年
- ・ 深田昭三・堀池美菜子・松本信吾・井上勝・山崎晃・伊藤順子・米神博子・林よし恵・道下真穂「幼児の自然体験と心情世界」『広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要』第27号、1999年
- ・ 文部省告示174号『幼稚園教育要領』、175号『小学校学習指導要領』1998年
- ・ 安江多輔『レンゲ全書』農山漁村文化協会、1993年



# 土から人へ

## —小・中学校における農作業体験活動の実態と課題—

杉山雅幸 野外活動専攻 4年

## From Earth to Human

### —The Circumstances and Subjects for Agriculture Experience Activities in the Elementary and Junior High School—

SUGIYAMA Masayuki : Major: Outdoor Activity, senior

Children are short of real experiences now. In order to make up for its shortage, it is very important to be experienced in Agriculture in the Elementary and junior high school. Then I have inquired into the circumstances and subjects for agriculture experience activities.

【キーワード】 農作業体験活動、小・中学校、課題、協力者

#### 1. YOU遊広場によせて

私は、信州大学教育学部を卒業するにあたり、卒業論文のテーマとして「農作業体験活動」を取り上げることにした。その取り上げるきっかけとなったのは、「信大YOU遊サタデー」で行なってきた、『自然体験活動「土づくりによる人づくり」プロジェクト』である。

私は2000年度、このプロジェクトに携わり、農場を開設し、年間を通して茂菅地区と牟礼村の子ども達とふれあいながら農作業をしてきた。そして私は、子ども達と共に作物を育てる楽しさや大変さを自分の身をもって知り、農作業を体験することの大切さを実感した。その結果、農作業体験を通しての教育が子ども達にとって重要な意味を持つのではないかと考えるようになり、小・中学校で行なわれている農作業体験活動について興味が湧いてきたのである。

そこでここでは、卒業論文で調査した学校の現場における農作業体験活動に関する実態と課題を述べながら、来年度によせる思いを書き記そうと思う。

#### 2. 農作業体験活動の必要性と可能性

人類は、文化の中で生きているということは言うまでもない。そしてその文化 (culture) の語源は、耕す (cultivate) ことからきている。地を耕し、食物を育てるようになってから人類の文化が大きく発展してきたことは、日本の歴史においても明白である。文化人類学者の中尾佐助<sup>1)</sup>は、「文化という農業はもちろん生きている文化であって、死体ではない。いや、農業は生きているどころでなく、人間がそれによって生存している文化である。」「農耕文化は文化財に満ちみちている。農具や農作技術は、人類の全歴史をあらためて述べることになるほどである。」と述べている。つまり農業は文化の基礎的な要素であり、人類に

にとって最も根源的なものだということである。では、現代社会においてはどうか。

今の日本は飽食の時代にあり、不自由なく食料品を手に入れることが可能になった。大手スーパーや大型ショッピングセンターに行けば、何でも揃っていて、しかも安価で手に入れることができる。それだけではなく、コンビニエンスストアでは24時間いつでも食べ物が買え、電話やインターネットなどでも食料品を入手することができる時代となった。それは昔に比べ、格段に便利で効率のよい世の中になったということである。しかし、その利便性を追求していく流れの中で、店頭できれいに並んでいる食料品を、汗水垂らして育てている人達の姿は、見えにくくなっているように思われる。そのため私達は、日常的に自分の生活と農業のつながりを意識することは少ないだろう。実際に、都市生活者に対して行われた調査<sup>2)</sup>によっても、約8割の人が「農業のイメージは縁遠い」(76.3%)、「農産物は、生産現場と消費者の距離がかけはなれていると思う」(85.5%)と感じているというデータが出ている。それだけではない。子どもの生活科学研究会が行なった小学生を対象に実施した「魚介・野菜等の名称に関する調査研究」<sup>3)</sup>によれば、1987年と1998年に行われた野菜の名称についての調査結果を比較すると、98年の方が87年に比べ正答率が低いと報告されている。このことから現代の子ども達は、食への関心が薄いことがうかがえる。人間は何かを食べなければ生きていけない。それ故に食への関心は、動物としての本能的な部分である。これらの報告は、人類としての基盤がゆらいでいることを示しているのではないだろうか。

日本の経済の発展から見ると、1950年代後半からの日本経済の急速な発展に伴い、農村部から都市部への人口の流出が始まり、1960年代には更にそれが激化した。この都市化の進展や就業構造の変化の中で、家族や地域共同体、会社の在り方及びこれらと個人との関係が大きく変化した<sup>4)</sup>。それによって人間関係が希薄化し、地域共同体のもつ子どもの教育力が失われたのである。農業を営む共同体の中には、様々な教育力が内在していた。多くの地域の人々とかかわりや伝統的な行事の中に日本の文化を見取り、祖先の知恵を学ぶこともできたであろうし、自分が生きていくための植物にふれることは、気づかぬうちに自然を学ぶことにもつながっていたに違いない。そうしてみると、人類の根源的な農耕の文化にふれることによって、本来人間がもっている力、すなわち「生きる力」を再生することができると思われる。

これらのことから、自らの手で農作物を生産することは、農耕が社会の基盤にある人間としてきわめて重要であり、生きていく上で、とても必要なことを学び得るのではないかと思う。

### 3. 農作業体験活動の実施状況

小・中学校における農作業体験活動に関して、中国・四国・九州の学校にアンケート調査を実施したところ、次のようなことが見えてきた。

- ①農作業体験活動は、6割以上の学校で行なわれていて、小学校の方が中学校に比べ、圧倒的に農作業体験活動を実施している学校が多いことがわかった。これは、中学校には高校受験のための勉強もせざるを得ないという状況があるためで、なかなか時間がとれないようである。
- ②農作業体験活動を行なっている農園は、学校外に比べ、学校内に設けられることが多い



が、学校外に設けられることも少なくないことがわかった。学校外に農園をもつことは、それほど珍しいことではないようである。

- ③農作業体験活動で扱われる作物は、多種多様であって、その中でも「さつまいも」が、校外・校内ともに最も多く育てられていた。また学校内の農園では、「ミニトマト」、「じゃがいも」も多く、学校外の農園では、「稲」も多いという結果になった。
- ④小学校で農作業体験活動を実施している学年は、「小学校 6 年生」が多く、「小学校 3 年生」は少ない。また、低学年は、学校内で農作業体験活動を行なう場合が多く、中・高学年は、学校外で行なわれる場合が多い。これは、年齢による体力や能力の差を、学校側が配慮し、安全かつ効率よく、体験活動ができるようにしているためと考えられる。
- ⑤カリキュラム上の位置付けとしては、「生活科」、「総合」、「理科」、「特別活動」に位置付けられていた。校内では、「生活科」や「理科」、校外では、「総合」に位置付けられることが多く、ここでも学校側の配慮が見られた。
- ⑥農作業体験活動の実施には、多くの場合、学級担任だけではなく、協力者が存在していた。その協力者には、「学校内部の教職員」、「児童・生徒の保護者」、「地域の農業従事者」が多く、校内に比べ、校外で実施される方が、より一層協力者を得て、活動が行なわれていることがわかった。
- ⑦農作業体験活動によって収穫された作物の利用方法は、「児童・生徒が調理して食べる」や「児童・生徒に分配する」が多く、直接、児童・生徒に還元されている。

これらのことから、学校での農作業体験活動をより一層充実していくためには、4つの改善策が考えられる。1つ目は、中学校での農作業体験活動の実現である。問題解決能力や知識など小学生よりも能力が高いことから、より質の高い学習が行なえるのではないかなと思う。2つ目に、取り扱われる作物の検討である。いろいろなものを育てることで、また違った利用価値が生まれ、新たな学習へと発展していく可能性があるように思う。3つ目には、協力者の検討である。たいてい学校関係者か地域の農業従事者であって、農協の職員や老人クラブなどの協力者は、少ないという結果になった。これらの人々の力を借りれば、農業の理解にもつながったり、世代間交流といったものにつながるのではないだろうか。4つ目は、作物の利用方法の検討である。作った子ども達が、食べたりすることは、収穫の喜びを味わうことから、とても重要なことではあるが、寄贈したり、販売するなど、他の利用方法を考え、学習を発展させていくことも必要ではないだろうか。

#### 4. 農作業体験活動の問題点、教育的効果、課題

実施状況と同様に、農作業体験活動の現状の問題点、教育的効果、今後の課題についてアンケート調査を実施したところ、次のようなことが明らかになった。

- ①農作業体験活動の現状の問題点としては、「長期休業期間中の世話が大変であること」や

「児童・生徒のかかわる時間が少ないこと」が問題点とされ、時間不足が大きな問題となっていることが、明らかになった。

- ②教育的効果としては、「自然のしくみに気づく」や「自然の大切さに気づく」といった、自然理解にかかわる成果が期待できることがうかがえた。
- ③今後、農作業体験活動を充実させるために、教員は、「協力者の確保」や「時間の確保」が必要だと思っていて、さらに、実施していない学校では、「場（農園）の確保」、実施している学校では、「マニュアルの開発」が求められていることがわかった。

また自由記述欄から課題を、次のように見出すことができた。

- 大規模校では、児童・生徒が多いことから、学校や学年単位で一斉に農作業体験活動を実施することが難しく、実施形態の工夫が課題となっているため、学級単位でそれぞれ特色ある農作業体験活動を実施するなどの工夫が必要である。
- 悪天候により計画が変更されることは、学校教育の現場にとって、大きな問題となるため、あらかじめ変更となることを予測し、中止になった場合の具体的な準備をしておくことなどのカリキュラムの柔軟な運営が必要である。
- 農作業体験活動は、教科学習や学校行事などとの時間の調整が難しいため、時間が延長してもいいようにその日の最終時限に行なったりするなどの授業運営の工夫や農作業体験活動の中に教科教育の内容を組みこむなどの授業内容の工夫が必要である。
- 都市部や市街地では、土地の確保が難しいため、屋上などに畑を作ったり、都市校外で手のかからない作物を育てるなどの農作業体験活動の場の工夫が必要である。

このようにアンケート調査では、課題が出された。しかし、自由記述欄の中に述べられるように数字では見出されにくい課題が、多々あることに気づいた。そこで実践事例から課題を抽出することを試みた。

## 5. 実践事例からの課題

実践事例には、様々な課題が述べられていたが、その中でも次の6つの課題が多く挙げられていた。

### ①学習内容の改善

農作業体験活動を体験し、楽しむだけに終わらせるのではなく、子ども達の学習につなげていくためには、教師が子ども達の興味をひくような動機づけの仕方や学習の発展のさせ方を考え、自主的な活動にしていくことが望まれる。そのためには、他校での農作業体験活動の実践事例などを参考にして、各学校の児童・生徒に見合った魅力ある授業を創造していくことが必要である。

### ②地域との協力体制の充実・整備

協力者の確保については、アンケート調査の課題で示されていたが、それは、教師にとって大きな負担となっていることが実践事例からうかがえた。「発掘した地域人材を学校



支援ボランティア(サポータ)として登録、組織化をするとともに活用計画を作成し、教育活動の中で積極的な活用を図る。」<sup>5)</sup>と、いったように協力体制を整えることができれば、子ども達にとっても充実した学習が行なえると思われる。また地域の隠れた力を引き出すことにもつながり、協力者の供給も容易になる。

### ③年間計画の再検討

アンケート調査の課題でも、「時間の確保」は重要な課題として挙げられていた。この「時間の確保」と年間計画は、密接に関係している。まず、年間を見通して、綿密な学習計画を立てることが、不可欠であり、児童・生徒の興味・関心を持続させるためにも、作物の成長に合わせ、農作業体験活動の回数や頻度を配慮すべきではないだろうか。

### ④教師の指導能力と指導体制の強化

子ども達の学習に有効な支援をするためには、教師自身が、農業のことについて理解を深めることが大切である。そのためには、各学校で積み重ねてきた知識やノウハウ、地域とのつながりを、毎年引き継いでいけるように、教職員の間で連携をとっていくことが、必要ではないかと思われる。

### ⑤経費の確保

事例の中には、補助金の打ち切りによって、継続の危機に瀕しているところもあった。そのことからすると、作ったものを販売するなどして、自分たちで経費を工面することも必要ではないだろうか。また今後、少子化による児童・生徒数の減少が考えられる中で、これまで行なわれてきた農作業体験活動を継続すれば、児童・生徒一人あたりの労力や金銭的にも負担も大きくなろう。こうした場合、再度その規模に見合った活動形態を考え直す必要もあると考えられる。

### ⑥安全管理体制の整備

現代は、学校にも危機管理能力が求められる時代である。安全面への配慮に関しては、今後、農作業体験活動においても重要視されてくるものかと思われる。だから農作業体験活動の引率者は、児童・生徒数に見合った引率者の数を増やしたり、作業の説明を丁寧に行なったりして、事故や怪我が起こらないように、最善の注意を払わねばならない。さらには、万が一、事故が発生した場合の対処方法や、連絡体制を整えておくべきである。また、上記でも述べられているように、傷害保険に加入することも必要であろう。

農作業体験活動の今後の課題は、前記のように挙げられた。全ての課題を通してみると、実施する学校の人口密度や地域の文化や歴史などの社会環境や自然環境の違いにより、課題は異なっている。そのためそれぞれの個々に応じた支援していくことが望まれる。そこで、私は地域に住む人々の協力が、これらの課題解決の鍵になると考えている。2002年度から完全学校週五日制が、実施されることから、失われた地域の教育力を再び呼び起こす必要がある。その力を是非、学校教員の手で復活させていただきたい。また地域も学校に歩み寄って来て欲しいと思う。

## 6. まとめにかえて

私は、大学生活の5年間、フレンドシップ事業にお世話になり、貴重な経験をさせていただきました。今、振り返れば、なんとすばらしい環境が整っていたんだろと感心してしまいます。その中で、自分が存分に学べたことに大変感謝しています。この卒業論文に取り組む中で、私は、次のようなエピソード<sup>6)</sup>に出会い、「信大YOU遊広場」にとっても、大切なことに気づかされました。それは、学校で田植えを終えてから、指導してくださった方が言った言葉でした。作業後、「おやつを用意したので」とその方が言うと、担任は「お勉強ですので」とお断りをすると、「田植えの終わった後日当たりのよい庭先で一服する楽しさも田植えのうち。農家の人は大変で、苦勞が多いばかりではないんですよ。」と一言。『一服する楽しさも田植えのうち』。この言葉を読んだ時、私は、肩の力が抜けました。今思えば、知らぬ間に余計な力が入っているときには、いいアイデアも浮かばなければ、見えるものも見えなくなっていたように思います。力を入れすぎず、頭を柔らかくしてやっていくことが大切なんだと気づかされました。時に道草も大事です。

私が、大学で会得した大きなこと。それは、人とのコミュニケーションの仕方でした。どう説明したら、わかってもらえるか、わかりやすいか。まだまだ未熟ですが、その大切さに気がついただけでも、よかったと思います。まだ、信大でやってみたかったことは、多々ありますが、今、やっと見えてきたのは、子どもを教育するには、その親の方と一緒にでなければ変わらないということです。是非、「家庭共育」を目指し、地域を変革していった欲しいと思います。最後になりましたが、僕に関わってくれた皆さん、本当にありがとうございました。

### 参考文献：

- 1) 中尾佐助 (1966)：栽培植物と農耕の起源、岩波新書、iii
- 2) ㈱博報堂生活総合研究所 (2000)：食と農業に関する意識調査、  
[http://athill.com/LAB/SHOKUNOU/itadaki/pdf/shousa\\_hyo.pdf](http://athill.com/LAB/SHOKUNOU/itadaki/pdf/shousa_hyo.pdf)、1-2
- 3) 谷田貝公昭ほか (1999)：魚介・野菜等の名称に関する調査研究、子どもの生活科学研究所、教育アンケート調査年鑑 1999 下、創育社、1006・1011
- 4) 文部省中央教育審議会 (2000)：新しい時代における教養教育の在り方について、文部省、[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/001237.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/001237.htm)
- 5) 瀬武史 (2000)：いきいきと主体的に活動する子どもの育成～ふるさと「小川」にふれ、学ぶ活動を通して～、総合的な学習 CD-ROM2001、(社)農山漁村文化協会、2062
- 6) 犬石秀実 (2000)：6年間を見通して育てる「育・食・遊」、米〈食と農〉からはじめる総合的な学習～消費者の視点から～、かがわ出版、34



# 農作業における子どもの「体験」と「学び」を結ぶ

## 学生と地域社会の支援

### －「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」での実践－

志村昌之 信州大学教育学部内地留学生 坂城町立南条小学校教諭

## Support of Connecting Children's Experiences with Learning in Farm Work by University Students and Community

### Through the Practice at "Mure School Farm" and "Mosuge School Farm"

SHIMURA Masayuki : Visiting student, Minamijo Elementary School, Sakaki Town

Through learning experience of farm work at "Mure School Farm" and "Mosuge School Farm", I have found three points important: First, to consider the meaning of cooperation with community and the process of learning useful knowledge. Second, to learn fundamental knowledge and skills from the community. And third, to set a situation of learning related to experiences of farm work.

【キーワード】 「信大牟礼ふるさと農場」 「信大茂菅ふるさと農場」 農作業体験学習  
「体験」と「学び」の結合 地域との連携

#### 1. はじめに

子どもの育ちにかかわって自然体験や農作業体験の必要性や重要性が多くの中で言われている。筆者も、学校現場において、学級園、理科園、近隣の農地などを活用して、毎年のように農作業体験学習を行ってきた。しかし、農業に対する知識不足、体験と子どもたちの学びや成長との結びつきにかかわる見通しの甘さなど、多くの問題を感じていた。今年度、内地留学という貴重な機会を与えられ、農作業体験を中核とした「総合的な学習の時間」のカリキュラムや完全学校五日制における地域での活動プログラムの開発について研究してきた。本稿では、農作業「体験」における子どもの「学び」の過程とそれを支えた学生と地域の取り組みについて、「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」での実践を通して考察してみたい。

#### 2. 「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」での実践

##### 2.1 問題の所在

農作業体験学習を行う場合には、農作業に関する基本的な知識や技能が必要であり、同時に、体験を通して子どもたちの学びや成長をどう見ていくかという指導者としてのビジョンも不可欠である。これらが無いがために、「単なる“まねごと”だ」とか「体験だけして何も残らない」といった批判が出てくる。そこで、地域指導者の活用などの地域との連携や体験から生まれる子どもたちの知的な気づきや学びへの意欲を引き出す場の設定を工夫してかなければならない。これらのことは、学校での「総合的な学習の時間」などの実践においても十分考慮していかなければならない課題である。

## 2.2 研究の目的

農作業体験学習を進めていく上で、体験したことにとまって子どもたちが知的な気づきをしたり学びへの意欲を持ったりしていく過程を明らかにしていく。また、子どもたちの学びへ結びつくような学生による学習場面の設定の工夫、学生や子どもたちの実態を踏まえて、農作業について専門的な知識や技能を持っている地域の方々と連携していくことの意義を明らかにしていく。

## 2.3 研究の方法・内容

「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」にかかわる地域の方々や子どもたちの活動の記録、学生の感想などを分析し、農作業体験学習における子どもたちの活動や地域との連携の具体的な場面を抽出し、子どもたちの「学び」や成長の過程にかかわる学生の企画や地域の方々との連携の意義を探る。

### (1) 「体験」と結びついた子どもの「学び」の姿

農作業体験学習では、その作業を通して子どもたちが知的好奇心や学びへの意欲を持つことが重要なポイントとなる。そこで、学生の企画で農作業体験と関連させながら子どもたちの学びにつながるような紙芝居やクイズなどの学習を実施した。なお、学校での教科学習とも関連が持てるようなことについて筆者も助言をした。

#### 1) 実施した学習（ は筆者の助言による企画）

##### 【信大茂菅ふるさと農場】

	活動内容	作業と関連した学習内容
4月21日(土)	ジャガイモの植えつけ	ジャガイモクイズ (ジャガイモの原産地、ジャガイモの花)
5月12日(土)	れんげの花の鑑賞	れんげの花の話 (れんげの花の紹介、花束の作り方、草笛作り、田んぼ周りの草花調べ)
6月2日(土)	田植え	お米クイズ (米の原産地、稲一粒から取れるお米の量、お米の花について) 土クイズ (稲の根、田んぼの土、何もないの三種類の水の透過性の実験)
9月29日(土)	稲刈り	お米の収穫について ・「米」という漢字の由来→八十八に分解→八十八もの (たぐさんの) 作業があるという意味 ・はぜ掛けの意味や天日干しの意味 ・マリ共和国の位置 (クイズ) : 国際協力田として送るお米について、マリ共和国の特徴についての説明
10月20日(土)	脱穀	脱穀、精米についての説明 (籾→玄米→白米の精米の過程、初穀、米糠の用途、脱穀の方法) もち米と粳米の違い 脱穀の道具と機軸について
12月8日(土)	注書製作	注書製作の由来、意匠の創

##### 【信大牟礼ふるさと農場】

4月28日(土)	ジャガイモの植えつけ	ジャガイモクイズ
5月26日(土)	サツマイモの苗植え	サツマイモクイズ (サツマイモの原産地、サツマイモの花、サツマイモのでき方)
7月14日(土)	蕎麦の種蒔き	紙芝居「カエルくんのお手紙」
10月13日(土)	蕎麦の刈り取り	蕎麦クイズ ・蕎麦の名前 (「稈」(「とがっている」の意味) →蕎麦) の由来 ・栽培面積と収穫量 (1aで40人分)



2) 子どもの反応から【SA児（小3男子 8月後半から茂菅、牟礼の農場に参加）】

① 稲刈りでの世界地図の学習から国旗や国の名前に興味を持つ

- ・「(前略) クイズでマリきょうわ国のことをやりました。アフリカにあって、お米があんまりとれないところです。だからここのお米をすこし分けておきます。うちへ帰ってから地図ちょうでもう一度みました。地図のまわりにいろいろな国の国きがありました。でもマリきょうわ国の国きはありませんでした。国きを見ていたら自分でもかいてみたくなりました。マリきょうわ国の国きもしらべてみたいです。」
- ・「ぼくは、今日国きを作ってみました。(中略) むずしいところもあったけど、うまくできてよかったです。大きい世界地図をかいて国きをはったらおもしろいかなあと思いました。国きあてクイズをやってみみたいです。」

② 脱穀で、脱穀の方法の違いやうるち米ともち米の違いに興味を持つ

- ・「(前略) 足ぶみだっこきを足でふみながら回してそこについたわらをそこにいれてお米だけをとっていきます。わらとこめがまざったら、ざるで風がふいたらわらだけがとびました。もう一つの機械はエンジンで動いて米とわらをべつべつに分けてくれます。うるち米ともち米の違いは、うるち米はどうめいでもち米は白色です。ぼくはどうしてちがう色なのかなあと思いました。これをごはんにしたらおいしいなあとおもいました。(後略)」

③ 蕎麦刈りで種取りの作業に集中し蕎麦と雑草の見分け方で自分なりの視点を持つ

- ・「そばかりをしました。いねかりに使ったかいねかりまをつかいました。一回目に切ったら、ザックザックッと切れてすごかったです。まちがえてざっそうまで切ってしまってこまりました。そばのくきの色は、くきのところが赤色です。そばのくきについているたねを手で引っぱってたねをとりました。その作業が一番楽しかったです。」

④ 蕎麦打ちで、蕎麦のこね方や蕎麦切り包丁などの道具に興味を持つ

- ・「(前略)」そばの作り方を教えてくれた人が、『水を半分のこしてまずこねるように』と言いました。それから少しずつ水を入れてこねていきました。耳たぶのかたさがいいます。ゆであがったそばを食べたらすごくおいしかったです。ほうちょうは、ふでばこぐらいの重さでした。大きさはティッシュのはこくらいでした。」

3) 考察

SA児は、稲刈りにおいて行われたマリ共和国に関するクイズをきっかけにして、世界地図や世界の国々、とりわけ国旗に興味・関心を持ち、その後、国旗についてより詳しい図鑑によりマリ共和国をはじめとして多くの国の国旗について調べるた。こうした学習への意欲を喚起したのは、国際協力田という場における農作業体験とそれに伴う学生の企画との結びつきの結果と言えよう。単に作業だけで終わるのではなく、国際協力田という場を生かし、子どもたちの作業によって作られたお米の送り先であるマリ共和国について世界地図を活用して示していったことが、SA児の興味・関心を引き出し、世界の国々（国旗や首都）について調べてみたいという学習意欲につながったと考えられる。筆者が経験してきた米作りの活動では、なかなかここまで発展させることができなかった。学年の学習内容に縛られ、社会科との関連という狭い範囲でしか学習のつながりがもてなかったことが多かった。しかし、この学生の企画とSA児の学びの過程の結びつきを目の当たりにし、「体験」と「学び」の結合を見通した農作業体験学習の重要

性をあらためて認識することができた。他にも、足踏み脱穀機と機械による脱穀の違い、うるち米ともち米の違い、雑草と見分け方から蕎麦の茎の特徴、蕎麦打ちのときの蕎麦切り包丁の大きさへの感動など、彼の知的好奇心をくすぐるような出会いがたくさんあった。これらも、それぞれの農作業体験の意味や地域の方々との連携を生かしながら進めた学生の企画が背景にあったと考えられる。

## (2) 地域との連携

(1) で見られたような学生の企画と子どもの学びが効果的に結びついた背景には、地域との連携があると考えられる。「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」においては、牟礼村ふるさと振興公社、JAながの、JAながの中央会などとの連携によって、農作業の基本的な知識や技能の習得を図っていった。

### 1) 学生の実態

#### ① 作物についての知識

現代の学生は、家庭や学校などで一般的に栽培する作物や使用する農具について知らないことが多い。トウモロコシがなっているのを見たことがない、お米の花を見たことがない、畝を知らない、鍬やみつまた鍬を持ったことがない、鎌を研いだことがないなどの実態がある。こうした学生が、子どもたちにかかわっていかうとしても見よう見まねになってしまったり、子どもたちの好き勝手にやらせたり、安全への配慮が欠けたりするなどの問題が出てくる。そこで、筆者は学生たちと相談の上、連携している地域の方々をお願いして、作物の栽培や農具の使い方について指導の場を設定していくこととした。

### 2) 学生を対象にした指導

#### 【農具使用についての指導講習会】

① 日時 5月14日(月)午後3時30分～5時

② 場所 信大茂菅ふるさと農場

③ 参加者 学生17名

④ 指導者 林部信造氏(農業)

⑤ 活動内容・講習の様子

- ・ みつまた、鍬、鎌の使い方(林部さんのご指導)

	みつまた	鍬	鎌
用途	田や畑を起こす	畝作り	
具体的な使い方・注意点	腰を入れて深く刺し、一度でこのように起こしてから土を持ち上げる。	紐などで目印をつけ、鍬の刃に合わせるようにして土を盛っていく。(畝作りの場合)	・ 草を逆手に持つ。(手や指を切らないようにするため) ・ 刃を滑らせるように右斜め手前を引く。 ・ 刃が45～60度くらいに傾けて置き、柄を膝で押さえてしっかり固定し、左手を刃のうら側で当て、右手で砥石を刃の角度に合わせて研ぐ。初めは粗い砥石で、仕上げは細かい砥石で研ぐ。

#### ⑥ 学生の感想から

- ・ みつまたと鍬は同じように使うものというイメージがあったが、目的によって道具をきちんと使い分けることがわかった。
- ・ みつまたで、てこの原理で起こすとスムーズに耕せるが、腰を入れて耕するのが難しい。
- ・ 錆びついた鎌も少し研いただけで切れ味がよくなった。どうしても鎌を正面に引いてしまう。一度ついた癖はなかなか抜けない。最初の段階できちんとした



やり方を身につけることが大事だと思った。

- ・ かまを研ぐときの押さえ方や刃に合わせた角度に砥石を滑らせることなど基礎的なことを教わった。林部さんが手を添えて一緒に持ってくれたので体で覚えることができた。
- ・ 道具の使い方について基本を教えてもらうよい機会となった。鎌の手入れや鍬やみつまたのほぞのかいかた、ぬらしてから使うことなど道具を大事にすることもきちんとしなければならないと思った。

#### 【稲刈りに向けての作業・講習】

① 日時 9月27日(木)28日(金)午後4時～6時

② 場所 信大茂菅ふるさと農場

③ 参加者 学生延べ14名

④ 指導者 林部信造氏(農業) 大内清氏(JAながの)

⑤ 活動内容・講習の様子

- ・ 雀除けの網はずし：網の収納(横一列に束ね、端から三つ編みのように巻いていく。)
- ・ 藁の縛り方：8株で1束を作る。縛る藁は選っておき、根元を水で濡らしておく。

⑥ 学生の感想

- ・ 網の収納は理にかなっていてコンパクトに収納でき次回の使用にも出しやすく工夫されている。先人の知恵に学ぶものがある。
- ・ 稲を手で刈るのは初めてだったが、かなり力が必要だった。ザクツという音が心地よい。
- ・ 一株一株丁寧に刈れた。藁で縛っていく方法もコツがわかることがわかった。くるとねじるだけだが、けっこう丈夫に縛れるものだった。
- ・ 天日干しは米の味がよいと聞いた。手間はかかるかもしれないが機械に頼らないこういう方法の方がかえって有効なこともあると思った。
- ・ 林部さんから差し入れていただいた柿がおいしかった。別の用があっても私たちのために駆けつけてくださったり差し入れをいただいたりして本当にありがたいと思う。また、林部さんとお話をしていると、自分の家族といるような懐かしい気持ちになる。

#### 3)子どもたちとの農作業での外部講師としての指導

##### 【サツマイモの苗植え】

① 日時 5月26日(土)午前10時～11時30分

② 場所 信大牟礼ふるさと農場

③ 参加者 子ども7名 学生14名

④ 指導者 竹元清春さん(牟礼村ふるさと振興公社)

⑤ 活動内容・指導の様子

- ・ 50cmくらいの間隔でテープを張りその両側から土を盛って畝にする。
- ・ 30cmくらいの間隔で、10cmくらいの深さの穴を掘って、茎を寝かせるようにして植える。そのとき、葉が土につかないように気をつける。
- ・ 植え終わったら、たっぷり水をやる。(苗を入れるときに、穴に水を入れて埋める方

法もあるとのこと。今回の場合、土が肥料や水分を含んでいるので水はかける程度でよい。)

- ・ 寒さ対策として寒冷紗を掛ける。
- ・ 竹元さんの指導を受け、子どもと学生が協力して作業ができた。鍬の使い方など子どもだけではうまくできないことを学生がよくフォローしてやっていた。

⑥ 学生の感想から

- ・ 畝の作り方がわかった。テープを張って列をそろえたり、テープの両側から鍬を使って土を盛っていくことなど、大変勉強になった。
- ・ 畝の間隔、苗の間隔、植え方など基本的なことから教えてもらいよかった。寒さや水分などデリケートなこともあることがわかって、それらに対する対処も経験できてよかった。
- ・ 鍬の使い方が勉強になった。ただ耕すだけのものかと思っていたが、こうした畝作りの場面で使うという基本的な用途がわかった。
- ・ 子どもたちの中で（高学年の子）鍬の使い方上手な子どもがいた。家庭や学校で農作業に親しんでいる子もいるんだなあと感じた。

【田植え】

① 日時 6月2日(土)午後2時～4時

② 場所 信大茂菅ふるさと農場

③ 参加者 子ども7名 学生14名

④ 指導者 林部信造氏（農業） 大内清氏（JAながの）

⑤ 活動内容・指導の様子

- ・ 苗の植え方について、親指、人差し指、中指の3本の指で持ち、土に向かってまっすぐに差し込む。深さは4cmくらいで倒れないようにしっかりと植える。
- ・ 水田の端から端に渡したテープに沿って15cmくらいの間隔で植える。
- ・ 1列植え終わったら後ろへ30cmほど下がるようにテープをずらし、次の列を植える。したがって、植え始めは田んぼの中央または反対側から後ろ向きにはじめることになる。

⑥ 学生の感想から

- ・ 初めて手で植える田植えをした。苗の持ち方、土への入れ方など基本的なことがわかった。なかなかまっすぐ入らなかったり倒れてしまったりして、慣れるまでは難しかった。
- ・ 苗と苗の間隔、列の間隔、苗の本数など、成長の過程を踏まえて決められてきていることがわかった。
- ・ 機械植えが当たり前の今、こうして手で植えることの大変さや面白さを味わうことの大切さを感じた。
- ・ 子どもたちは、見よう見まねでやってしまうことが多かった。最初のうちは手を添えて一緒にやっていくことが必要だった。
- ・ 初めての田植えで楽しかった。子どもたちと話したり苗を手渡ししたりして一緒にできたことが楽しかった。
- ・ 田起こし、あぜシート張り、代掻き、あぜや土手の草刈り、水の管理など田植え



までの準備が大変だった。

#### 4) 考察

学生の感想の中で多かったのが「基本的なことを教わってよかった」「教えていただいたことが理にかなっている」ということであった。やろうと思えば見よう見まねで何とかなるものの、やはり基本的なことをきちんと教わるということは重要なことである。そのことが、「丈夫」「使いやすい」「味がよい」「成長を見通して」など理にかなっているということにもつながり、現代の価値観から見ると非合理的なことのようだが、実は先人の努力や工夫が生み出したすばらしい知恵や技術が伝えられたということを学んでいることを実感している。このように、豊富な体験と専門的な技術を持っている方々から実際の体験を通して学んだことで、学生が自信を持って子どもたちを指導していくことができ、子どもたちの学びを引き出すことにもつながったと考えられる。さらに、竹元さん、林部さん、大内さんなど専門的な知識や技術や知識を持った方々との触れ合いにも注目したい。単に知識や技術を教わるということだけでなく、指導者の方々の人柄に触れていったことも貴重な経験であり、「学び」の場と位置づけることができる。学生や子どもたち一人一人の手をとって教えてくださったり、時間的な面で無理を承知でお願いしても快く引き受けてくださったり、時には差し入れをしていただきみんなで輪になってご馳走になったりして、人間的なお付き合いもさせていただいた。こうした、物心両面の支援も学生や子どもたちの「学び」として心に残ることとなった。

### 3. おわりに

農作業体験学習においては、地域との連携や子どもたちの「体験」と「学び」の結合について考慮していくことが不可欠である。今回の「信大牟礼ふるさと農場」「信大茂菅ふるさと農場」の活動に参加した子どもたち、学生、保護者の方々、農業関係者や地域の方々のかかわりを見て、そのことをあらためて強く感じた。子どもたちや学生は、地域の方々の指導や協力により、人とかかわりながら泥まみれ、汗まみれになって草を抜き、耕し、豊かな収穫を得るとともに、知的好奇心や学びへの意欲を持ち、人間としても成長していった。そうした子どもたちの姿を見て、保護者の方々がほほえましく思ったり、あるいは一緒に汗を流したりするなど、人と人とのつながりの広がりも見られた。「総合的な学習の時間」が本格的に始まる学校現場、学校五日制が完全実施される地域、それぞれの場所での活動が注目される今、農作業「体験」と「学び」の結合の重要性が増し、教師の指導力の向上、地域の教育力の蘇生が大きな課題となると考える。

#### 参考文献

門脇厚司(1999)『子どもの社会力』(岩波新書)

佐野安仁 新茂之 芝野昭男 吉田健二 (2001)『「総合的な学習」と人間形成』(晃洋書房)

# 「信大Y O U遊広場」の実践を通して学生は何を体験したか

谷塚光典 信州大学教育学部附属教育実践総合センター講師

## Analysis of Students' Experience through Friendship Project at Shinshu University

YATSUKA Mitsunori : Center for Educational Research and Training,  
Faculty of Education, Shinshu University

Students who participated in the practice of Friendship Project at Shinshu University replied to the questionnaire on their experience through the activities. They experienced diverse experience, especially with children and community. As prospective teachers, they had variable and significant experience to become good teachers. It was clarified that Friendship Project in preservice teacher education curricula promoted their practical teaching abilities, such as understanding of children, appropriate teaching strategies, preparation of and inquiry on teaching materials, relationship with community, leadership, and management of projects.

【キーワード】 フレンドシップ事業 体験的カリキュラム 教員養成 教育参加

### 1. はじめに

教員養成系大学・学部における教職を志す学生の教員としての実践的指導力の育成を目指して行われているフレンドシップ事業であるが、5年目となる平成13年度は、信州大学教育学部のフレンドシップ事業は新たな展開を迎えた。すなわち、開設6年目となる「教育参加」と本年度から新たに発足した「信大Y O U遊広場」との2本立てで、信州大学教育学部フレンドシップ事業は成り立っている。

ところで、このようなフレンドシップ事業に参加した学生たちは、どのような体験をし、そしてそれらの体験を通してどのような実践的指導力を身につけてきているのであろうか。国立大学教育実践研究関連センター協議会の事業プロジェクトの1つである「教育実践・教師教育部門」においても、文部科学省科学研究費補助金「新免許法に対応する教員養成課程体験的カリキュラムの体系的構築に関する実践的研究」に基づいて、フレンドシップ事業の展開についての研究と実践を進めてきている<sup>1)</sup>。また、各大学・学部で発行されているフレンドシップ事業報告書にも、フレンドシップ事業の概要や具体的な活動内容と合わせて、活動に参加した成果やフレンドシップ事業の意義が語られている<sup>2)</sup>。

そこで、本稿では、「信大Y O U遊広場」に参加した学生を対象に行った調査の分析に基づいて、学生たちは「信大Y O U遊広場」の実践を通して何を体験し、実践的指導力の基礎としてどのような資質・能力を身につけてきたのかを明らかにすることを目的とする。



## 2. フレンドシップ事業を通して学生に何を体験して欲しいのか

「教員の養成段階において、学生が種々の体験的活動等を通して、子どもたちとふれあい、子どもの気持ちや行動を理解し、実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を設ける」ことが留意事項のひとつとして挙げられているフレンドシップ事業であるが、実際に全国の教員養成系大学・学部で実施されているフレンドシップ事業は、次の4つに類型化されることになる<sup>3)</sup>。

- ①出前授業型のフレンドシップ事業
- ②社会教育や学校教育への参画型のフレンドシップ事業
- ③学生中心型のフレンドシップ事業
- ④勤労生産・自然体験型のフレンドシップ事業

信州大学教育学部におけるフレンドシップ事業は、1年次生を対象とした「教育参加」と、2～4年次生を対象とした「社会体験実習」という2つの授業科目として行われている。このうち「教育参加」は、主として②「社会教育や学校教育への参画型」であり、学生中心ではなく、青年の家・少年自然の家における主催事業や信州大学教育学部附属松本学校園や養護諸学校における教育活動への参加という形態である<sup>4)</sup>。一方、「社会体験実習」の単位認定を受ける「信大YOU遊広場」の場合は、学生が運営委員会を組織して学生中心で企画運営し、学校とも連携し、農場も耕し、キャンプにも出かけ、そしてキャンパス内にプレーパークやピオトープを作るなど、①～④すべてにかかわるような活動となっていることが特徴である。

このようなフレンドシップ事業では、どのような資質・能力の育成が期待されているのであろうか。信州、熊本、上越教育の各大学におけるフレンドシップ事業のねらいを比較してみよう。「信大YOU遊広場」では、次の3点の力量形成を目指している。

- ①「自然」との共生による人間力の向上
- ②「地域社会」との共生による社会力の向上
- ③学問と自発的な体験の結合による実践的指導力の向上

また、中山は、フレンドシップ事業に期待するポイントとして次の4点を挙げている<sup>5)</sup>。

- ①人々とかかわり合う知恵
- ②自主的主体的な企画・運営
- ③感動する心と共感する心
- ④開かれた学びの場

そして、濁川は、フレンドシップ事業に期待するねらいとして次の4点を挙げている<sup>6)</sup>。

- ①体験的学習を通して、経験幅を広げると共に、体を通した学びの大切さを自覚させる。
- ②社会教育活動に参加することによって、よりよき社会人として責任と自覚を促す。
- ③子ども達との触れ合い活動を通して、子ども理解の大切さと接し方の研鑽の必要性を自覚させる。
- ④主催事業を通して、企画、準備、運営する力を身に付けさせる。

上越教育大学のフレンドシップ事業の一つとして位置付けられている「学びのひろば」では次の3点の目的を持って活動している<sup>7)</sup>。

①子ども理解

子どもとの活動を通して、子どもとふれあう素晴らしさや指導の難しさを実感し、子ども理解を深めよう。

②実践力

1つのイベントを企画準備し、運営するたくましい実践力を身につけよう。

③主体性

受動的ではなく、一人一人が企画から運営まで主体的に行動できる力を養おう。

これらを総合すると、フレンドシップ事業において学生に体験して欲しいと期待されていることとして、次の7点にまとめることができよう。

①子ども理解を深めること

②多様な子どもそれぞれに適した指導を行えるようになること

③創造性を発揮しながら、活動の企画を行うこと

④リーダーシップを発揮しながら、立案した企画を主体的に運営すること

⑤教材研究の方法と大切さを知ること

⑥地域社会と連携し、地域の人々とのコミュニケーションを大切にすること

⑦教職に対する意識を向上し、人間としての成長を実感すること

### 3. 「信大YOU遊広場」の実践を通して学生が体験したこと

#### (1) 調査の概要

「信大YOU遊広場」は年間を通して活動してきたものであるが、第1期「信大YOU遊広場」のしめくくりとして、2001年12月8日(土)に「信大YOU遊フェスティバル」が開催された。その終了後、スタッフとして活動した学生を中心に、「信大YOU遊広場」の実践に参加した学生を対象にした調査を行った。調査の概要は次の通りである。

○調査時期

平成13年12月～平成14年1月

○調査対象

「信大YOU遊フェスティバル」スタッフの信州大学教育学部学生

48名が回答(1年次17名、2年次以上31名)

○調査方法

「信大YOU遊フェスティバル」終了後、調査用紙を配布し、後日回収した。

○本稿で考察を行う質問項目

『「信大YOU遊広場」(「信大YOU遊フェスティバル」も含む)に参加することによって、学校や教育現場で働くためのどのような資質・能力を身につけることができたと思いますか。また、それはどのような場面での経験を通して身につきましたか。』



(2) 学生はどのような資質・能力が身についたと感じているか

この質問項目について、48 名から計 166 の回答があった。調査用紙には、この質問項目について6つの記入欄を設けていたが、なかには欄外を含めて8つ回答した学生もいた。

これらの回答を、前節で提示した「学生に体験して欲しいと期待されていること」の観点から類型化すると、表1のとおりである。

表1 学生が身についたと感じている資質・能力

	1 年生	2 年生以上	計
①子ども理解	4 名(11%)	1 2 名(9%)	1 6 名(10%)
②子ども指導	2 8 (74)	4 5 (35)	7 3 (44)
③創造的企画	2 (5)	1 5 (12)	1 7 (10)
④主体的運営	2 (5)	2 2 (17)	2 4 (14)
⑤教材研究	0 (0)	1 1 (9)	1 1 (7)
⑥地域連携	0 (0)	1 4 (11)	1 4 (8)
⑦教職意識	2 (5)	9 (7)	1 1 (7)

回答数の最も多かった項目は、②子ども指導に関するものである。これには、子どもとの接し方（話しかけ方、しかり方、寄り添うこと）、安全面への配慮（ケガややけどなどトラブルへの対応）、子どもの楽しませ方（子どもを楽しませるにはまず自分が楽しむ、自分が笑顔でいること）などが含まれる。また、子どもを指導するための基礎として、①子ども理解がある。具体的には、子どもの視点に立つて考えることの大切さや子どもの多様性への気づきが挙げられている。これら①子ども理解と②子ども指導の回答が全体の半数以上を占めていることから、「信大YOU遊広場」の活動での子どもとのふれあいを通して、子どもを理解し、子どもを指導する際の方略を自分なりに気付いていることがわかる。

次に多かった項目としては、④リーダーシップを発揮しての主体的運営に関するものと、③想像力を発揮した企画に関するものが挙げられている。③創造的企画については、子どもとの活動を企画立案するにあたって、「見通しをもって計画する力」「遊びを準備し提供する力」「お金がなくても人間関係やアイデアでさまざまなことを可能にしていく力」などを身につけてきている。そのような企画に基づく活動を通して、「先を見通して物事を進めていく力」「裏方の仕事の大切さ」「常に周りに気を配る能力」など、全体を把握していることの大切さを感じ、自分たちで企画したことを盛り上げていっている。

「信大YOU遊広場」は前述のように、学生による自主的主体的な企画・運営で進められている。その際には、リーダーシップを発揮しながら、学生スタッフの意見をまとめる必要もある。特に、各プラザ長から「みんなの意見のとりまとめ」「話し合いを進める力」など、リーダーシップに関する回答が見受けられることは、頼もしい限りである。

また、「信大YOU遊広場」の活動では、特に茂菅や牟礼のふるさと農場の運営に際して地元のJAなどの連携機関の協力を仰いでいる。その際には、地域社会の人々とのコミュニケーション能力も必要となっている。学生たちは、⑥地域社会との連携の大切さにも気づき、「保護者や地域の人と協力する能力」や「自分と関わってくれた人への挨拶」などの能力が身についたことも実感している。

このほかには、⑤教材研究の方法と大切さ、⑦教職に対する意識などに関する回答がある。⑦教職に対する意識に関する回答が比較的少ないように感じられるが、1年次生全員必修科目である「教育参加」とは違って、「社会体験実習」は選択科目であることから、すでに教職への意識が比較的高い学生が集まっているため、「信大YOU遊広場」だけによって教職への意識が形成されているのではないことに起因することが推察される。

### (3) 1年次生と2年生以上との回答の比較による「教育参加」のあり方の検討

信州大学教育学部では、2年次以降は長野市にある西長野キャンパスで生活するが、1年次生は長野市から約65km離れた松本市の旭キャンパスで生活をしている。そのため、「信大YOU遊広場」へ日常的な参加は難しい状況であるが、「教育参加」の授業で参加希望者を募ったところ、「信大YOU遊フェスティバル」に18名の1年次生が参加した。

表1のように、1年次生の回答と2年次以上のそれとを比較すると、際だった違いがあることに気付く。それは、1年生の回答は②子ども指導と①子ども理解に集中し、⑤教材研究や⑥地域連携に関する回答がゼロ、その他の3項目も少数にとどまっていることである。この原因としては、次の3点が考えられる。あわせて今後の「教育参加」のあり方についても合わせて述べることとする。

まず第一に、「信大YOU遊広場」の活動に、1年次生は日常的には携わってきてはいないことがある。長野と松本という距離の問題は致し方ないものがある。しかしながら、「信大YOU遊フェスティバル」に“単発的に”参加した1年次生は、各講座の企画に関しても、子どもとふれあいに関しても、年間を通じて活動が続けてきた2年次以上には及ばないのは当然であろう。そういう状況下でも、「信大YOU遊フェスティバル」に参加した1年次生たちは、もちをついたりしめ縄をなったりする活動を通して、子どもとのふれあいを実感し、子ども指導のあり方の糸口に気付いてきていることがわかる。

次に、「教育参加」の活動においては、子どもとのふれあいがあまり充分でなかったか、または子どもとふれあう機会があっても積極的にふれあう姿勢が足りなかったことが考えられる。そのため、各講座のキャプテンの行動や「信大YOU遊フェスティバル」までの準備などの企画・運営に関することよりも、目の前にいる子どもとのふれあいから学ぶことに重点がおかれていたことが読みとれる。

そして3点めに、「教育参加」における活動は、青年の家・少年自然の家における主催事業や信州大学教育学部附属松本学校園や養護諸学校における教育活動への参加など、「社会教育や学校教育への参画型」であることを挙げられる。1年次の段階では、まずは子どもとのふれあいを通した子ども理解を中心として、「教育参加」や平成14年度から開設される「学校教育臨床基礎」を履修し、そして、さらに企画力や運営力を身につける活動として「信大YOU遊広場」に参加することによって、4年間一貫した臨床経験カリキュラムとしてのフレンドシップ事業の展開が可能になる。

## 4. おわりに

本稿では、「信大YOU遊広場」に参加した学生を対象に行った調査を手がかりにして、学生たちは「信大YOU遊広場」の実践を通してどのような資質・能力を身につけてきたのかを明らかにすることを試みた。その結果、「信大YOU遊広場」のねらいとして掲げら



れていた3点(①「自然」との共生による人間力の向上、②「地域社会」との共生による社会力の向上、③学問と自発的な体験の結合による実践的指導力の向上)は、「信大YOU遊広場」の実践を通して着実に身につけてきているといえよう。

しかしながら、フレンドシップ事業の活動は、教員養成カリキュラムにおける一部に過ぎない。教育学部における学生生活4年間を通して、教師としての実践的指導力を身につけていかなければならない。濁川は、教師の実践的力量として次の5点を挙げている<sup>8)</sup>。

- ①日々の教育を創造的に展開していく地道な研究心
- ②額に汗して、教育活動に取り組む逞しい実践的態度
- ③多感な子ども達により多く接し、子ども達と心優しく、かつ毅然と指導できる度量と指導力
- ④保護者や地域社会の人たちと心を通わせることのできる社交性と社会性
- ⑤教育活動創造の土台となる少しでも広く多様な自然、勤労、社会体験

このような実践的指導力育成の基礎としてのフレンドシップ事業のあり方、そして、教員養成カリキュラムのあり方に関する更なる研究を推進することを通して、まもなく本格始動する第2期「信大YOU遊広場」をこれからも応援していきたい。

#### <文献>

- 1) 濁川明男, 「全国フレンドシップ事業の現状と課題—全国教育系大学・学部フレンドシップ事業に関するアンケート調査結果より—」. 第59回国立大学教育実践研究関連センター協議会事業プロジェクト「教育実践・教師教育部門」資料, 2001.
- 2) 例えば、次のようなフレンドシップ事業報告書やシンポジウム報告書に記載されている。
  - 土井進, 「教員養成カリキュラムにおけるフレンドシップ事業の役割」. 信州大学教育学部附属教育実践研究指導センター編, 『地元教育機関と連携した「教育参加」の実践』(平成10年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書(その2)), pp.105-110, 1999.
  - 東原義訓, 「各大学のフレンドシップ事業から学ぶ」. 信州大学教育学部附属教育実践総合センター編, 『第2回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム報告書』(平成11年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書(その2)), pp.7-12, 2000.
- 3) 前掲 1), pp.5-6.
- 4) 「教育参加」については、次のような論文等でその詳細が報告されている。
  - 谷塚光典・土井進・東原義訓, 「臨床経験科目『教育参加』における学生の体験内容」. 『信州大学教育学部紀要』(信州大学教育学部), 第104号, pp.23-34, 2001.
  - 信州大学教育学部附属教育実践総合センター編, 『地元教育機関と連携した「教育参加」の実践(第6集)』(平成13年度信州大学教育学部フレンドシップ事業報告書(その2)), 信州大学教育学部附属教育実践総合センター, 2002.
- 5) 中山玄三, 「フレンドシップ事業を通して見えてきたこと」. 平成13年度信州大学フレンドシップ事業シンポジウム検討会資料, 2002.
- 6) 濁川明男, 「平成12年度フレンドシップ事業の概要」. 上越教育大学フレンドシップ事業実行委員会編, 『平成12年度フレンドシップ事業報告書』, pp.1-2, 2001.
- 7) 上越教育大学学びのひろば実行委員会編, 『平成12年度上越教育大学フレンドシップ事業「学びのひろば」活動報告書』, p.3, 2001.
- 8) 前掲 6), p.1.

# 教育における臨床経験・作業活動

小林輝行 信州大学教育学部教育科学講座教授

## A Consideration of Clinical Instructions and Work Activities in Education

KOBAYASHI Teruyuki : Educational Science, Faculty of Education,  
Shinshu University

The purpose of this paper is to clarify the educational significance of clinical instructions and work activities, and the matters of consideration at the time of its practice, chiefly based on "The School and Society" written by John Dewey. One of its consideration is to make a clear the location of these experiences and activities in the curriculum. Others is to clarify the process of formation to its knowledge and to be awake children the meaning of these experiences and work activities.

【キーワード】 学校教育 臨床経験 作業活動 経験知 デューイ・スクール

### はじめに

平成 14 年度からの総合的学習の時間の実施を目前に控え、体験学習、作業学習等が多くの学校に導入され、従来にも増して精力的に試行実践されている。そこでは子どもたちの生活に身近な地域の祭りや河川を中心とした環境問題など様々なテーマが設定され、地域社会の環境研究や人々との交流等、地域社会に密着した特色ある学習活動が展開されている。例えば、「山裾の町」といわれる長野県高遠町にある高遠中学校では、「山裾の時間」という時間をを設定し、「自ら学ぶ」をテーマに、生徒ひとりひとりが郷土に根ざした課題を見つけ、〈自然環境・探索コース〉、〈太鼓コース〉、〈昔の遊び郷土史コース〉、〈炭焼きコース〉、〈高遠焼きの焼き物・工芸コース〉等、全部で 11 のコースに分かれて地域社会と密着した学習活動を展開している。(1)

一方、教員養成大学・学部においてもそのカリキュラムの中に教育実習等の臨床経験や社会体験等が積極的に導入されはじめてきている。信州大学教育学部では、既に 1 年次に青年の家など社会教育機関などと連携した教育参加、2 年次に授業参観、授業研究などを行う学校教育臨床演習、3, 4 年次に事前事後指導を含めた教育実習の合計 9 単位に及ぶ臨床経験科目を必修として課している。さらに平成 14 年度からは、学校教育臨床演習基礎という附属松本学校園で学生たちが附属学校園教官の指導、支援のもとに、教育研究活動に補助的に参加する授業科目が、学校教員養成課程の 1 年次生の必修科目として新たに加えられ、臨床経験科目は一層充実強化されようとしている。(2)



こうした学校教育のカリキュラムにおける臨床経験・作業活動の積極的導入に対し、「体験や活動をさせればよいというものではない」という声をしばしば耳にする。こうした声は、ややもすれば硬直した言語主義的な教育、理論に偏重した教育の現状の改善を阻むことにもなりがちである。臨床経験、作業学習の科目や授業が極めて不足している現状においては、臨床経験、作業学習の授業や科目の導入なくして、内実をもった真の知識や実践的指導力を身に付けることが困難であるからである。しかし、こうした声は、半面、臨床経験、作業活動などの導入に際しての十分な配慮の必要性、またそれらがもつ教育的意義について注意を喚起するという点では、重要な意味をもつものである。

本稿は、主としてデューイの『学校と社会』(The School and Society)を手懸かりにして、教育活動において臨床経験、作業活動がもつ意義とそれらを導入する際に、如何なる点に配慮すべきかを考察せんとするものである。

## 1. 「臨床教育学」の登場

文部次官の職を退いた沢柳政太郎は、1909(明治 42)年に『実際的教育学』を刊行し、「従来の教育学はあまりに実際と没交渉である」<sup>(3)</sup>と当時の講壇教育学を批判して話題になった。沢柳が同書において、教育学は、教育の事実を根拠として研究する科学でなければならぬと主張してから 90 余年になる。しかし、わが国の教育学は、依然として「いじめ」や不登校問題をはじめとして教育の実際的諸問題の解決、克服には無力な状況が今日まで続き、現在も沢柳の言葉は完全な死語とはなっていない。

ところで、わが国において臨床教育学という名称の講座が初めて京都大学教育学部に設置されたのは、1987 年(昭和 62)、今から 15 年前である。その主任教授は、このたび文化庁長官に就任された河合隼雄教授である。河合教授の本来の専門は臨床心理学で、それを基礎として臨床教育学樹立の必要性を提唱され設置されたものである。

「新しい学問の必要性は、きわめて実際的なことから生じてきた。……現代のわが国においては教育に関する問題が山積している。「いじめ」……「不登校」……教室で騒ぐ子、……一言も話さない子。……給食を食べるのに長い時間を要する子。盗みをする子。うそをよくつく子。このようなことをどのように考え、どのように対応してゆくといいのか。それに対して役立つ学問はあるのだろうか。」<sup>(4)</sup>

という問いかけからスタートし、

「実際的问题とかかわり、……自分自身が積極的に主観的にかかわっていった現象を、どこかの地点で客観化したり、そこから得られた知見を体系化したりして、他に示して批判を仰ぐことなどをしなくてはならない。このような意図をもって、臨床教育学という発想が浮かびあがってきた。」<sup>(5)</sup>

と臨床教育学という全く新しい方法論に立った学問体系をうち立てようとしたのである。

臨床とは、もともと病床に臨むことをさす医学の世界の用語である。医学界では、臨床医学は、基礎医学に対する言葉として使用されている。仮にこうした医学界の例にならうならば、教育学の世界では、臨床教育学と基礎教育学ということになる(東京大学の改革構想にも「基礎法学」という専攻が登場している)。病に苦しむ患者を眼前にし、その苦悩からの患者の解放を第一義とする臨床医学が医学界にあるのだから、「いじめ」や不登校等に苦しむ子どもをその苦悩から解放することを主たる目的とする臨床教育学があっても少



しも不思議ではない。そうした意味では、むしろ臨床教育学の登場があまりに遅すぎたということになるだろう。

ところで、現在、臨床教育学は、学校教育の中の病理現象だけを研究対象としているわけではない。授業をはじめ、教育の実際現場におけるありとあらゆる事象に積極的に関わることから出発し、そこから得られた知見を体系化しようとする方向性をもった学問として発展しようとしている。(6)信州大学教育学部における教員養成教育の基本的理念として掲げられている「臨床の知」(7)も、こうした臨床教育学の方向性と概ね軌を一にするものということができる。

## 2. 学校教育と作業活動

デューイ(J. Dewey)はアメリカにおける進歩主義教育の旗手として、また児童中心主義、生活主義、経験主義教育論者として広く知られている。デューイとわが国教育界との関係も浅からぬものがある。デューイの『学校と社会』は、文部省翻訳(馬場一朗訳)により1905年(明治38)に刊行されており、(8)大正新教育が展開された時期には、長野師範附属学校の教師たちがデューイの著作を読書会などで取り上げている。(9)また日本の戦後教育もデューイの教育学説の影響下に展開されたことは広く知られており、戦前戦後を通じてデューイとわが国の教育界とは深い関わりをもっている。

しかし、わが国に導入摂取された他の欧米の教育学説と同様に、(10)デューイの教育理論が必ずしも正確に紹介され受容されたわけではない。児童中心主義、経験主義教育の側面は受容されたが、その基底にあるデューイの真の教育精神、考え方を軽視ないしは無視されていたのである。それゆえ大正期自由教育、戦後の日本の新教育は、デューイの教育学説とは似て非なるものとなっている。

アメリカでは、1919年に新教育を推進する人々によって進歩主義教育協会が結成され、1924年には機関誌として『進歩主義教育』が創刊されるが、その機関誌の表紙には、

「(1)自然に発達する自由(自発性と自己表現の重視)

(2)興味はすべての課業の動因である(それを満たし、伸ばす)

(3)教師はガイドであって、課業監督者ではない(生徒の遊びや演劇の重視)

(4)生徒の発達の科学研究(学業成績のみならず、心身の発達を記録する)

(5)児童の身体的発達に影響するすべてのものに一層の注意を払う(生徒の健康増進への配慮)

(6)子供の生活要求を満たすために学校と家庭が協力する(手芸・家事・レクリエーションの尊重)

(7)進歩主義学校は教育運動のリーダーである。」(11)

という7つのスローガンが掲げられている。デューイは、1927年に請われてこの進歩主義教育協会の名誉会長に就任するが、協会の掲げる進歩主義教育に対しては、きわめて批判的であった。デューイは、当時のアメリカの進歩主義教育に対し、

「(1)進歩主義教育は、社会的視野を充分にもたず、個人の教育を重視する。

(2)進歩主義の教育場面は、《技巧的》であり、《学校の外側で営まれている現実生活の代わりにはなっていない。》

(3)教授法に関しては、興味の本質を誤解して、子供の生の興味に依存している。



(4)生徒たちが何もかも自分たちで計画してしまい、しかも自分たちの課題遂行に責任をもたされていない。そして興味から興味へと次々に移り変わるので、たゆまぬ努力しに精神は成長しないという基本的原理を犯している。

(5)学校は構成的活動を通してよりよき社会秩序を建設するために依存しているはずなのに、進歩主義教育はそうした目的を示していない。」<sup>(12)</sup>

と痛烈に批判し、当時のアメリカの進歩主義教育とは明確に一線を画している。こうしたデューイの進歩主義教育への批判からも、デューイの児童中心主義教育、経験主義教育が如何なる内実、性格をもつものであるかが看取される。デューイは、子どもの興味にのみ依存した単なる経験や作業活動に厳しい目を向けているのである。

### 3. デューイの「仕事」(occupation)

デューイは、1896年にシカゴ大学付属の実験室学校(The Laboratory School)、いわゆるデューイ・スクールを開設し、「仕事」(occupation)を中心とした教育実践を展開した。そこでの教育は、1899年に主として附属学校児童の保護者たちを対象に行った連続講演の内容を一書にした、『学校と社会』に具体的に述べられている。

同書においてデューイは、「仕事」を次のように定義している。

「仕事という言葉によって、私が意味するものは、子どもがおこなう一種の活動であって、それが社会生活上において営まれる或る形態の作業を再現したり、ないし、それと対応しておこなわれたりするもののことである。当大学付属小学校においてはこれらの仕事は、木片といろいろな道具をつかう工作室作業によって、料理によって、裁縫によって、そしてまたここに報告される織物作業によって代表されている。」<sup>(13)</sup>

デューイがこのように「仕事」を定義するのは、「仕事」を社会的意義において考えなければならないとするからである。すなわち「仕事」は、社会が自らの存続を維持する諸過程の典型であり、社会生活の第一義的な必要条件のいくつかを子どもたちに納得させる媒介として提供されるものであり、またそれらの必要が人間の次第に成長する洞察と工夫とによって充たされてきた道程の典型として考えられているからである。

ところで、こうした「仕事」とある職業に就くための教育を目的とする作業との根本的な相違は、仕事の目的がその仕事自体の中にあるか、それとも外部的効用の中にあるかという点であるとして、デューイは、次のように述べている。

「実業学校以外の学校においても、総じて強調点が手或は身体の方面に置かれるようにこの種の作業がおこなわれることは、いかにもありうることである。そういうばあいには、作業はたんなる仕来りないし慣習となってしまうと、その教育的価値は失われているのである。これは、たとえば、手工教授において、或る道具のつかいかたの習熟または或る物の製作が第一目的とされていて、子どもは、それが可能なばあいにおいても、最も適合する材料や道具を選択する知的責任をあたえられず、したがって仕事についての自分自身の様式および計画を工夫する機会をあたえられず、それゆえにまた、自分自身の誤謬を知覚し、それらの誤謬を是正する方法を発見する——といっても、もちろん、子どもの能力の範囲内においてであるが——ようにみちびかれることがないようなばあいにおいては、つねに不可避免的に現れる傾向である。」<sup>(14)</sup>

このようにデューイは、「諸々の観念と、それらの観念が行動となって具体的に表現さ



れたものとのあいだの不断の交互作用から生ずる成長」(15)をもたらさないような作業は、無意識的、機械的なものであり、教育的価値の少ないものと断じている。

しからは、こうした「仕事」による成長をもたらすためには、どのような点に注意を払わなければならないのであろうか。デューイは、(一)織物作業と関連する身をもつての実験や計画や再発見、および(二)歴史的発展の線との平行に、という二点に最大限の意識を傾けなければならないと強調する。

「第一の点は、子どもが外部的作業を正しくなしうするためには、一々の点において精神的に敏速・敏活であることを要求する。第二の点は、その作業が再現するところの社会生活から暗示される諸々の価値をこれに滲透せしめることによって、遂行される仕事をゆたかにし、かつ深化するのである。(16)

こうした配慮を伴った「仕事」は、子どもたちに実際の必要と動機をもたらし、子どもたちの感覚訓練および思考訓練の理想的な機会を提供することになるというのである。

#### 4. 教育における臨床経験・作業活動

叙上のデューイの進歩主義教育、「仕事」(occupation)論は、教育における臨床経験、作業活動の教育的意義を考察する際に、有益な示唆を与えてくれる。その第一は臨床経験、作業活動を実施する場合、臨床経験、作業活動のカリキュラム上の目的、位置づけを明確にすることの必要性である。目的や位置づけの曖昧な臨床経験、作業活動は、そこから得られるものよりも失うものの方が大きい場合があることは、戦後新教育における「はいまわる経験主義」による基礎学力の低下という事実が如実に示している。

次に第二には、臨床経験、作業活動を通しての「知」への道筋を明らかにし、その「知」の体系化を図ることである。デューイが、実験室学校を設置する際に、その目的は、「計画された教育実験」を行うためのものであるとし、次のように述べている。

「この実験は、仮説として用いられた或る観念をテストするものである。これらの観念は哲学と心理学より導き出されたものであり、或るものは多分心理学の哲学的解釈(a philosophical interpretation of psychology)ともいふべき提案といえよう。それは知識論によこたわっている問題部門を強調したものである。それは思考の発達途上における、且つまた思考がいかなる経過のもとに知識に変化したかどうかを、行為でテストする必要がある活動場面に起ったものであった。包括的な知識論(a comprehensive theory of knowledge)を理解し、实际的に検討することができる唯一の場所は、教育過程の中である。」(17)

デューイの場合、その実験室学校において、子どもたちの思考が知に形成されるまでを子どもたちの行為、活動の過程の中に把握しようと試みたことが知られる。そこでは理論と実践とが次に示すように有機的に関連づけられている。

「子どもはたんに仕事をなすばかりでなくて、かれが為すところのもろもろのものについての観念をもまた獲得するのである。すなわち、かれの実践に入り込み、それをゆたかならしめるところのなんらかの知的概念を最初から獲得してかかるのである。一方あらゆる観念は、直接にか間接にか、なんらかの形において経験に適用され、生活のうえになんらかの影響をあたえるのである。このことが、いうまでもなく、教育における「書物」ないし読書の地位を決定する。書物は経験の代用物としては有害な



ものであるが、経験を解釈し、拡張するうえにおいてはこの上もなく重要なものである。(18)

ここには直接的経験知と間接的経験知とを有機的に関連せしめることにより、経験の絶えざる改造がなされ、豊かな知が形成される道筋の骨格が示されている。このように臨床経験、作業活動の場合も、それらの経験、活動から知に至る道程の骨格を明らかにし、さらにそれらの体系化を図ることが必要である。

さらに第三には、子どもに自分たちが取り組む臨床経験、作業活動の意味をきちんと自覚させることである。デューイが、学校において子どもが読み書きをあまりせず、木工、金工、編物、裁縫、料理などの作業活動にばかり熱中することにいぶかる附属小学校の保護者たちに、

「プラトンはどこかで、奴隷とは自分の行動において自分の意志ではなくて誰か他人の意志を表現する人間のことだと言っている。方法・目的・理解が作業をする人間の意識の中に存せねばならないということ、すなわち、人間の活動がその本人にとって意味を持たねばならぬということは、プラトンの時代におけるよりもいっそう緊切でさえある現代の社会問題である。」(19)

と訴えている。すなわち、今あなた方の子どもがしている木工や金工などの作業は、ギリシャ時代の奴隷たちがしていたことと同じことをしているとあなた方の目には見えるかも知れない。しかし、ギリシャ時代の奴隷たちは、自分が今していることの意味を知らないが、あなたがたの子どもは、今自分のしていることの意味を知っている。そのことがギリシャ時代の奴隷とあなたがたの子どもとの違いであり、その相違こそが大変重要な点であることを強調し、保護者の説得に努めている。デューイが指摘するように、子どもが、自分たちのしていることの意味をしっかりと認識していなければ、作業活動もギリシャ時代の奴隷たちとさして変わらない作業のレベルにとどまり、所期の成果を期待することはきわめて困難である。

#### おわりに

以上、主としてデューイの『学校と社会』を手がかりに、臨床経験、作業活動がもつ教育的意義ならびにそれらを導入し実践する場合に配慮すべき事項について述べてきたが、最後に、教員養成カリキュラムが当面する臨床経験、作業活動の問題に触れておきたい。

これまでのわが国の教員養成カリキュラムを見たとき、実践的指導力を身につけた教員の養成が充分行われているとはいえない状況にあった。とりわけ臨床経験科目の欠落が早くから指摘され、(20)最近では多くの教員養成機関のカリキュラムにこうした臨床経験科目が取り入れられるようになった。しかし、臨床経験科目のカリキュラム上の位置づけが必ずしも明確でなく、実際には、養成教育と現職研修とを一体化した教師教育の体系が未整備のため、体系化した教員養成カリキュラムを編成することが困難な状況にある。アメリカの医学部は、歴史学や美術史や遺伝学等を専攻した多種多様な学生たちが四年間の学部教育卒業後に進む四年間の博士課程であるが、アメリカの医師養成教育は、四年間で学ぶべき内容が体系化されており、前半の二年間は教室での授業、後半の二年間は病院実習に充てられている。(21)日本でもようやく医学部、歯学部で標準カリキュラムができたが、教員養成においても養成教育と現職研修とを一体化した教師教育の体系化の上に立った教員

養成の標準カリキュラムを早急につくることが何よりも必要である。

次に、教員養成カリキュラムへの作業活動、とくに農作業活動の積極的導入の必要性について述べておきたい。信州大学教育学部には、新制大学発足当初から「職業科」という、後の技術科の前身があり、その中に農業がおかれ、長野市吉田地区にもっていた水田、蔬菜園、果樹園などで職業科・技術科専攻の学生たちが農作業実習などを行ってきた。<sup>(22)</sup>しかし、職業科、技術科専攻の組織の改編が進み、農業は次第に縮小され、農地も現在ではなくなってしまっている。そして現在では、「栽培(実習を含む)」という免許法の定める科目として「栽培基礎」という授業科目が、技術の教員免許状取得希望者のため、非常勤講師により細々と開設されてはいるが、受講者は、技術の免許状取得者に限られている。

しかるに信州大学教育学部では、平成 11 年度の学部改組により「総合・生活科」という「学修分野」が新しく設置された。同分野では、「生活科」と「総合的な学習の時間」の研究開発を目指して、JAより休耕田を借り受け、「自然体験研究特講」、「自然体験研究演習」という授業科目を開設して、その受講者に対し稲作や野菜、蕎麦の栽培実習を課すようになり、現在に至っている。<sup>(23)</sup>こうした作業活動、とりわけ農業体験実習は、農業という日本人の原体験にふれるとともに、自然を知り、仲間との協同、共同精神を培うために、さらには現代のわれわれを取り巻く文明や生活の原点を実感として理解し、直接的経験知と間接的経験知との統合を図るためにも、教員養成には大きな意義をもつ科目であり、今後教員養成課程の学生の必修科目の一つに加えることを検討すべき授業科目の一つであろう。

## 註

- (1) 高遠中学校「総合的な学習の時間のあり方を求めて」『信濃教育』 第 1361 号 (平成 12 年 4 月)、城倉真理子「山裾は遠くひらけて」同 第 1382 号(平成 14 年 1 月)参照
- (2) 平成 14 年 1 月信州大学教育学部教授会資料
- (3) 沢柳政太郎著、滑川道夫・中内敏夫共編『実際的教育学』(世界教育学選集) 明治図書 1974 年 15 頁
- (4) 河合隼雄『臨床教育学』 岩波書店 1995 年 5~6 頁
- (5) 同書 10~11 頁
- (6) 同書 193 頁
- (7) 平成 13 年度 学生便覧 信州大学教育学部 巻頭
- (8) デューイ著・宮原誠一訳『学校と社会』「訳者序」 岩波書店 昭和 42 年 3 頁
- (9) 『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』 同刊行会 昭和 61 年 431 頁
- (10) 例えば、ペスタロッツ(J. H. Pestalozzi)の教育思想やヘルバルト(J. F. Herbart)派の教授思想の受容に際しても、当時の日本の状況に適合し役立つ側面だけを導入摂取している。
- (11) 栗田修「進歩主義の哲学的基礎」杉浦 宏編『アメリカ教育哲学の展望』 清水弘文堂 昭和 56 年 56 頁
- (12) 同上



- (13) デューイ著・宮原誠一訳『学校と社会』 岩波文庫版 137 頁
- (14) 同上書 138 頁
- (15) 同上
- (16) 同上書 139 頁
- (17) 杉浦 宏『デューイ教育思想の研究』 刀江書店 昭和 37 年 17～18 頁
- (18) 同上書 88 頁
- (19) 同上書 34 頁
- (20) 例えば、大学における教員養成の改善に関する調査研究会『大学における教員養成の改善に関する研究』（第 1 次報告 平成 8 年、第 2 次報告 平成 9 年）を参照
- (21) 赤津靖子『アメリカの医学教育』（日本評論社 1996 年）には、1990 年代前半のアメリカのブラウン大学の医学教育の実状が体験的に述べられている。
- (22) 『信州大学教育学部三十年誌』同刊行会 昭和 57 年 519～539 頁参照
- (23) 土井 進「『信大茂菅ふるさと農場』と『信大牟礼ふるさと農場』の創設」『平成 12 年度信州大学教育学部 学部・附属共同研究報告書』2001 年 211～2 15 頁、海沼正典、土井 進「学校や地域社会における農作業体験学習の意義 ——『信大茂菅ふるさと農場』での実践をとおして ——」『教育実践研究』信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 NO.2 2001 年 123～132 頁

# 「信大YOU遊広場」の精神と実践的指導力の養成

土井進 信州大学教育学部教育科学講座教授

## The Spirit of "Shin-dai YOU-Yu Plaza" and Training for Practical Teaching Skills and Qualities

Doi Susumu : Educational Science, Faculty of Education,  
Shinshu University

The spirit of "Shin-dai YOU-Yu Plaza" is the prospective teachers' independence to complete their own wishes throughout one year. "ZUKU", the attitude to have a strong will and do always one's best, encourages their practical teaching skills to become good teachers.

【キーワード】臨床の知 実践的指導力 ずく 人間力 教材開発力 授業組織力

### 1. 附属小学校北校舎に「信大YOU遊広場」の活動拠点

平成12年10月1日付けで筆者は附属教育実践総合センターから教育科学講座に移籍したものの、引越し先の研究室が定まらないまま年を越した。平成13年2月15日付けで総務・予算委員会の栗津原宏子委員長から、「1.東校舎E301およびE302をスポーツ科学教育講座が使用する。2.旧附属小学校北校舎104および105を教育科学講座が使用する。」ことを了承した旨の回答が届いた。ここによりやく生活科・総合学習分野の研究室と演習室が定まることになった。

附属長野小学校が平成9年度に長野市南堀の地に移転して5年目に、縁あって、かつて子どもたちの学びの場であった「竹」と名づけられた教室に引越すことができた。農作業に長靴や農具は欠かせない。泥のついた長靴や鍬ときれいな建物の3階は、どうしても似合わない。胡桃、無花果、杏、梅、枇杷などの実のなる木があり、四季折々に小鳥がさえずり、春には桜が満開になり、シシ沢川には蛍が舞う、旧附属小跡地こそ生活科や総合的な学習にはふさわしい。何としてもここに研究室を定め「信大YOU遊広場」の活動拠点として、新たな実践研究に取り組みたいと願った。この微意を諒とされ、全面的に協力してくださったスポーツ科学教育講座の皆様に心から感謝している。

### 2. 長野師範附属小における杉崎瑠・淀川茂重らの「研究学級」

児童の歓声が聞こえなくなってから5年、物置き場となっていたかつての旧附属小北校舎1階の「竹」の教室に入った。重い鉄の戸は容易には開かず、両手でやっと開けることができた。天井からは蜘蛛の糸が下がり、使い古された黒板は表面がガサガサになり、水道をひねると錆びた水が流れ出る。壁面も積年の埃で煤けている。



「竹」の部屋の前にあるプレハブの一室も、附属長野小学校のご了解を得て「信大YOU遊広場」の物品庫として使用させていただくことになった。5年前の移転時に廃棄処分された書類がダンボール箱に詰められ、うずたかく積み上げられていた。これを学部の軽トラックを借りて長野市清掃工場へ4往復して搬出した。

平成13年3月末に内地留学生の海沼正典教諭と総合・生活科教育分野の学生の協力によって、附属教育実践総合センターの研究室にあった物品と倉庫に保管されていた「信大YOU遊サタデー」関係の物品一切の引越しを完了することができた。「竹」の部屋に心身ともに活動拠点を移したとき、ふと1918（大正7）年にこの地で、杉崎塔主事や淀川茂重教諭によって実践された「研究学級」のことが思い浮かんだ。20世紀の初頭の教育思潮や、J.デューイの「実験室学校」などに学びながら、「研究学級」というそれまでの日本の教育界では使われたことのない教育研究のための新しい学級がこの地に増設されたのであった。遠く83年前の清新な息吹に思いを馳せながら、今再びこの地から21世紀の新しい教育実践研究を創造していくことを深く心に期したのであった。

### 3. 「臨床の知」をどのように受け止めたか

信州大学教育学部は平成11年度の改組において、学部教育の理念を「臨床の知」を探究することに設定した。そして、「臨床の知」をこれからの教員に求められる「学校、家庭および地域社会の諸問題に主体的にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ」ことができる智慧であるにとらえた。臨床という言葉はこれまで医学用語として多く使われてきたので、教員養成にはなじまないのではないかという意見も根強いものがあった。しかし、筆者は臨床医師と同じく教師も人間そのものを対象とし、一人ひとりの子どもの全人格にふれながら、臨機に対応していくことが求められている点において、「臨床の知」に裏打ちされた実践的指導力が求められているのであり、教員養成学部に要請されているこの課題に真正面から取り組んでいくには、「臨床の知」という新たな概念を教育理念に掲げ、時間をかけて理念の具現化を図る努力を積み重ねるなかで、新たな教員養成システム開発の突破口を開いていくことが建設的な受け止め方であると思った。

「臨床の知」の概念についての考察はここではひとまずおき、とりあえずこれを英語訳するとどうなるか、ということが本報告書のタイトルを表記するのに必要になってきた。様々な訳語が検討されたが、学部の教育目標と具体的カリキュラムの関連という観点から、渡邊時夫教授による“Experience-based Teacher Education”を採用することになった。

「臨床の知」すなわち、実践に裏打ちされた智慧や指導力の養成をめざして、本学部では目下、臨床経験カリキュラムの体系化と充実発展に鋭意取り組んでいるのである。

### 4. 実践的指導力の3要素

今後の教員に求められる資質能力を考えるにあたって、教育職員養成審議会は1987（昭和62）年12月の答申「教員の資質能力の向上方策について」において、「実践的指導力」が必要であるとして次のように述べている。

「学校教育の直接の担い手である教員の活動は、人間の心身の発達にかかわるものであり、幼児・児童・生徒の人格形成に大きな影響を及ぼすものである。このような専門職としての教員の職責にかんがみ、教員については、教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知



識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である。」

この記述をもとに 1998（平成 9）年 7 月の教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」においては、養成段階で習得すべき最小限必要な資質能力は「採用当初から学級や教科を担当しつつ、教科指導、生徒指導等の職務を著しい支障が生じることなく実践できる資質能力」であると示している。

これらの記述をもとに、実践的指導力とは何か。教員の養成段階である大学において学生が習得しなければならない実践的指導力の基礎とは何か、について考察することにした。先に引用した教養審答申の文脈からも明らかなように、実践的指導力とは深い人間観、専門的知識、幅広い教養、そして使命感に根ざした教育的愛情などを基盤として発揮される教師としての本領を示す資質能力である。今後の教員に求められる実践的指導力を構成する 3 要素として筆者は、授業を構成する 3 要素といわれている「子ども」「教材」「教師」に対比させて、①子どもに寄り添う「人間力」、②子どもの学びを引き出す「教材開発力」、③子どもと教材を結んで学びを成立させる「授業組織力」、の三つを考えている。

「信大 Y O U 遊広場」や「教育実習」を通して、学生はどのような実践的指導力の基礎を習得しているのだろうか。改組された本学部の第 1 期生である平成 11 年度入学の T さんを事例として考察したい。

## 5. 先生になりたいー「信大 Y O U 遊広場」の実践ー

T さんは故郷の先生になることを夢に描いて信州大学教育学部に入学した。実践の場で早く子どもとふれあいたいと思い、1 年次は松本キャンパスから長野へ通ってきて「信大 Y O U 遊サタデー」に参加し、2 年次には茂菅のふるさと農場に参加し、3 年次には「信大 Y O U 遊広場」の創設に参画し、プラザ長に立候補して積極的に活動を推進してきた。

T さんは平成 13 年 8 月 21 日から 9 月 18 日まで、信州大学教育学部附属長野小学校で基礎教育実習（3 年次）に取り組んだ。平成 13 年 9 月 14 日（金）に最後の授業を終えた T さんは、教育実習前の子どもを見る眼はお姉さんとしての立場からの見方であったが、教育実習を経験することによって教師としての子どもを見る眼が備わってきていることを実感することができたという。「私は大学に入ってからたくさんの子どものとふれあうために「信大 Y O U 遊広場」のプラザ長に立候補して積極的に活動してきた。だから自分では子どもと活動していくのは好きだし、うまくやっていけるものと思っていた。でも実際に授業をやって、子どもと向き合ってみると何かが違う。Y O U 遊プラザの活動では、お姉さんお兄さんの立場であるから、子どもと同じ方を向いていけばよくて、一緒に楽しむことができた。でも、授業となるとそのような一つの方向だけでは足りない。子どもと同じものを見ながら、もう一方で見ている子どもたちを観る眼っていうものも必要だと思った。」と述べ、これまで 3 年間の子どものとふれあい活動からは得られなかった体験を「教育実習」を経て学んだことを吐露している。そして、長くて、短くて、辛くて、楽しかった教育実習も終わりを迎えた 9 月 17 日（月）の実習記録には、T さんが全人格をぶつけて教師としての仕事に取り組んだ経験のうから教師観について次のように記述している。

「この 4 週間を振り返って、教師とは何かを考えてみた。私は教育実習前は、子どもの姿を見て環境を整えたり、学習を促すのが教師の役目だと思っていた。だから外から客観的に見ている監視役みたいなものが教師の立場だと思っていた。しかし、実際に授業を通して子どもとふれあってみて、それでは何も見えてこない。なぜ笑っているのか、なぜつ



まらなさそうにしているのか、今どんな感情なのかも分からない。これが分かるようになる、分かろうとするには、客観的な見方ではだめだ。内側から見つめていく眼、言い換えれば、もう一人の子ども自身になることが必要だと思う。子どもと教師が同じ環境のもとで、同じ人間としての立場にたって、同じ方向を向いて考える。そういうふうに師弟が同一化してこそ見えてくるものがあると思う。4週間たったの私の考える教師とは『もう一人のその子自身』の立場になってあげることであるような気がする。」

## 6. 教育実習生の学びに教師道の原点

筆者は24年前、30歳でようやく教員採用試験に合格し教壇に立つことになった。その時、元東京都文京区立第五中学校長、戸畑忠政先生から励ましの言葉を原稿用紙の裏に筆でしたためていただいた。それを今も研究室に掲げ座右の銘としている。戸畑先生は次のように揮毫してくださった。

「悉有仏性 師弟同行 師弟共育」

「坐る」という字をよく見ると、「土の上に人が二人いる」という形になっている。一人は、「今ある自分」で、もう一人は「もう一人の自分」、「永遠の自分」であるという。誠実に、そして、真摯に、未来からの使者である子どもたちの前に、教育実習生として黒板を背にして立ったTさんの実習記録から、私たちが襟を正して学ばなければならない真実が潜んでいるように思われてならない。自分の顔は自分では見えないように出来ている。だから「子どもは親の鏡である」ととらえる見方が教師にも要求される。教師にとって児童・生徒は教師の姿を映し出す鏡なのである。また、「渋柿の しぶがそのまま 甘さかな」といわれるように、児童・生徒の欠点こそは、一皮むいて太陽に当てることによって、甘味この上ない干し柿になるのである。子どもの欠点に同苦しながら、真人間になるために一皮むく試練の道を共に歩んゆく（同行）存在こそ、教師ではなかろうか。また、水の性質を称えた言葉に、「花の美しさ 緑のあざやかさ 水は自らその姿を消し この世の命となる」とある。児童・生徒と共に学び、共に成長していく（共育）教師の姿を象徴しているともいえよう。Tさんが四週間の実践を通して感得した、「教師とは『もう一人のその子自身』の立場になってあげること」という気づきは、「悉有仏性、師弟同行、師弟共育」の本質を余すところなく感知したが故にほとばしり出た言葉であるように筆者には思われてならない。

## 7. 実践的指導力の源は「ずく（尽）」、菩薩の「誓願」

今後の教員に求められる実践的指導力の三要素として「人間力」「教材開発力」「授業組織力」を取り上げて考察してきた。それではこれらの三つの力の根源は何であるのか。この問いへの一つの答えとしてふと思ひ浮かんだ言葉がある。それは長野県において今日でもよく使われている方言である「ずく（尽）」という言葉である。「ずく（尽）」とは『日本方言大辞典』（小学館）によれば、①強い精神力。がまん強く続ける気力。②骨惜しみせず、精を出して働くこととある。したがって「ずくがある」とは、その人の精神的な骨格がしっかりとしており、精を出して立ち働く性根を持っている、というような意味合いになる。これこそ実践的指導力の根源をなすものであると筆者は考えている。また、「ずく（尽）」という字は、一切の仏菩薩が発するといわれる四弘誓願の精神をも想起させる。すなわち四弘誓願とは、「衆生無辺誓願度 煩惱無量誓願断 法門無尽誓願学 仏道無上誓願成」

である。子どもたちの成長をひたすら願い、自己の至らなさを常に省みて研鑽に精進し、子どもの喜びをわが喜びとして、共に学び共に成長していこうとする教育者の生きざまこそ、菩薩道であると言っても過言ではなかろう。

#### 8. 「信大YOU遊広場」の精神

信州大学学生が、「やりたいと思ったことを、やりたいと思っている仲間とともに、やりたいようにやる」というのが「信大YOU遊広場」の根本精神である。従って、初めに「信大YOU遊広場」という組織があって、そこに学生が入って何がしかの役割を担うというのではなく、何事かをやりたいと思った学生が寄り集まって、自然発生的に組織が築かれていくのがこの活動の特色である。やりたいことを課題として1年間持ちつづけてやり抜く「ずく」から自ずから「臨床の知」が生まれ、発現した「臨床の知」に裏打ちされて実践的指導力の基礎が身についていく。ここに教員養成の鍵が秘めれているように思う。

#### 参考文献

- 中野光『中野光 教育著作選集 第1巻「教育空間としての学校」』株式会社 EXP 2000年  
佐々木将人『何かある それが人生』神明塾 2001年  
土井進「教育実習による学生の成長」日本教師教育学会編『講座 教師教育学 第2巻「教師をめざす一教員養成・採用の道筋をさぐる一」』学文社 2002年（刊行予定）



【「信大YOU遊広場」事務局のある「竹」の部屋】





【そばの花が咲き土寄せを終えて】



【林部農場での稲刈り実習を終えて】



【第1期「信大YOU遊広場」千秋楽】

Web上では非公開





Web上では非公開





スタッフ名簿

長…プラザ長 副…副プラザ長 研…研究主任

No	名前	学年	専攻	所属プラザ							YOUフェス (キャプテン、係長は太字)			
				0	1	2	3	4	5	6	午前講座	係	午後講座	係
1	佐藤 正志	院2年	技術										ラジオ	会場
2	那須 良寛	院1年	学校教育		研	○		○	○					
3	大木美那子	4年	技術										ラジオ	案内・駐車場
4	小松 慎	4年	技術										ラジオ	案内・駐車場
5	佐藤祐輔	4年	技術										ラジオ	会場
6	宮原新	4年	技術										ラジオ	会場
7	矢代祐介	4年	技術										ラジオ	会場
8	相磯 素子	4年	幼児教育			研								
9	林 一真	4年	家庭		○	○	○	○			ウイナー	案内・駐車場		cooking
10	千野 加世子	4年	家庭		○	○		○						
11	中澤 典子	4年	国語	○	○	副		○						
12	関谷 亜紀子	4年	数学	○	○	○		○						
13	笹崎 典子	4年	数学	○	○	○		○		研				
14	両角 孝之	4年	数学					○	○			記録		記録
15	大場 浩幸	4年	数学				研	○			おもちつき	案内・駐車場	おもちつき	
16	長澤 ひとみ	4年	理科	○										
17	佐間野 昌資	4年	野外活動					○	○					
18	杉山 雅幸	4年	野外活動		○	○		③	研					
19	角 直子	3年	教育実践					○					けしゴム	会場
20	三枝 あかね	3年	教育実践					○						
21	島田 恵理子	3年	教育実践				○	○						
22	岡部 桂子	3年	教育実践	○		○		○	○		ツリー	会場		
23	梶田 将孝	3年	教育実践			○								
24	鹿子木 愛	3年	教育実践	○	○	○	○	研	○	○	おもちつき	会場	おもちつき	
25	小黒 あかり	3年	教育実践	○		○	○	長	○		ウイナー	会場		
26	清水 美香	3年	教育実践		○	○	長	○	○		本部		本部	cooking
27	林 美智子	3年	教育実践		○	○	副	○			本部		本部	
28	志方 涼子	3年	教育実践			○								cooking
29	西川 美幸	3年	言語教育								子育て	案内・駐車場		
30	白崎 麻希子	3年	理数	○				○						
31	鈴木 智哉	3年	理数					○			ツリー	会場	なわとび	会場
32	野口 亮一	3年	理数					○						cooking
33	松崎 健太	3年	理数					○						
34	等々力 陽平	3年	理数					○						
35	岡田 泰尚	3年	理数					○						
36	村木 知子	3年	理数					○						
37	西澤 俊輔	3年	理数	○	長	長	○	○	○	○	子育て	会場	なわとび	会場
38	松本 佳須美	3年	理数			○								
39	堀内 育恵	3年	理数					○						cooking
40	居澤 結美	3年	社会								フリスビー	受付	なわとび	案内・駐車場
41	岩倉 鮎美	3年	社会										ラジオ	案内・駐車場
42	小林 久美子	3年	社会								フリスビー	案内・駐車場		
43	保科 幸子	3年	社会								フリスビー	案内・駐車場	けしゴム	受付
44	泊 宗之	3年	社会		○	○								
45	町田 竜太	3年	社会	○	○	○	○	○	○	副	本部		本部	cooking
46	土田 みどり	3年	社会		○	○		○	○		フリスビー	会場		
47	梅田 亜紀子	3年	社会		○	○			○	長	本部		本部	cooking
48	白井 克典	3年	社会			○	○	副	○		しめなわ	受付		記録
49	間宮 亜武呂	3年	社会		○									
50	梅本 直樹	3年	社会		○									
51	井上 将宏	3年	生活科学										ラジオ	受付
52	加藤 信博	3年	生活科学										ラジオ	会場



No	名前	学年	専攻	所属プラザ							YOUフェス (キャプテン、係長は太字)			
				0	1	2	3	4	5	6	午前講座	係	午後講座	係
53	国分 麻紀	3年	生活科学								ツリー	受付		
54	田中 信竹	3年	生活科学										ラジオ	会場
55	夏目 千奈利	3年	生活科学					○					けしゴム	案内・駐車場
56	横本 浩美	3年	生活科学							○				
57	梶原 彩子	3年	生活科学							○				
58	駒村 志帆	3年	生活科学							○				
59	福森 麻希	3年	生活科学							○				
60	佐々木 俊英	3年	地域スポーツ								子育て	会場		
61	清水 泰代	3年	地域スポーツ	○							子育て	受付		
62	武田 共代	3年	地域スポーツ								子育て	会場		
63	小島 真知子	3年	地域スポーツ	○	○			○	長				なわとび	会場
64	片瀬 亜希子	3年	地域スポーツ					○					なわとび	案内・駐車場
65	内池 深咲	3年	野外教育								子育て	会場		
66	小林 則雄	3年	野外教育	○			○	○	副		子育て	案内・駐車場		
67	富山 裕子	3年	障害児教育	長	○	○		○	○		子育て	案内・駐車場	ポストカード	受付
68	平賀 倫子	3年	障害児教育	副		○		○			ツリー	会場	ポストカード	会場・cooking
69	比嘉 頼子	3年	障害児教育	研										
70	西村 崇	2年	教育実践					○			ウイナー	案内・駐車場		
71	林下 佳与	2年	教育実践					○						
72	原 耕平	2年	教育実践			○		○		○	おもちつき	受付	おもちつき	
74	山口 真史	2年	教育実践	○				○						
75	宮川 幸浩	2年	教育実践		○			○	○		しめなわ	会場		
76	山本 公三	2年	教育実践					○		○	しめなわ	案内・駐車場	ポストカード	案内・駐車場
77	山本 真望	2年	教育実践		○			○	○		ウイナー	会場		
78	篠原 真美	2年	教育実践					○			ウイナー	案内・駐車場		
79	西 絢平	2年	教育実践					○	○		ウイナー	会場		
80	高相 朱里	2年	教育実践	○										
81	高橋 和之	2年	理数								おもちつき	案内・駐車場	おもちつき	
82	舘 裕介	2年	理数										ポストカード	会場
83	田中 千穂	2年	理数					○			ウイナー	会場	なわとび	案内・駐車場
84	花村 尚美	2年	理数		○	○	○	○	○		frisbee	会場	ポストカード	会場
85	花村 江里子	2年	理数		○	○								
86	岩脇 悟子	2年	理数		○	○		○			ウイナー	受付	なわとび	受付
87	野口 陽子	2年	理数		○	○		○	○					
88	上野 まり子	2年	言語								ウイナー	案内・駐車場		
89	岡本 くるみ	2年	言語								ツリー	案内・駐車場	なわとび	案内・駐車場
90	金井 理保子	2年	言語								おもちつき	会場	おもちつき	
91	高橋 由夏里	2年	言語								ウイナー	会場		
92	武重 智子	2年	言語	○							ウイナー	案内・駐車場		
93	安田 みゆき	2年	言語			○		○						
94	山本 恵理子	2年	社会		○									
95	塩川 順子	2年	社会		○	○								
96	丸山 貴史	2年	社会		○									
97	坪野 さやか	2年	社会		○	○	○				おもちつき	会場	おもちつき	
98	島田 綾香	2年	社会		○	○					おもちつき	会場	おもちつき	
99	池田 恵美	2年	生活科学										ラジオ	案内・駐車場
100	蓼沼 夏子	2年	生活科学					○	○		ウイナー	会場	けしゴム	案内・駐車場
101	谷口 智香	2年	生活科学										ラジオ	案内・駐車場
102	中西 千草	2年	生活科学					○			ウイナー	会場		
103	福澤 俊幸	2年	生活科学										ポストカード	
104	藤岡 恵美	2年	生活科学										けしゴム	案内・駐車場
105	藤森 美紀	2年	生活科学										ラジオ	会場
106	松崎 麻梨子	2年	生活科学		○									
107	松田 博美	2年	生活科学	○	○			○						

	名前	学年	専攻	所属プラザ							YOUフェス (キャプテン、係長は太字)			
				0	1	2	3	4	5	6	午前講座	係	午後講座	係
108	三浦 康典	2年	生活科学										ラジオ	案内・駐車場
109	宮尾 さやか	2年	生活科学										ラジオ	会場
110	桐山 恵美子	2年	生活科学	○		○		○	○				ラジオ	会場
111	原山 美樹	2年	生活科学	○	○	○		○					ポストカード	会場
112	出沢 綾子	2年	生活科学			○		○	○				ラジオ	
113	森田 美保	2年	保健体育	○	○	○		○	○		しめなわ	会場	なわとび	会場
114	藤本 晃子	2年	地域スポーツ					○	○		ウイナー	会場		
115	鈴木 めぐみ	2年	地域スポーツ		○	○								
116	須永 優	2年	野外教育		○	○		○						
117	山内 樹	2年	野外教育								子育て	会場		
118	割田 節行	2年	障害児教育								しめなわ	会場		
119	増田 美和	2年	障害児教育	○	○				○		しめなわ	会場	なわとび	会場・cooking
120	江崎 さやか	2年	障害児教育		○									
121	佐志田 英和	1年	教育実践								ツリー	案内・駐車場		
122	鷺津 智子	1年	教育実践								ウイナー	会場	けしゴム	会場
123	萩原 美樹	1年	言語								しめなわ	案内・駐車場	ポストカード	案内・駐車場
124	原山 いずみ	1年	言語								しめなわ	案内・駐車場	けしゴム	会場
125	福田 翠	1年	言語								フリスビー	会場	なわとび	案内・駐車場
126	木下 沙紀	1年	社会								ウイナー	会場		
127	長浜 愛	1年	社会								ウイナー	案内・駐車場	なわとび	会場
128	堀内 奈保子	1年	社会								ウイナー	案内・駐車場	ポストカード	案内・駐車場
129	宮本 里美	1年	社会								ウイナー	案内・駐車場	なわとび	
130	宇良 知子	1年	生活科学								しめなわ	会場	けしゴム	会場
131	沖田 幸子	1年	生活科学										なわとび	会場
132	松嶋 糸津香	1年	生活科学										なわとび	会場
133	世古 じゅり	1年	野外教育								おもちつき	案内・駐車場	おもちつき	
134	武井 恒	1年	障害児教育								おもちつき	会場	おもちつき	
135	渡辺 久士	1年	障害児教育								おもちつき	会場	おもちつき	
136	北川 伸尚	1年	障害児教育								おもちつき	会場	おもちつき	
137	坂本 育美	1年	心理臨床								おもちつき	案内・駐車場	おもちつき	
138	澤本 麻衣	1年	心理臨床								おもちつき	会場	おもちつき	
139	新谷 雅人	1年	心理臨床								ツリー	会場		
140	仲島 光比古	1年	心理臨床								ツリー	案内・駐車場		
141	濱口 真由美	1年	心理臨床								ツリー	案内・駐車場		
142	多部田 雄輔	4年	経済学部			○						記録		記録

### 協力して下さった先生方

藤沢謙一郎学部長  
 渡辺時夫学部長補佐  
 田巻義孝学部長補佐  
 橋本光明教授  
 市澤要三教授  
 山崎保寿教授  
 下田好行助教授  
 小池浩子講師  
 和田清教授  
 渡邊伸教授  
 平野吉直助教授  
 渡辺敏明講師  
 谷塚光典講師  
 森山潤助教授

東原義訓教授  
 寺沢宏次助教授  
 干川圭吾教授  
 藤田英樹助教授  
 土井進教授  
 志村昌之教諭  
 塩原茂孝教諭  
 大澤安貴子教諭



「信大 YOU 遊広場（プラザ）」とこれまでの「信大 YOU 遊サタデー」は一体どう違うのか、同じではないのかという疑問が、この 1 年間信州大学内外の学生から寄せられた。プラザが船出して無事 1 年経った今、この疑問への私見を述べご理解願いたいと思う。

信州大学教育学部は平成 11 年度に、“臨床の知”を教育理念とする学校教育教員養成課程（210 名）、養護学校教員養成課程（20 名）、生涯スポーツ課程（30 名）、教育カウンセリング課程（20 名）に改組された。この学部改組と連動して附属教育実践研究指導センター（専任教官 2 名）も附属教育実践総合センター（専任教官 4 名、客員教授 1 名）に改組された。「信大 YOU 遊サタデー」は、附属教育実践研究指導センターが開設母体となっている「教育実習事前事後指導」の授業における学生の声がもとになって、平成 6 年 6 月 6 日に誕生した。同センターの専任教官であった筆者は文字通り「サタデー」と共に 7 年間歩んできた。しかし、学内人事により平成 12 年 10 月 1 日付けで教育科学講座に移籍し、生活科指導法と総合的学習の担当教官となった。この急激な変化のなかで「サタデー」を担っている学生たちが、さらに勇気をもって進んでいける道を模索しなければならなくなった。実践センターを活動拠点とした「サタデー」から、生活科・総合学習分野を活動拠点とした「プラザ」へと脱皮する必要に迫られた。

これより先、平成 12 年 4 月に学部改組第 1 期生が意気揚々と松本キャンパスから長野キャンパスに進学してきた。生活科・総合学習分野にも 18 名の学生が希望届を出した。「サタデー」のイベント的な活動は、早晩行き詰まりがくることが予想されていた。そこで平成 11 年 12 月に JA 長野中央会に学生とともに出向き、「人づくりのための土づくり」を実践できる荒廃農地を借り受けたいとお願いした。農場において地域子どもたちと継続的な体験活動を展開したいと考えたのである。JA 長野中央会、JA ながのとの折衝の先頭に立ってくださったのが本学部の初代生活科教授を務められた和田清教授であった。和田教授は授業科目に位置付けられていない「サタデー」の活動の内、農作業体験を「自然体験研究特講・演習」の授業科目に位置付け、フレンドシップ事業として発展させていく道を勧めてくださった。このような準備作業と多くの方々の支えによって、学生の任意活動に過ぎなかった 7 年間の「サタデー」が、平成 13 年度からフレンドシップ事業としての「プラザ」（授業科目名「社会体験実習」）へと方向転換を図ることができたのである。

平成 14 年 2 月 15 日に図書館 2 階の大講義室において、和田清教授の最終講義が行われた。「私が自慢に思うこと」という講演のなかで和田教授は、附属志賀自然教育研究施設が昭和 41 年に教員養成大学・学部初の研究施設として文部省から認可された活力は何だったのか。「それはまぎれもなく、奮闘努力された当時の信大教育学部の学生諸君と卒業してからも応援に駆けつけてくれた延べ 500 名にもものぼる若い力の結集」であったと力説された。そして、「信大 YOU 遊広場」の学生たちにこれからの教育学部づくりへの熱い期待を寄せてくださった。筆者は志賀施設建設に込められた師弟同行の精神を、「信大 YOU 遊広場」においてもしっかりと受け継いでいきたいと決意を新たにした。

この 1 年間「信大 YOU 遊広場」に温かいご理解とご協力を惜しまれなかった全ての皆様に衷心より御礼申し上げる次第である。

平成 14 年 2 月 18 日

土井 進（通称：五左衛門）



## 編集後記

信大YOU遊広場の一年が無事終わりました。第1回編集委員会でこの一年間に体験したこと、学んだことを「楽しかった」「よかった」だけの感想や思い出だけでは終わらせることはできないという意見が多く出され、今回の実践記録では一年間の活動を通しての考察に力を入れた実践記録にしようということになりました。そのため体験だけではなく、理論だけではなく、体験と理論が調和した実践記録が完成したと思います。

今、信大YOU遊広場の部屋では毎日のように来年度の活動の話し合いが行われています。信大YOU遊広場はまさにゼロからのスタートでした。しかし、そこにはYOU遊サタデーの先輩達が創りあげてきた土台があり、先輩達が受け継いできた熱い思いがありました。先輩達の熱い思いを受け継ぎながら今後ますます信大YOU遊広場が発展していくことを願っています。

最後になりましたが、お忙しい中原稿を書いてくださった皆様方に心から感謝申し上げます。そして、ともに編集作業に携わってくれた編集委員会の仲間にも心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

(社会科学教育専攻 3年 白井克典)

「信大YOU遊広場」の活動を通して学び、感じたことは何なのか。この実践記録は、プラザの実践記録だけでなく、そのことを学生・教官がそれぞれ追求し書いてくださいました。原稿依頼の最初に「一年間様々な活動に取り組み、体験する中で、将来教師を目指す学生自身がそれをどのように考え、生かそうとしているのかを念頭において原稿を書いて下さい」とお願いしました。それは、奥が深くじっくりと考えることであったと思います。

実践記録を編集する中で学ぶことも多くありました。振り返りということの大切さや普段話せない先輩方の考えが、原稿だけでなく更に膨らませて話ぐできました。私も含め2年生は、来年度の「信大YOU遊広場」についての話し合いを今進めています。今年度の活動とまた違ったことにも挑戦しようとしています。この実践記録が、それらの活動を進めていくうえで大変参考になると思っています。

最後に、原稿執筆から編集までご協力くださいました皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(理数科学教育専攻 2年 花村尚美)

2002 (平成14) 年 2 月 26 日

### <編集委員会>

◎白井克典 (社3) ○花村尚美 (理2) 那須良寛 (M1) 林一真 (家4) 岡部桂子 (実3)  
片瀬亜希子 (地3) 町田竜太 (社3) 富山裕子 (障3) 西澤俊輔 (理3) 清水美香 (実3)  
小黑あかり (実3) 林美智子 (実3) 鹿子木愛 (実3) 小島真知子 (地3) 小林則雄 (地3)  
梅田亜紀子 (社3) 鈴木智哉 (理3) 土井進 (教官) 谷塚光典 (教官)



平成 13 年度教員養成学部フレンドシップ事業報告書：授業科目名「社会体験実習」  
平成 13 年度信州大学研究プロジェクト報告書：「不登校、いじめ、キレる、荒れる、  
学級崩壊を包括する地域と学校教育のあり方」

第 1 期「信大 Y O U 遊広場（プラザ）」の実践  
—“臨床の知”を求めて—

発行日：2002（平成 14）年 3 月 15 日

編集：「信大 Y O U 遊広場」実践記録編集委員会

発行責任者：土井進

連絡先：信州大学教育学部 〒380-8544 長野市西長野 6 - ロ

TEL/FAX：026-238-4260

E-Mail：doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp





やさしさ、たくましさ

原点はここにあります。

## “臨床の知”

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした新しい教育体制に生まれ変わりました。